漱石全集

第六卷

それから
門

明治四十三年四月撮影

目次

それから

四二、六、二七——四二、一〇、一四

一

誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下がつてゐた。けれども、その俎下駄は、足音の遠退くに從つて、すうと頭から拔け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覺めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が靜かな所爲かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確めながら眠りに就いた。

ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した樣に、寐ながら胸の上に手を當てゝ、又心臓の鼓動を檢し始めた。寐ながら胸の脈を聽いて見るのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相變らず落ち附いて確かに打つてゐた。彼は胸に手を當てた儘、此鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる樣を想像して見た。是が命であると考へた。自分は今流れる命を掌で抑へてゐるんだと考へた。それから、此掌に應へる、時計の針に似た響は、自分を死に誘ふ警鐘の樣なものであると考へた。此警鐘を聞くことなしに生きてゐられたなら、――血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に自分は氣樂だらう。如何に自分は絶對に生を味はひ得るだらう。けれども――代助は

は覺えず慄とした。彼は血潮によつて打たるゝ懸念のない、靜かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此處を鐵槌で一つ擲されたならと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事實を、殆ど奇蹟の如き僥倖とのみ自覺し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から兩手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる繪があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。其處には學校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを讀んでゐたが、やがて、惓怠さうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落とした。夫から煙草を一本吹かしながら、五寸許り布團を摺り出して、疊の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて來た。口と口髭と鼻の大部分が全く隱れた。烟は椿の瓣と蕊に絡まつて漂ふ程濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行つた。

其處で丁寧に齒を磨いた。彼は齒並の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃やかな一種の光澤がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つた樣に、肩を搖かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。彼は夫にも滿足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同樣に細く且初々しく、口の上を品よく蔽うてゐる。代助は其ふつくらした頰を、兩手で兩三度撫でながら、鏡の前にわが顏を映してゐた。丸で女が御白粉を附ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さへ附けかねぬ程に、肉體に誇りを置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の樣な骨骼と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顏に生れなくつ

て、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は舊時代の日本を乘り超えてゐる。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら燒麵麭に牛酪を附けてゐると、門野と云ふ書生が座敷から新聞を疊んで持つて來た。四つ折りにしたのを座布團の傍へ置きながら、

「先生、大變な事が始まりましたな」と仰山な聲で話しかけた。此書生は代助を捕まへては、先生先生と敬語を使ふ。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへゝゝ、だつて先生と、すぐ先生にして仕舞ふので、已むを得ず其儘にして置いたのが、いつか習慣になつて、今では、此男に限つて、平氣に先生として通してゐる。實際書生が代助の樣な主人を呼ぶには、先生以外に別段適當な名稱がないと云ふことを、書生を置いて見て、代助も始めて悟つたのである。

「學校騷動の事ぢやないか」と代助は落ち附いた顏をして麵麭を食つて居た。

「だつて痛快ぢやありませんか」

「校長排斥がですか」

「えゝ、到底辭職もんでせう」と嬉しがつてゐる。

「校長が辭職でもすれば、君は何か儲かる事でもあるんですか」

「冗談云つちや不可ません。さう損得づくで、痛快がられやしません」

代助は矢つ張り麵麭を食つてゐた。

「君、あれは本當に校長が惡らしくつて排斥するのか、他に損得問題があつて排斥するのか知つてます

か」と云ひながら鐵瓶の湯を紅茶々碗の中へ注した。

「何うも知りませんな。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな運動をやるもんかね。あれや方便だよ、君」

「へえ、左樣なもんですかな」と門野は稍眞面目な顔をした。代助はそれぎり默つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左樣なもんですかなで押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが應へるのだか、應へないのだか丸で要領を得ない。代助は、其淡泊な所を愛して、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代り、學校へも行かず、勉強もせず、一日ごろ／＼してゐる。君、ちつと、外國語でも研究しちやどうだなどと云ふ事がある。すると門野は何時でも、左樣でせうか、とか、左樣なもんでせうか、とか答へる丈である。決して爲ませうと云ふ事は口にしない。又かう、怠惰ものでは、さう判然した答が出來ないのである。代助の方でも、門野を教育しに生れて來た譯でもないから、好い加減にして放つて置く。幸ひ頭と違つて、身體の方は善く動くので、代助はそこを大いに重寶がつてゐる。代助ばかりではない、從來からゐる婆さんも門野の御蔭で此頃は大變助かる樣になつた。その原因で婆さんと門野とは頗る仲が好い。主人の留守などには、よく二人で話しをする。

「先生は一體何をする氣なんだらうね。小母さん」

「あの位になつて入らつしやれば、何でも出來ますよ。心配するがものはない」

「心配はせんがね。何か爲たら好ささうなもんだと思ふんだがな」
「まあ御嫁樣でも御貰ひになつてから、緩り、御役でも御探しなさる御積りなんでせうよ」
「いゝ積りだなあ。僕も、あんな風に一日本を讀んだり、音樂を聞きに行つたりして暮らして居たいな」
「御前さんが？」
「本は讀まんでも好いがね。あゝ云ふ具合に遊んで居たいね」
「夫はみんな、前世からの約束だから仕方がない」
「左樣なものかな」
まあ斯う云ふ調子である。門野が代助の所へ引き移る一週間前には、此若い獨身の主人と、此居候との間に下の樣な會話があつた。
「君は何方の學校へ行つてるんですか」
「もとは行きましたがね。今は廢めちまひました」
「もとは、何處へ行つたんです」
「何處つて方々行きました。然しどうも厭きつぽいもんだから」
「ぢき厭になるんですか」
「まあ、左樣ですな」
「で、大して勉強する考へもないんですか」
「えゝ、一寸有りませんな。それに近頃家の都合が、あんまり好くないもんですから」

「家の嬶さんは、あなたの御母さんを知つてゐんだつてね」
「ええ、もと、直ぐ近所に居たもんですから」
「御母さんは矢つ張り……」
「矢つ張りつまらない内職なんかしてゐるんですが、どうも近頃は不景気で、餘り好くない樣です」
「好くない樣だつて、君、一所に居るんぢやないですか」
「一所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞いた事もありません。何でも能くこぼしてゐる樣です」
「兄さんは」
「兄は郵便局の方へ出てゐます」
「家は夫丈ですか」
「まだ弟があります。是は銀行の――まあ小使に少し毛の生えた位な所なんでせう」
「すると遊んでゐるのは、君計りぢやないか」
「まあ、左樣なもんですな」
「それで、家にゐるときは、何をしてゐるんです」
「まあ、大抵寐てゐますな。でなければ一寸散歩でも爲ますかな」
「外のものが、みんな稼いでゐるのに、君計り寐てゐるのは苦痛ぢやないですか」
「いえ、左樣でもありませんな」
「家庭が餘つ程圓滿なんですか」

「だつて、御母さんや兄さんから云つたら、一日も早く君に獨立して貰ひたいでせうがね」
「別段喧嘩もしませんがな。妙なもんで」
「左樣かも知れませんな」
「君は餘つ程氣樂な性分と見える。それが本當の所なんですか」
「え〻、別に嘘を吐く料簡もありませんな」
「ぢや全くの呑氣屋なんだね」
「え〻、まあ呑氣屋つて云ふもんでせうか」
「兄さんは何歲になるんです」
「斯うつと、取つて六になりますか」
「すると、もう細君でも貰はなくちやならないでせう。兄さんの細君が出來ても、矢つ張り今の樣にしてる積りですか」
「其時に爲つて見なくつちや、自分でも見當が附きませんが、何しろ、どうか爲るだらうと思つてます」
「其外に親類はないんですか」
「叔母が一人ありますがな。こいつは今、濱で運漕業をやつてます」
「叔母さんが？」
「叔母が遣つてる譯でもないんでせうが、まあ叔父ですな」
「其處へでも賴んで使つて貰つちや、どうです。運漕業なら大分人が要るでせう」

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見た樣に身體を氣にしちや、――仕舞には本當の病氣に取つ附かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえゝと云つた限り、代助の光澤の好い顏色や肉の豐かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を氣の毒に思ふ。代助から見ると、此青年の頭は、牛の腦味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられないのである。話しをすると、平民の通る大通を半町位しか附いて來ない。たまに横町へでも曲がると、すぐ迷兒になつて仕舞ふ。論理の地盤を竪に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神經系に至つては猶更粗末である。恰も荒繩で組み立てられたるかの感が起る。代助は此青年の生活狀態を觀察して、彼は必竟何の爲に呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さへある。それでゐて彼は平氣にのらくらしてゐる。しかも此のらくらを以て、暗に自分の態度と同一型に屬するものと心得て、中々得意に振舞ひたがる。其上頑强一點張りの肉體を笠に着て、却て主人の神經的な局所へ肉薄して來る。自分の神經は自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感應性に對して拂ふ租税である。高尙な敎育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報いに受ける不文の刑罰である。是等の犧牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に爲れた。否、ある時は是等の犧牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さへある。門野にはそんな事は丸で分らない。

「門野さん、郵便は來て居なかつたかね」

「郵便ですか。斯うつと。來てゐました。端書と封書が。机の上に置きました。持つて來ますか」

「いや、僕が彼方へ行つても可い」

息切れのしない返事なので、門野はもう立つて仕舞つた。さうして端書と郵便を持つて來た。端書は、今日二時東京着、たゞちに表面へ投宿、取敢ず御報、明日午前會ひたし、と薄墨の走り書きの簡單極まるもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次郎といふ差出人の姓名が、表と同じ亂暴さ加減で書いてある。

「もう來たのか、昨日着いたんだな」と獨り言の樣に云ひながら、封書の方を取り上げると、是は親爺の手蹟である。二三日前歸つて來た。急ぐ用事でもないが、色々話しがあるから、此手紙が着いたら來てくれろと書いて、あとには京都の花がまだ早かつたの、急行列車が一杯で窮屈だつたのといふ閑文字が數行列ねてある。代助は封書を卷きながら、妙な顔をして、兩方見較べてゐた。

「君、電話を掛けて呉れませんか。家へ」

「はあ、御宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合はせる人があるから上がれないつて。明日か明後日屹度伺ひますからつて」

「はあ。何方に」

「親爺が旅行から歸つて來て、話しがあるから一寸來いつて云ふんだが、――何も親爺を呼び出さないでも可いから、誰にでも左樣云つて呉れ給へ」

「はあ」

門野は無雜作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書齋へ歸つた。見ると、綺麗に掃除が出來てゐる。落椿も何處かへ掃き出されて仕舞つた。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い寫眞帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃迄來てぴたりと手を留めた。其處には二十歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顏を見詰めてゐた。

二

着物でも着換へて、此方から平岡の宿を訪ねようかと思つてゐる所へ、折よく先方から遣つて來た。車をがら／＼と門前迄乘り附けて、此所だ／＼と梶棒を下ろさした聲は慥かに三年前分かれた時そつくりである。玄關で、取次の婆さんを捕まへて、宿へ蟇口を忘れて來たから、一寸二十錢貸してくれと云つた所などは、どうしても學校時代の平岡を思ひ出さずにはゐられない。代助は玄關迄馳け出して行つて、手を執らぬ許りに舊友を座敷へ上げた。

「何うした。まあ緩りするが好い」

「おや、椅子だね」と云ひながら平岡は安樂椅子へ、どさりと身體を投げ掛けた。十五貫目以上もあらうと云ふわが肉に、三文の價値を置いてゐない樣な扱ひ方に見えた。それから椅子の脊に坊主頭を靠して、一寸部屋の中を見廻しながら、

「中々好い家だね。思つたより好い」と賞めた。代助は黙つて巻莨入の蓋を開けた。

「それから、以後何うだい」

「何うの、斯うのつて、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分つたが、近頃ぢや些とも寄こさないもんだから」

「いや何所も彼所も御無沙汰して」と平岡は突然眼鏡を外して、背広の胸から皺だらけの手帛を出して、眼をぱち／＼させながら拭き始めた。学校時代からの近眼である。代助は凝と其様子を眺めてゐた。

「君は何うだい」と云ひながら、細い蔓を耳の後へ絡みつけに、両手で持つて行つた。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番好いな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調を更へて、

「やあ、桜がある。今漸く咲き掛けた所だね。余程気候が違ふ」と云つた。話し具合が何だか故の様にしんみりしない。代助も少し気の抜けた風に、

「彼方は大分暖かいだらう」と序同然の挨拶をした。すると、今度は寧ろ法外に熱した具合で、

「うん、大分違ふ」と力の這入つた返事があつた。恰も自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助は又平岡の顔を眺めた。平岡は巻莨に火を点けた。其時婆さんが漸くの事で急須に茶を淹れて持つて出た。今しがた鉄瓶に水を注して仕舞つたので、煮立てるのに暇が入つて、つい遅くなつて済みませんと言訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌つてる間、紫檀の盆を見て黙つてゐた。

婆さんは相手にされないので、獨りで愛想笑ひをして座敷を出た。
「ありや何だい」
「婆さんさ。雇つたんだ。飯を食はなくつちやならないから」
「御世辭が好いね」
代助は赤い脣の兩端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑む樣に笑つた。
「今迄斯んな所へ奉公した事がないんだから、仕方がない」
「君の家から誰か連れて來れば好いのに。大勢ゐるだらう」
「みんな若いの許りでね」と代助は眞面目に答へた。平岡は此時始めて聲を出して笑つた。
「若けりや猶結構ぢやないか」
「兎に角家の奴は好くないよ」
「あの婆さんの外に誰かゐるのかい」
「書生が一人ゐる」
門野は何時の間にか歸つて、臺所の方で婆さんと話しをしてゐた。
「それ限りかい」
「それ限りだ。何故」
「細君はまだ貰はないのかい」
代助は心持ち赤い顏をしたが、すぐ尋常一般の極めて平凡な調子になつた。

「妻を貰つたら、君の所へ通知位する筈ぢやないか。それよりか君の―と云ひかけて、ぴたりと已めた。

代助と平岡とは中學時代からの知り合ひで、殊に學校を卒業して後、一年間といふものは、殆ど兄弟の樣に親しく往來した。其時分は互に凡てを打ち明けて、互に力に爲り合ふ樣なことを云ふのが、互に娯樂の尤もなるものであつた。この娯樂が變じて實行となつた事も少なくないので、彼等は相互の爲に口にした凡ての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでゐると確信してゐた。さうして其犠牲を卽座に拂へば、娯樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであると云ふ陳腐な事實にさへ氣が附かずにゐた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤めてゐる銀行の、京阪地方のある支店詰めになつた。代助は、出立の當時、新夫婦を新橋の停車場に送つて、愉快さうに、直き歸つて來給へと平岡の手を握つた。平岡は、仕方がない、當分辛抱するさと打遣る樣に云つたが、其眼鏡の裏には得意の色が羨ましい位動いた。それを見た時、代助は急に此友達を憎らしく思つた。家へ歸つて、一日部屋へ這入つたなり考へ込んでゐた。嫂を連れて音樂會へ行く筈の所を斷つて、大いに嫂に氣を揉ました位である。

平岡からは斷えず音信があつた。安着の端書、向うで世帶を持つた報知、それが濟むと、支店勤務の模樣、自己將來の希望、色々あつた。手紙の來るたびに、代助は何時も丁寧な返事を出した。不思議な事に、代助が返事を書くときは、何時でも一種の不安に襲はれる。たまには我慢するのが厭になつて、途中で返事を已めて仕舞ふ事がある。たゞ平岡の方から、自分の過去の行爲に對して、幾分か感謝の意を表して來る場合に限つて、安々と筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうち段々手紙の遣り取りが疎遠になつて、月に二遍が、一遍になり、一遍が又二月、三月に跨がる

様に間を置いて來ると、今度は手紙を書かない方が、却て不安になつて、何の意味もないのに、只この感じを驅逐する爲に封筒の糊を濕す事があつた。それが半年ばかり續くうちに、代助の頭も胸も段々組織が變つて來る樣に感ぜられて來た。此變化に伴なつて、平岡へは手紙を書いても書かなくても、丸で苦痛を覺えない樣になつて仕舞つた。現に代助が一戸を構へて以來、約一年餘と云ふものは、此春年賀狀の交換のとき、序を以て、今の住所を知らした丈である。

それでも、ある事情があつて、平岡の事は丸で忘れる譯には行かなかつた。時々思ひ出す。さうして今頃は何うして暮らしてゐるだらうと、色々に想像して見る事がある。然したゞ思ひ出す丈で、別段問ひ合はせたり聞き合はせたりする程に、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日迄過ごして來た所へ、二週間前に突然平岡からの書信が屆いたのである。其手紙には近々當地を引き上げて、御地へまかり越す積りである。但し本店からの命令で、榮轉の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれては困る。少し考へがあつて、急に職業替へをする氣になつたから、着京の上は何分宜しく頼むとあつた。此何分宜しく頼むの頼むは本當の意味の頼むか、又は單に辭令上の頼むか不明だけれども、平岡の一身上に急劇な變化のあつたのは爭ふべからざる事實である。代助は其時はつと思つた。

それで、逢ふや否や此變動の一部始終を聞かうと待ち設けて居たのだが、不幸にして話しが外れて容易に其所へ戻つて來ない。折を見て此方から持ち掛けると、まあ緩り話すとか何とか云つて、中々埒を開けない。代助は仕方なしに、仕舞に、

「久し振だから、其處いらで飯でも食はう」と云ひ出した。平岡は、それでも、まだ何れ緩りを繰り

返したがるのを、無理に引つ張つて、近所の西洋料理へ上がつた。
兩人は其處で大分飮んだ。飮む事と食ふ事は昔の通りだねと言つたのが始まりで、硬い舌が段々弛んで來た。代助は面白さうに、二三日前自分の觀に行つた、ニコライの復活祭の話をした。御祭が夜の十二時を相圖に、世の中の寐鎭まる頃を見計らつて始まる。參詣人が長い廊下を廻つて本堂へ歸つて來ると、何時の間にか幾千本の蠟燭が一度に點いてゐる。法衣を着た坊主が行列して向うを通るときに、黑い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。――平岡は頰杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞いてゐた。代助はそれから夜の二時頃廣い御成街道を通つて、深夜の鐵軌が、暗い中を眞直に渡つてゐる上を、たつた一人上野の森迄來て、さうして電燈に照らされた花の中に這入つた。
「人氣のない夜櫻は好いもんだよ」と云つた。平岡は默つて盃を干したが、一寸氣の毒さうに口元を動かして、
「好いだらう、僕はまだ見た事がないが。――然し、そんな眞似が出來る間はまだ氣樂なんだよ。世の中へ出ると、中々それ所ぢやない」と暗に相手の無經驗を上から見た樣な事を云つた。代助には其調子よりも其返事の內容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの經驗よりも、復活祭當夜の經驗の方が、人生に於て有意義なものと考へてゐる。其所でこんな答をした。
「僕は所謂處世上の經驗程愚なものはないと思つてゐる。苦痛がある丈ぢやないか」
平岡は醉つた眼を心持ち大きくした。
「大分考へが違つて來た樣だね。――けれども其苦痛が後から藥になるんだつて、もとは君の持說ぢや

なかつたか」

「そりや不見識な青年が、流俗の諺に降參して、好い加減な事を云つてゐた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中へ出なくつちやなるまい。其時それぢや困るよ」

「世の中へは昔から出てゐるさ。ことに君と分れてから、大變世の中が廣くなつた樣な氣がする。たゞ君の出てゐる世の中とは種類が違ふ丈だ」

「そんな事を云つて威張つたつて、今に降參する丈だよ」

「無論食ふに困る樣になれば、何時でも降參するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な經驗を嘗めるものか。印度人が外套を着て、冬の來た時の用心をすると同じ事だもの」

平岡の眉の間に、一寸不快の色が閃めいた。赤い眼を据ゑてぷか／＼煙草を吹かしてゐる。代助は、ちと云ひ過ぎたと思つて、少し調子を穩やかにした。――

「僕の知つたものに、丸で音樂の解らないものがある。學校の教師をして、一軒ぢや飯が喰へないもんだから、三軒も四軒も懸け持ちをやつてゐるが、そりや氣の毒なもので、下讀みをするのと、教場へ出て器械的に口を動かしてゐるより外に全く暇がない。たまの日曜抔は骨休めとか號して一日ぐう／＼寐てゐる。だから何處に音樂會があらうと、どんな名人が外國から來ようと聞きに行く機會がない。つまり樂といふ一種の美しい世界には丸で足を踏み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。僕から云はせると、是程憐れな無經驗はないと思ふ。麵麭に關係した經驗は、切實かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麭

を離れ水を離れた贅澤な經驗をしなくつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考へてるらしいが、僕の住んでゐる贅澤な世界では、君よりずつと年長者の積りだ」

平岡は卷烟草の灰を、皿の上にはたきながら、沈んだ暗い調子で、

「うん、何時迄もさう云ふ世界に住んでゐられゝば結構さ」と云つた。其重い言葉の足が、富に對する一種の呪咀を引き摺つてゐる樣に聽こえた。

兩人は醉つて、戶外へ出た。酒の勢ひで變な議論をしたものだから、肝心の一身上の話しはまだ少しも發展せずにゐる。

「少し步かないか」と代助が誘つた。平岡も口程忙しくはないと見えて、生返事をしながら、一所に步を運んで來た。通を曲がつて橫町へ出て、成る可く、話しの爲好い閑な場所を選んで行くうちに、何時か緒口が開いて、思ふあたりへ談柄が落ちた。

平岡の云ふ所によると、赴任の當時彼は事務見習ひのため、地方の經濟狀況取調べのため、大分忙しく働いて見た。出來得るならば、學理的に實地の應用を研究しようと思つた位であつたが、地位が大程高くないので、已むを得ず、自分の計畫は計畫として未來の試驗用に頭の中に入れて置いた。尤も始めのうちは色々支店長に建策した事もあるが、支店長は冷然として、何れも取り合はなかつた。六づかしい理窟抔を持ち出すと甚だ御機嫌が惡い。靑二才に何が分るものかと云ふ樣な風をする。其癖自分は實際何も分つて居ないらしい。平岡から見ると、其相手にしない所が、相手にするに足らないからではなくつて、寧ろ相手にするのが怖いからの樣に思はれた。其處に平岡の癪があつた。衝突しかけた事も一度や二度では

ない。

けれども、時日を經過するに從つて、肝癪が何時となく薄らいできて、次第に自分の頭が、周圍の空氣と融和する樣になつた。又成るべくは、融和する樣に力めた。それにつれて、支店長の自分に對する態度も段々變つて來た。時々は向うから相談をかける事さへある。すると學校を出たての平岡でないから、先方に解らない、且都合の惡いことは成るべく云はない樣にして置く。

「無暗に御世辭を使つたり、胡麻を摺るのとは違ふが」と平岡はわざ〳〵斷つた。代助は眞面目な顏をして、「そりや無論さうだらう」と答へた。

支店長は平岡の未來の事に就いて、色々心配してくれた。近いうちに本店に歸る番に中たつてるから、其時は一所に來給へ抔と冗談半分に約束迄した。其頃は事務にも慣れるし、信用も厚くなるし、交際も殖えるし、勉強をする暇が自然となくなつて、又勉強が却て實務の妨げをする樣に感ぜられて來た。

支店長が、自分に萬事を打ち明ける如く、自分は自分の部下の關といふ男を信任して、色々と相談相手にして居つた。所が此男がある藝妓と關係つて、何時の間にか會計に穴を明けた。それが暴露したので、本人は無論解雇しなければならないが、ある事情からして、放つて置くと、支店長に迄多少の煩ひが及んで來さうだつたから、其所で自分が責を引いて辭職を申し出た。

平岡の語る所は、ざつと斯うであるが、代助には彼が支店長から因果を含められて、處決を促された樣にも聞こえた。それは平岡の話しの末に「會社員なんてものは、上になればなる程旨い事が出來るもので ね。實は關なんて、あれつ許りの金を使ひ込んで、すぐ免職になるのは氣の毒な位なものさ」といふ句が

あつたのから推したのである。

「おや支店長は一番旨い事をしてゐる譯だね」と代助が聞いた。

「或はそんなものかも知れない」と平岡は言葉を濁して仕舞つた。

「それで其男の使ひ込んだ金は何うした」

「千に足らない金だつたから、僕が出して置いた」

「よく有つたね。君も大分旨い事をしたと見える」

平岡は苦い顔をして、じろりと代助を見た。

「旨い事をしたと假定しても、皆使つて仕舞つてゐる。生活にさへ足りない位だ。其金は借りたんだよ」

「さうか」と代助は落ち附き拂つて受けた。代助は何んな時でも平生の調子を失はない男である。さうして其調子には低く明らかなうちに一種の丸味が出てゐる。

「支店長から借りて埋めて置いた」

「何故支店長がぢかに其關とか何とか云ふ男に貸して遣らないのかな」

平岡は何とも答へなかつた。代助も押しては聞かなかつた。二人は無言の儘しばらくの間並んで歩いて行つた。

代助は平岡が語つたより外に、まだ何かあるに違ひないと鑑定した。けれども彼はもう一歩進んで飽く迄其眞相を研究する程の權利を有つてゐないことを自覺してゐる。又そんな好奇心を引き起すには、實際あまり都會化し過ぎてゐた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に nil adm-

mirari の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫驚する程の山出しではなかつた。彼の神經は斯樣に陳腐な祕密を嗅いで嬉しがる樣に退屈を感じてはゐなかつた。否、是より幾倍か快い刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた。

代助は平岡のそれとは殆ど緣故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化――進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが――してゐたのである。それを平岡は全く知らない。代助をもつて、依然として舊態を改めざる三年前の初心と見てゐるらしい。かう云ふ御坊つちやんに、洗ひ渫ひ自分の弱點を打ち明けては、徒らに馬糞を投げて、御孃さまを驚かせると同結果に陷り易い。餘計な事をして愛想を盡かされるよりは默つてゐる方が安全だ。――代助には平岡の腹が斯う取れた。それで平岡が自分に返事もせずに無言で歩いて行くのが、何となく馬鹿らしく見えた。平岡が代助を子供視する程度に於て、あるひは其れ以上の程度に於て、代助は平岡を子供視し始めたのである。けれども兩人が十五六間過ぎて、又話しを遣り出した時は、どちらにも、そんな痕迹は更になかつた。最初に口を切つたのは代助であつた。

「それで、是から先何うする積りかね」

「さあ」

「矢つ張り今迄の經驗もあるんだから、同じ職業が可いかも知れないね」

「さあ。事情次第だが。實は緩り君に相談して見ようと思つてゐたんだが。何うだらう、君の兄さんの會社の方に口はあるまいか」

「うん、頼んで見よう。二三日内に家へ行く用があるから。然し何うかな」
「もし、實業の方が駄目なら、どつか新聞へでも這入らうかと思ふ」
「夫も好いだらう」
兩人は又電車の通る通へ出た。平岡は向うから來た電車の軒を見てゐたが、突然是に乘つて歸ると云ひ出した。代助はさうかと答へた儘、留めもしない、と云つて直ぐ分れもしなかつた。赤い棒の立つてゐる停留所迄歩いて來た。そこで、
「三千代さんは何うした」と聞いた。
「難有う、まあ相變らずだ。君に宜しく云つてゐた。實は今日連れて來ようと思つたんだけれども、何だか汽車に搖れたんで頭が惡いといふから宿屋へ置いて來た」
電車が二人の前で留まつた。平岡は二三歩早足に行きかけたが、代助から注意されて已めた。彼の乘るべき車はまだ着かなかつたのである。
「子供は惜しい事をしたね」
「うん。可哀相な事をした。其節は又御丁寧に難有う。どうせ死ぬ位なら生れない方が好かつた」
「其後は何うだい。まだ後は出來ないか」
「うん、未だにも何にも、もう駄目だらう。身體があんまり好くないものだからね」
「こんなに動く時は子供のない方が却つて便利で可いかも知れない」
「夫もさうさ。一層君の樣に一人身なら、猶の事、氣樂で可いかも知れない」

「一人身になるさ」
「冗談云つてら――夫よりか、妻が頻りに、君はもう奥さんを持つたらうか、未だだらうかつて氣にしてるたぜ」
所へ電車が來た。

三

代助の父は長井得といつて、御維新のとき、戰爭に出た經驗のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きてゐる。役人を已めてから、實業界に這入つて、何か彼かしてゐるうちに、自然と金が貯まつて、此十四五年來は大分の財産家になつた。
誠吾と云ふ兄がある。學校を卒業してすぐ、父の關係してゐる會社へ出たので、今では其所で重要な地位を占める樣になつた。梅子といふ夫人に、二人の子供が出來た。兄は誠太郎と云つて十五になる。妹は縫といつて三つ違ひである。
誠吾の外に姉がまだ一人あるが、是はある外交官に嫁いで、今は夫と共に西洋にゐる。誠吾と此姉の間にもう一人、それから此姉と代助の間にもまだ一人兄弟があつたけれども、それは二人とも早く死んで仕舞つた。母も死んで仕舞つた。
代助の一家は是丈の人數から出來上がつてゐる。そのうちで外へ出てゐるものは、西洋に行つた姉と、近頃一戸を構へた代助ばかりだから、本家には大小合はせて五人殘る譯になる。

代助は月に一度は必ず本家へ金を貰ひに行く。代助は親の金とも、兄の金ともつかぬものを使つて生きてゐる。月に一度の外にも、退屈になれば出掛けて行く。さうして子供に調戯つたり、書生と五目並べをしたり、嫂と芝居の評をしたりして歸つて來る。

代助は此嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく繼ぎ合はせた樣な一種の人物である。わざ〳〵佛蘭西にゐる義妹に注文して、六つかしい名のつく、頗る高價な織物を取り寄せて、それを四五人で裁つて、帶に仕立てて着て見たり何かする。後で、それは日本から輸出したものだと云ふ事が分つて大笑ひになつた。三越陳列所へ行つて、それを調べて來たものは代助である。夫から西洋の音樂が好きで、よく代助に誘ひ出されて聞きに行く。さうかと思ふと易斷に非常な興味を有つてゐる。石龍子と尾島某を大いに崇拜する。代助も二三度御相伴に、車で易者の許迄附いて行つた事がある。

誠太郎と云ふ子は近頃ベースボールに熱中してゐる。代助が行つて時々球を投げてやる事がある。彼は妙な希望を持つた子供である。毎年夏の初めに、多くの燒芋屋が俄然として氷水屋に變化するとき、第一番に馳けつけて、汗も出ないのに、氷菓を食ふものは誠太郎である。氷菓がないときには、氷水で我慢する。さうして得意になつて歸つて來る。近頃では、もし相撲の常設館が出來たら、一番先に這入つて見たいと云つてゐる。叔父さん誰か相撲を知りませんかと代助に聞いた事がある。

縫といふ娘は、何か云ふと、好くつてよ、知らないわと答へる。さうして日に何遍となくリボンを掛け易へる。近頃はヴイオリンの稽古に行く。歸つて來ると、鋸の目立ての樣な聲を出して御浚ひをする。ただし人が見てゐると決して遣らない。室を締め切つて、きい〳〵云はせるのだから、親は可なり上手だと

思つてゐる。代助丈が時々そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。

兄は大抵不在勝ちである。ことに忙しい時になると、家で食ふのは朝食位なもので、あとは、何うして暮らしてゐるのか、二人の子供には全く分らない。同程度に於て代助にも分らない。是は分らない方が好ましいので、必要のない限りは、兄の日々の戸外生活に就いて決して研究しないのである。

代助は二人の子供に大變人望がある。嫂にも可なりある。兄には、あるんだか、ないんだか分らない。會に兄と弟が顔を合はせると、たゞ浮世話をする。雙方とも普通の顔で、大いに平氣で遣つてゐる。陳腐に慣れ抜いた樣子である。

代助の尤も應へるのは親爺である。好い年をして、若い妾を持つてゐるが、それは構はない。代助から云ふと寧ろ贊成な位なもので、彼は妾を置く餘裕のないものに限つて、蓄妾の攻擊をするんだと考へてゐる。親爺は又大分の八釜し屋である。子供のうちは心魂に徹して困却した事がある。しかし成人の今日では、それにも別段辟易する必要を認めない。たゞ應へるのは、自分の青年時代と、代助の現今とを混同して、兩方共大した變りはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔世に處した時の心掛けでもつて、代助も遣らなくつては、嘘だといふ論理になる。尤も代助の方では、何が嘘ですかと聞き返した事がない。だから決して喧嘩にはならない。代助は子供の頃非常な肝癪持ちで、十八九の時分親爺と組打をした事が一二返ある位だが、成長して學校を卒業して、しばらくすると、此肝癪がぱたりと已んで仕舞つた。それから以後つひぞ怒つた試しがない。親爺はこれを自分の薫育の效果と信じてひそかに誇つてゐる。

實際を云ふと親爺の所謂薫育は、此父子の間に纒綿する暖かい情味を次第に冷却せしめた丈である。少

なくとも、代助はさう思つてゐる。所が親爺の腹のなかでは、それが全く反對に解釋されて仕舞つた。何をしようと血肉の親子である。子が親に對する天賦の情合が、子を取扱ふ方法の如何に因つて變る筈がない。教育の爲、少しの無理はしようとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺は、固く斯う信じてゐた。自分が代助に存在を與へたといふ單純な事實が、あらゆる不快苦痛に對して、永久愛情の保證になると考へた親爺は、其信念をもつて、ぐん／＼押して行つた。さうして自分に冷淡な一個の息子を作り上げた。尤も代助の卒業前後からは其待遇法も大分變つて來て、ある點から云へば、驚く程寬大になつた所もある。然しそれは代助が生れ落ちるや否や、此親爺が代助に向つて作つたプログラムの一部分の遂行に過ぎないので、代助の心意の變移を見拔いた適宜の處置ではなかつたのである。自分の教育が代助に及ぼした惡結果に至つては、今に至つて全く氣が附かずにゐる。

親爺は戰爭に出たのを頗る自慢にする。稍ともすると、御前抔はまだ戰爭をした事がないから、度胸が据わらなくつて不可んと一概にけなして仕舞ふ。恰も度胸が人間至上な能力であるかの如き言草である。代助はこれを聞かせられるたんびに厭な心持がする。膽力は命の遣り取りの劇しい、親爺の若い頃の樣な野蠻時代にあつてこそ、生存に必要な資格かも知れないが、文明の今日から云へば、古風な弓術擊劍の類と大差はない道具と、代助は心得てゐる。否、膽力とは兩立し得ないで、しかも膽力以上に難有がつて然るべき能力が澤山ある樣に考へられる。御父さんから、又膽力の講釋を聞いた。御父さんの樣に云ふと、世の中で石地藏が一番偉いことになつて仕舞ふ樣だねと云つて、嫂と笑つた事がある。

斯う云ふ代助は無論臆病である。又臆病で恥づかしいといふ氣は心から起らない。ある場合には臆病を

以て自任したくなる位である。子供の時、親爺の使嗾で、夜中にわざ〳〵青山の墓地迄出掛けた事がある。氣味のわるいのを我慢して一時間も居たら、たまらなくなつて、蒼青な顔をして家へ歸つて來た。其折は自分でも殘念に思つた。あくる朝親爺に笑はれたときは、親爺が憎らしかつた。親爺の云ふ所によると、彼と同時代の少年は、膽力修養の爲、夜半に結束して、たつた一人、御城の北一里にある劍が峰の天頂迄登つて、其所の辻堂で夜明しをして、日の出を拜んで歸つてくる習慣であつたさうだ。今の若いものとは心得方からして違ふと親爺が批評した。

斯んな事を眞面目に口にした、又今でも口にしかねまじき親爺は氣の毒なものだと代助は考へる。彼は地震が嫌ひである。瞬間の動搖でも胸に波が打つ。あるときは書齋で凝と坐つてゐて、何かの拍子に、ああ地震が遠くから寄せて來るなと感ずる事がある。すると、尻の下に敷いてゐる坐蒲團も、疊も、乃至床板も明らかに震へる樣に思はれる。彼はこれが自分の本來だと信じてゐる。親爺の如きは、神經未熟の野人か、然らずんば己を僞る愚者としか代助には受け取れないのである。

代助は今此親爺と對坐してゐる。廂の長い小さな部屋なので、居ながら庭を見ると、廂の先で庭が仕切られた樣な感がある。少なくとも空は廣く見えない。其代り靜かで落ち附いて、尻の据り具合が好い。

親爺は刻煙草を吹かすので、手のある長い煙草盆を前へ引き附けて、時々灰吹をぽん〳〵と叩く。それが靜かな庭へ響いて好い音がする。代助の方は金の吸口を四五本手焙の中へ竝べた。もう鼻から烟を出すのが厭になつたので、腕組をして親爺の顔を眺めてゐる。其顔には年の割に肉が多い。それでゐて頬は瘦けてゐる。濃い眉の下に眼の皮が弛んで見える。髭は眞白と云はんよりは、寧ろ黄色である。さうして、

話しをするときに相手の膝頭と顔とを半々に見較べる癖がある。其時の眼の動かし方で、白眼が一寸ちらついて、相手に妙な心持をさせる。

老人は今斯んな事を云つてゐる。――

「さう人間は自分丈を考へるべきではない。世の中もある。國家もある。少しは人の爲に何かしなくつては心持のわるいものだ。御前だつて、さう、ぶら〳〵してゐて心持の好い筈はなからう。そりや、下等社會の無教育のものなら格別だが、最高の教育を受けたものが、決して遊んで居て面白い理由がない。學んだものは、實地に應用して始めて趣味が出るものだからな」

「左樣です」と代助は答へてゐる。親爺から說法されるたんびに、代助は返答に窮するから好い加減な事を云ふ習慣になつてゐる。代助に云はせると、親爺の考へは、萬事中途半端に、或物を獨り勝手に斷定してから出立するんだから、毫も根本的の意義を有してゐない。しかのみならず、今利他本位でやつてるかと思ふと、何時の間にか利己本位に變つてゐる。言葉丈は滾々として、勿體らしく出るが、要するに端倪すべからざる空談である。それを基礎から打ち崩して懸かるのは大變な難事業だし、又必竟出來ない相談だから、始めより成るべく觸らない樣にしてゐる。所が親爺の方では代助を以て無論自己の太陽系に屬すべきものと心得てゐるので、自己は飽くまでも、代助の軌道を支配する權利があると信じて押して來る。そこで代助も已むを得ず親爺といふ老太陽の周圍を、行儀よく廻轉する樣に見せてゐる。

「それは實業が厭なら厭で好い。何も金を儲ける丈が日本の爲になるとも限るまいから。金は取らんでも構はない。金の爲に兎や角云ふとなると、御前も心持がわるいだらう。金は今迄通り己が補助して遣る。

おれも、もう何時死ぬか分らないし、死にや金を持つて行く譯にも行かないし。月々御前の生計位どうでもしてやる。だから奮發して何か爲るが好い。國民の義務としてするが好い。もう三十だらう」

「左樣です」

「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不體裁だな」

代助は決してのらくらして居るとは思はない。たゞ職業の爲に汚されない內容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へてゐる丈である。親爺が斯んな事を云ふたびに、實は氣の毒になる。親爺の幼稚な頭腦には、かく有意義に月日を利用しつゝある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出してゐるのが、全く映らないのである。仕方がないから、眞面目な顏をして、

「えゝ、困ります」と答へた。老人は頭から代助を小僧視してゐる上に、其返事が何時でも幼氣を失はない、簡單な、世帶離れをした文句だものだから、馬鹿にするうちにも、どうも坊つちやんは成人しても仕樣がない、困つたものだと云ふ氣になる。さうかと思ふと、代助の口調が如何にも平氣で、冷靜で、はにかまず、もぢ附かず、尋常極まつてゐるので、此奴は手の附け樣がないといふ氣にもなる。

「身體は丈夫だね」

「二三年このかた風邪を引いた事もありません」

「頭も惡い方ぢやないだらう。學校の成績も可なりだつたんぢやないか」

「まあ左樣です」

「夫で遊んでゐるのは勿體ない。あの何とか云つたね、そら御前の所へ好く話しに來た男があるだらう。

己も一二度逢つたことがある」

「平岡ですか」

「さう平岡。あの人なぞは、あまり出來の可い方ぢやなかつたさうだが、卒業すると、すぐ何處かへ行つたぢやないか」

「其代り失敗つて、もう歸つて來ました」

老人は苦笑を禁じ得なかつた。

「どうして」と聞いた。

「詰り食ふ爲に働くからでせう」

老人には此意味が善く解らなかつた。

「何か面白くないことでも遣つたのかな」と聞き返した。

「其場合々々で當然の事を遣るんでせうけれども、其當然が矢つ張り失敗になるんでせう」

「はあゝ」と氣の乘らない返事をしたが、やがて調子を易へて、說き出した。

「若い人がよく失敗るといふが、全く誠實と熱心が足りないからだ。己も多年の經驗で、此年になる迄遣つて來たが、どうしても此二つがないと成功しないね」

「誠實と熱心があるために、却て遣り損なふこともあるでせう」

「いや、先づないな」

親爺の頭の上に、誠者天之道也と云ふ額が麗々と掛けてある。先代の舊藩主に書いて貰つたとか云つて、

親爺は尤も珍重してゐる。代助は此額が甚だ嫌ひである。第一字が嫌ひだ。其上文句が氣に喰はない。誠は天の道なりの後へ、人の道にあらずと附け加へたい様な心持がする。

其昔藩の財政が疲弊して、始末が附かなくなつた時、整理の任に當たつた長井は、藩侯に緣故のある町人を二三人呼び集めて、刀を脫いで其前に頭を下げて、彼等に一時の融通を頼んだ事がある。固より返せるか、返せないか、分らなかつたんだから、分らないと眞直に自白して、それがために其時成功した。その因緣で此額を藩主に書いて貰つたんである。爾來長井は何時でも、之を自分の居間に掛けて朝夕眺めてゐる。代助は此額の由來を何遍聞かされたか知れない。

今から十五六年前に、舊藩主の家で、月々の支出が嵩んできて、折角持ち直した經濟が又崩れ出した時にも、長井は前年の手腕によつて、再度の整理を委託された。其時長井は自分で風呂の薪を焚いて見て、實際の消費高と帳面づらの消費高との差違から調べにかゝつたが、終日終夜この事丈に精魂を打ち込んだ結果は、約一ヶ月内に立派な方法を立て得るに至つた。それより以後藩主の家では比較的豐かな生計をしてゐる。

斯う云ふ過去の歷史を持つてゐて、此過去の歷史以外には、一歩も踏み出して考へる事を敢てしない長井は、何によらず、誠實と熱心へ持つて行きたがる。

「御前は、どう云ふものか、誠實と熱心が缺けてゐる樣だ。それぢや不可ん。だから何も出來ないんだ」

「誠實も熱心もあるんですが、たゞ人事上に應用出來ないんです」

「何う云ふ譯で」

代助は又返答に窮した。代助の考へによると、誠實だらうが、熱心だらうが、自分が出來合ひの奴を胸に蓄へてゐるんぢやなくつて、石と鐵と觸れて火花の出る樣に、相手次第で摩擦の具合がうまく行けば、當事者二人の間に起るべき現象である。自分の有する性質と云ふよりは寧ろ精神の交換作用である。だから相手が惡くつては起り樣がない。

「御父さんは論語だの、王陽明だのといふ、金の延金を呑んで入らつしやるから、左樣いふ事を仰しやるんでせう」

「金の延金とは」

代助はしばらく默つてゐたが、漸く、

「延金の儘出て來るんです」と云つた。門野は、書物癖のある、偏屈な、世慣れない若輩のいひたがる不得要領の警句として、好奇心のあるにも拘らず、取り合ふ事を敢てしなかつた。

それから約四十分程して、老人は着物を着換へて、袴を穿いて、車に乘つて、何處かへ出て行つた。代助も玄關迄送つて出たが、又引き返して客間の戸を開けて中へ這入つた。是は近頃になつて建て増した西洋作りで、内部の裝飾其他の大部分は、代助の意匠に本づいて、專門家へ注文して出來上がつたものである。ことに欄間の周圍に張つた模樣畫は、自分の知り合ひの去る畫家に頼んで、色々相談の揚句に成つたものだから、猶更興味が深い。代助は立ちながら、畫卷物を展開した樣な、横長の色彩を眺めてゐたが、どう云ふものか、此前來て見た時よりは痛く見劣りがする。是では頼もしくないと思ひながら、猶局部局部に眼を附けて吟味してゐると、突然嫂が這入つて來た。

「おや、此所に入らつしやるの」と云つたが、「一寸其所いらに私の櫛が落ちて居なくつて」と聞いた。
櫛は長椅子の足の所にあつた。昨日縫子に貸して遣つたら、何所かへ失くなして仕舞つたんで、探しに來たんださうである。兩手で頭を抑へる樣にして、櫛を束髮の根方へ押し附けて、上眼で代助を見ながら、
「相變らず茫乎してるぢやありませんか」と調戲つた。
「御父さんから御談義を聞かされちまつた」
「また？能く叱られるのね。御歸り匆々、隨分氣が利かないわね。然し貴方もあんまり、好かないわ。些とも御父さんの云ふ通りになさらないんだもの」
「御父さんの前で議論なんかしやしませんよ。萬事控へ目に大人しくしてゐるんです」
「だから猶始末が惡いのよ。何か云ふと、へい〱つて、さうして、些とも云ふ事を聞かないんだもの」
代助は苦笑して默つて仕舞つた。梅子は代助の方へ向いて、椅子へ腰を卸ろした。脊のすらりとした、色の淺黑い、眉の濃い、唇の薄い女である。
「まあ、御掛けなさい。少し話し相手になつて上げるから」
代助は矢つ張り立つた儘、嫂の姿を見守つてゐた。
「今日は妙な半襟を掛けてますね」
「これ？」
梅子は顎を縮めて、八の字を寄せて、自分の襦袢の襟を見ようとした。
「此間買つたの」

「好い色だ」

「まあ、そんな事は、何うでも可いから、其所へ御掛けなさいよ」

代助は嫂の眞正面へ腰を卸ろした。

「へえ掛けました」

「一體今日は何を叱られたんです」

「何を叱られたんだか、あんまり要領を得ない。然し御父さんの國家社會の爲に盡くすには驚いた。何でも十八の年から今日迄のべつに盡くしてるんだつてね」

「それだから、あの位に御成りになつたんぢやありませんか」

「國家社會の爲に盡くして、金が御父さん位儲かるなら、僕も盡くしても好い」

「だから遊んでないで、御盡くしなさいな。貴方は寐てゐて御金を取らうとするから狡猾よ」

「御金を取らうとした事は、まだ有りません」

「取らうとしなくつても、使ふから同じぢやありませんか」

「兄さんが何とか云つてましたか」

「兄さんは呆れてゐるから、何とも云やしません」

「隨分猛烈だな。然し御父さんより兄さんの方が偉いですね」

「何うして。――あら惡らしい、又あんな御世辭を使つて。貴方はそれが惡いのよ。眞面目な顏をして他を茶化すから」

「左様なもんでせうか」
「左様なもんでせうかつて、他の事ぢやあるまいし。少しや考へて御覧なさいな」
「何うも此所へ来ると、丸で門野と同じ様になつちまふから困る」
「門野つて何です」
「なに宅にゐる書生ですがね。人に何か云はれると、屹度左様なもんでせうか、とか、左様でせうか、とか答へるんです」
「あの人が？餘つ程妙なのね」
代助は一寸話しを已めて、梅子の肩越しに、窓掛の間から、綺麗な空を透かす様に見てゐた。遠くに大きな樹が一本ある。薄茶色の芽を全體に吹いて、柔らかい梢の端が天に接く所は、糠雨で暈されたかの如くに霞んでゐる。
「好い氣候になりましたね。何所か御花見にでも行きませうか」
「行きませう。行くから仰しやい」
「何を」
「御父さまから云はれた事を」
「云はれた事は色々あるんですが、秩序立てゝ繰り返すのは困るですよ。頭が悪いんだから」
「まだ空つとぼけて入らつしやる。ちやんと知つてますよ」
「ぢや、伺ひませうか」

梅子は少しつんとした。
「貴方は近頃餘つ程減らず口が達者におなりね」
「何、姉さんが辟易する程ぢやない。――時に今日は大變靜かですね。どうしました、子供達は」
「子供は學校です」
十六七の小間使が戸を開けて顔を出した。あの、旦那樣が、奥樣に一寸電話口迄と取り次いだなり、默つて梅子の返事を待つてゐる。梅子はすぐ立つた。代助も立つた。つゞいて客間を出ようとすると、梅子は振り向いた。
「あなたは、其所に入らつしやい。少し話しがあるから」
代助には嫂のかう云ふ命令的の言葉が何時でも面白く感ぜられる。御緩りと見送つた儘、又腰を掛けて、再び例の畫を眺め出した。しばらくすると、其色が壁の上に塗り附けてあるのでなくつて、自分の眼球の中から飛び出して、壁の上へ行つて、べた〳〵喰つ附く樣に見えて來た。仕舞には眼球から色を出す具合一つで、向うにある人物樹木が、此方の思ひ通りに變化出來る樣になつた。代助はかくして、下手な個所個所を悉く塗り更へて、とう〳〵自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩に包圍されて、恍惚と坐つてゐた。所へ梅子が歸つて來たので、忽ち當り前の自分に戻つて仕舞つた。
梅子の用事と云ふのを改まつて聞いて見ると、又例の縁談の事であつた。代助は學校を卒業する前から、梅子の御蔭で寫眞實物色々な細君の候補者に接した。けれども、何れも不合格者ばかりであつた。始めのうちは體裁の好い逃げ口上で斷つてゐたが、二年程前からは、急に圖迂々々しくなつて、屹度相手にけち

を附ける。口と顎の角度が惡いとか、眼の長さが顏の幅に比例しないとか、耳の位置が間違つてるとか、必ず妙な非難を持つて來る。それが悉く尋常な言草でないので、仕舞には梅子も少々考へ出した。是は必竟世話を燒き過ぎるから、附け上つて、人を困らせるのだらう。當分打遣つて置いて、向うから頼み出させるに若くはない。と決心して、夫からは緣談の事をつひぞ口にしなくなつた。所が本人は一向困つた樣子もなく、依然として海のものとも、山のものとも見當が附かない態度で今日迄暮らして來た。

其所へ親爺が甚だ因緣の深いある候補者を見附けて、旅行先から歸つた。梅子は代助の來る二三日前に、其話を親爺から聞かされたので、今日の會談は必ずそれだらうと推したのである。然し代助は實際老人から結婚問題に附いては、此日何も聞かなかつたのである。老人は或はそれを披露する氣で、呼んだのかも知れないが、代助の態度を見て、もう少し控へて置く方が得策だといふ了簡を起した結果、故意と話題を避けたとも取れる。

此候補者に對して代助は一種特殊な關係を有つてゐた。候補者の姓は知つてゐる。けれども名は知らない。年齡、容貌、教育、性質に至つては全く知らない。何故その女が候補者に立つたと云ふ因緣になると又能く知つて居る。

代助の父には一人の兄があつた。直記と云つて、父とはたつた一つ違ひの年上だが、父よりは小柄なうへに、顏附眼鼻立が非常に似てゐるものだから、知らない人には往々雙子と間違へられた。其折は父も得とは云はなかつた。誠之進といふ幼名で通つてゐた。

直記と誠之進とは外貌のよく似てゐた如く、氣質も本當の兄弟であつた。兩方の差支へのあるときは特

別、都合さへ附けば、同じ所に食つ附き合つて、同じ事をして暮らしてゐた。稽古も同時同刻に往き返りをする。讀書にも一つ燈火を分かつた位親しかつた。

丁度直記の十八の秋であつた。ある時二人は城下外れの等覺寺といふ寺へ親の使に行つた。これは藩主の菩提寺で、そこにゐる楚水といふ坊さんが、二人の親とは昵懇なので、用の手紙を、此楚水さんに渡しに行つたのである。用は圍碁の招待か何かで返事にも及ばない程簡略なものであつたが、楚水さんに留められて、色々話してゐるうちに遲くなつて、日の暮れる一時間程前に漸く寺を出た。其日は何か祭のある折で、市中は大分雜沓してゐた。二人は群集のなかを急いで歸る拍子に、ある横町を曲がらうとする角で、川向ひの方限りの某といふものに突き當たつた。此某と二人とは、かねてから仲が悪かつた。其時某は大分酒氣を帶びてゐたと見えて、二言三言いひ爭ふうちに刀を拔いて、いきなり斬り附けた。斬り附けられた方は兄であつた。已むを得ず是も腰の物を拔いて立ち向かつたが、相手は平生から極めて評判のわるい亂暴ものの丈あつて、醉つてゐるにも拘らず、強かつた。默つてゐれば兄の方が負ける。そこで弟も刀を拔いた。さうして二人で滅茶苦茶に相手を斬り殺して仕舞つた。

其頃の習慣として、侍が侍を殺せば、殺した方が切腹をしなければならない。兄弟は其覺悟で家へ歸つて來た。父も二人を並べて置いて順々に自分で介錯をする氣であつた。所が母は生憎祭で知己の家へ呼ばれて留守である。父は二人に切腹をさせる前、もう一遍母に逢はしてやりたいと云ふ人情から、すぐ母を迎ひにやつた。さうして母の來る間、二人に訓戒を加へたり、或は切腹する座敷の用意をさせたり可成愚圖々々してゐた。

母の客に行つてゐた所は、その遠縁にあたる高木といふ勢力家であつたので、大變都合が好かつた。と云ふのは、其頃は世の中の動き掛けた當時で、侍の掟も昔の樣には嚴重に行はれなかつた。殊更殺された相手は評判の惡い無賴の靑年であつた。ので高木は母とともに長井の家へ來て、何分の沙汰が公向きからある迄は、當分其儘にして、手を着けずに置くやうにと、父を諭した。

高木はそれから奔走を始めた。さうして第一に家老を說き附けた。それから家老を通して藩主を說き附けた。殺された某の親は又、存外譯の解つた人で、平生から倅の行跡の良くないのを苦に病んでゐたのみならず、斬り附けた當時も、此方から狼藉をしかけたと同然であるといふ事が明瞭になつたので、兄弟を寬大に處分する運動に就いては別段の苦情を持ち出さなかつた。兄弟はしばらく一間の內に閉ぢ籠もつて、謹愼の意を表して後、二人とも人知れず家を捨てた。

三年の後兄は京都で浪士に殺された。四年目に天下が明治となつた。又五六年してから、誠之進は兩親を國元から東京へ呼び寄せた。さうして妻を迎へて、得といふ一字名になつた。其時は自分の命を助けてくれた高木はもう死んで、養子の代になつてゐた。東京へ出て仕官の方法でも講じたらと思つて色々勸めて見たが應じなかつた。此養子に子供が二人あつて、男の方は京都へ出て同志社へ這入つた。其所を卒業してから、長らく亞米利加に居つたさうだが、今では神戶で實業に從事して、相當の資產家になつてゐる。女の方は縣下の多額納稅者の所へ嫁に行つた。代助の細君の候補者といふのは此多額納稅者の娘である。

「大變込み入つてるのね。私驚いちまつた」と嫂が代助に云つた。

「御父さんから何遍も聞いてるぢやありませんか」

「だつて、何時もは御嫁の話しが出ないから、好い加減に聞いてるのよ」
「佐川にそんな娘があつたのかな。僕も些とも知らなかつた」
「御貰ひなさいよ」
「賛成なんですか」
「賛成ですとも。因縁つきぢやありませんか」
「先祖の拵へた因縁よりも、まだ自分の拵へた因縁で貰ふ方が貰ひ好い様だな」
「おや、左様なのがあるの」
代助は苦笑して答へなかつた。

四

代助は今読み切つた許りの薄い洋書を机の上に開けた儘、両肱を突いて茫乎考へた。代助の頭は最後の幕で一杯になつてゐる。――遠くの向うに寒さうな樹が立つてゐる後に、二つの小さな角燈が音もなく揺めいて見えた。絞首台は其処にある。刑人は暗い所に立つた。木履を片足失くなした、寒いと一人が云ふと、何を？と一人が聞き直した。木履を失くなして寒いと前のものが同じ事を繰り返した。Mは何処にゐると誰か聞いた。此所にゐると誰か答へた。樹の間に大きな、白い様な、平たいものが見える。湿つぽい風が其所から吹いて来る。海だとGが云つた。しばらくすると、宣告文を書いた紙と、宣告文を持つた、白い手――手套を穿めない――を角燈が照らした。読み上げんでも可からうといふ声がした。其声は顫へ

てゐた。やがて角燈が消えた。……もう只一人になつたとKが云つた。さうして溜息を吐いた。Sも死んで仕舞つた。Wも死んで仕舞つた。Mも死んで仕舞つた。只一人になつて仕舞つた。……

海から日が上がつた。彼等は死骸を一つの車に積み込んだ。さうして引き出した。長くなつた頸、飛び出した眼、唇の上に咲いた、怖ろしい花の樣な血の泡に濡れた舌を積み込んで元の路へ引き返した。……

代助はアンドレーフの「七刑人」の最後の模樣を、此所迄頭の中で繰り返して見て、竦と肩を縮めた。斯う云ふ時に、彼が尤も痛切に感ずるのは、萬一自分がこんな場に臨んだら、どうしたら宜からうといふ心配である。考へると到底死ねさうもない。と云つて、無理にも殺されるんだから、如何にも殘酷である。彼は生の慾望と死の壓迫の間に、わが身を想像して、未練に兩方に往つたり來たりする苦悶を心に描き出しながら凝と坐つてゐると、背中一面の皮が毛穴ごとにむづ／＼して殆ど堪らなくなる。

彼の父は十七のとき、家中の一人を斬り殺して、それが爲切腹をする覺悟をしたと自分で常に人に語つてゐる。父の考へでは伯兄の介錯を自分がして、自分の介錯を祖父に頼む筈であつたさうだが、能くそんな眞似が出來るものである。父が過去を語る度に、代助は父をえらいと思ふより、不愉快な人間だと思ふ。さうでなければ嘘吐きだと思ふ。嘘吐きの方がまだ餘つ程父らしい氣がする。

父計りではない。祖父に就いても、こんな話がある。祖父が若い時分、撃劍の同門の何とかいふ男が、あまり技藝に達してゐた所から、他の嫉妬を受けて、ある夜縄手道を城下へ歸る途中で、誰かに斬り殺された。其時第一に馳け附けたものは祖父であつた。左の手に提灯を翳して、右の手に拔身を持つて、其拔身で死骸を叩きながら、軍平確りしろ、創は淺いぞと云つたさうである。

伯父が京都で殺された時は、頭巾を着た人間にどや〳〵と、旅宿へ踏み込まれて、伯父は二階の廂から飛び下りる途端、庭石に爪付いて倒れる所を上から、容赦なく遣られた爲に、顔が膾の樣になつたさうである。殺される十日程前、夜中、合羽を着て、傘に雪を除けながら、足駄がけで、四條から三條へ歸つた事がある。其時旅宿の二丁程手前で、突然後から長井直記どのと呼び懸けられた。伯父は振り向きもせず、矢張り傘を差した儘、旅宿の戸口迄來て、格子を開けて中へ這入つた。さうして格子をぴしやりと締めて、中から、長井直記は拙者だ。何御用か。と聞いたさうである。

代助は斯んな話を聞く度に、勇ましいと云ふ氣持よりも、まづ怖い方が先に立つ。度胸を買つてやる前に、腥い臭が鼻柱を拔ける樣に應へる。

もし死が可能であるならば、それは發作の絶高頂に達した一瞬にあるだらうとは、代助のかねて期待する所であつた。所が、彼は決して發作性の男でない。手も顫へる、足も顫へる。聲の顫へる事や、心臟の飛び上がる事は始終ある。けれども、激する事は近來殆どない。激すると云ふ心的狀態は、死に近づき得る自然の階段で、激するたびに死に易くなるのは眼に見えてゐるから、時には好奇心で、せめて、其近所迄押し寄せて見たいと思ふ事もあるが、全く駄目である。代助は此頃の自己を解剖するたびに、五六年前の自己と、丸で違つてゐるのに驚かずには居られなかつた。

代助は机の上の書物を伏せると立ち上がつた。緣側の硝子戸を細目に開けた間から暖かい陽氣な風が吹き込んで來た。さうして鉢植のアマランスの赤い瓣をふら〳〵と搖かした。日は大きな花の上に落ちてゐる。代助は曲んで、花の中を覗き込んだ。やがて、ひよろ長い雄蕊の頂から、花粉を取つて、雌蕊の先へ

持つて來て、丹念に塗り附けた。
「蟻でも附きましたか」と門野が玄關の方から出て來た。袴を穿いてゐる。代助は曲んだ儘顏を上げた。
「もう行つて來たの」
「えゝ、行つて來ました。何ださうです。明日御引移りになるさうです。今日是から上がらうと思つてた所だと仰しやいました」
「誰が？平岡が？」
「えゝ。――どうも何ですな。大分御忙しい樣ですな。先生た餘つ程違つてますね。――蟻なら種油を御注ぎなさい。さうして苦しがつて、穴から出て來る所を一々殺すんです。何なら殺しませうか」
「蟻ぢやない。斯うして、天氣の好い時に、花粉を取つて、雌蕊へ塗り附けて置くと、今に實が結るんです。暇だから植木屋から聞いた通り、遣つてる所だ」
「なある程。どうも重寶な世の中になりましたね。――然し盆栽は好いもんだ。綺麗で、樂しみになつて」
代助は面倒臭いから返事をせずに默つてゐた。やがて、
「惡戲も好い加減に休すかな」と云ひながら立ち上がつて、緣側へ据附けの、籐の安樂椅子に腰を掛けた。夫限りほかんと何か考へ込んでゐる。門野は詰らなくなつたから、自分の玄關傍の三疊敷へ引き取つた。障子を開けて這入らうとすると、又緣側へ呼び返された。
「平岡が今日來ると云つたつて」

「えゝ、來る樣な御話しでした」

「ぢや待つてゐよう」

代助は外出を見合せた。實は平岡の事が此間から大分氣に掛かつてゐる。

平岡は此前、代助を訪問した當時、既に落ち附いてゐられない身分であつた。彼自身の代助に語つた所によると、地位の心當りが二三ヶ所あるから、差し當り其方面へ運動して見る積りなんださうだが、其二三ヶ所が今どうなつてゐるか、代助は殆ど知らない。代助の方から神保町の宿を訪ねた事は二返あるが、一度は留守であつた。一度は居つたには居つた。が、洋服を着た儘、部屋の敷居の上に立つて、何か急しい調子で、細君を極め附けてゐた。——案内なしに廊下を傳つて、平岡の部屋の横へ出た代助には、突然ながら、たしかに左樣取れた。其時平岡は一寸振り向いて、やあ君かと云つた。其顏にも容子にも、少しも快ささうな所は見えなかつた。部屋の内から顏を出した細君は代助を見て、蒼白い頰をぽつと赤くした。代助は何となく席に就き惡くなつた。まあ這入れと申し譯に云ふのを聞き流して、いや別段用ぢやない。何うしてゐるかと思つて一寸來て見た丈だ。出掛けるなら一所に出ようと、此方から誘ふ樣にして表へ出て仕舞つた。

其時平岡は、早く家を探して落ち附きたいが、あんまり忙しいんで、何うする事も出來ない、たまに宿のものが教へてくれるかと思ふと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるひは今壁を塗つてる最中だつたりする。などと、電車へ乘つて分かれる迄諸事苦情づくめであつた。代助も氣の毒になつて、そんなら家は、宅の書生に探させよう。なに不景氣だから、大分空いてるのがある筈だ。と請合つて歸つた。

夫から約束通り門野を探しに出した。出すや否や、門野はすぐ恰好なのを見附けて來た。門野に案内をさせて平岡夫婦に見せると、大抵可からうと云ふ事で分かれたさうだが、家主の方へ責任もあるし、又其所が氣に入らなければ外を探す考へもあるからと云ふので、借りるか借りないか判然した所を、門野に、もう一遍確めさしたのである。

「君、家主の方へは借りるつて、斷つて來たんだらうね」

「えゝ、歸りに寄つて、明日引越すからつて、云つて來ました」

代助は椅子に腰を掛けた儘、新しく二度の世帶を東京に持つ、夫婦の未來を考へた。平岡は三年前新橋で分かれた時とは、もう大分變つてゐる。彼の經歷は處世の階子段を一二段で踏み外したと同じ事である。まだ高い所へ上つてゐなかつた丈が、幸ひと云へば云ふ樣なものゝ、世間の眼に映ずる程、身體に打撲を受けてゐないのみで、其實精神狀態には旣に狂ひが出來て居る。始めて逢つた時、代助はすぐ左樣思つた。けれども、三年間に起つた自分の方の變化を打算して見て、或は此方の心が向うに反響を起したのではなからうかと訂正した。が、其後平岡の旅宿を尋ねて行つて、座敷へも這入らないで一所に外へ出た時の、容子から言語動作を眼の前に浮かべて見ると、どうしても又最初の判斷に戾らなければならなくなつた。平岡は其時顏の中心に一種の神經を寄せてゐた。風が吹いても、砂が飛んでも、强い刺激を受けさうな眉と眉の繼目を、憚らず、ぴくつかせてゐた。さうして、口にする事が、內容の如何に關らず、如何にも急しなく、且切なさうに、代助の耳に響いた。代助には、平岡の凡てが、恰も肺の强くない人の、重苦しい葛湯の中を片息で泳いでゐる樣に取れた。

「あんなに、焦つて」と、電車へ乘つて飛んで行く平岡の姿を見送つた代助は、口の内でつぶやいた。さうして旅宿に殘されてゐる細君の事を考へた。

代助は此細君を捕まへて、かつて奥さんと云つた事がない。何時でも三千代さん三千代さんと、結婚しない前の通りに、本名を呼んでゐる。代助は平岡に分かれてから又引き返して、旅宿へ行つて、三千代さんに逢つて話しをしようかと思つた。けれども、何だか行けなかつた。足を停めて思案しても、今の自分には、行くのが惡いと云ふ意味はちつとも見出だせなかつた。けれども、氣が咎めて行かれなかつた。勇氣を出せば行かれると思つた。たゞ代助には是丈の勇氣を出すのが苦痛であつた。夫で家へ歸つた。其代り歸つても、落ち附かない樣な、物足らない樣な、妙な心持がした。ので、又外へ出て酒を飮んだ。代助は酒をいくらでも飮む男である。ことに其晩はしたゝかに飮んだ。

「あの時は、何うかしてゐたんだ」と代助は椅子に倚りながら、比較的冷やかな自己で、自己の影を批判した。

「何か御用ですか」と門野が又出て來た。袴を脫いで、足袋を脫いで、團子の樣な素足を出してゐる。代助は默つて門野の顏を見た。門野も代助の顏を見て、一寸の間突つ立つてゐた。

「おや、御呼びになつたんぢやないですか。おや、おや」と云つて引つ込んで行つた。代助は別段可笑しいとも思はなかつた。

「小母さん、御呼びになつたんぢやないとさ。何うも變だと思つた。だから手も何も鳴らないつて云ふのに」といふ言葉が茶の間の方で聞こえた。夫から門野と婆さんの笑ふ聲がした。

其時、待ち設けてゐる御客が來た。取次に出た門野は意外な顏をして這入つて來た。さうして、其顏を代助の傍迄持つて來て、先生、奧さんですと囁く樣に云つた。代助は默つて椅子を離れて座敷へ這入つた。
平岡の細君は、色の白い割に髮の黑い、細面に眉毛の判然映る女である。一寸見ると何所となく淋しい感じの起る所が、古版の浮世繪に似てゐる。歸京後は色光澤がことに可くないやうだ。始めて旅宿で逢つた時、代助は少し驚いた位である。汽車で長く搖られた疲れが、まだ回復しないのかと思つて、聞いて見たら、左樣ぢやない、始終斯うなんだと云はれた時は、氣の毒になつた。
三千代は東京を出て一年目に產をした。生れた子供はぢき死んだが、それから心臟を痛めたと見えて、兎角具合が惡い。始めのうちは、たゞ、ぶら／＼してゐたが、何うしても、はか／″＼しく癒らないので、仕舞に醫者に見て貰つたら、能くは分らないが、ことに依ると何とかいふ六づかしい名の心臟病かも知れないと云つた。もし左樣だとすれば、心臟から動脈へ出る血が、少しづゝ、後戾りをする難症だから、根治は覺束ないと宣告されたので、平岡も驚いて、出來る丈養生に手を盡くした所爲か、一年許りするうちに、好い案排に、元氣が滅切りよくなつた。色光澤も殆ど元の樣に冴々して見える日が多いので、當人も喜んでゐると、歸る一ケ月ばかり前から、又血色が惡くなり出した。然し醫者の話しによると、今度のは心臟の爲ではない。心臟は、夫程丈夫にもならないが、決して前よりは惡くなつてゐない。辨の作用に故障があるものとは、今は決して認められないといふ診斷であつた。——是は三千代が直かに代助に話した所である。代助は其時三千代の顏を見て、矢つ張り何か心配の爲ぢやないかしらと思つた。
三千代は美しい線を綺麗に重ねた鮮やかな二重瞼を持つてゐる。眼の恰好は細長い方であるが、瞳を据

ゐて凝と物を見るときに、それが何かの具合で大變大きく見える。代助は是を黒眼の働きと判斷してゐた。三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代の斯う云ふ眼遣ひを見た。さうして今でも善く覺えてゐる。三千代の顔を頭の中に浮かべようとすると、顔の輪廓が、まだ出來上がらないうちに、此黒い、濕んだ樣に暈された眼が、ぽつと出て來る。

廊下傳ひに座敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛けた。さうして綺麗な手を膝の上に疊ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の枠に比較的大きな眞珠を盛つた當世風のもので、三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。

三千代は顔を上げた。代助は、突然例の眼を認めて、思はず瞬きを一つした。

汽車で着いた明日平岡と一所に來る筈であつたけれども、つい氣分が惡いので、來損なつて仕舞つて、それからは一人でなくつては來る機會がないので、つい出ずにゐたが、今日は丁度、と云ひかけて、句を切つて、それから急に思ひ出した樣に、此間來て呉れた時は、平岡が出掛け際だつたものだから、大變失禮して濟まなかつたといふ樣な詫びをした。

「待つていらつしやれば可かつたのに」と女らしく愛想をつけ加へた。けれども其調子は沈んでゐた。尤も是は此女の持ち調子で、代助は却て其昔を憶ひ出した。

「だつて大變忙しさうだつたから」

「えゝ、忙しい事は忙しいんですけれども——好いぢやありませんか。入らしつたつて。あんまり他人行儀ですわ」

代助はあの時、夫婦の間に何があつたか聞いて見ようと思つたけれども、まづ已めにした。例なら調戲半分に、あなたは何か叱られて、顔を赤くしてゐましたね、どんな悪い事をしたんですか位言ひかねない間柄なのであるが、代助には三千代の愛嬌が、後から其場を取り繕ふ樣にいたましく聞こえたので、冗談を云ひ募る元氣も一寸出なかつた。

代助は煙草へ火を點けて、吸口を啣へた儘、椅子の背に頭を持たせて、寛いだ樣に、

「久し振だから、何か御馳走しませうか」と聞いた。さうして心のうちで、自分の斯う云ふ態度が、幾分か此女の慰藉になる樣に感じた。三千代は、

「今日は澤山。さう緩りしちやゐられないの」と云つて、昔の金歯を一寸見せた。

「まあ、可いでせう」

代助は兩手を頭の後へ持つて行つて、指と指を組み合はせて三千代を見た。三千代はこゞんで帶の間から小さな時計を出した。代助が眞珠の指輪を此女に贈りものにする時、平岡は此時計を妻に買つて遣つたのである。代助は、一つ店で別々の品物を買つた後、平岡と連れ立つて其所の敷居を跨ぎながら互に顔を見合はせて笑つた事を記憶してゐる。

「おや、もう三時過ぎね。まだ二時位かと思つてたら。――少し寄り道をしてゐたものだから」と獨り言の樣に説明を加へた。

「そんなに急ぐんですか」

「えゝ、成り丈早く歸りたいの」

代助は頭から手を放して、烟草の灰をはたき落とした。
「三年のうちに大分世帯染みちまつた。仕方がない」
代助は笑つて斯う云つた。けれども其調子には何處かに苦い所があつた。
「あら、だつて、明日引越すんぢやありませんか」
三千代の聲は、此時急に生々と聞こえた。代助は引越の事を丸で忘れてゐたが、相手の快よささうな調子に釣り込まれて、此方からも他愛なく追窮した。
「ぢや引越してから緩くり來れば可いのに」
「でも」と云つた三千代は少し挨拶に困つた色を、額の所へあらはして、一寸下を見たが、やがて頰を上げた。それが薄赤く染まつて居た。
「實は私少し御願ひが有つて上がつたの」
癇の鋭い代助は、三千代の言葉を聞くや否や、すぐ其用事の何であるかを悟つた。實は平岡が東京へ着いた時から、いつか此問題に出逢ふ事だらうと思つて、半意識の下で覺悟してゐたのである。
「何ですか、遠慮なく仰しやい」
「少し御金の工面が出來なくつて？」
三千代の言葉は丸で子供の樣に無邪氣であるけれども、兩方の頰は矢つ張り赤くなつてゐる。代助は、此女に斯んな氣恥づかしい思ひをさせる、平岡の今の境遇を、甚だ氣の毒に思つた。
段々聞いて見ると、明日引越をする費用や、新しく世帶を持つ爲の金が入用なのではなかつた。支店の

方を引き上げる時、向うへ置き去りにして來た借金が三口とかあるうちで、其一口を是非片附けなくてはならないのださうである。東京へ着いたら一週間うちに、どうでもすると云ふ堅い約束をして來た上に、少し譯があつて、他の樣に放つて置けない性質のものだから、平岡も着いた明日から心配して、所々奔走してゐるけれども、まだ出來さうな樣子が見えないので、已むを得ず三千代に云ひ附けて代助の所に頼みに寄こしたと云ふ事が分つた。

「支店長から借りたと云ふ奴ですか」

「いゝえ。其方は何時迄延ばして置いても構はないんですが、此方の方を何うかしないと困るのよ。東京で運動する方に響いて來るんだから」

代助は成程そんな事があるのかと思つた。金高を聞くと五百圓と少し許りである。代助はなんだ其位と腹の中で考へたが、實際自分は一文もない。代助は、自分が金に不自由しない樣でゐて、其實大いに不自由してる男だと氣が附いた。

「何でまた、そんなに借金をしたんですか」

「だから私考へると厭になるのよ。私も病氣をしたのが、惡いには惡いけれども」

「病氣の時の費用なんですか」

「ぢやないのよ。藥代なんか知れたもんですわ」

三千代は夫以上を語らなかつた。代助も夫以上を聞く勇氣がなかつた。たゞ蒼白い三千代の顏を眺めて、その中に、漠然たる未來の不安を感じた。

五

翌日朝早く門野は荷車を三臺雇つて、新橋の停車場迄平岡の荷物を受取りに行つた。實は疾うから着いて居たのだけれども、宅がまだ極まらないので、今日迄其儘にしてあつたのである。往復の時間と、向うで荷物を積み込む時間を勘定して見ると、何うしても半日仕事である。早く行かなけりや、間に合はないよと代助は寐床を出るとすぐ注意した。門野は例の調子で、なに譯はありませんと答へた。此男は、時間の考へなどは、あまりない方だから、斯う簡便な返事が出來たんだが、代助から説明を聞いて始めて成程と云ふ顔をした。それから荷物を平岡の宅へ屆けた上に、萬事綺麗に片附く迄手傳ひをするんだと云はれた時は、えゝ承知しました、なに大丈夫ですと氣輕に引き受けて出て行つた。

それから十一時過迄代助は讀書してゐた。が不圖ダヌンチオと云ふ人が、自分の家の部屋を、青色と赤色に分かつて裝飾してゐると云ふ話を思ひ出した。ダヌンチオの主意は、生活の二大情調の發現は、此二色に外ならんと云ふ點に存するらしい。だから何でも興奮を要する部屋、即ち音樂室とか書齋とか云ふものは、成るべく赤く塗り立てる。又寢室とか、休息室とか、凡て精神の安靜を要する所は青に近い色で飾り附けをする。と云ふのが、心理學者の説を應用した、詩人の好奇心の滿足と見える。

代助は何故ダヌンチオの樣な刺激を受け易い人に、奮興色とも見做し得べき程強烈な赤の必要があるだらうと不思議に感じた。代助自身は稻荷の鳥居を見ても餘り好い心持はしない。出來得るならば、自分の頭丈でも可いから、緑のなかに漂はして安らかに眠りたい位である。いつかの展覽會に青木と云ふ人が海

の底に立つてゐる脊の高い女を畫いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い氣持に出來てゐると思つた。つまり、自分もあゝ云ふ沈んだ落ち附いた情調に居りたかつたからである。

代助は椽側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。花はいつしか散つて、今は新芽若葉の初期である。はなやかな緑がぱつと顏に吹き附けた樣な心持ちがした。眼を醒ます刺激の底に何處か沈んだ調子のあるのを嬉しく思ひながら、鳥打帽を被つて、銘仙の不斷着の儘門を出た。

平岡の新宅へ來て見ると、門が開いて、がらんとしてゐる丈で、荷物の着いた樣子もなければ、平岡夫婦の來てゐる氣色も見えない。たゞ車夫體の男が一人椽側に腰を懸けて煙草を呑んでゐた。聞いて見ると、先刻一返御出でになりましたが、此案排ぢや、どうせ午過ぎだらうつて又御歸りになりましたといふ答である。

「旦那と奧さんと一所に來たかい」

「えゝ御一所です」

「さうして一所に歸つたかい」

「えゝ御一所に御歸りになりました」

「荷物もそのうち着くだらう。御苦勞さま」と云つて、又通へ出た。

神田へ來たが平岡の旅宿へ寄る氣はしなかつた。けれども二人の事が何だか氣に掛かる。ことに細君の事が氣に掛かる。ので一寸顏を出した。夫婦は膳を並べて飯を食つてゐた。下女が盆を持つて、敷居に尻を向けてゐる。其後から、聲を懸けた。

平岡は驚いた樣に代助を見た。其眼が血ばしつてゐる。二三日よく眠らない所爲だと云ふ。三千代は仰山なものゝ云ひ方だと云つて笑つた。代助は氣の毒にも思つたが、又安心もした。留めるのを外へ出て、飯を食つて、髮を刈つて、九段の上へ一寸寄つて、又歸りに新宅へ行つて見た。三千代は手拭を姉さん被りにして、友禪の長襦袢をさらりと出して、襷がけで荷物の世話を燒いてゐた。旅宿で世話をして呉れたと云ふ下女も來てゐる。平岡は縁側で行李の紐を解いてゐたが、代助を見て、笑ひながら、少し手傳はないかと云つた。門野は袴を脱いで、尻を端折つて、重ね箪笥を車夫と一所に座敷へ抱へ込みながら、先生どうです、此服裝は、笑つちや不可ませんよと云つた。

翌日、代助が朝食の膳に向つて、例の如く紅茶を呑んでゐると、門野が、洗ひ立ての顏を光らして茶の間へ這入つて來た。

「昨夕は何時御歸りでした。つい疲れちまつて、假寐をしてゐたものだから、些とも氣が附きませんでした。――寐てゐる所を御覧になつたんですか、先生も隨分人が惡いな。全體何時頃なんです、御歸りになつたのは。夫迄何處へ行つて入らしつた」と平生の調子で苦もなく饒舌り立てた。代助は眞面目で、

「君、すつかり片附く迄居て呉れたんでせうね」と聞いた。

「えゝ、すつかり片附けちまひました。其代り、何うも骨が折れましたぜ。何しろ、我々の引越と違つて、大きな物が色々あるんだから。奥さんが座敷の眞中へ立つて、茫然、斯う周圍を見回してゐた樣子つたら、――隨分可笑しなもんでした」

「少し身體の具合が惡いんだからね」

「どうも左樣らしいですね。色が何だか可くないと思つた。平岡さんとは大違ひだ。あの人の體格は好いですね。昨夕一所に湯に入つて驚いた」

代助はやがて書齋へ歸つて、手紙を二三本書いた。一本は朝鮮の統監府に居る友人宛で、先達て送つて呉れた高麗燒の禮狀である。一本は佛蘭西に居る姉婿宛で、タナグラの安いのを見附けて呉れといふ依賴である。

晝過ぎ散歩の出掛けに、門野の室を覗いたら又引つ繰り返つて、ぐう〳〵寐てゐた。代助は門野の無邪氣な鼻の穴を見て羨ましくなつた。實を云ふと、自分は昨夕寐つかれないで大變難儀したのである。例に依つて、枕の傍へ置いた袂時計が、大變大きな音を出す。夫が氣になつたので、手を延ばして、時計を枕の下へ押し込んだ。けれども音は依然として頭の中へ響いて來る。其音を聞きながら、つい、うと〳〵する間に、凡ての外の意識は、全く暗窖の裡に降下した。が、たゞ獨り夜を縫ふミシンの針丈が刻み足に頭の中を絕えず通つてゐた事を自覺してゐた。所が其音が何時かりん〳〵といふ蟲の音に變つて、綺麗な玄關の傍の植込の奥で鳴いてゐる樣になつた。――代助は昨夕の夢を此處迄辿つて來て、睡眠と覺醒との間を繫ぐ一種の絲を發見した樣な心持がした。

代助は、何事によらず一度氣にかゝり出すと、何處迄も氣にかゝる男であつた。しかも自分で其馬鹿氣さ加減の程度を明らかに見積る丈の腦力があるので、自分の氣にかゝり方が猶眼に附いてならない事があつた。三四年前、平生の自分が如何にして夢に入るかと云ふ問題を解決しようと試みた事があつた。夜、蒲團へ這入つて、好い案排にうと〳〵し掛けると、あゝ此所だ、斯うして眠るんだなと思つてはつとする。

すると、其瞬間に眼が冴えて仕舞ふ。しばらくして、又眠りかけると、又、そら此所だと思ふ。代助は殆ど毎晩の様に此好奇心に苦しめられて、同じ事を二遍も三遍も繰り返した。仕舞には自分ながら辟易した。どうかして、此苦痛を逃れようと思つた。のみならず、つく〴〵自分は愚物であると考へた。自分の不明瞭な意識を、自分の明瞭な意識に訴へて、同時に回顧しようとするのは、ジエームスの云つた通り、暗闇を檢査する爲に蠟燭を點したり、獨樂の運動を吟味する爲に獨樂を抑へる樣なもので、生涯寐られつこない譯になる。と解つてゐるが晩になると又はつと思ふ。

此困難は約一年許りで何時の間にか漸く遠退いた。代助は昨夕の夢と此困難とを比較して見て、妙に感じた。正氣の自己の一部分を切り放して、其儘の姿として、知らぬ間に夢の中へ讓り渡す方が趣があると思つたからである。同時に、此作用は氣狂になる時の狀態と似て居はせぬかと考へ附いた。代助は今迄、自分は激昂しないから氣狂にはなれないと信じて居たのである。

それから二三日は、代助も門野も平岡の消息を聞かずに過ごした。四日目の午過ぎに代助は麻布のある家へ園遊會に呼ばれて行つた。御客は男女を合はせて、大分來たが、正賓といふのは、英國の國會議員とか實業家とかいふ、無暗に脊の高い男と、それから鼻眼鏡をかけた其細君とであつた。これは中々の美人で、日本抔へ來るには勿體ない位な容色だが、何處で買つたものか、岐阜出來の繪日傘を得意に差してゐた。

尤も其日は大變な好い天氣で、廣い芝生の上にフロツクで立つてゐると、もう夏が來たといふ感じが、肩から背中へ掛けて著しく起つた位、空が眞蒼に透き通つてゐた。英國の紳士は顏をしかめて空を見て、

實に美しいと云つた。すると細君がすぐ、ラッヴレイと答へた。非常に疳の高い聲で尤も力を入れた挨拶の仕様であつたので、代助は英國の御世辭は、また格別のものだと思つた。

代助も二言三言此細君から話しかけられた。が三分の經たないうちに、遣り切れなくなつて、すぐ退却した。あとは、日本服を着て、わざと島田に結つた令嬢と、長らく紐育で商業に從事してゐたと云ふ某が引き受けた。此某は英語を喋舌る天才を以て自ら任ずる男で、缺かさず英語會へ出席して、日本人と英語の會話を遣つて、それから英語で卓上演說をするのを、何よりの樂しみにしてゐる。何か云つては、あとでさも可笑しさうに、げら〱笑ふ癖がある。英國人が時によると怪訝な顔をしてゐる。代助はあれ丈は已めたら可からうと思つた。令嬢も中々旨い。是は米國婦人を家庭教師に雇つて、英語を使ふ事を研究した、ある物持ちの娘である。代助は、顔より言葉の方が達者だと考へながら、つく〲感心して聞いてゐた。

代助が此所へ呼ばれたのは、個人的に此所の主人や、此英國人夫婦に關係があるからではない。全く自分の父と兄との社交的勢力の餘波で、招待狀が廻つて來たのである。だから、萬遍なく方々へ行つて、好い加減に頭を下げて、ぶら〱してゐた。其中に兄も居た。

「やあ、來たな」と云つた儘、帽子に手も掛けない。

「何うも、好い天氣ですね」

「あゝ。結構だ」

代助も脊の低い方ではないが、兄は一層高く出來てゐる。其上此五六年來次第に肥滿して來たので、中

中立派に見える。

「何うです、彼方へ行つて、ちと外國人と話しでもしちや」

「いや、泰平だ」と云つて兄は苦笑ひをした。さうして大きな腹にぶら下がつてゐる金鎖を指の先で弄くつた。

「何うも外國人は調子が可いですね。少し可すぎる位だ。あゝ賞められると、天氣の方でも是非好くならなくつちやならなくなる」

「そんなに天氣を賞めてゐたのかい。へえ。少し暑過ぎるぢやないか」

「私にや暑過ぎる」

誠吾と代助は申し合はせた樣に、白い手巾を出して額を拭いた。兩人共重い絹帽を被つてゐる。

兄弟は芝生の外れの木蔭迄來て留まつた。近所には誰もゐない。向うの方で餘興か何か始まつてゐる。それを、誠吾は宅にゐると同じ樣な顔をして、遠くから眺めた。

「兄の樣になると、宅にゐても、客に來ても同じ心持なんだらう。斯う世の中に慣れ切つて仕舞つても、樂しみがなくつて、詰らないものだらう」と思ひながら代助は誠吾の樣子を見てゐた。

「今日は御父さんは何うしました」

「御父さんは詩の會だ」

誠吾は相變らず普通の顔で答へたが、代助の方は多少可笑しかつた。

「姉さんは」

「御客の接待掛りだ」

また嫂が後で不平を云ふ事だらうと考へると、代助は又可笑しくなつた。

代助は、誠吾の始終忙しがつてゐる樣子を知つてゐる。又その忙しさの過半は、斯う云ふ會合から出來上がつてゐるといふ事實も心得てゐる。さうして、別に厭な顏もせず、一口の不平も零さず、不規則に酒を飮んだり、物を食つたり、女を相手にしたり、してゐながら、何時見ても疲れた態もなく、噪ぐ氣色もなく、物外に平然として、年々肥滿してくる伎倆に敬服してゐる。

誠吾が待合へ這入つたり、料理茶屋へ上がつたり、晩餐に出たり、午餐に呼ばれたり、倶樂部へ行つたり、新橋に人を送つたり、横濱に人を迎へたり、大磯へ御機嫌伺ひに行つたり、朝から晩迄多勢の集まる所へ顏を出して、得意にも見えなければ、失意にも思はれない樣子は、斯う云ふ生活に慣れ拔いて、海月が海に漂ひながら、鹽水を辛く感じ得ない樣なものだらうと代助は考へてゐる。

其所が代助には難有い。と云ふのは、誠吾は父と異つて、嘗て小六づかしい說法抔を代助に向つて遣つた事がない。主義だとか、主張だとか、人生觀だとか云ふ窮屈なものは、てんで、これつ許りも口にしないんだから、有るんだか、無いんだか、殆ど要領を得ない。其代り、此窮屈な主義だとか、主張だとか、人生觀だとかいふものを積極的に打ち壞して懸かつた試しもない。實に平凡で好い。

だが面白くはない。話し相手としては、兄よりも嫂の方が、代助に取つて遙かに興味がある。兄に逢ふと屹度何うだいと云ふ。以太利に地震があつたぢやないかと云ふ。土耳其の天子が廢されたぢやないかと云ふ。其外、向島の花はもう駄目になつた、横濱にある外國船の船底に大蛇が飼つてあつた、誰が鐵道で

轢かれた、ぢやないかと云ふ。みんな新聞に出た事許りである。其代り、當らず障らずの材料はいくらでも持つて居る。いつ迄經つても種が盡きる様子が見えない。

さうかと思ふと。時にトルストイと云ふ人は、もう死んだのかね抔と妙な事を聞く事がある。今日本の小說家では誰が一番偉いのかねと聞く事もある。要するに文藝には丸で無頓着で且驚くべき無識であるが、尊敬と輕蔑以上に立つて平氣で聞くんだから、代助も返事がし易い。

斯う云ふ兄と差し向ひで話しをしてゐると、刺激の乏しい代りには、灰汁がなくつて、氣樂で好い。ただ朝から晩迄出歩いてゐるから滅多に捕まへる事が出來ない。嫂でも、誠太郎でも、縫子でも、兄が終日宅に居て、三度の食事を家族と共に缺かさず食ふと、却て珍らしがる位である。

だから木陰に立つて、兄と肩を比べた時、代助は丁度好い機會だと思つた。

「兄さん、貴方に少し話しがあるんだが。何時か暇はありませんか」

「暇」と繰り返した誠吾は、何も說明せずに笑つて見せた。

「明日の朝は何うです」

「明日の朝は濱迄行つて來なくつちやならない」

「午からは」

「午からは、會社の方に居る事はゐるが、少し相談があるから、來ても緩り話しちやゐられない」

「ぢや晩なら宜からう」

「晩は帝國ホテルだ。あの西洋人夫婦を明日の晩帝國ホテルへ呼ぶ事になつてるから駄目だ」

代助は口を尖らかして、兄を凝と見た。さうして二人で笑ひ出した。
「そんなに急ぐなら、今日ぢや、何うだ。今日なら可い。久し振で一所に飯でも食はうか」
代助は賛成した。所が倶樂部へでも行くかと思ひの外、誠吾は鰻が可からうと云ひ出した。
「絹帽で鰻屋へ行くのは始めてだな」と代助は逡巡した。
「何構ふものか」
二人は園遊會を辭して、車に乘つて、金杉橋の袂にある鰻屋へ上がつた。
其所は河が流れて、柳があつて、古風な家であつた。黒くなつた床柱の傍の違ひ棚に、絹帽を引繰り返しに、二つ竝べて置いて見て、代助は妙だなと云つた。然し明け放した二階の間に、たつた二人で胡坐をかいてゐるのは、園遊會より却て樂であつた。
二人は好い心持に酒を飲んだ。兄は飲んで、食つて、世間話をすれば其外に用はないと云ふ態度であつた。代助も、うつかりすると、肝心の事件を忘れさうな勢ひであつた。が下女が三本目の銚子を置いて行つた時に、始めて用談に取り掛かつた。代助の用談と云ふのは、言ふ迄もなく、此間三千代から頼まれた金策の件である。
實を云ふと、代助は今日迄まだ誠吾に無心を云つた事がない。尤も學校を出た時少々藝者買ひをし過ぎて、其尻を兄になすり附けた覺えはある。其時兄は叱るかと思ひの外、さうか、困り者だな、親爺には内内で置けと云つて嫂を通して、綺麗に借金を拂つてくれた。さうして代助には一口の小言も云はなかつた。代助は其時から、兄に恐縮して仕舞つた。其後小遣に困る事はよくあるが、困るたんびに嫂を痛めて事

を濟ましてゐた。從つて斯う云ふ事件に關して兄との交渉は、まあ初對面の樣なものである。代助から見ると、誠吾は蔓のない藥罐と同じことで、何處から手を出して好いか分らない。然しそこが代助には興味があつた。

代助は世間話の體にして、平岡夫婦の經歴をそろ／＼話し始めた。誠吾は面倒な顔色もせず、へえ／＼と拍子を取る樣に、飲みながら、聞いてゐる。段々進んで三千代が金を借りに來た一段になつても、矢つ張りへえ／＼と合槌を打つ丈である。代助は、仕方なしに、

「で、私も氣の毒だから、何うにか心配して見やうつて受合つたんですがね」と云つた。

「へえ。左樣かい」

「何うでせう」

「御前金が出來るのかい」

「私や一文も出來やしません。借りるんです」

「誰から」

代助は始めから此所へ落とす積りだつたんだから、判然した調子で、

「貴方から借りて置かうと思ふんです」と云つて、改めて誠吾の顔を見た。兄は矢つ張り普通の顔をしてゐた。さうして、平氣に、

「そりや、御廢しよ」と答へた。

誠吾の理由を聞いて見ると、義理や人情に關係がない許りではない、返す返さないと云ふ損得にも關係

がなかつた。たゞ、そんな場合には放つて置けば自ら何うかなるもんだと云ふ單純な斷定であつた。

誠吾は此斷定を證明する爲に、色々な例を擧げた。誠吾の門内に藤野と云ふ男が長屋を借りて住んでゐる。其藤野が近頃遠縁のものの息子を頼まれて宅へ置いた。所が其子が徴兵檢査で急に國へ歸らなければならなくなつたが、前以て國から送つてある學資も旅費も藤野が使ひ込んでゐると云ふので、一時の繰合せを頼みに來た事がある。無論誠吾が直かに逢つたのではないが、妻に云ひ附けて斷らした。夫でも其子は期日迄に國へ歸つて差支へなく檢査を濟ましてゐる。夫から此藤野の親類の何とか云ふ男は、自分の持つてゐる貸家の敷金を、つい使つて仕舞つて、借家人が明日引越すといふ間際になつても、まだ調達が出來ないとか云つて、矢つ張り藤野から泣き附いて來た事がある。然し是も斷らした。夫でも別に不都合はなく敷金は返せてゐる。――まだ其外にもあつたが、まあ斯んな種類の例ばかりであつた。

「そりや、姊さんが蔭へ廻つて惠んでゐるに違ひない。ハヽヽヽ。兄さんも餘つ程呑氣だなあ」と代助は大きな聲を出して笑つた。

「何、そんな事があるものか」

誠吾は矢張り當り前の顏をしてゐた。さうして前にある猪口を取つて口へ持つて行つた。

六

其日誠吾は中々金を貸して遣らうと云はなかつた。代助も三千代が氣の毒だとか、可哀相だとか云ふ泣言は、可成避ける樣にした。自分が三千代に對してこそ、さう云ふ心持もあるが、何も知らない兄を、其

所迄連れて行くのには一通りでは駄目だと思ふし、と云つて、無暗にセンチメンタルな文句を口にすれば、兄には馬鹿にされる、ばかりではない、かねて自分を愚弄する樣な氣がするので、矢つ張り平生の代助の通り、のらくらした所を、彼方へ行つたり此方へ來たりして、飲んでゐた。飲みながらも、親爺の所謂熱誠が足りないとは、此所の事だなと考へた。けれども、代助は泣いて人を動かさうとする程、低級趣味のものではないと自信してゐる。凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や、煩悶や、眞面目や、熱誠ほど氣障なものはないと自覺してゐる。兄には其邊の消息がよく解つてゐる。だから此手で遣り損なひでもしようものなら、生涯自分の價値を落とす事になる。と氣が附いてゐた。

代助は飲むに從つて、段々金を遠ざかつて來た。たゞ互が差し向ひであるが爲に、旨く飲めたと云ふ自覺を、互に持ち得る樣な話しをした。が茶漬を食ふ段になつて、思ひ出した樣に、金は借りなくつても好いから、平岡を何處か使つて遣つて呉れないかと頼んだ。

「いや、さう云ふ人間は御免蒙る。のみならず此不景氣ぢや仕樣がない」と云つて誠吾はさくさく飯を搔き込んでゐた。

明日眼が覺めた時、代助は床の中でまづ第一番に斯う考へた。

「兄を動かすのは、同じ仲間の實業家でなくつちや駄目だ。單に兄弟の好しみ丈では何うする事も出來ない」

斯う考へた樣なものゝ、別に兄を不人情と思ふ氣は起らなかつた。寧ろその方が當然であると悟つた。此兄が自分の放蕩費を苦情も云はずに辨償して呉れた事があるんだから可笑しい。そんなら自分が今茲で

平岡の爲に判を押して、連借でもしたら、何うするだらう。矢つ張り彼の時の樣に綺麗に片附けて呉れるだらうか。兄は其所迄考へてゐて、斷つたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初めから安心して借さないのかしらん。

代助自身の今の傾向から云ふと、到底人の爲に判なぞを押しさうにもない。自分もさう思つてゐる。けれども、兄が其所を見拔いて金を貸さないとすると、一寸意外な連帶をして、兄がどんな態度に變るか、試驗して見たくもある。――其所迄來て、代助は自分ながら、あんまり性質が能くないなと心のうちで苦笑した。

けれども、唯一つ慥かな事がある。平岡は早晩借用證書を携へて、自分の判を取りにくるに違ひない。斯う考へながら、代助は床を出た。門野は茶の間で、胡坐をかいて新聞を讀んでゐたが、髮を濡らして湯殿から歸つて來る代助を見るや否や、急に坐三昧を直して、新聞を疊んで坐蒲團の傍へ押し遣りながら、

「何うも『煤烟』は大變な事になりましたな」と大きな聲で云つた。

「君讀んでるんですか」

「えゝ、毎朝讀んでます」

「面白いですか」

「面白い樣ですな。どうも」

「何んな所が」

「何んな所がつて。さう改まつて聞かれちや困りますが。何ぢやありませんか、一體に、斯う、現代的

の不安が出てゐる樣ぢやありませんか」

「さうして、肉の臭ひがしやしないか」

「しますな。大いに」

代助は默つて仕舞つた。

紅茶茶碗を持つた儘、書齋へ引き取つて、椅子へ腰を懸けて、茫然と庭を眺めてゐると、瘤だらけの柘榴の枯枝と、灰色の幹の根方に、暗綠と暗紅を混ぜ合はした樣な若い芽が、一面に吹き出してゐる。代助の眼には夫がぱつと映じた丈で、すぐ刺激を失つて仕舞つた。

代助の頭には今具體的な何物をも留めてゐなかつた。恰も戶外の天氣の樣に、それが靜かに凝と働いてゐた。が、其底には微塵の如き本體の分らぬものが無數に押し合つてゐた。乾酪の中で、いくら蟲が動いても、乾酪が元の位置にある間は、氣が附かないと同じ事で、代助も此微震には殆ど自覺を有してゐなかつた。たゞ、それが生理的に反射して來る度に、椅子の上で、少し宛身體の位置を變へなければならなかつた。

代助は近頃流行語の樣に人が使ふ、現代的とか不安とか云ふ言葉を、あまり口にした事がない。それは、自分が現代的であるのは、云はずと知れてゐると考へたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分丈で信じて居たからである。

代助は露西亞文學に出て來る不安を、天候の具合と、政治の壓迫で解釋してゐた。佛蘭西文學に出てくる不安を、有夫姦の多いためと見てゐた。ダヌンチオによつて代表される以太利文學の不安を、無制限の

墮落から出る自己缺損の感と判斷してゐた。だから日本の文學者が、好んで不安と云ふ側からのみ社會を描き出すのを、舶來の唐物の樣に見傚した。

理智的に物を疑ふ方の不安は、學校時代に、有つたにはあつたが、ある所迄進行して、ぴたりと留まつて、夫から逆戻りをして仕舞つた。丁度天へ向つて石を擲げた樣なものである。代助は今では、なまじひ石抔を擲げなければ可かつたと思つてゐる。禪坊さんの所謂大疑現前抔と云ふ境界は、代助のまだ踏み込んだ事のない未知國であつた。代助は、さう眞率性急に萬事を疑ふには、あまり利口に生れ過ぎた男であつた。

代助は門野の賞めた「煤烟」を讀んでゐる。今日は紅茶茶碗の傍に新聞を置いたなり、開けて見る氣にならない。ダヌンチオの主人公は、皆金に不自由のない男だから、贅澤の結果あゝ云ふ惡戯をしても無理とは思へないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな餘地のない程に貧しい人である。それを彼所迄押して行くには、全く情愛の力でなくつちや出來る筈のものでない。所が、要吉といふ人物にも、朋子といふ女にも、誠の愛で、已むなく社會の外に押し流されて行く樣子が見えない。彼等を動かす内面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝいふ境遇に居て、あゝ云ふ事を斷行し得る主人公は、恐らく不安ぢやあるまい。これを斷行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は獨りで考へるたびに、自分は特殊人だと思ふ。けれども要吉の特殊人たるに至つては、自分より遙かに上手であると承認した。それで此間迄は好奇心に驅られて「煤烟」を讀んでゐたが、昨今になつて、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある樣に思はれ出したので、眼を通さない事がよくある。

代助は椅子の上で、時々身を動かした。さうして、自分では飽く迄落ち附いて居ると思つてゐた。やがて、紅茶を呑んで仕舞つて、例の通り讀書に取りかゝつた。約二時間ばかりは故障なく進行したが、ある頁の中頃まで來て急に休めて頬杖を突いた。さうして、傍にあつた新聞を取つて「煤烟」を讀んだ。呼吸の合はない事は同じ事である。それから外の雜報を讀んだ。大隈伯が高等商業の紛擾に關して、大いに騷動しつゝある生徒側の味方をしてゐる。それが中々強い言葉で出てゐる。代助は斯う云ふ記事を讀むと、是は大隈伯が早稻田へ生徒を呼び寄せる爲の方便だと解釋する。代助は新聞を放り出した。

午過ぎになつてから、代助は自分が落ち附いてゐないと云ふ事を、漸く自覺し出した。腹のなかに小さな皺が無數に出來て、其皺が絶えず、相互の位地と形狀とを變へて、一面に搖いてゐる樣な氣持がする。代助は時々斯う云ふ情調の支配を受ける事がある。さうして、此種の經驗を、今日迄、單なる生理上の現象としてのみ取り扱つて居つた。代助は昨日兄と一所に鰻を食つたのを少し後悔した。散步がてらに、平岡の所へ行つて見ようかと思ひ出したが、散步が目的か、平岡が目的か、自分には判然たる區別がなかつた。婆さんに着物を出さして、着換へようとしてゐる所へ、甥の誠太郎が來た。帽子を手に持つた儘、恰好の好い圓い頭を、代助の前へ出して、腰を掛けた。

「もう學校は引けたのかい。早過ぎるぢやないか」

「ちつとも早かない」と云つて、笑ひながら、代助の顏を見てゐる。代助は手を敲いて婆さんを呼んで、

「誠太郎、チヨコレートを飲むかい」と聞いた。

「飲む」

代助はチョコレートを二杯命じて置いて誠太郎に調戯ひだした。
「誠太郎、御前はベースボール計り遣るもんだから、此頃手が大變大きくなつたよ。頭より手の方が大きいよ」
誠太郎はにこ〳〵して、右の手で、圓い頭をぐる〳〵撫でた。實際大きな手を持つてゐる。
「叔父さんは、昨日御父さんから奢つて貰つたんですつてね」
「あゝ、御馳走になつたよ。御蔭で今日は腹具合が悪くつて不可ない」
「又神經だ」
「神經ぢやない本當だよ。全く兄さんの所爲だ」
「だつて御父さんは左樣云つてましたよ」
「何て」
「明日學校の歸りに代助の所へ廻つて何か御馳走して貰へつて」
「へえゝ、昨日の御禮にかい」
「えゝ、今日は己が奢つたから、明日は向うの番だつて」
「それで、わざ〳〵遣つて來たのかい」
「えゝ」
「兄の子丈あつて、中々拔けないな。だから今チョコレートを飮まして遣るから好いぢやないか」
「チョコレートなんぞ」

「飲まないかい」

「飲む事は飲むけれども」

誠太郎の注文をよく聞いて見ると、相撲が始まつたら、回向院へ連れて行つて、正面の最上等の所で見物させろといふのであつた。代助は快く引き受けた。すると誠太郎は嬉しさうな顔をして、突然、

「叔父さんはのらくらして居るけれども實際偉いんですつてね」と云つた。代助も是には一寸呆れた。仕方なしに、

「偉いのは知れ切つてるぢやないか」と答へた。

「だつて、僕は昨夕始めて御父さんから聞いたんですもの」と云ふ辯解があつた。

誠太郎の云ふ所によると、昨夕兄が宅へ歸つてから、父と嫂と三人して、代助の合評をしたらしい。子供のいふ事だから、能く分らないが、比較的頭が可いので、能く斷片的に其時の言葉を覺えてゐる。父は代助を、どうも見込がなささうだと評したのださうだ。兄は之に對して、あゝ遣つてゐても、あれで中々解つた所がある。當分放つて置くが可い。放つて置いても大丈夫だ、間違ひはない。いづれ其内に何か遣るだらうと辯護したのださうだ。すると嫂がそれに賛成して、一週間許り前占者に見てもらつたら、此人は屹度人の上に立つに違ひないと判斷したから大丈夫だと主張したのださうだ。

代助はうん、それから、と云つて、始終面白さうに聞いて居たが、占者の所へ來たら、本當に可笑しくなつた。やがて着物を着換へて、誠太郎を送りながら表へ出て、自分は平岡の家を訪ねた。

平岡の家は、此十數年來の物價騰貴に伴れて、中流社會が次第々々に切り詰められて行く有樣を、住宅

の上に善く代表した、尤も粗惡な見苦しき構へであつた。とくに代助には左樣見えた。
門と玄關の間が一間位しかない。勝手口も其通りである。さうして裏にも、横にも同じ樣な窮屈な家が建てられてゐた。東京市の貧弱なる膨脹に附け込んで、最低度の資本家が、なけなしの元手を二割乃至三割の高利に廻さうと目論んで、あたじけなく拵へ上げた、生存競爭の記念であつた。

今日の東京市、ことに場末の東京市には、到る處に此種の家が散點してゐる、のみならず、梅雨に入つた蚤の如く、日毎に、格外の増加律を以て殖えつゝある。代助はかつて、之を敗亡の發展と名づけた。さうして、之を目下の日本を代表する最好の象徴とした。

彼等のあるものは、石油罐の底を繼ぎ合はせた四角な鱗で蔽はれてゐる。彼等の一つを借りて、夜中に柱の割れる音で眼を醒まさないものは一人もない。彼等の戸には必ず節穴がある。彼等の襖は必ず狂ひが出ると極まつてゐる。資本を頭の中へ注ぎ込んで、月々其頭から利息を取つて生活しようと云ふ人間は、みんな斯ういふ所を借りて立て籠もつてゐる。平岡も其一人であつた。

代助は垣根の前を通るとき、先づ其屋根に眼が附いた。さうして、どす黒い瓦の色が妙に彼の心を刺激した。代助には此光のない土の板が、いくらでも水を吸ひ込む樣に思はれた。玄關前に、此間引越のときに解いた菰包みの藁屑がまだ零れてゐた。座敷へ通ると、平岡は机の前へ坐つて、長い手紙を書き掛けてゐる所であつた。三千代は次の部屋で箪笥の環をかた〱鳴らしてゐた。傍に大きな行李が開けてあつて、中から綺麗な長襦袢の袖が半分出かゝつてゐた。

平岡が、失敬だが鳥渡待つて呉れと云つた間に、代助は行李と長襦袢と、時々行李の中へ落ちる纖い手

とを見てゐた。襖は明けた儘閉て切る樣子もなかつた。が三千代の顏は陰になつて見えなかつた。

やがて、平岡は筆を机の上へ拋げ附ける樣にして、座を直した。何だか込み入つた事を懸命に書いてゐたと見えて、耳を赤くしてゐた。目も赤くしてゐた。

「何うだい。此間は色々難有う。其後一寸禮に行かうと思つて、まだ行かない」

平岡の言葉は言譯と云はんより寧ろ挑戰の調子を帶びてゐる樣に聞こえた。襯衣も股引も着けずにすぐ胡坐をかいた。襟を正しく合はせないので、胸毛が少し出てゐる。

「まだ落ち附かないだらう」と代助が聞いた。

「落ち附く所か、此分ぢや生涯落ち附きさうもない」と、いそがしさうに烟草を吹かし出した。

代助は平岡が何故こんな態度で自分に應接するか能く心得てゐた。決して自分に中たるのぢやない、つまり世間に中たるんである、否己に中たつてゐるんだと思つて、却て氣の毒になつた。けれども代助の樣な神經には、此調子が甚だ不愉快に響いた。たゞ腹が立たない丈である。

「宅の都合は、どうだい。間取りの具合は可ささうぢやないか」

「うん、まあ、惡くつても仕方がない。氣に入つた家へ這入らうと思へば、株でも遣るより外に仕樣がなからう。此頃東京に出來る立派な家はみんな株屋が拵へるんだつて云ふぢやないか」

「左樣かも知れない。其代り、あゝ云ふ立派な家が一軒立つと、其陰にどの位澤山な家が潰れてゐるか知れやしない」

「だから猶住み好いだらう」

平岡は斯う云つて大いに笑つた。其所へ三千代が出て來た。先達てはと、輕く代助に挨拶をして、手に持つた赤いフランネルのくる〳〵と卷いたのを、坐ると共に、前へ置いて、代助に見せた。

「何ですか、それは」

「赤ん坊の着物なの。拵へた儘、つい、まだ、解かずにあつたのを、今行李の底を見たら有つたから、出して來たんです」と云ひながら、附紐を解いて筒袖を左右に開いた。

「こら」

「まだ、そんなものを仕舞つといたのか。早く壞して雜巾にでもして仕舞へ」

三千代は子供の着物を膝の上に乘せた儘、返事もせずしばらく俯向いて眺めてゐたが、

「貴方のと同じに拵へたのよ」と云つて夫の方を見た。

「是か」

平岡は絣の袷の下へ、ネルを重ねて、素肌に着てゐた。

「是はもう不可ん、暑くて駄目だ」

代助は始めて、昔の平岡を當面に見た。

「袷の下にネルを重ねちやもう暑い。襦袢にすると可い」

「うん、面倒だから着てるるが」

「洗濯をするから御脱ぎなさいと云つても、中々脱がないのよ」

「いや、もう脱ぐ、己も少々厭になつた」

話しは死んだ子供の事をとう〳〵離れて仕舞つた。さうして、來た時よりは幾分か空氣に暖味が出來た。平岡は久し振に一杯飲まうと云ひ出した。三千代も支度をするから、緩りして行つて呉れと頼む様に留めて、次の間へ立つた。代助は其後姿を見て、どうかして金を拵へてやりたいと思つた。

「君何所か奉公口の見當は附いたか」と聞いた。

「うん、まあ、ある様な無い様なもんだ。無ければ當分遊ぶ丈の事だ。緩り探してゐるうちには何うかなるだらう」

云ふ事は落ち附いてゐるが、代助が聞くと却て焦つて探してゐる様にしか取れない。代助は、昨日兄と自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせようと思つてゐたのだが、此一言を聞いて、暫く見合せる事にした。何だか、構へてゐる向うの體面を、わざと此方から毀損する様な氣がしたからである。其上金の事に附いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。だから表向き挨拶をする必要もないのである。たゞ、斯うして默つてゐれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴だと惡く思はれるに極まつてゐる。けれども今の代助はさう云ふ非難に對して、殆ど無感覺である。又實際自分はさう熱烈な人間ぢやないと考へてゐる。三四年前の自分になつて、今の自分を批判して見れば、自分は、墮落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使ひ回してゐた。鍍金を金に通用させようとする切ない工面より、眞鍮を眞鍮で通して、眞鍮相當の侮蔑を我慢する方が樂である。と今は考へてゐる。

代助が眞鍮を以て甘んずる様になつたのは、不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚きの餘り、心機一轉

の結果を來したといふ樣な、小說じみた歷史を有つてゐる爲ではない。全く彼自身に特有な思索と觀察の力によつて、次第々々に鍍金を自分で剝がして來たに過ぎない。代助は此鍍金の大半をもつて、親爺が捺擦り附けたものと信じてゐる。其時分は親爺が金に見えた。多くの先輩が金に見えた。相當の敎育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の鍍金が辛かつた。早く金になりたいと焦つて見た。所が、他のものの地金へ、自分の眼光がぢかに打つかる樣になつて以後は、それが急に馬鹿な盡力の樣に思はれ出した。

代助は同時に斯う考へた。自分が三四年の間に、是迄變化したんだから、同じ三四年の間に、平岡も、かれ自身の經驗の範圍内で大分變化してゐるだらう。昔の自分なら、可成平岡によく思はれたい心から、斯んな場合には兄と喧嘩をしても、父と口論をしても、平岡の爲に計つたらう、又其計つた通りを平岡の所へ來て事々しく吹聽したらうが、それを豫期するのは、矢つ張り昔の平岡で、今の彼は左程に友達を重くは見てゐまい。

それで肝心の話しは一二言で已めて、あとは色々な雜談に時を過ごすうちに酒が出た。三千代が德利の尻を持つて御酌をした。

平岡は醉ふに從つて、段々口が多くなつて來た。此男はいくら醉つても、中々平生を離れない事がある。かと思ふと、大變に元氣づいて、調子に一種の悅樂を帶びて來る。さうなると、普通の酒家以上に、能く辯ずる上に、時としては比較的眞面目な問題を持ち出して、相手と議論を上下して樂し氣に見える。代助は其昔、麥酒の壜を互の間に竝べて、よく平岡と戰つた事を覺えてゐる。代助に取つて不思議とも思はれ

るのは、平岡が斯う云ふ狀態に陷つた時が、一番平岡と議論がしやすいと云ふ自覺であつた。又酒を呑んで本音を吐かうか、と平岡の方からよく云つたものだ。今日の二人の境界は其時分とは、大分離れて來た。さうして、其離れて、近づく路を見出だし惡い事實を、雙方共に腹の中で心得てゐる。東京へ着いた翌日、三年振で邂逅した二人は、其時既に、二人ともに何時か互の傍を立退いてゐたことを發見した。

所が今日は妙である。酒に親しめば親しむ程、平岡が昔の調子を出して來た。旨い局所へ酒が回つて、刻下の經濟や、目前の生活や、又それに伴なふ苦痛やら、不平やら、心の底の騷がしさやらを全然麻痺して仕舞つた樣に見える。平岡の談話は一躍して高い平面に飛び上がつた。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働いてゐる。又是からも働く積りだ。君は僕の失敗したのを見て笑つてゐる。——笑はないたつて、要するに笑つてると同じ事に歸着するんだから構はない。いゝか、君は笑つてゐる。笑つてゐるが、其君は何も爲ないぢやないか。君は世の中を、有りの儘で受け取る男だ。言葉を換へて云ふと、意志を發展させる事の出來ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘だ。人間だもの。其證據には、始終物足りないに違ひない。僕は僕の意志を現實社會に働き掛けて、其現實社會が、僕の意志の爲に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確證を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の價値を認めるんだ。君はたゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立して生きてゐる。此大不調和を忍んでゐる所が、既に無形の大失敗ぢやないか。何故と云つて見給へ。僕のは其不調和を外へ出した迄で、君のは内に押し込んで置く丈の話だから、外面に押し掛けた丈、僕の方が本當の失敗の度は少ないかも知れない。でも僕は君に笑はれてゐる。さうして

僕は君を笑ふ事が出來ない。いや笑ひたいんだが、世間から見ると、笑つちや不可ないんだらう」
「何笑つても構はない。君が僕を笑ふ前に、僕は既に自分を笑つてるんだから」
「そりや、嘘だ。ねえ三千代」
三千代は先刻から默つて坐つてるたが、夫から不意に相談を受けた時、にこりと笑つて、代助を見た。
「本當でせう、三千代さん」と云ひながら、代助は盃を出して、酒を受けた。
「そりや嘘だ。おれの細君が、いくら辯護したつて、嘘だ。尤も君は人を笑つても、自分を笑つても、兩方共頭の中で遣る人だから、嘘か本當か其邊はしかと分らないが……」
「冗談云つちや不可ない」
「冗談ぢやない。全く本氣の沙汰であります。そりや昔の君はさうぢや無かつたが、今の君は大分違つてるよ。ねえ三千代。長井は誰が見たつて、大得意ぢやないか」
「何だか先刻から、傍で伺つてると、貴方の方が餘つ程御得意の樣よ」
平岡は大きな聲を出してハヽヽと笑つた。三千代は燗徳利を持つて次の間へ立つた。
平岡は膳の上の肴を二口三口箸で突つついて、下を向いた儘、むしや〳〵云はしてゐたが、やがて、どろんとした眼を上げて、云つた。——
「今日は久し振に好い心持に醉つた。なあ君。——君はあんまり好い心持にならないね。何うも怪しからん。僕が昔の平岡常次郎になつてるのに、君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給へ。さうして、大いに遣つて呉れ給へ。僕も是から遣る。から君も遣つて呉れ給へ」

代助は此言葉のうちに、今の自己を昔に返さうとする眞率な又無邪氣な一種の努力を認めた。さうして、それに動かされた。けれども一方では、一昨日食つた麵麭を今返せと強請られる樣な氣がした。

「君は酒を呑むと、言葉丈醉つ拂つても、頭は大抵確かな男だから、僕も云ふがね」

「それだ。それでこそ長井君だ」

代助は急に云ふのが厭になつた。

「君、頭は確かかい」と聞いた。

「確かだとも。君さへ確かなら此方は何時でも確かだ」と云つて、ちやんと代助の顏を見た。實際自分の云ふ通りの男である。そこで代助が云つた。――

「君はさつきから、働かない働かないと云つて、大分僕を攻擊したが、僕は默つてゐた。攻擊される通り僕は働かない積りだから默つてゐた」

「何故働かない」

「何故働かないつて、そりや僕が惡いんぢやない。つまり世の中が惡いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本對西洋の關係が駄目だから働かないのだ。第一、日本程借金を拵へて、貧乏震ひをしてゐる國はありやしない。此借金が君、何時になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、それ許りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない國だ。それでゐて、一等國を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等國の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向つて、奧行を削つて、一等國丈の間口を張つちまつた。なまじひ張れるから、なほ悲慘なものだ。牛

と競爭をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。其影響はみんな我々個人の上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の壓迫を受けてゐる國民は、頭に餘裕がないから、碌な仕事は出來ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神經衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲勞してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身體の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず、道德の敗退も一所に來てゐる。日本國中何所を見渡したつて、輝いてる斷面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黑だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を爲たつて、仕樣がないさ。僕は元來怠けものだ。いや、君と一所に往來してゐる時分から怠けものだ。あの時は强ひて景氣をつけてゐたから、君には有爲多望の樣に見えたんだらう。そりや今だつて、日本の社會が精神的、德義的、身體的に、大體の上に於て健全なら、僕は依然として有爲多望なのさ。さうなれば遣る事はいくらでもあるからね。さうして僕の怠惰性に打ち勝つ丈の刺激も亦いくらでも出來て來るだらうと思ふ。然し是ぢや駄目だ。今の樣なら僕は寧ろ自分丈になつてゐる。さうして、君の所謂有りの儘の世界を、有りの儘で受取つて、其中僕に尤も適したものに接觸を保つて滿足する。進んで外の人を、此方の考へ通りにするなんて、到底出來た話ぢやありやしないもの――」

代助は一寸息を繼いだ。さうして、一寸窮屈さうに控へてゐる三千代の方を見て、御世辭を遣つた。

「三千代さん。どうです、私の考へは。隨分呑氣で宜いでせう。贊成しませんか」

「何だか厭世の樣な呑氣の樣な妙なのね。私よく分らないわ。けれども、少し胡魔化して入らつしやる

様よ」

「へえゝ。何處ん所が」

「何處ん所つて、ねえ貴方」と三千代は夫を見た。平岡は股の上へ肱を乘せて、肱の上へ頤を載せて默つてゐたが、何も云はずに盃を代助の前に出した。代助も默つて受けた。三千代は又酌をした。

代助は盃へ唇を附けながら、是から先はもう云ふ必要がないと感じた。元來が平岡を自分の樣に考へ直させる爲の辯論でもなし、又平岡から意見されに來た訪問でもない。二人はいつ迄立つても、二人として離れてゐなければならない運命を有つてゐるんだと、始めから心附いてゐるから、議論は好い加減に引き上げて、三千代の仲間入りの出來る樣な、普通の社交上の題目に談話を持つて來やうと試みた。

けれども、平岡は醉ふとしつこくなる男であつた。胸毛の奥迄赤くなつた胸を突き出して、斯う云つた。

「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た樣に局部に當つて、現實と惡鬪してゐるものは、そんな事を考へる餘地がない。日本が貧弱だつて、弱蟲だつて、働いてゐるうちは、忘れてゐるからね。世の中が墮落したつて、世の中の墮落に氣が附かないで、其中に活動するんだからね。君の樣な暇人から見れば日本の貧乏や、僕等の墮落が氣になるかも知れないが、それは此社會に用のない傍觀者にして始めて口にすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見る餘裕があるから、さうなるんだ。忙しい時は、自分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」

平岡は饒舌つてるうち、自然と此比喩に打つかつて、大いなる味方を得た樣な心持がしたので、其所で得意に一段落をつけた。代助は仕方なしに薄笑ひをした。すると平岡はすぐ後を附け加へた。

「君は金に不自由しないから不可ない。生活に困らないから、働く氣にならないんだ。要するに坊つちやんだから、品の好い樣なこと許り云つてゐて、――」

代助は少々平岡が小憎らしくなつたので、突然中途で相手を遮つた。

「働くのも好いが、働くなら、生活以上の働でなくつちや名譽にならない。あらゆる神聖な勞力は、みんな麵麭を離れてゐる」

平岡は不思議に不愉快な眼をして、代助の顏を窺つた。さうして、

「何故」と聞いた。

「何故つて、生活の爲の勞力は、勞力の爲の勞力でないもの」

「そんな論理學の命題見た樣なものは分らないな。もう少し實際的の人間に通じる樣な言葉で云つてくれ」

「つまり食ふ爲の職業は、誠實にや出來惡いと云ふ意味さ」

「僕の考へとは丸で反對だね。食ふ爲だから、猛烈に働く氣になるんだらう」

「猛烈には働けるかも知れないが誠實には働き惡いよ。食ふ爲の働きと云ふと、つまり食ふのと、働くのと何方が目的だと思ふ」

「無論食ふ方さ」

「夫れ見給へ。食ふ方が目的で働く方が方便なら、食ひ易い樣に、働き方を合はせて行くのが當然だらう。さうすりや、何を働いたつて、又どう働いたつて、構はない、唯麵麭が得られゝば好いと云ふ事に歸

着して仕舞ふぢやないか。勞力の内容も方向も乃至順序も悉く他から制肘される以上は、其勞力は墮落の勞力だ」

「甚だ理論的だね、何うも。夫で一向差支へないぢやないか」

「では極上品な例で說明してやらう。古臭い話だが、ある本で斯んな事を讀んだ覺えがある。織田信長が、ある有名な料理人を抱へた所が、始めて、其料理人の拵へたものを食つて見ると頗る不味かつたんで、大變小言を云つたさうだ。料理人の方では最上の料理を食はして、叱られたものだから、其次からは二流もしくは三流の料理を主人にあてがつて、始終褒められたさうだ。此料理人を見給へ。生活の爲に働く事は拔け目のない男だらうが、自分の技藝たる料理其物のために働く點から云へば、頗る不誠實ぢやないか、墮落料理人ぢやないか」

「だつて左樣しなければ解雇されるんだから仕方があるまいよ」

「だからさ。衣食に不自由のない人が、云はゞ、物數奇にやる働きでなくつちや、眞面目な仕事は出來るもんぢやないんだよ」

「さうすると、君の樣な身分のものでなくつちや、神聖の勞力は出來ない譯だ。ぢや益遣る義務がある。なあ三千代」

「本當ですわ」

「何だか話しが、元へ戻つちまつた。是だから議論は不可ないよ」と云つて、代助は頭を掻いた。議論はそれで、とう／＼御仕舞になつた。

七

代助は風呂へ這入つた。

「先生、何うです、御燗は。もう少し燃させませうか」と門野が突然入り口から顏を出した。門野は斯う云ふ事には能く氣の附く男である。代助は、凝と湯に浸かつた儘、

「結構」と答へた。すると、門野が、

「ですか」と云ひ棄てゝ、茶の間の方へ引き返した。代助は門野の返事のし具合に、いたく興味を有つて、獨りにや〳〵と笑つた。代助には人の感じ得ない事を感じる神經がある。それが爲時々苦しい思ひもする。ある時、友達の親爺さんが死んで、葬式の供に立つたが、不圖其友達が裝束を着て、青竹を突いて、柩のあとへ附いて行く姿を見て可笑しくなつて困つた事がある。又ある時は、自分の父から御談義を聞いてゐる最中に、何の氣もなく父の顏を見たら、急に吹き出したくなつて弱り拔いた事がある。自宅に風呂を買はない時分には、つい近所の錢湯に行つたが、其所に一人の骨骼の逞しい三助がゐた。是が行くたんびに、奧から飛び出して來て、流しませうと云つては背中を擦る。代助は其奴に體をごし〳〵遣られる度に、どうしても、埃及人に遣られてゐる樣な氣がした。いくら思ひ返しても日本人とは思へなかつた。

まだ不思議な事がある。此間、ある書物を讀んだら、ウエーバーと云ふ生理學者は自分の心臓の鼓動を、增したり、減らしたり、隨意に變化さしたと書いてあつたので、平生から鼓動を試驗する癖のある代助は、ためしに遣つて見たくなつて、一日に二三回位怖々ながら試してゐるうちに、何うやら、ウエーバーと

同じ様になりさうなので、急に驚いて已めにした。

湯のなかに、静かに浸かつてゐた代助は、何の氣なしに右の手を左の胸の上へ持つて行つたが、どんどんと云ふ命の音を二三度聞くや否や、忽ちウェーバーを思ひ出して、すぐ流しへ下りた。さうして、其所に胡坐をかいた儘、茫然と、自分の足を見詰めてゐた。すると其足が變になり始めた。どうも自分の胴から生えてゐるんでなくて、自分とは全く無關係のものが、其所に無作法に横たはつてゐる樣に思はれて來た。さうなると、今迄は氣が附かなかつたが、實に見るに堪へない程醜いものである。毛が不揃に延びて、青い筋が所々に蔓つて、如何にも不思議な動物である。

代助は又湯に這入つて、平岡の云つた通り、全く暇があり過ぎるので、こんな事迄考へるのかと思つた。湯から出て、鏡に自分の姿を寫した時、又平岡の言葉を思ひ出した。幅の厚い西洋髪剃で、顎と頬を剃る段になつて、其鋭い刃が、鏡の裏で閃めく色が、一種むづ痒い樣な氣持を起させた。是が烈敷くなると、高い塔の上から、遙かの下を見下ろすのと同じになるのだと意識しながら、漸く剃り終つた。

茶の間を抜けようとする拍子に、

「何うも先生は旨いよ」と門野が婆さんに話してゐた。

「何が旨いんだ」と代助は立ちながら、門野を見た。門野は、

「やあ、もう御上りですか。早いですな」と答へた。此挨拶では、もう一遍、何が旨いんだと聞かれもしなくなつたので、其儘書齋へ歸つて、椅子に腰を掛けて休息してゐた。

休息しながら、斯う頭が妙な方面に鋭く働き出しちや、身體の毒だから、些と旅行でもしようかと思つ

て見た。一つは近來持ち上がつた結婚問題を避けるに都合が好いとも考へた。すると又平岡の事が妙に氣に掛かつて、轉地する計畫をすぐ打ち消して仕舞つた。夫を能く煎じ詰めて見ると、平岡の事が氣に掛かるのではない。矢つ張り三千代の事が氣に掛かるのである。代助は其所迄押して來ても、別段不德義とは感じなかつた。寧ろ愉快な心持がした。

代助が三千代と知り合ひになつたのは、今から四五年前の事で、代助がまだ學生の頃であつた。代助は長井家の關係から、當時交際社會の表面にあらはれて出た若い女の顏も名も、澤山に知つてゐた。けれども三千代は其方面の婦人ではなかつた。色合から云ふと、もつと地味で、氣持から云ふと、もう少し沈んでゐた。其頃、代助の學友に菅沼と云ふのがあつて、代助とも平岡とも、親しく附き合つてゐた。三千代は其妹である。

此菅沼は東京近縣のもので、學生になつた二年目の春、修業の爲と號して、國から妹を連れて來ると同時に、今迄の下宿を引き拂つて、二人して家を持つた。其時妹は國の高等女學校を卒業した許りで、年は慥か十八とか云ふ話であつたが、派出な半襟を掛けて、肩上けをしてゐた。さうして程なくある女學校へ通ひ始めた。

菅沼の家は谷中の淸水町で、庭のない代りに、緣側へ出ると、上野の森の古い杉が高く見えた。それがまた、錆びた鐵の樣に、頗る異しい色をしてゐた。其一本は殆んど枯れ掛かつて、上の方には丸裸の骨許り殘つた所に、夕方になると烏が澤山集まつて鳴いてゐた。隣には若い畫家が住んでゐた。車もあまり通らない細い橫町で、至極閑靜な住居であつた。

代助は其所へ能く遊びに行つた。始めて三千代に逢つた時、三千代はたゞ御辭儀をした丈で引つ込んで仕舞つた。代助は上野の森を評して歸つて來た。二返行つても、三返行つても、三千代はたゞ御茶を持つて出る丈であつた。其癖狹い家だから、隣の室にゐるより外はなかつた。代助は菅沼と話しながら、隣の室に三千代がゐて、自分の話しを聽いてゐるといふ自覺を去る譯に行かなかつた。

三千代と口を利き出したのは、どんな機會であつたか、今では代助の記憶に殘つてゐない。殘つて居ない程、瑣末な尋常の出來事から起つたのだらう。詩や小説に厭いた代助には、それが却て面白かつた。けれども一旦口を利き出してからは、矢つ張り詩や小説と同じ樣に、二人はすぐ心安くなつて仕舞つた。

平岡も、代助の樣に、よく菅沼の家へ遊びに來た。あるときは二人連れ立つて、來た事もある。さうして、代助と前後して、三千代と懇意になつた。三千代は兄と此二人に食つ附いて、時々池の端抔を散歩した事がある。

四人は此關係で約二年足らず過ごした。すると菅沼の卒業する年の春、菅沼の母と云ふのが、田舍から遊びに出て來て、暫く淸水町に泊つてゐた。此母は年に一二度づゝは上京して、子供の家に五六日寐起きする例になつてゐたんだが、其時は歸る前日から熱が出だして、全く動けなくなつた。それが一週間の後窒扶斯と判明したので、すぐ大學病院へ入れた。三千代は看護の爲附添ひとして一所に病院に移つた。病人の經過は、一時稍佳良であつたが、中途からぶり返して、とう〳〵死んで仕舞つた。それ許りではない。窒扶斯が、見舞に來た兄に傳染して、是も程なく亡くなつた。國にはたゞ父親が一人殘つた。

それが母の死んだ時も、菅沼の死んだ時も出て來て、始末をしたので、生前に關係の深かつた代助とも

平岡とも知り合ひになつた。三千代を連れて國へ歸る時は、娘とともに二人の下宿を別々に訪ねて、暇乞ひ旁禮を述べた。

其年の秋、平岡は三千代と結婚した。さうして其間に立つたものは代助であつた。尤も表向きは郷里の先輩を頼んで、媒酌人として式に連なつて貰つたのだが、身體を動かして、三千代の方を纏めたものは代助であつた。

結婚して間もなく二人は東京を去つた。國に居た父は思はざるある事情の爲に餘儀なくされて、是も亦北海道へ行つて仕舞つた。三千代は何方かと云へば、今心細い境遇に居る。どうかして、此東京へ落ち附いてゐられる樣にして遣りたい氣がする。代助はもう一返嫂に相談して、此間の金を調達する工面をして見ようかと思つた。又三千代に逢つて、もう少し立ち入つた事情を委しく聞いて見ようかと思つた。けれども、平岡へ行つた所で、三千代が無暗に洗ひ浚ひ饒舌り散らす女ではなし、よしんば何うして、そんな金が要る樣になつたかの事情を、詳しく聞き得たにした所で、夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる譯のものではない。――代助の心の底を能く見詰めてゐると、彼の本當に知りたい點は、却て此所に在ると、自ら承認しなければならなくなる。だから正直を云ふと、何故に金が入用であるかと研究する必要は、もう既に通り越してゐたのである。實は外面の事情は聞いても聞かなくつても、三千代に金を貸して滿足させたい方であつた。けれども三千代の歡心を買ふ目的を以て、其手段として金を拵へる氣は丸でなかつた。代助は三千代に對して、それ程政略的な料簡を起す餘裕を有つてゐなかつたのである。

其上平岡の留守へ行き中てて、今日迄の事情を、特に經濟の點に關して丈でも、充分聞き出すのは困難

である。平岡が家にゐる以上は、詳しい話しの出來ないのは知れ切つてゐる。出來ても、それは一から十迄眞に受ける譯には行かない。平岡は世間的な色々の動機から、代助に見榮を張つてゐる。見榮の入らない處でも一種の考へから沈默を守つてゐる。

代助は、兎も角もまづ嫂に相談して見ようと決心した。さうして、自分ながら甚だ覺束ないとは思つた。今迄嫂にちび〳〵、無心を吹き掛けた事は何度もあるが、斯う短兵急に痛め附けるのは始めてである。然し梅子は自分の自由になる資産をいくらか持つてゐるから、或は出來ないとも限らない。夫で駄目なら、又高利でも借りるのだが、代助はまだ其所迄には氣が進んでゐなかつた。たゞ早晩平岡から表向きに、連帶責任を強ひられて、それを斷り切れない位なら、一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遙かに愉快だといふ取捨の念丈は殆ど理窟を離れて、頭の中に潛んでゐた。

生暖かい風の吹く日であつた。曇つた天氣が何時迄も無精に空に引つ掛かつて、中々暮れさうにない四時過ぎから家を出て、兄の宅迄電車で行つた。青山御所の少し手前迄來ると、電車の左側を父と兄が綱曳で急がして通つた。挨拶をする暇もないうちに擦れ違つたから、向うは元より氣が附かずに過ぎ去つた。代助は次の停留所で下りた。

兄の家の門を這入ると、客間でピアノの音がした。代助は一寸砂利の上に立ち留まつたが、すぐ左へ切れて勝手口の方へ廻つた。其所には格子の外に、ヘクターと云ふ英國産の大きな犬が、大きな口を革紐で縛られて臥てゐた。代助の足音を聞くや否や、ヘクターは毛の長い耳を振つて、斑な顏を急に上げた。さうして尾を搖かした。

入口の書生部屋を覗き込んで、敷居の上に立ちながら、二言三言愛嬌を云つた後、すぐ西洋間の方へ來て、戸を明けると、嫂がピアノの前に腰を掛けて兩手を動かして居た。其傍に縫子が袖の長い着物を着て、例の髪を肩迄掛けて立つてゐた。代助は縫子の髪を見るたんびに、ブランコに乘つた縫子の姿を思ひ出す。黒い髪と、淡紅色のリボンと、それから黄色い縮緬の帶が、一時に風に吹かれて空に流れる樣を、鮮やかに頭の中に刻み込んでゐる。

母子は同時に振り向いた。

「おや」

縫子の方は、默つて馳けて來た。さうして、代助の手をぐい／＼引つ張つた。代助はピアノの傍迄來た。

「如何なる名人が鳴らしてゐるのかと思つた」

梅子は何も云はずに、額に八の字を寄せて、笑ひながら手を振り／＼、代助の言葉を遮つた。さうして、向うから斯う云つた。

「代さん、此所ん所を一寸遣つて見せて下さい」

代助は默つて嫂と入れ替つた。譜を見ながら、兩方の指をしばらく綺麗に働かした後、

「斯うだらう」と云つて、すぐ席を離れた。

それから三十分程の間、母子して交る／＼樂器の前に坐つては、一つ所を復習してゐたが、やがて梅子が、

「もう廢しませう。彼方へ行つて、御飯でも食べませう。叔父さんもいらつしやい」と云ひながら立つ

た。部屋のなかはもう薄暗くなつてゐた。代助は先刻から、ピアノの音を聞いて、嫂や姪の白い手の動く様子を見て、さうして時々は例の欄間の畫を眺めて、三千代の事も、金を借りる事も殆ど忘れてゐた。部屋を出る時、振り返つたら、紺青の波が摧けて、白く吹き返す所丈が、暗い中に判然見えた。代助は此大濤の上に黄金色の雲の峰を一面に描かした。さうして、其雲の峰をよく見ると、真裸な女性の巨人が、髪を亂し、身を躍らして、一團となつて、暴れ狂つてゐる樣に、旨く輪廓を取らした。代助はヴルキイルを雲に見立てた積りで此圖を注文したのである。彼は此雲の峰だか、又巨大な女性だか、殆ど見分けの付かない、偉な塊を腦中に髣髴して、ひそかに嬉しがつてゐた。が偖出來上がつて、壁の中へ嵌め込んでみると、想像したよりは不味かつた。梅子と共に部屋を出た時は、此ヴルキイルは殆ど見えなかつた。紺青の波は固より見えなかつた。たゞ白い泡の大きな塊が薄白く見えた。

居間にはもう電燈が點いてゐた。代助は其所で、梅子と共に晩食を濟ました。子供二人も卓を共にした。誠太郎に兄の部屋から、マニラを一本取つて來さして、夫を吹かしながら、雜談をした。やがて、子供は明日の下讀をする時間だと云ふので、母から注意を受けて、自分の部屋へ引き取つたので、後は差し向ひになつた。

代助は突然例の話を持ち出すのも、變なものだと思つて、關係のない所からそろ〳〵進行を始めた。先づ父と兄が綱曳で車を急がして何所へ行つたのだとか、此間は兄さんに御馳走になつたとか、あなたは何故麻布の園遊會へ來なかつたのだとか、御父さんの漢詩は大抵法帖だとか、色々聞いたり答へたりして居るうちに、一つ新しい事實を發見した。それは外でもない。父と兄が、近來目に立つ樣に、忙しさうに奔

走し始めて、此四五日は碌々寐るひまもない位だと云ふ報知である。全體何が始まつたんですと、代助は平氣な顔で聞いて見た。すると、嫂も普通の調子で、さうですね、何か始まつたんでせう。御父さんも、兄さんも私には何も仰しやらないから、知らないけれどもと答へて、代さんは、それよりか此間の御嫁さんをと云ひ掛けてる所へ、書生が這入つて來た。

今夜も遲くなる、もし、誰と誰が來たら何とか屋へ來る樣に云つて呉れと云ふ電話を傳へた儘、書生は再び出て行つた。代助は又結婚問題に話しが戻ると面倒だから、時に姉さん、些と御願ひがあつて來たんだが、とすぐ切り出して仕舞つた。

梅子は代助の云ふ事を素直に聞いて居た。代助は凡てを話すに約十分許りを費やした。最後に、

「だから思ひ切つて貸して下さい」と云つた。すると梅子は眞面目な顏をして、

「さうね。けれども全體何時返す氣なの」と思ひも寄らぬ事を問ひ返した。代助は顋の先を指で撮んだ儘、ぢつと嫂の氣色を窺つた。梅子は益眞面目な顏をして、又斯う云つた。

「皮肉ぢやないのよ。怒つちや不可ませんよ」

代助は無論怒つてはゐなかつた。たゞ姉弟から斯ういふ質問を受けようと豫期してゐなかつた丈である。今更返す氣だの、貰ふ積りだのと布衍すればする程馬鹿になる計りだから、甘んじて打擊を受けてゐた丈である。梅子は漸く手に餘る弟を取つて抑へた樣な氣がしたので、後が大變云ひ易かつた。――

「代さん、あなたは不斷から私を馬鹿にして御出でなさる。――いゝえ、厭味を云ふんぢやない、本當の事なんですもの、仕方がない。さうでせう」

「困りますね、左樣眞劍に詰問されちや」

「善ござんすよ。胡魔化さないでも。ちやんと分つてるんだから。だから正直に左樣だと云つて御仕舞ひなさい。左樣でないと、後が話せないから」

代助は默つてにや〳〵笑つてゐた。

「でせう。そら御覽なさい。けれども、それが當り前よ。ちつとも構やしません。いくら私が威張つたつて、貴方に敵ひつこないのは無論ですもの。私と貴方とは今迄通りの關係で、御互に滿足なんだから、文句はありやしません。そりや夫で好いとして、貴方は御父さんも馬鹿にして入らつしやるのね」

代助は嫂の態度の眞率な所が氣に入つた。それで、

「えゝ、少しは馬鹿にしてゐます」と答へた。すると梅子は左も愉快さうにハヽヽヽと笑つた。さうして云つた。

「兄さんも馬鹿にして入らつしやる」

「兄さんですか。兄さんは大いに尊敬してゐる」

「嘘を仰しやい。序だから、みんな打ち散けて御仕舞ひなさい」

「そりや、或點では馬鹿にしない事もない」

「それ御覽なさい。あなたは一家族中悉く馬鹿にして入らつしやる」

「どうも恐れ入りました」

「そんな言譯はどうでも好いんですよ。貴方から見れば、みんな馬鹿にされる資格があるんだから」

「もう、廢さうぢやありませんか。今日は中々きびしいですね」

「本當なのよ。夫で差支へないんですよ。喧嘩も何も起らないんだから。けれどもね、そんなに偉い貴方が、何故私なんぞから、御金を借りる必要があるの。可笑しいぢやありませんか。いえ、揚足を取ると思ふと、腹が立つでせう。左樣なんぢやありません。それ程偉い貴方でも、御金がないと、私見た樣なものに頭を下げなけりやならなくなる」

「だから先から頭を下げてゐるんです」

「まだ本氣で聞いていらつしやらないのね」

「是が私の本氣な所なんです」

「ぢや、それも貴方の偉い所かも知れない。然し誰も御金を貸し手がなくつて、今の御友達を救つて上げる事が出來なかつたら、何うなさる。いくら偉くつても駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋と同してすもの」

代助は今迄嫂が是程適切な異見を自分に向つて加へ得ようとは思はなかつた。實は金の工面を思ひ立つてから、自分でも此弱點を冥々の裡に感じてゐたのである。

「全く車屋ですね。だから姉さんに賴むんです」

「仕方がないのね、貴方は。あんまり、偉過ぎて。一人で御金を御取んなさいな。本當の車屋なら貸して上げない事もないけれども、貴方には厭よ。だつて餘りぢやありませんか。月々兄さんや御父さんの厄介になつた上に、人の分迄自分に引き受けて、貸してやらうつて云ふんだから。誰も出し度くはないぢや

ありませんか」

梅子の云ふ所は實に尤もである。然し代助は此尤もを通り越して、氣が附かずにゐた。振り返つて見ると、後の方に姉と兄と父がかたまつてゐた。自分も後戻りをして、世間並にならなければならないと感じた。家を出る時、嫂から無心を斷られるだらうとは氣遣つた。けれども、夫が爲に、大いに働いて、自ら金を取らねばならぬといふ決心は決して起し得なかつた。代助は此事件を夫程重くは見てゐなかつたのである。

梅子は、此機會を利用して、色々の方面から代助を刺激しようと力めた。所が代助には梅子の腹がよく解つてゐた。解れば解る程激する氣にならなかつた。そのうち話題は金を離れて、再び結婚に戻つて來た。代助は最近の候補者に就いて、此間から親爺に二度程惱まされてゐる。親爺の論理は何時聞いても昔風に甚だ義理堅いものであつたが、其代り今度は左程權柄づくでもなかつた。自分の命の親に當たる人の血統を受けたものと縁組をするのは結構な事であるから、貰つて呉れと云ふんである。さうすれば幾分か恩が返せると云ふんである。要するに代助から見ると、何が結構なのか、何が恩返しに當たるのか丸で筋の立たない主張であつた。尤も候補者自身に就いては、代助も格別の苦情は持つてゐなかつた。だから父の云ふ事の當否は論議の限りにあらずとして、貰へば貰つても構はなかつた。代助は此二三年來、凡ての物に對して重きを置かない習慣になつた如く、結婚に對しても、あまり重きを置く必要を認めてゐなかつた。佐川の娘といふのは只寫眞で知つてゐる許りであるが、夫丈でも澤山な樣な氣がした。――尤も寫眞は大分美しかつた。――從つて、貰ふとなれば、左樣面倒な條件を持ち出す考へも何もなかつた。たゞ、貰ひ

ませうと云ふ確答が出なかつた丈である。

その不明晰な態度を、父に評させると、丸で要領を得てゐない鈍物同樣の挨拶振りになる。結婚を生死の間に橫たはる一大要件と見傚して、あらゆる他の出來事を、これに從屬させる考への嫂から云はせると、不可思議になる。

「だつて、貴方だつて、生涯一人でゐる氣でもないんでせう。さう我儘を云はないで、好い加減な所で極めて仕舞つたら何うです」と梅子は少し焦れつたさうに云つた。

生涯一人でゐるか、或は妾を置いて暮らすか、或は藝者と關係をつけるか、代助自身にも明瞭な計畫は丸でなかつた。只、今の彼は結婚に對して、他の獨身者の樣に、あまり興味を持てなかつた事は慥かである。是は、彼の性情が、一圖に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭が普通以上に鋭くつて、しかも其鋭さが、日本現代の社會狀況のために、幻像打破の方面に向つて、今日迄多く費やされたのと、それから最後には、比較的金錢に不自由がないので、ある種類の女を大分多く知つてゐるのとに、歸着するのである。が代助は其所迄解剖して考へる必要は認めてゐなかつた。たゞ結婚に興味がないと云ふ、自己に明らかな事實を握つて、それに應じて未來を自然に延ばして行く氣でゐた。だから、結婚を必要事件と、初手から斷定して、何時か之を成立させようと喘る努力を、不自然であり、不合理であり、且あまりに俗臭を帶びたるものと解釋した。

代助は固より斯んな哲理を嫂に向つて講釋する氣はない。が、段々押し詰められると、苦し紛れに、

「だが、姉さん、僕は何うしても嫁を貰はなければならないのかね」と聞く事がある。代助は無論眞面

目に聞く積りだけれども、嫂の方では呆れて仕舞ふ。さうして、自分を茶にするのだと取る。梅子は其晩代助に向つて、平生の手續を繰り返した後で、斯んな事を云つた。

「妙なのね、そんなに厭がるのは。――厭なんぢやないつて、口では仰しやるけれども、貰はなければ、厭なのと同じぢやありませんか。それぢや誰か好きなのがあるんでせう。其方の名を仰しやい」

代助は今迄嫁の候補者としては、たゞの一人も好いた女を頭の中に指名してゐた覺えがなかつた。が、今斯う云はれた時、どう云ふ譯か、不意に三千代といふ名が心に浮かんだ。つゞいて、だから先刻云つた金を貸して下さい、といふ文句が自ら頭の中で出來上がつた。――けれども代助はたゞ苦笑して嫂の前に坐つてゐた。

八

代助が嫂に失敗して歸つた夜は、大分更けてゐた。彼は辛うじて青山の通で、最後の電車を捕まへた位である。それにも拘らず彼の話してゐる間には、父も兄も歸つて來なかつた。尤も其間に梅子は電話口へ二返呼ばれた。然し、嫂の樣子に別段變つた所もないので、代助は此方から進んで何も聞かなかつた。

其夜は雨催ひの空が、地面と同じ樣な色に見えた。停留所の赤い柱の傍に、たつた一人立つて電車を待ち合はしてゐると、遠い向うから小さい火の玉があらはれて、それが一直線に暗い中を上下に搖れつゝ代助の方に近づいて來るのが非常に淋しく感ぜられた。乘り込んで見ると、誰も居なかつた。黑い着物を着た車掌と運轉手の間に挾まれて、一種の音に埋まつて動いて行くと、動いてゐる車の外は眞暗である。代

助は一人明るい中に腰を掛けて、どこ迄も電車に乘つて、終に下りる機會が來ない迄引つ張り廻される樣な氣がした。

　神樂坂へかゝると、寂りとした路が左右の二階屋に挾まれて、細長く前を塞いでゐた。中途迄上つて來たら、それが急に鳴り出した。代助は風が家の棟に當たる事と思つて、立ち留まつて暗い軒を見上げながら、屋根から空をぐるりと見廻すうちに、忽ち一種の恐怖に襲はれた。戸と障子と硝子の打ち合ふ音が、見る〳〵烈しくなつて、あゝ地震だと氣が附いた時は、代助の足は立ちながら半ば竦んでゐた。其時代助は左右の二階家が坂を埋むべく、雙方から倒れて來る樣に感じた。すると、突然右側の潛り戸をがらりと開けて、子供を抱いた一人の男が、地震だ〳〵、大きな地震だと云つて出て來た。代助は其男の聲を聞いて漸く安心した。

　家へ着いたら、婆さんも門野も大いに地震の噂をした。けれども代助は、二人とも自分程には感じなかつたらうと考へた。寐てから、又三千代の依賴をどう處置しようかと思案して見た。然し分別を凝らす迄には至らなかつた。父と兄の近來の多忙は何事だらうと推して見た。結婚は愚圖々々にして置かうと了簡を極めた。さうして眠りに入つた。

　其明日の新聞に始めて日糖事件なるものがあらはれた。砂糖を製造する會社の重役が、會社の金を使用して代議士の何名かを買收したと云ふ報知である。門野は例の如く重役や代議士の拘引されるのを痛快だ痛快だと評してゐたが、代助にはそれ程痛快にも思へなかつた。が、二三日するうちに取り調べを受けるものの數が大分多くなつて來て、世間ではこれを大疑獄の樣に囃し立てる樣になつた。ある新聞ではこれ

を英國に對する檢擧と稱した。其說明には、英國大使が日糖株を買ひ込んで、損をして、苦情を鳴らし出したので、日本政府が英國に對する申し譯に手を下したのだとあつた。

日糖事件の起る少し前、東洋汽船といふ會社は、一割二分の配當をした後の半期に、八十萬圓の缺損を報告した事があつた。それを代助は記憶して居た。其時の新聞が此報告を評して信を置くに足らんと云つた事も記憶してゐた。

代助は自分の父と兄の關係してゐる會社に就いては何事も知らなかつた。けれども、いつ何んな事が起るまいものでもないとは常から考へてゐた。さうして、父も兄もあらゆる點に於て神聖であるとは信じてゐなかつた。もし八釜敷い吟味をされたなら、兩方共拘引に價ひする資格が出來はしまいかと迄疑つてゐた。それ程でなくつても、父と兄の財產が、彼等の腦力と手腕丈で、誰が見ても尤もと認める樣に、作り上げられたとは肯はなかつた。明治の初年に橫濱へ移住奬勵のため、政府が移住者に土地を與へた事がある。其時たゞ貰つた地面の御蔭で、今は非常な金滿家になつたものがある。けれども是は寧ろ天の與へた偶然である。父と兄の如きは、此自己にのみ幸福なる偶然を、人爲的に且政略的に、暖室を造つて、拵へ上げたんだらうと代助は鑑定してゐた。

代助は斯う云ふ考へで、新聞記事に對しては別に驚きもしなかつた。父と兄の會社に就いても心配をする程正直ではなかつた。たゞ三千代の事丈が多少氣に掛かつた。けれども、徒手で行くのが面白くないんで、其うちの事と腹の中で料簡を定めて、日々讀書に耽つて四五日過ごした。不思議な事に其後例の金の件に就いては、平岡からも三千代からも何とも云つて來なかつた。代助は心のうちに、あるひは三千代が

又一人で返事を聞きに來る事もあるだらうと、實は心待ちに待つてゐたのだが、其甲斐はなかつた。仕舞にアンニュイを感じ出した。何處か遊びに行く所はあるまいかと、娯樂案内を捜して、芝居でも見ようと云ふ氣を起した。神樂坂から外濠線へ乘つて、御茶の水迄來るうちに氣が變つて、森川町にゐる寺尾といふ同窓の友達を尋ねる事にした。此男は學校を出ると、教師は厭だから文學を職業とすると云ひ出して、他のものの留めるにも拘らず、危險な商賣をやり始めた。やり始めてから三年になるが、未だに名聲も上がらず、窮々云つて原稿生活を持續してゐる。自分の關係のある雜誌に、何でも好いから書けと逼るので、代助は一度面白いものを寄草した事がある。それは一ヶ月の間雜誌屋の店頭に曝されたぎり、永久人間世界から何處かへ、運命の爲に持つて行かれて仕舞つた。それぎり代助は筆を執る事を御免蒙つた。寺尾は逢ふたんびに、もつと書け書けと勸める。さうして、己を見ろと云ふのが口癖であつた。けれども外の人に聞くと、寺尾ももう陷落するだらうと云ふ評判であつた。大變露西亞ものが好きで、ことに人が名前を知らない作家が好きで、なけなしの錢を工面しては新刊物を買ふのが道樂であつた。あまり氣燄が高かつた時、代助が、文學者も恐露病に罹つてゐるうちはまだ駄目だ。一旦日露戰爭を經過したものでないと話せないと冷評し返した事がある。すると寺尾は眞面目な顏をして、戰爭は何時でもするが、日露戰爭後の日本の樣に往生しちや詰らんぢやないか。矢つ張り恐露病に罹つてる方が、卑怯でも安全だ、と答へて矢つ張り露西亞文學を鼓吹してゐた。

　玄關から座敷へ通つて見ると、寺尾は眞中へ一閑張の机を据ゑて、頭痛がすると云つて鉢卷をして、腕まくりで、帝國文學の原稿を書いてゐた。邪魔ならまた來ると云ふと、歸らんでもいゝ、もう今朝から五

五、貳圓五拾錢丈稼いだからと云ふ挨拶であつた。やがて鉢卷を外して、話しを始めた。始めるが早いか、今の日本の作家と評家を眼の玉の飛び出る程痛快に罵倒し始めた。代助はそれを面白く聞いてゐた。然し腹の中では、寺尾の事を誰も賞めないので、其對抗運動として、自分の方では他を貶すんだらうと思つた。ちと、左樣云ふ意見を發表したら好いぢやないかと勸めると、左樣は行かないよと笑つてゐる。何故と聞き返しても答へない。しばらくして、そりや君の樣に氣樂に暮らせる身分なら隨分云つて見せるが――何しろ食ふんだからね。どうせ眞面目な商賣ぢやないさ。と云つた。代助は、夫で結構だ、確り遣り玉へと奬勵した。すると寺尾は、いや些とも結構ぢやない。どうかして、眞面目になりたいと思つてゐる。どうだ、君ちつと金を借して僕を眞面目にする了見はないかと聞いた。いや、君が今の樣な事をして、夫で眞面目だと思ふ樣になつたら、其時借してやらうと調戲つて、代助は表へ出た。

本郷の通迄來たが倦怠の感は依然として故の通りである。何處をどう歩いても物足りない。と云つて、人の宅を訪ねる氣はもう出ない。自分を檢査して見ると、身體全體が、大きな胃病の樣な心持がした。四丁目から又電車へ乘つて、今度は傳通院前迄來た。車中で搖られるたびに、五尺何寸かある大きな胃嚢の中で、腐つたものが、波を打つ感じがあつた。三時過ぎにぼんやり宅へ歸つた。玄關で門野が、

「先刻御宅から御使でした。手紙は書齋の机の上に載せて置きました。受取は一寸私が書いて渡して置きました」と云つた。

手紙は古風な狀箱の中にあつた。其赤塗の表には名宛も何も書かないで、眞鍮の環に通した觀世撚の封じ目に黑い墨を着けてあつた。代助は机の上を一目見て、此手紙の主は嫂だとすぐ悟つた。嫂には斯う云

ふ舊式な趣味があつて、それが時々思はぬ方角へ出てくる。代助は鋏の先で觀世撚の結び目を突つつきながら、面倒な手數だと思つた。

けれども中にあつた手紙は、狀箱とは正反對に簡單な、言文一致で用を濟ましてゐた。此間わざ〳〵來て呉れた時は、御依頼通り取計らひかねて、御氣の毒をした。後から考へて見ると、其時色々無遠慮な失禮を云つた事が氣にかゝる。どうか惡く取つて下さるな。其代り御金を上げる。尤もみんなと云ふ譯には行かない。貳百圓丈都合して上げる。から夫をすぐ御友達の所へ屆けて御上げなさい。是は兄さんには內所だから其積りでゐなくつては不可ない。奧さんの事も宿題にするといふ約束だから、よく考へて返事をなさい。

手紙の中に卷き込めて、貳百圓の小切手が這入つてゐた。代助は、しばらく、それを眺めてゐるうちに、梅子に濟まない樣な氣がして來た。此間の晩、歸りがけに、向うから、ぢや御金は要らないのと聞いた。貸して呉れと切り込んで頼んだ時は、あゝ手痛しく跳ね附けて置きながら、いざ斷念して歸る段になると、却て斷つた方から、掛念がつて駄目を押して出た。代助はそこに女性の美しさと弱さとを見た。さうして其弱さに附け入る勇氣を失つた。此美しい弱點を弄ぶに堪へなかつたからである。えゝ要りません、何うかなるでせうと云つて分れた。それを梅子は冷やかな挨拶と思つたに違ひない。其冷やかな言葉が、梅子の平生の思ひ切つた動作の裏に、何處にか引つ掛かつてゐて、とう〳〵此手紙になつたのだらうと代助は判斷した。

代助はすぐ返事を書いた。さうして出來る丈暖かい言葉を使つて感謝の意を表した。代助が斯う云ふ氣

分になる事は兄に對してもない。父に對してもない。世間一般に對しては固よりない。近來は梅子に對してもあまり起らなかつたのである。

代助はすぐ三千代の所へ出掛けようかと考へた。實を云ふと、貳百圓は代助に取つて中途半端な額であつた。是丈呉れるなら、一層思ひ切つて、此方の強請つた通りにして、滿足を買へばいゝにと云ふ氣も出た。が、それは代助の頭が梅子を離れて三千代の方へ向いた時の事であつた。その上、女は如何に思ひ切つた女でも、感情上中途半端なものであると信じてゐる代助には、それが別段不平にも思へなかつた。否女の斯う云ふ態度の方が、却て男性の斷然たる處置よりも、同情の彈力性を示してゐる點に於て、快いものと考へてゐた。だから、もし貳百圓を自分に贈つたものが、梅子でなくつて、父であつたとすれば、代助は、それを經濟的中途半端と解釋して、却て不愉快な感に打たれたかも知れないのである。

代助は晩食も食はずに、すぐ又表へ出た。五軒町から江戸川の縁を傳つて、河を向ふへ越した時は、先刻散歩からの歸りの樣に精神の困憊を感じてゐなかつた。坂を上つて傳通院の横へ出ると、細く高い煙突が、寺と寺の間から、汚ない烟を、雲の多い空に吐いてゐた。代助はそれを見て、貧弱な工業が、生存の爲に無理に吐く呼吸を見苦しいものと思つた。さうして其近くに住む平岡と、此煙突とを暗々の裏に連想せずにはゐられなかつた。斯う云ふ場合には、同情の念より美醜の念が先に立つのが、代助の常であつた。代助は此瞬間に、三千代の事を殆ど忘れて仕舞つた位、空に散る憐れな石炭の烟に刺激された。

平岡の玄關の沓脱には女の穿く重ね草履が脱ぎ棄ててあつた。格子を開けると、奥の方から三千代が裾を鳴らして出て來た。其時上り口の二疊は殆ど暗かつた。三千代は其暗い中に坐つて挨拶をした。始めは

誰が來たのか、よく分らなかつたらしかつたが、代助の聲を聞くや否や、何方かと思つたら……と寧ろ低い聲で云つた。代助は判然見えない三千代の姿を、常よりは美しく眺めた。

平岡は不在であつた。それを聞いた時、代助は話してる易い樣な、又話してる惡い樣な變な氣がした。けれども三千代の方は常の通り落ち附いてゐた。洋燈も點けないで、暗い室を閉て切つた儘二人で坐つてゐた。三千代は下女も留守だと云つた。自分も先刻其所迄用達しに出て、今歸つて夕食を濟ました計りだと云つた。やがて平岡の話が出た。

豫期した通り、平岡は相變らず奔走してゐる。が、此一週間程は、あんまり外へ出なくなつた。疲れた、と云つて、よく宅に寐てゐる。でなければ酒を飲む。人が尋ねて來れば猶飲む。さうして善く怒る。さかんに人を罵倒する。のださうである。

「昔と違つて氣が荒くなつて困るわ」と云つて、三千代は暗に同情を求める樣子であつた。代助は默つてゐた。下女が歸つて來て、勝手口でがた／＼音をさせた。しばらくすると、胡摩竹の臺の着いた洋燈を持つて出た。襖を締める時、代助の顏を偸む樣に見て行つた。

代助は懷から例の小切手を出した。二つに折れたのを其儘三千代の前に置いて、奥さん、と呼び掛けた。代助が三千代を奥さんと呼んだのは始めてであつた。

「先達て御賴みの金ですがね」

三千代は何も答へなかつた。たゞ眼を擧げて代助を見た。

「實は、直ぐにもと思つたんだけれども、此方の都合が附かなかつたものだから、遂遲くなつたんだが、

何うですか、もう始末は附きましたか」と聞いた。

其時三千代は急に心細さうな低い聲になつた。さうして怨ずる樣に、

「未だですわ。だつて、片附く譯が無いぢやありませんか」と云つた儘、眼を睜つて凝と代助を見てゐた。代助は折れた小切手を取り上げて二つに開いた。

「是丈ぢや駄目ですか」

三千代は手を伸ばして小切手を受取つた。

「難有う。平岡が喜びますわ」と靜かに小切手を疊の上に置いた。

代助は金を借りて來た由來を、極くざつと說明して、自分は斯ういふ呑氣な身分の樣に見えるけれども、何か必要があつて、自分以外の事に、手を出さうとすると、丸で無能力になるんだから、そこは惡く思つて呉れない樣にと言譯を附け加へた。

「それは、私も承知してゐますわ。けれども、困つて、何うする事も出來ないものだから、つい無理を御願ひして」と三千代は氣の毒さうに詫びを述べた。代助はそこで念を押した。

「夫丈で、何うか始末が附きますか。もし何うしても附かなければ、もう一遍工面して見るんだが」

「もう一遍工面するつて」

「判を押して高い利のつく御金を借りるんです」

「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消す樣に云つた。「それこそ大變よ。貴方」

代助は平岡の今苦しめられてゐるのも、其起りは、性質の惡い金を借り始めたのが轉々して祟つてゐる

んだと云ふ事を聞いた。平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶら〳〵し出すと、遊び始めたのである。それも初めのうちは、夫程烈しくもなかつたので、三千代はたゞ交際上已むを得ないんだらうと諦めてゐたが、仕舞にはそれが段々高じて、程度が無くなる許りなので三千代も心配をする。すれば身體が悪くなる。なれば放蕩が猶募る。不親切なんぢやない。私が悪いんですと三千代はわざ〳〵断つた。けれども又淋しい顔をして、責めて子供でも生きてゐて呉れたら嘸可かつたらうと、つく〴〵考へた事もありましたと自白した。

代助は經濟問題の裏面に潜んでゐる、夫婦の關係をあらまし推察し得た樣な氣がしたので、つまり多く此方から問ふのを控へた。歸りがけに、

「そんなに弱つちや不可ない。昔の樣に元氣に御成んなさい。さうして些と遊びに御出でなさい」と勇氣をつけた。

「本當ね」と三千代は笑つた。彼等は互の昔を互の顔の上に認めた。平岡はとう〳〵歸つて來なかつた。

中二日置いて、突然平岡が來た。其日は乾いた風が朗らかな天を吹いて、蒼いものが眼に映る、常よりは暑い天氣であつた。朝の新聞に菖蒲の案内が出てゐた。代助の買つた大きな鉢植の君子蘭はとう〳〵縁側で散つて仕舞つた。其代り脇差程も幅のある緑の葉が、莖を押し分けて長く延びて來た。古い葉は黒ずんだ儘、日に光つてゐる。其一枚が何かの拍子に半分から折れて、莖を去る五寸許りの所で、急に鋭く下がつたのが、代助には見苦しく見えた。代助は鋏を持つて縁に出た。さうして其葉を折れ込んだ手前から、剪つて棄てた。時に厚い切り口が、急に煮染む樣に見えて、しばらく眺めてゐるうちに、ぽたりと縁に音

がした。切り口に集まつたのは綠色の濃い重い汁であつた。代助は其香を嗅がうと思つて、亂れる葉の中に鼻を突つ込んだ。緣側の滴りは其儘にして置いた。立ち上がつて、袂から半帛を出して、鋏の刃を拭いてゐる所へ、門野が平岡さんが御出でですと報せて來たのである。代助は其時平岡の事も三千代の事も、丸で頭の中に考へてゐなかつた。只不思議な綠色の液體に支配されて、比較的世間に關係のない情調の下に動いてゐた。それが平岡の名を聞くや否や、すぐ消えて仕舞つた。さうして、何だか逢ひたくない樣な氣持がした。

「此方へ御通し申しませうか」と門野から催促された時、代助はうんと云つて、座敷へ這入つた。あとから席に導かれた平岡を見ると、もう夏の洋服を着てゐた。襟も白襯衣も新しい上に、流行の編襟飾を掛けて、浪人とは誰にも受け取れない位、ハイカラに取り繕つてゐた。

話して見ると、平岡の事情は、依然として發展してゐなかつた。もう近頃は運動しても當分駄目だから、毎日斯うして遊んで歩く。それでなければ、宅に寐てゐるんだと云つて、大きな聲を出して笑つて見せた。代助もそれが可からうと答へたなり、後は當らず障らずの世間話に時間を潰してゐた。けれども自然に出る世間話といふよりも、寧ろある問題を回避する爲の世間話だから、兩方共に緊張を腹の底に感じてゐた。平岡は三千代の事も、金の事も口へ出さなかつた。從つて三日前代助が彼の留守宅を訪問した事に就いても何も語らなかつた。代助も始めのうちは、わざと、その點に觸れないで澄ましてゐたが、何時迄經つても、平岡の方で餘所々々しく構へてゐるので、却て不安になつた。

「實は二三日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と云ひ出した。

「うん。左樣だつたさうだね。其節は又難有う。御蔭さまで。――なに、君を煩はさないでも何うかなつたんだが、彼奴があまり心配し過ぎて、つい君に迷惑を掛けて濟まない」と冷淡な禮を云つた。それから、

「僕も實は御禮に來た樣なものだが、本當の御禮には、いづれ當人が出るだらうから」と丸で三千代と自分を別物にした言分であつた。代助はたゞ、

「そんな面倒な事をする必要があるものか」と答へた。話しは是で切れた。が又兩方に共通で、しかも、兩方のあまり興味を持たない方面に摺り滑つて行つた。すると、平岡が突然、

「僕はことによると、もう實業は已めるかも知れない。實際內幕を知れば知る程厭になる。其上此方へ來て、少し運動をして見て、つくぐ勇氣がなくなつた」と心底かららしい告白をした。代助は、一口、

「それは、左樣だらう」と答へた。平岡はあまり此返事の冷淡なのに驚いた樣子であつた。が、又あとを附けた。

「先達ても一寸話したんだが、新聞へでも這入らうかと思つてる」

「口があるのかい」と代助が聞き返した。

「今、一つある。多分出來さうだ」

來た時は、運動しても駄目だから遊んでゐると云ふし、今は新聞に口があるから出ようと云ふし、少し要領を缺いでゐるが、追窮するのも面倒だと思つて、代助は、

「それも面白からう」と賛成の意を表して置いた。

平岡の歸りを玄關迄見送つた時、代助はしばらく、障子に身を寄せて、敷居の上に立つてゐた。門野も御附合ひに平岡の後姿を眺めてゐた。が、すぐ口を出した。

「平岡さんは思つたよりハイカラですな。あの服裝ぢや、少し宅の方が御粗末過ぎる樣です」

「左樣でもないさ。近頃はみんな、あんなものだらう」と代助は立ちながら答へた。

「全く、服裝丈ぢや分らない世の中になりましたからね。何處の紳士かと思ふと、どうも變ちきりんな家へ這入つてますからね」と門野はすぐあとを附けた。

代助は返事も爲ずに書齋へ引き返した。緣側に垂れた君子蘭の綠の滴りがどろ／＼になつて、干上がり掛かつてゐた。代助はわざと、書齋と座敷の仕切を立て切つて、一人室のうちへ這入つた。來客に接した後しばらくは、獨坐に耽るが代助の癖であつた。ことに今日の樣に調子の狂ふ時は、格別その必要を感じた。

平岡はとう／＼自分と離れて仕舞つた。逢ふたんびに、遠くにゐて應對する樣な氣がする。實を云ふと、平岡ばかりではない。誰に逢つても左んな氣がする。現代の社會は孤立した人間の集合體に過ぎなかつた。大地は自然に續いてゐるけれども、其上に家を建てたら、忽ち切れ／＼になつて仕舞つた。家の中にゐる人間も亦切れ／＼になつて仕舞つた。文明は我等をして孤立せしむるものだと、代助は解釋した。

代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人であつた。今でも左樣かも知れない。が、些ともそんな顏をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける樣に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か、又は是が現代社會に本來の面目だと云ふ悟りか、何方かに歸着する。

平岡に接近してゐた時分の代助は、人の爲に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の壓迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競爭場裡に立つ人で、眞によく人の爲に泣き得るものに、代助は未だ嘗て出逢はなかつた。

代助は今の平岡に對して、隔離の感よりも寧ろ嫌惡の念を催した。さうして向うにも自己同樣の念が萌してゐると判じた。昔の代助も、時々わが胸のうちに、斯う云ふ影を認めて驚いた事があつた。其時は非常に悲しかつた。今は其悲しみも殆ど薄く剝がれて仕舞つた。だから自分で黑い影を凝と見詰めて見る。さうして、これが眞だと思ふ。已むを得ないと思ふ。たゞそれ丈になつた。

斯う云ふ意味の孤獨の底に陷つて煩悶するには、代助の頭はあまりに判然し過ぎてゐた。彼はこの境遇を以て、現代人の踏むべき必然の運命と考へたからである。從つて、自分と平岡の隔離は、今の自分の眼に訴へて見て、尋常一般の徑路を、ある點迄進行した結果に過ぎないと見傚した。けれども、同時に、兩人の間に横たはる一種の特別な事情の爲、此隔離が世間並よりも早く到着したと云ふ事を自覺せずにはゐられなかつた。それは三千代の結婚であつた。三千代を平岡に周旋した者は元來が自分であつた。それを當時に悔ゆる樣な薄弱な頭腦ではなかつた。今日に至つて振り返つて見ても、自分の所作は、過去を照らす鮮やかな名譽であつた。けれども三年經過するうちに自然は自然に特有な結果を、彼等二人の前に突き附けた。彼等は自己の滿足と光輝を棄てて、其前に頭を下げなければならなかつた。さうして平岡は、ちらりちらりと何故三千代を貰つたかと思ふ樣になつた。代助は何處かしらで、何故三千代を周旋したかと

云ふ聲を聞いた。

代助は書齋に閉ぢ籠もつて一日考へに沈んでゐた。晩食の時、門野が、

「先生今日は一日御勉强ですね。どうです、些と御散歩になりませんか。今夜は寅毘沙ですぜ。演藝館で支那人の留學生が芝居を演つてます。どんな事を演る積りですか、行つて御覽なすつたら何うです。支那人てえ奴は、臆面がないから、何でも遣る氣だから呑氣なもんだ。……」と一人で喋舌つた。

九

代助は又父から呼ばれた。代助には其用事が大抵分つてゐた。代助は不斷から成るべく父を避けて會はない樣にしてゐた。此頃になつては猶更奧へ寄り附かなかつた。逢ふと、丁寧な言葉を使つて應對してゐるにも拘らず、腹の中では、父を侮辱してゐる樣な氣がしてならなかつたからである。

代助は人類の一人として、互を腹の中で侮辱する事なしには、互に接觸を敢てし得ぬ、現代の社會を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近來急に膨脹した生活慾の高壓力が道義慾の崩壞を促したものと解釋してゐた。又これを此等新舊兩慾の衝突と見做してゐた。最後に、此生活慾の目醒ましい發展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得てゐた。

この二つの因數は、何處かで平衡を得なければならない。けれども、貧弱な日本が、歐洲の最强國と、財力に於て肩を較べる日の來る迄は、此平衡は日本に於て得られないものと代助は信じてゐた。さうして、斯かる日は、到底日本の上を照らさないものと諦めてゐた。だからこの窮地に陷つた日本紳士の多數は、

口毎に法律に觸れない程度に於て、もしくはたゞ頭の中に於て、罪惡を犯さなければならない。さうして、相手が今如何なる罪惡を犯しつゝあるかを、互に默知しつゝ、談笑しなければならない。代助は人類の一人として、かゝる侮辱を加ふるにも、又加へらるゝにも堪へなかつた。

代助の父の場合は、一般に比べると、稍特殊的傾向を帶びる丈に複雜であつた。彼は維新前の武士に固有な道義本位の教育を受けた。此教育は情意行爲の標準を、自己以外の遠い所に据ゑて、事實の發展によつて證明せらるべき手近な眞を、眼中に置かない無理なものであつた。にも拘らず、父は習慣に囚へられて、未だに此教育に執着してゐる。さうして、一方には、劇烈な生活慾に冒され易い實業に從事した。父は實際に於て年々此生活慾の爲に腐蝕されつゝ今日に至つた。だから昔の自分と、今の自分の間には、大きな相違のあるべき筈である。それを父は自認してゐなかつた。昔の自分が、昔通りの心得で、今の事業を是迄に成し遂げたとばかり公言する。けれども封建時代にのみ通用すべき教育の範圍を狹める事なしに、現代の生活慾を時々刻々に充たして行ける譯がないと代助は考へた。もし雙方を其儘に存在させようとすれば、之を敢てする個人は、矛盾の爲に大苦痛を受けなければならない。もし内心に此苦痛を受けながら、たゞ苦痛の自覺丈明らかで、何の爲の苦痛だか分別が附かないならば、それは頭腦の鈍い劣等な人種である。代助は父に對する毎に、父は自己を隱蔽する僞君子か、もしくは分別の足らない愚物か、何方かでなくてはならない樣な氣がした。さうして、左う云ふ氣がするのが厭でならなかつた。

と云つて、父は代助の手際で、何うする事も出來ない男であつた。代助には明らかに、それが分つてゐた。だから代助は未だ曾て父を矛盾の極端迄追ひ詰めた事がなかつた。

代助は凡ての道德の出立點は社會的事實より外にないと信じてゐた。始めから頭の中に硬張つた道德を据ゑ附けて、其道德から逆に社會的事實を發展させようとする程、本末を誤つた話はないと信じてゐた。從つて日本の學校でやる、講釋の倫理敎育は、無意義のものだと考へた。彼等は學校で昔風の道德を敎授してゐる。それでなければ一般歐洲人に適切な道德を吞み込ましてゐる。此劇烈なる生活慾に襲はれた不幸な國民から見れば、迂遠の空談に過ぎない。此迂遠な敎育を受けたものは、他日社會を眼前に見る時、昔の講釋を思ひ出して笑つて仕舞ふ。でなければ馬鹿にされた樣な氣がする。代助に至つては、學校のみならず、現に自分の父から、最も嚴格で、尤も通用しない德義上の敎育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭の中に起した。代助はそれを恨めしく思つてゐる位であつた。

代助は此前梅子に禮を云ひに行つた時、梅子から一寸奥へ行つて、挨拶をしていらつしやいと注意された。代助は笑ひながら御父さんはゐるんですかと空とぼけた。いらつしやるわと云ふ確答を得た時でも、今日はちと急ぐから廢さうと歸つて來た。

今日はわざ／＼其爲に來たのだから、否でも應でも父に逢はなければならない。相變らず、内玄關の方から廻つて座敷へ來ると、珍らしく兄の誠吾が胡坐をかいて、酒を吞んでゐた。梅子も傍に坐つてゐた。兄は代助を見て、

「何うだ、一盃遣らないか」と、前にあつた葡萄酒の壜を持つて振つて見せた。中にはまだ餘程這入つてゐた。梅子は手を敲いて洋盞を取り寄せた。

「當てて御覽なさい。どの位古いんだか」と一杯注いだ。

「代助に分るものか」と云つて、誠吾は弟の唇のあたりを眺めてゐた。代助は一口飲んで盃を下へ下ろした。肴の代りに薄いウェーファーが菓子皿にあつた。

「旨いですね」と云つた。

「だから時代を當てて御覧なさいよ」

「時代があるんですか。偉いものを買ひ込んだもんだね。歸りに一本貰つて行かう」

「御生憎樣、もう是限りなの。到來物よ」と云つて梅子は緣側へ出て、膝の上に落ちたウェーファーの粉を拂いた。

「兄さん、今日は何うしたんです。大變氣樂さうですね」と代助が聞いた。

「今日は休養だ。此間中は何うも忙し過ぎて降參したから」と誠吾は火の消えた葉卷を口に啣へた。代助は自分の傍にあつた燐寸を擦つて遣つた。

「代さん貴方こそ氣樂ぢやありませんか」と云ひながら梅子が緣側から歸つて來た。

「姉さん歌舞伎座へ行きましたか。まだなら、行つて御覧なさい。面白いから」

「貴方もう行つたの、驚いた。貴方も餘つ程怠けものね」

「怠けものは可くない。勉强の方向が違ふんだから」

「押しの強い事ばかり云つて。人の氣も知らないで」と梅子は誠吾の方を見た。誠吾は赤い瞼をして、ほかんと葉卷の烟を吹いてゐた。

「ねえ、貴方」と梅子が催促した。誠吾はうるささうに葉卷を指の股へ移して、

「今のうち澤山勉強して貰つて置いて、今に此方が貧乏したら、救つて貰ふ方が好いぢやないか」と云つた。梅子は、

「代さん、あなた役者になれて」と聞いた。代助は何も云はずに、洋盃を姉の前に出した。梅子も默つて葡萄酒の壜を取り上げた。

「兄さん、此間中は何だか大變忙しかつたんだつてね」と代助は前へ戻つて聞いた。

「いや、もう大弱りだ」と云ひながら、誠吾は寐轉んで仕舞つた。

「何か日糖事件に關係でもあつたんですか」と代助が聞いた。

「日糖事件に關係はないが、忙しかつた」

兄の答は何時でも此程度以上に明瞭になつた事がない。實は明瞭に話したくないんだらうけれども、代助の耳には、夫が本來の無頓着で、話すのが億劫なためと聞こえる。だから代助はいつでも樂に其返事の中に這入つてゐた。

「日糖も詰らない事になつたが、あゝなる前に何うか方法はないんでせうかね」

「左うさなあ。實際世の中の事は、何が何うなるんだか分らないからな。——梅、今日は直木に云ひ附けて、ヘクターを少し運動させなくつちや不可ないよ。あゝ大食ひをして寐て計りゐちや毒だ」と誠吾は眠さうな瞼を指で、しきりに擦つた。代助は、

「愈奥へ行つて御父さんに叱られて來るかな」と云ひながら又洋盃を嫂の前へ出した。梅子は笑つて酒を注いだ。

「嫁の事か」と誠吾が聞いた。

「まあ、左うだらうと思ふんです」

「貰つて置くがいゝ。さう老人に心配さしたつて仕樣があるものか」と云つたが、今度はもつと判然した語勢で、

「氣を附けないと不可んよ。少し低氣壓が來てるるから」と注意した。代助は立ち掛けながら、

「まさか此間中の奔走からきた低氣壓ぢやありますまいね」と念を押した。兄は寐轉んだ儘、

「何とも云へないよ。斯う見えて、我々も日糖の重役と同じ樣に、何時拘引されるか分らない身體なんだから」と云つた。

「馬鹿な事を仰しやるなよ」と梅子が窘めた。

「矢つ張り僕ののらくらが持ち來した低氣壓なんだらう」と代助は笑ひながら立つた。

廊下傳ひに中庭を越して、奧へ來て見ると、父は唐机の前へ坐つて、唐本を見てゐた。父は詩が好きで、閑があると折々支那人の詩集を讀んでゐる。然し時によると、それが尤も機嫌のわるい索引になる事があつた。さう云ふときは、いかに神經のふつくら出來上がつた兄でも、成るべく近寄らない事にしてゐた。是非顏を合はせなければならない場合には、誠太郎か、縫子か、何方か引つ張つて父の前へ出る手段を取つてゐた。代助も緣側迄來て、そこに氣が附いたが、夫程の必要もあるまいと思つて、座敷を一つ通り越して、父の居間に這入つた。

父はまづ眼鏡を外した。それを讀み掛けた書物の上に置くと、代助の方に向き直つた。さうして、たゞ

一言、

「來たか」と云つた。其語調は平常よりも却て穩やかな位であつた。代助は膝の上に手を置きながら、兄が眞面目な顔をして、自分を擔いたんぢやなからうかと考へた。代助はそこで又苦い茶を飲ませられて、しばらく雜談に時を移した。今年は芍藥の出が早いとか、茶摘歌を聞いてゐると眠くなる時候だとか、何所とかに、大きな藤があつて、其花の長さが四尺足らずあるとか、話しは好い加減な方角へ大分長く延びて行つた。代助は又其方が勝手なので、いつ迄も延ばす樣にと、後から後を附けて行つた。父も仕舞には持て餘して、とう／＼、時に今日御前を呼んだのはと云ひ出した。

代助はそれから後は、一言も口を利かなくなつた。只謹んで親爺の云ふことを聽いてゐた。父も代助から斯う云ふ態度に出られると、長い間自分一人で、講義でもする樣に、述べて行かなくてはならなかつた。然し其半分以上は、過去を繰り返す丈であつた。が代助はそれを、始めて聞くと同程度の注意を拂つて聞いてゐた。

父の長講義のうちに、代助は二三の新しい點も認めた。その一つは、御前は一體是からさき何うする料簡なんだと云ふ眞面目な質問であつた。代助は今迄父からの注文ばかり受けてゐた。だから、其注文を曖昧に外す事に慣れてゐた。けれども、斯う云ふ大質問になると、さう口から出任せに答へられない。無暗な事を云へば、すぐ父を怒らして仕舞ふからである。と云つて正直を自白すると、二三年間父の頭を教育した上でなくつては、通じない理窟になる。代助は此大質問に應じて、自分の未來を明瞭に道破る丈の考へも何も有つてゐなかつた。彼はそれが自分に取つて尤もな所だと思つてゐた。けれども父に、其通りを

話して、成程と納得させる迄には、大變な時間がかゝる。或は生涯通じつこないかも知れない。父の氣に入る樣にするのは、何でも、國家の爲とか、天下の爲とか、景氣の好い事を、しかも結婚と兩立しない樣な事を、述べて置けば濟むのであるが、代助は如何に、自己を侮辱する氣になつても、是ばかりは馬鹿氣てゐて、口へ出す勇氣がなかつた。そこで已むを得ないから、實は色々計畫もあるが、いづれ秩序立てて來て、御相談をする積りであると答へた。答へた後で、實に滑稽だと思つたが仕方がなかつた。

　代助は次に、獨立の出來る丈の財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると、父が、では佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ條件を附けた。其財産は佐川の娘が持つて來るのか、又は父が呉れるのか甚だ曖昧であつた。代助は少し其點に向つて進んで見たが、遂に要領を得なかつた。けれども、それを突き留める必要がないと考へて已めた。

　次に、一層洋行する氣はないかと云はれた。代助は好いでせうと云つて贊成した。けれども、これにも、矢つ張り結婚が先決問題として出て來た。

「そんなに佐川の娘を貰ふ必要があるんですか」と代助が仕舞に聞いた。すると父の顏が赤くなつた。

　代助は父を怒らせる氣は少しもなかつたのである。彼の近頃の主義として、人と喧嘩をするのは、人間の墮落の一範疇になつてゐた。喧嘩の一部分として、人を怒らせるのは、怒らせる事自身よりは、怒つた人の顏色が、如何に不愉快にわが眼に映するかと云ふ點に於て、大切なわが生命を傷つける打撃に外ならぬと心得てゐた。彼は罪惡に就いても彼自身に特有な考へを有つてゐた。けれども、それが爲に、自然の儘に振舞ひさへすれば、罰を免れ得るとは信じてゐなかつた。人を斬つたものの受くる罰は、斬られた人

の肉から出る血潮であると固く信じてゐた。逆る血の色を見て、清い心の迷亂を引き起さないものはあるまいと感ずるからである。代助は夫程神經の鋭い男であつた。だから顔の色を赤くした父を見た時、妙に不快になつた。けれども此罪を二重に償ふために、父の云ふ通りにしようと云ふ氣は些とも起らなかつた。彼は、一方に於て、自己の腦力に、非常な尊敬を拂ふ男であつたからである。

其時父は頗る熱した語氣で、先づ自分の年を取つてゐる事、子供の未來が心配になる事、子供に嫁を持たせるのは親の義務であると云ふ事、嫁の資格其他に就いては、本人よりも親の方が遙かに周到な注意を拂つてゐると云ふ事、他の親切は、其當時にこそ餘計な御世話に見えるが、後になると、もう一遍うるさく干渉して貰ひたい時機が來るものであるといふ事を、非常に丁寧に説いた。代助は愼重な態度で、聽いてゐた。けれども、父の言葉が切れた時も、依然として許諾の意を表さなかつた。すると父はわざと抑へた調子で、

「ぢや、佐川は已めるさ。さうして誰でも御前の好きなのを貰つたら好いだらう。誰か貰ひたいのがあるのか」と云つた。是は嫂の質問と同樣であるが、代助は梅子に對する樣に、たゞ苦笑ばかりしてはゐられなかつた。

「別にそんな貰ひたいのもありません」と明らかな返事をした。すると父は急に癇の發した樣な聲で、

「ぢや、少しは此方の事も考へて呉れたら好からう。何もさう自分の事ばかり思つてゐないでも」と急調子に云つた。代助は、突然父が代助を離れて、彼自身の利害に飛び移つたのに驚かされた。けれども其驚きは、論理なき急劇の變化の上に注がれた丈であつた。

「貴方にそれ程御都合が好い事があるなら、もう一遍考へて見ませう」と答へた。

父は益々機嫌を惡くした。代助は人と應對してゐる時、何うしても論理を離れる事の出來ない場合がある。夫が爲、よく人から、相手を遣り込めるのを目的とする樣に受取られる。實際を云ふと、彼程人を遣り込める事の嫌ひな男はないのである。

「何も己の都合許りで、嫁を貰へと云つてやしない」と父は前の言葉を訂正した。「そんなに理窟を云ふなら、參考の爲、云つて聞かせるが、御前はもう三十だらう、三十になつて、普通のものが結婚をしなければ、世間では何と思ふか大抵分るだらう。そりや今は昔と違ふから、獨身も本人の隨意だけれども、獨身の爲に親や兄弟が迷惑したり、果ては自分の名譽に關係する樣な事が出來したりしたら何うする氣だ」

代助はたゞ茫然として父の顏を見てゐた。父は何の點に向つて、自分を刺した積りだか、代助には殆ど分らなかつたからである。しばらくして、

「そりや私のことだから少しは道樂もしますが……」と云ひかけた。父はすぐ夫を遮つた。

「そんな事ぢやない」

二人は夫限りしばらく口を利かずにゐた。父は此沈默を以て代助に向つて與へた打擊の結果と信じた。やがて、言葉を和らげて、

「まあ、よく考へて御覽」と云つた。代助ははあと答へて、父の室を退いた。座敷へ來て兄を探したが見えなかつた。嫂はと尋ねたら、客間だと下女が敎へたので、行つて戸を明けて見ると、縫子のピヤノの

先生が來てゐた。代助は先生に一寸挨拶をして、梅子を戸口迄呼び出した。
「あなたは僕の事を何か御父さんに讒訴しやしないか」
梅子はハヽヽヽと笑つた。さうして、
「まあ御這入んなさいよ。丁度好い所だから」と云つて、代助を樂器の傍迄引つ張つて行つた。

十

蟻の座敷へ上がる時候になつた。代助は大きな鉢へ水を張つて、其中に眞白な鈴蘭を莖ごと漬けた。簇がる細かい花が、濃い模樣の縁を隱した。鉢を動かすと、花が零れる。代助はそれを大きな字引の上に載せた。さうして、其傍に枕を置いて仰向けに倒れた。黑い頭が丁度鉢の陰になつて、花から出る香が、好い具合に鼻に通つた。代助は其香を嗅ぎながら假寐をした。
代助は時々尋常な外界から法外に痛烈な刺激を受ける。それが劇しくなると、晴天から來る日光の反射にさへ堪へ難くなることがあつた。さう云ふ時には、成る可く世間との交渉を稀薄にして、朝でも午でも構はず寐る工夫をした。其手段には、極めて淡い、甘味の輕い、花の香をよく用ひた。瞼を閉ぢて、瞳に落ちる光線を謝絶して、靜かに鼻の穴丈で呼吸してゐるうちに、枕元の花が、次第に夢の方へ、躁ぐ意識を吹いて行く。是が成功すると、代助の神經が生れ代つた樣に落ち附いて、世間との連絡が、前よりは比較的樂に取れる。
代助は父に呼ばれてから二三日の間、庭の隅に咲いた薔薇の花の赤いのを見るたびに、それが點々として

て眼を刺してならなかつた。其時は、いつでも、手水鉢の傍にある、擬寶珠の葉に眼を移した。其葉には、放肆な白い縞が、三筋四筋、長く亂れてゐた。代助が見るたびに、擬寶珠の葉は延びて行く樣に思はれた。さうして、それと共に白い縞も、自由に拘束なく、延びる樣な氣がした。柘榴の花は、薔薇よりも派出に且重苦しく見えた。綠の間にちらり／＼と光つて見える位、强い色を出してゐた。從つて是も代助の今の氣分には相應らなかつた。

彼の今の氣分は、彼に時々起る如く、總體の上に一種の暗調を帶びてゐた。だから餘りに明る過ぎるものに接すると、其矛盾に堪へがたかつた。擬寶珠の葉も長く見詰めてゐると、すぐ厭になる位であつた。

其上彼は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲はれ出した。其不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蠻程度の現象であつた。彼は此心的現象の爲に甚だしき動搖を感じた。彼は神に信仰を置く事を喜ばぬ人であつた。又頭腦の人として、神に信仰を置く事の出來ぬ性質であつた。けれども、相互に信仰を有するものは、神に依賴するの必要がないと信じてゐた。相互が疑ひ合ふときの苦しみを解脫する爲に、神は始めて存在の權利を有するものと解釋してゐた。だから、神のある國では、人が嘘を吐くものと極めた。然し今の日本は、神にも人にも信仰のない國柄であるといふ事を發見した。さうして、彼は之を一に日本の經濟事情に歸着せしめた。

四五日前、彼は掏摸と結託して惡事を働いた刑事巡査の話を新聞で讀んだ。それが一人や二人ではなかつた。他の新聞の記す所によれば、もし嚴重に、それからそれへと、手を延ばしたら、東京は一時殆ど無警察の有樣に陷るかも知れないさうである。代助は其記事を讀んだとき、たゞ苦笑した丈であつた。さう

して、生活の大難に對抗せねばならぬ薄給の刑事が、惡い事をするのは、實際尤もだと思つた。

代助は父に逢つて、結婚の相談を受けた時も、少し是と同樣の氣がした。が、これはたゞ父に信仰がない所から起る、代助に取つて不幸な暗示に過ぎなかつた。さうして代助は自分の心のうちに、かゝる忌まはしい暗示を受けたのを、不德義とは感じ得なかつた。それが事實となつて眼前にあらはれても、矢張り父を尤もだと肯ふ積りだつたからである。

代助は平岡に對しても同樣の感じを抱いてゐた。然し平岡に取つては、それが當然な事であると許してゐた。たゞ平岡を好く氣になれない丈であつた。代助は兄を愛してゐた。けれども其兄に對しても矢張り信仰は有ち得なかつた。嫂は實意のある女であつた。然し嫂は、直接生活の難關に當たらない丈、それ丈兄よりも近附き易いのだと考へてゐた。

代助は平生から、此位に世の中を打遣つてゐた。だから、非常な神經質であるにも拘らず、不安の念に襲はれる事は少なかつた。さうして、自分でもそれを自覺してゐた。夫が、何う云ふ具合か急に搖き出した。代助は之を生理上の變化から起るのだらうと察した。そこである人が北海道から採つて來たと云つて呉れた鈴蘭の束を解いて、それを悉く水の中に浸して、其下に寐たのである。

一時間の後、代助は大きな黑い眼を開いた。其眼は、しばらくの間一つ所に留まつて全く動かなかつた。手も足も寐てゐた時の姿勢を少しも崩さずに、丸で死人のそれの樣であつた。其時一匹の黑い蟻が、ネルの襟を傳はつて、代助の咽喉に落ちた。代助はすぐ右の手を動かして咽喉を抑へた。さうして、額に皺を寄せて、指の股に挾んだ小さな動物を、鼻の上迄持つて來て眺めた。其時蟻はもう死んでゐた。代助は人

指し指の先に着いた黒いものを、親指の爪で向うへ彈いた。さうして起き上がつた。それから手を叩いて人を呼んだ。

膝の周圍に、まだ三四匹這つてるたのを、薄い象牙の紙小刀で打ち殺した。

「御目醒めですか」と云つて、門野が出て來た。

「御茶でも入れて來ませうか」と聞いた。代助は、はだかつた胸を搔き合はせながら、

「君、僕の寐てるたうちに、誰か來やしなかつたかね」と、靜かな調子で尋ねた。

「えゝ、御出ででした。平岡の奧さんが。よく御存じですな」と門野は平氣に答へた。

「何故起さなかつたんだ」

「餘り能く御休みでしたからな」

「だつて御客なら仕方がないぢやないか」

代助の語勢は少し強くなつた。

「ですがな。平岡の奧さんの方で、起さない方が好いつて、仰しやつたもんですからな」

「それで、奧さんは歸つて仕舞つたのか」

「なに歸つて仕舞つたと云ふ譯でもないんです。一寸神樂坂に買物があるから、それを濟まして又來るからつて、云はれるもんですからな」

「ぢや又來るんだね」

「さうです。實は御目覺めになる迄待つてるようかつて、此座敷迄上がつて來られたんですが、先生の

顔を見て、あんまり善く寐てゐるもんだから、こいつは、容易に起きさうもないと思つたんでせう」

「また出て行つたのかい」

「えゝ、まあ左うです」

代助は笑ひながら、兩手で寐起きの顔を撫でた。さうして風呂場へ顔を洗ひに行つた。頭を濡らして、縁側迄歸つて來て、庭を眺めてゐると、前よりは氣分が大分晴々した。曇つた空を燕が二羽飛んでゐる樣が大いに愉快に見えた。

代助は此前平岡の訪問を受けてから、心待ちに後から三千代の來るのを待つてゐた。けれども、平岡の言葉は遂に事實として現はれて來なかつた。特別の事情があつて、三千代がわざと來ないのか、又は平岡が始めから御世辭を使つたのか、疑問であるが、それがため、代助は心の何處かに空虛を感じてゐた。然し彼は此空虛な感じを、一つの經驗として日常生活中に見出だした迄で、其原因をどうするの、斯うするのと云ふ氣はあまりなかつた。此經驗自身の奧を覗き込むと、それ以上に暗い影がちらついてゐる樣に思つたからである。

それで彼は進んで平岡を訪問するのを避けてゐた。散歩のとき彼の足は多く江戸川の方角に向いた。櫻の散る時分には、夕暮の風に吹かれて、四つの橋を此方から向うへ渡り、向うから又此方へ渡り返して、長い堤を縫ふ樣に歩いた。が其櫻はとくに散つて仕舞つて、今は新緑の時節になつた。代助は時々橋の眞中に立つて、欄干に頬杖を突いて、茂る葉の中を、眞直に通つてゐる、水の光を眺め盡くして見る。それから其先の細くなつた先の方に、高く聳える目白臺の森を見上げて見る。けれども橋を向うへ渡つて、小

石川の坂を上る事はやめにして歸る樣になつた。ある時彼は大曲の所で、電車を下りる平岡の影を半丁程手前から認めた。彼は慥かに左樣に違ひないと思つた。さうして、すぐ揚場の方へ引き返した。

彼は平岡の安否を氣にかけてゐた。まだ坐食の不安な境遇に居るに違ひないとは思ふけれども、或は何の方面かへ、生活の行路を切り開く手掛りが出來たかも知れないとも想像して見た。けれども、それを確める爲に、平岡の後を追ふ氣にはなれなかつた。彼は平岡に面するときの、原因不明な一種の不快を豫想する樣になつた。と云つて、たゞ三千代の爲にのみ、平岡の位地を心配する程、平岡を惡んでもゐなかつた。平岡の爲にも、矢張り平岡の成功を祈る心はあつたのである。

斯んな風に、代助は空虚なるわが心の一角を抱いて今日に至つた。いま先方門野を呼んで括り枕を取り寄せて、午寐を貪つた時は、あまりに潑溂たる宇宙の刺激に堪へなくなつた頭を、出來るならば、蒼い色の附いた、深い水の中に沈めたい位に思つた。それ程彼は命を鋭く感じ過ぎた。從つて熱い頭を枕へ着けた時は、平岡も三千代も、彼に取つて殆ど存在してゐなかつた。彼は幸ひにして涼しい心持に寐た。けれども其穩やかな眠りのうちに、誰かすうと來て、又すうと出て行つた樣な心持がした。眼を醒まして起き上がつても其感じがまだ殘つてゐて、頭から拭ひ去る事が出來なかつた。それで門野を呼んで、寐てゐる間に誰か來はしないかと聞いたのである。

代助は兩手を額に當てて、高い空を面白さうに切つて廻る燕の運動を緣側から眺めてゐたが、やがて、それが眼ま苦しくなつたので、室の中に這入つた。けれども、三千代が又訪ねて來ると云ふ目前の豫期が、既に氣分の平調を冒してゐるので、思索も讀書も殆ど手に着かなかつた。代助は仕舞に本棚の中から、大

きな畫帖を出して來て、膝の上に廣げて、繰り始めた。けれども、それも、只指の先で順々に開けて行くだけであつた。一つ畫を半分とは味はつてゐられなかつた。やがてブランギンの所へ來た。代助は平生から此裝飾畫家に多大の趣味を有つてゐた。彼の眼は常の如く輝きを帶びて、一度は其上に落ちた。それは何處かの港の圖であつた。背景に船と檣と帆を大きく描いて、其餘つた所に、際立つて花やかな空の雲と、蒼黑い水の色をあらはした前に、裸體の勞働者が四五人ゐた。代助は是等の男性の、山の如くに怒らした筋肉の張り具合や、彼等の肩から脊へかけて、肉塊と肉塊が落ち合つて、其間に渦の樣な谷を作つてゐる模樣を見て、其處にしばらく肉の力の快感を認めたが、やがて、畫帖を開けた儘、眼を放して耳を立てた。すると勝手の方で婆さんの聲がした。それから牛乳配達か空壜を鳴らして急ぎ足に出て行つた。宅のうちが靜かなので、鋭い代助の聽神經には善く應へた。

代助はぼんやり壁を見詰めてゐた。門野をもう一返呼んで、三千代が又くる時間を、云ひ置いて行つたか何うか尋ねようと思つたが、あまり愚だから憚つた。それ許りではない、人の細君が訪ねて來るのを、それ程待ち受ける寓意がないと考へた。又それ程待ち受ける位なら、此方から何時でも行つて話しをすべきであると考へた。此矛盾の兩面を相對に見た時、代助は急に自己の沒論理に恥ぢざるを得なかつた。彼の腰は半ば椅子を離れた。けれども彼はこの沒論理の根柢に横たはる色々の因數を自分で善く承知してゐた。さうして、今の自分に取つては、この沒論理の狀態が、唯一の事實であるから仕方ないと思つた。且、此事實と衝突する論理は、自己に無關係な命題を繋ぎ合はして出來上がつた、自己の本體を蔑視する、形式に過ぎないと思つた。さう思つて又椅子へ腰を卸ろした。

それから三千代の來る迄、代助はどんな風に時を過ごしたか、殆ど知らなかつた。表に女の聲がした時、彼は胸に一鼓動を感じた。彼は論理に於て尤も強い代りに、心臓の作用に於て尤も弱い男であつた。彼が近來怒れなくなつたのは、全く頭の御蔭で、腹を立てる程自分を馬鹿にすることを、理智が許さなくなつたからである。が其他の點に於ては、尋常以上に情緒の支配を受けるべく餘儀なくされてゐた。取次に出た門野が足音を立てて、書齋の入口にあらはれた時、血色のいゝ代助の頬は微かに光澤を失つてゐた。門野は、

「此方にしますか」と甚だ簡單に代助の意向を確めた。座敷へ案内するか、書齋で逢ふかと聞くのが面倒だから、斯う詰めて仕舞つたのである。代助はうんと云つて、入口に返事を待つてゐた門野を追ひ拂ふ樣に、自分で立つて行つて、緣側へ首を出した。三千代は緣側と玄關の繼目の所に、此方を向いてためらつて居た。

三千代の顏は此前逢つた時よりは寧ろ蒼白かつた。代助に眼と顋で招かれて書齋の入口へ近寄つた時、代助は三千代の息を喘まして居ることに氣が附いた。

「何うかしましたか」と聞いた。

三千代は何も答へずに室の中に這入つて來た。セルの單衣の下に襦袢を重ねて、手に大きな白い百合の花を三本許り提げてゐた。其百合をいきなり洋卓の上に投げる樣に置いて、其横にある椅子へ腰を卸ろした。さうして、結つた許りの銀杏返しを、構はず、椅子の脊に押し附けて、

「あゝ苦しかつた」と云ひながら、代助の方を見て笑つた。代助は手を叩いて水を取り寄せようとした。

三千代は默つて洋卓の上を指した。其所には代助の食後の嗽ひをする硝子の洋盃があつた。中に水が二口許り殘つて居た。

「綺麗なんでせう」と三千代が聞いた。

「此奴は先刻僕が飮んだんだから」と云つて、洋盃を取り上げたが、躊躇した。代助の坐つてゐる所から、水を棄てようとすると、障子の外に硝子戸が一枚邪魔をしてゐる。門野は毎朝縁側の硝子戸を一二枚宛開けないで、元の通りに放つて置く癖があつた。代助は席を立つて、縁へ出て、水を庭へ空けながら、門野を呼んだ。今居た門野は何處へ行つたか、容易に返事をしなかつた。代助は少しまごついて、又三千代の所へ歸つて來て、

「今すぐ持つて來て上げる」と云ひながら、折角空けた洋盃を其儘洋卓の上に置いたなり、勝手の方へ出て行つた。茶の間を通ると、門野は無細工な手をして錫の茶壺から玉露を撮み出してゐた。代助の姿を見て、

「先生、今直きです」と言譯をした。

「茶は後でも好い。水が要るんだ」と云つて、代助は自分で臺所へ出た。

「はあ、左樣ですか。上るんですか」と茶壺を放り出して門野も附いて來た。二人で洋盃を探したが一寸見附からなかつた。婆さんはと聞くと、今御客さんの菓子を買ひに行つたといふ答であつた。

「菓子がなければ、早く買つて置けば可いのに」と代助は水道の栓を捩つて湯呑に水を溢らせながら云つた。

「つい、小母さんに、御客さんの來る事を云つて置かなかつたものですからな」と門野は氣の毒さうに頭を掻いた。

「ぢや、君が菓子を買ひに行けば可いのに」と代助は勝手を出ながら、門野に當たつた。門野はそれでも、まだ、返事をした。

「なに菓子の外にも、まだ色々買物があるつて云ふもんですからな。足は惡し天氣は好くないし、廢せば好いんですのに」

代助は振り向きもせず、書齋へ戻つた。敷居を跨いで、中へ這入るや否や三千代の顔を見ると、三千代は先刻代助の置いて行つた洋盃を膝の上に兩手で持つてゐた。其洋盃の中には、代助が庭へ空けたと同じ位に水が這入つてゐた。代助は湯呑を持つた儘、茫然として、三千代の前に立つた。

「何うしたんです」と聞いた。三千代は例の通り落ち附いた調子で、

「難有う。もう澤山。今あれを飲んだの。あんまり綺麗だつたから」と答へて、鈴蘭の漬けてある鉢を顧た。代助は此大鉢の中に水を八分目程張つて置いた。妻楊枝位な細い茎の薄青い色が、水の中に揃つてゐる間から、陶器の模樣が仄かに浮いて見えた。

「何故あんなものを飲んだんですか」と代助は呆れて聞いた。

「だつて毒ぢやないでせう」と三千代は手に持つた洋盃を代助の前へ出して、透かして見せた。

「毒でないつたつて、もし二日も三日も經つた水だつたら何うするんです」

「いえ、先刻來た時、あの傍迄顔を持つて行つて嗅いで見たの。其時、たつた今其鉢へ水を入れて、桶

から移した許りだつて、あの方が云つたんですもの。大丈夫だわ。好い香ね」

代助は默つて椅子へ腰を卸ろした。果して詩の爲に鉢の水を呑んだのか、又は生理上の作用に促されて飲んだのか、追窮する勇氣も出なかつた。よし前者とした所で、詩を衒つて、小説の眞似なぞをした受賣の所作とは認められなかつたからである。そこで、たゞ、

「氣分はもう好くなりましたか」と聞いた。

三千代の頬に漸く色が出て來た。袂から手帛を取り出して、口の邊を拭きながら話しを始めた。――大抵は傳通院前から電車へ乘つて本郷まで買物に出るんだが、人に聞いて見ると、本郷の方は神樂坂に比べて、何うしても一割か二割物が高いと云ふので、此間から一二度此方の方へ出て來て見た。此前も寄る筈であつたが、つい遲くなつたので急いで歸つた。今日は其積りで早く宅を出た。が、御息み中だつたので、又通迄行つて買物を濟まして歸り掛けに寄る事にした。所が天氣模樣が惡くなつて、藁店を上がり掛けるとぽつ／＼降り出した。傘を持つて來なかつたので、濡れまいと思つて、つい急ぎ過ぎたものだから、すぐ身體に障つて、息が苦しくなつて困つた。――

「けれども、慣れつこに爲つてるんだから、驚きやしません」と云つて、代助を見て淋しい笑ひ方をした。

「心臟の方は、まだ悉皆善くないんですか」と代助は氣の毒さうな顏で尋ねた。

「悉皆善くなるなんて、生涯駄目ですわ」

意味の絶望な程、三千代の言葉は沈んでゐなかつた。繊い指を反らして穿めてゐる指環を見た。それか

ら、手帛を丸めて、又袂へ入れた。代助は眼を俯せた女の額の、髪に連なる所を眺めてゐた。

すると、三千代は急に思ひ出した樣に、此間の小切手の禮を述べ出した。其時何だか少し頰を赤くした樣に思はれた。視感の鋭敏な代助にはそれが善く分つた。彼はそれを、貸借に關した羞恥の血潮とのみ解釋した。そこで話しをすぐ他所へ外らした。

先刻三千代が提げて這入つて來た百合の花が、依然として洋卓の上に載つてゐる。甘たるい強い香が二人の間に立ちつゝあつた。代助は此重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪へなかつた。けれども無斷で、取り除ける程、三千代に對して思ひ切つた振舞が出來なかつた。

「此花は何うしたんです。買つて來たんですか」と聞いた。三千代は默つて首肯いた。さうして、

「好い香でせう」と云つて、自分の鼻を、瓣の傍迄持つて來て、ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を眞直に踏ん張つて身を後の方へ反らした。

「さう傍で嗅いぢや不可ない」

「あら何故」

「何故つて理由もない。だが、不可ない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顏をもとの位置に戻した。

「貴方、此花、御嫌ひなの？」

代助は椅子の足を斜に立てて、身體を後へ伸ばした儘、答へをせずに、微笑して見せた。

「ぢや、買つて來なくつても好かつたのに。詰らないわ、回り路をして。御負けに雨に降られ損なつて、

息を切らして」

雨は本當に降つて來た。雨滴が樋に集まつて、流れる音がざあと聞こえた。代助は椅子から立ち上がつた。眼の前にある百合の束を取り上げて、根元を括つた濡藁を挘り切つた。

「僕に呉れたのか。そんなら早く活けよう」と云ひながら、すぐ先刻の大鉢の中に投げ込んだ。莖が長すぎるので、根が水を跳ねて、飛び出しさうになる。代助は滴る莖を又鉢から拔いた。さうして洋卓の引出しから西洋鋏を出して、ぷつり〳〵と半分程の長さに剪り詰めた。さうして、大きな花を、鈴蘭の簇がる上に浮かした。

「さあ是で好い」と代助は鋏を洋卓の上に置いた。三千代は此不思議に無作法に活けられた百合を、しばらく見てゐたが、突然、

「あなた、何時から此花が御嫌ひになつたの」と妙な質問をかけた。

昔三千代の兄がまだ生きてゐた時分、ある日何かのはずみに、長い百合を買つて、代助が谷中の家を訪ねた事があつた。其時彼は三千代に危しげな花瓶の掃除をさして、自分で、大事さうに買つて來た花を活けて、三千代にも、三千代の兄にも、床へ向き直つて眺めさした事があつた。三千代はそれを覺えてゐたのである。

「貴方だつて、鼻を着けて嗅いで入らしつたぢやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた樣にも思つて、仕方なしに苦笑した。

そのうち雨は益深くなつた。家を包んで遠い音が聽こえた。門野が出て來て、少し寒い樣ですな、硝

子戸を閉めませうかと聞いた。硝子戸を引く間、二人は顏を揃へて庭の方を見てゐた。青い木の葉が悉く濡れて、靜かな濕り氣が、硝子越しに代助の頭に吹き込んで來た。世の中の浮いてゐるものは殘らず大地の上に落ち附いた樣に見えた。代助は久し振で吾に返つた心持がした。

「好い雨ですね」と云つた。

「些とも好かないわ、私、草履を穿いて來たんですもの」

三千代は寧ろ恨めしさうに樋から洩る雨點を眺めた。

「歸りには車を云ひ附けて上げるから可いでせう。緩りなさい」

三千代はあまり緩り出來さうな樣子も見えなかつた。まともに、代助の方を見て、

「貴方も相變らず呑氣な事を仰しやるのね」と窘めた。けれども其眼元には笑の影が泛かんでゐた。

今迄三千代の陰に隱れてぼんやりしてゐた平岡の顏が、此時明らかに代助の心の瞳に映つた。代助は急に薄暗がりから物に襲はれた樣な氣がした。三千代は矢張り、離れ難い黑い影を引き摺つて歩いてゐる女であつた。

「平岡君は何うしました」とわざと何氣なく聞いた。すると三千代の口元が心持ち締まつて見えた。

「相變らずですわ」

「まだ何も見附からないんですか」

「その方はまあ安心なの。來月から新聞の方が大抵出來るらしいんです」

「そりや好かつた。些とも知らなかつた。そんなら當分夫で好いぢやありませんか」

「えゝ、まあ難有いわ」と三千代は低い聲で眞面目に云つた。代助は、其時三千代を大變可愛く感じた。引續いて、

「彼方の方は差當り責められる樣な事もないんですか」と聞いた。

「彼方の方つて――」と少し逡巡つてゐた三千代は、急に顏を赧らめた。

「私、實は今日夫で御詫びに上がつたのよ」と云ひながら、一度俯向いた顏を又上げた。

代助は少しでも氣不味い樣子を見せて、此上にも、女の優しい血潮を動かすに堪へなかつた。同時に、わざと向うの意を迎へる樣な言葉を掛けて、相手を殊更に氣の毒がらせる結果を避けた。それで靜かに三千代の云ふ所を聽いた。

先達ての貳百圓は、代助から受取るとすぐ借錢の方へ回す筈であつたが、新しく家を持つた爲め色々入費が掛かつたので、つい其方の用を、あのうちで幾分か辨じたのが始りであつた。あとはと思つてゐると、今度は毎日の活計に追はれ出した。自分ながら好い心持はしなかつたけれども、仕方なしに困るとは使ひ、困るとは使ひして、とう／＼荒増し亡くして仕舞つた。尤もさうでもしなければ、夫婦は今日迄斯うして暮らしては行けなかつたのである。今から考へて見ると、一層の事無ければ無いなりに、何うか斯うか工面も附いたかも知れないが、なまじひ、手元に有つたものだから、苦し紛れに、急場の間に合はして仕舞つたので、肝心の證書を入れた借錢の方は、いまだに其儘にしてある。是は寧ろ平岡の惡いのではない。全く自分の過ちである。

「私、本當に濟まない事をしたと思つて、後悔してゐるのよ。けれども拜借するときは、決して貴方を

瞞して嘘を吐く積りぢやなかつたんだから、堪忍して頂戴」と三千代は甚だ苦しさうに言譯をした。
「何うせ貴方に上げたんだから、何う使つたつて、誰も何とも云ふ譯はないでせう。役にさへ立てば夫で好いぢやありませんか」と代助は慰めた。さうして貴方といふ字をことさらに重く且緩く響かせた。三千代はたゞ、
「私、夫で漸く安心したわ」と云つた丈であつた。
雨が頻りなので、歸るときには約束通り車を雇つた。寒いので、セルの上へ男の羽織を着せようとしたら、三千代は笑つて着なかつた。

十一

何時の間にか、人が絽の羽織を着て歩く樣になつた。二三日、宅で調べ物をして庭先より外に眺めなかつた代助は、冬帽を被つて表へ出て見て、急に暑さを感じた。自分もセルを脱がなければならないと思つて、五六町歩くうちに、袷を着た人に二人出逢つた。左樣かと思ふと新しい氷屋で書生が洋盃を手にして、冷たさうなものを飲んで居た。代助は其時誠太郎を思ひ出した。
近頃代助は前よりも誠太郎が好きになつた。外の人間と話してゐると、人間の皮と話す樣で歯痒くつてならなかつた。けれども、顧て自分を見ると、自分は人間中で、尤も相手を歯痒がらせる樣に拵へられてゐた。是も長年生存競爭の因果に曝された罰かと思ふと、餘り難有い心持はしなかつた。
此頃誠太郎はしきりに玉乘りの稽古をしたがつてゐるが、それは、全く此間淺草の奥山へ一所に連れて

行つた結果である。あの一圖な所はよく、嫂の氣性を受け續いでゐる。然し兄の子丈あつて、一圖なうちに、何處か逼らない鷹揚な氣性がある。誠太郎の相手をしてゐると、向うの魂が遠慮なく此方へ流れ込んで來るから愉快である。實際代助は、晝夜の區別なく、武裝を解いた事のない精神に、包圍されるのが苦痛であつた。

誠太郎は此春から中學校へ行き出した。すると急に脊丈が延びて來る樣に思はれた。もう一二年すると聲が變る。それから先何んな徑路を取つて、生長するか分らないが、到底人間として、生存する爲には、人間から嫌はれると云ふ運命に到着するに違ひない。其時、彼は穩やかに人の目に着かない服裝をして、乞食の如く、何物をか求めつゝ、人の市をうろついて歩くだらう。

代助は堀端へ出た。此間迄向うの土手にむら躑躅が、團々と紅白の模樣を青い中に印してゐたのが、丸で跡形もなくなつて、のべつに草が生ひ茂つてゐる高い傾斜の上に、大きな松が何十本となく並んで、何處迄も續いてゐる。空は綺麗に晴れた。代助は電車に乘つて、宅へ行つて、嫂に調戯つて、誠太郎と遊ばうと思つたが、急に厭になつて、此松を見ながら、草臥れる所迄堀端を傳つて行く氣になつた。

新見附へ來ると、向うから來たり、此方から行つたりする電車が苦になり出したので、堀を橫切つて、招魂社の橫から番町へ出た。そこをぐる／＼回つて歩いてゐるうちに、かく目的なしに歩いてゐる事が、不意に馬鹿らしく思はれた。目的があつて歩くものは賤民だと、彼は平生から信じてゐたのであるけれども、此場合に限つて、其賤民の方が偉い樣な氣がした。全く、又アンニュイに襲はれたと悟つて、歸りだした。神樂坂へかゝると、ある商店で大きな蓄音器を吹かしてゐた。其音が甚しく金屬性の刺激を帶びて

ゐて、大いに代助の頭に應へた。
家の門を這入ると、今度は門野が、主人の留守を幸ひと、大きな聲で琵琶歌をうたつてゐた。夫でも代助の足音を聞いて、ぴたりと已めた。
「いや、御早うがしたな」と云つて玄關へ出て來た。代助は何も答へずに、帽子を其所へ掛けた儘、縁側から書齋へ這入つた。さうして、わざ〳〵障子を締め切つた。つゞいて湯呑に茶を注いで持つて來た門野が、
「締めときますか。暑かありませんか」と聞いた。代助は袂から手帛を出して額を拭いてゐたが、矢つ張り、
「締めて置いてくれ」と命令した。門野は妙な顏をして障子を締めて出て行つた。代助は暗くした室のなかに、十分許りぼかんとしてゐた。
彼は人の羨む程光澤の好い皮膚と、勞働者に見出しがたい樣に柔らかな筋肉を有つた男であつた。彼は生れて以來、まだ大病と名のつくものを經驗しなかつた位、健康に於て幸福を享けてゐた。彼はこれでこそ、生き甲斐があると信じてゐたのだから、彼の健康は、彼に取つて、他人の倍以上に價値を有つてゐた。彼の頭は、彼の肉體と同じく確かであつた。たゞ始終論理に苦しめられてゐたのは事實である。それから時々頭の中心が、大弓の的の樣に、二重もしくは三重にかさなる樣に感ずる事があつた。ことに、今日は朝から左樣な心持がした。
代助が默然として、自己は何の爲に此世の中に生れて來たかを考へるのは斯う云ふ時であつた。彼は今

[illegible]此大問題を捕へて、彼の眼前に据ゑ附けて見た。其動機は、單に哲學上の好奇心から來た事もあるし、又世間の現象が、餘りに複雜な色彩を以て、彼の頭を染め附けようと焦るから來る事もあるし、又最後には今日の如くアンニュイの結果として來る事もあるが、其都度彼は同じ結論に到着した。然し其結論は、此問題の解決ではなくつて、寧ろ其否定と異ならなかつた。彼の考へによると、人間はある目的を以て、生れたものではなかつた。之と反對に、生れた人間に、始めてある目的が出來て來るのであつた。最初から客觀的にある目的を拵へて、それを人間に附着するのは、其人間の自由な活動を、既に生れる時に奪つたと同じ事になる。だから人間の目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならない。けれども、如何な本人でも、之を隨意に作る事は出來ない。自己存在の目的は、自己存在の經過が、既にこれを天下に向つて發表したと同樣だからである。

此根本義から出立した代助は、自己本來の活動を、自己本來の目的としてゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立てて、活動するのは活動の墮落になる。從つて自己全體の活動を擧げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壞したも同然である。

だから、代助は今日迄、自分の腦裏に願望、嗜欲が起るたび毎に、是等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在してゐた。二個の相容れざる願望嗜欲が胸に戰ふ場合も同じ事であつた。たゞ矛盾から出る一目的の消耗と解釋してゐた。これを煎じ詰めると、彼は普通に所謂無目的な行爲を目的として活動

してゐたのである。さうして、他を偽らざる點に於てそれを尤も道德的なものと心得てゐた。此主義を出來る丈遂行する彼は、其遂行の途中で、われ知らず、自分のとうに棄却した問題に襲はれて、自分は今何の爲に、こんな事をしてゐるかと考へ出す事がある。彼が番町を散歩しながら、何故散歩しつつあるかと疑つたのは正に是である。

其時彼は自分ながら、自分の活力に充實してゐない事に氣がつく。餓ゑたる行動は、一氣に遂行する勇氣と、興味に乏しいから、自ら其行動の意義を中途で疑ふ樣になる。彼はこれをアンニユイと名づけてゐた。アンニユイに罹ると、彼は論理の迷亂を引き起すものと信じてゐた。彼の行爲の中途に於て、何の爲と云ふ、冠履顚倒の疑ひを起させるのは、アンニユイに外ならなかつたからである。

彼は立て切つた室の中で、一二度頭を抑へて振り動かして見た。彼は昔から今日迄の思索家の、屢繰り返した無意義な疑義を、又腦裏に拈定するに堪へなかつた。その姿のちらりと眼前に起つた時、またかと云ふ具合に、すぐ切り棄てて仕舞つた。同時に彼は自己の生活力の不足を劇しく感じた。從つて行爲其物を目的として、圓滿に遂行する興味も有たなかつた。彼はたゞ一人荒野の中に立つた。茫然としてゐた。

彼は高尙な生活欲の滿足を冀ふ男であつた。又ある意味に於て道義欲の滿足を買はうとする男であつた。さうして、ある點へ來ると、此二つのものが火花を散らして切り結ぶ關門があると豫想してゐた。それで生活欲を低い程度に留めて我慢してゐた。彼の室は普通の日本間であつた。是と云ふ程の大した裝飾もなかつた。彼に云はせると、額さへ氣の利いたものは掛けてなかつた。色彩として眼を惹く程に美しいのは、本棚に竝べてある洋書に集められたと云ふ位であつた。彼は今此書物の中に、茫然として坐つた。良あつ

て、これほど寐入つた自分の意識を强烈にするには、もう少し周圍の物を何うかしなければならぬと、思ひながら、室の中をぐる〳〵見廻した。それから、又ぽかんとして壁を眺めた。が、最後に、自分を此薄弱な生活から救ひ後る方法は、たゞ一つあると考へた。さうして口の内で云つた。

「矢つ張り、三千代さんに逢はなくちや不可ん」

彼は足の進まない方角へ散歩に出たのを悔いた。もう一遍出直して、平岡の許迄行かうかと思つてゐる所へ、牛込の方から寺尾が來た。新しい麥藁帽を被つて、閑靜な薄い羽織を着て、暑い暑いと云つて赤い顏を拭いた。

「何だつて、今時分來たんだ」と代助は愛想もなく云ひ放つた。彼と寺尾とは平生でも、この位な言葉で交際してゐたのである。

「今時分が丁度訪問に好い刻限だらう。君、又晝寐をしたな。どうも職業のない人間に、惰弱で不可ん。君は一體何の爲に生れて來たのだつたかね」と云つて、寺尾は麥藁帽で、しきりに胸のあたりへ風を送つた。時候はまだ夫程暑くないのだから、此所作は頗る愛嬌を添へた。

「何の爲に生れて來ようと、餘計な御世話だ。夫より君こそ何しに來たんだ。又『此所十日許りの間』ぢやないか、金の相談ならもう御免だよ」と代助は遠慮なく先へ斷つた。

「君も隨分禮義を知らない男だね」と寺尾は已むを得ず答へた。けれども別段感情を害した樣子も見えなかつた。實を云ふと、此位な言葉は寺尾に取つて、少しも無禮とは思へなかつたのである。代助は默つて、寺尾の顏を見てゐた。それは、空しい壁を見てゐるより以上の何等の感動をも、代助に與へなかつた。

寺尾は懐から汚い假綴の書物を出した。
「是を譯さなけりやならないんだ」と云つた。代助は依然として默つてゐた。
「食ふに困らないと思つて、さう無精な顔をしなくつても好からう。もう少し判然として呉れ。此方は生死の戰ひだ」と云つて、寺尾は小形の本を、とん／＼と椅子の角で二返敲いた。
「何時迄に」
寺尾は、書物の頁をさら／＼と繰つて見せたが、斷然たる調子で、
「二週間」と答へた後で、「何うでも斯うでも、夫迄に片附けなけりや、食へないんだから仕方がない」と說明した。
「偉い勢ひだね」と代助は冷やかした。
「だから、本郷からわざ／＼遣つて來たんだ。なに、金は借りなくても好い。――貸せば猶好いが――夫より少し分らない所があるから、相談しようと思つて」
「面倒だな。僕は今日は頭が惡くつて、そんな事は遣つてゐられないよ。好い加減に譯して置けば構はないぢやないか。どうせ原稿料は頁で呉れるんだらう」
「なんぼ、僕だつて、さう無責任な飜譯は出來ないだらうぢやないか。誤譯でも指摘されると後から面倒だあね」
「仕樣がないな」と云つて、代助は矢張り横着な態度を維持してゐた。すると、寺尾は、
「おい」と云つた。「冗談ぢやない、君の樣に、のらくら遊んでる人は、たまには其位な事でも、しな

くつちや退屈で仕方がないだらう。なに、僕だつて、本の善く讀める人の所へ行く氣なら、わざ／＼君の所迄來やしない。けれども、左んな人は君と違つて、みんな忙しいんだからな」と少しも辟易した樣子を見せなかつた。代助は喧嘩をするか、相談に應ずるか何方かだと覺悟を極めた。彼の性質として、斯う云ふ相手を輕蔑する事は出來るが、怒り附ける氣は出せなかつた。

「ぢや成るべく少しにしようぢやないか」と斷つて置いて、符號の附けてある所丈を見た。代助は其書物の梗概さへ聞く勇氣がなかつた。相談を受けた部分にも曖昧な所は澤山あつた。寺尾は、やがて、

「やあ、難有う」と云つて本を伏せた。

「分らない所は何うする」と代助が聞いた。

「なに何うかする。――誰に聞いたつて、さう善く分りやしまい。第一時間がないから已むを得ない」と、寺尾は、誤譯よりも生活費の方が大事件である如くに天から極めてゐた。

相談が濟むと、寺尾は例によつて、文學談を持ち出した。不思議な事に、さうなると、自己の翻譯とは違つて、いつもの通り非常に熱心になつた。代助は現今の文學者の公にする創作のうちにも、寺尾の翻譯と同じ意味のものが澤山あるだらうと考へて、寺尾の矛盾を可笑しく思つた。けれども面倒だから、口へは出さなかつた。

寺尾の御蔭で代助は其日とう／＼平岡へ行きはぐれて仕舞つた。

晩食の時、丸善から小包が屆いた。箸を措いて開けて見ると、餘程前に外國へ注文した二三の新刊書であつた。代助はそれを腋の下に抱へ込んで、書齋へ歸つた。一册づゝ順々に取り上げて、暗いながら二三

頁、捲ぐる様に眼を通したが何處も彼の注意を惹く様な所はなかつた。最後の一冊に至つては、其名前さへ既に忘れてゐた。何れ其中讀む事にしようと云ふ考へで、一所に纒めた儘、立つて、本棚の上に重ねて置いた。緣側から外を窺ふと、綺麗な空が、高い色を失ひかけて、隣の梧桐の一際濃く見える上に、薄い月が出てゐた。

そこへ門野が大きな洋燈を持つて這入つて來た。それには縮緬の樣に、竪に溝の入つた青い笠が掛けてあつた。門野はそれを洋卓の上に置いて、又緣側へ出たが、出掛けに、

「もう、そろ〳〵螢が出る時分ですな」と云つた。代助は可笑しな顏をして、

「まだ出やしまい」と答へた。すると門野は例の如く、

「左樣でせうか」と云ふ返事をしたが、すぐ眞面目な調子で、「螢てえものは、昔は大分流行つたもんだが、近來は餘り文士方が騷がない樣になりましたな。何う云ふもんでせう。螢だの烏だのつて、此頃ぢやつひぞ見た事がない位なもんだ」と云つた。

「左樣さ。何う云ふ譯だらう」と代助も空つとぼけて、眞面目な挨拶をした。すると門野は、

「矢つ張り、電氣燈に壓倒されて、段々退却するんでせう」と云ひ終つて、自ら、えへゝゝと、洒落の結末をつけて、書生部屋へ歸つて行つた。代助もつゞいて玄關迄出た。門野は振り返つた。

「また御出掛けですか。よござんす。洋燈は私が氣を附けますから。――小母さんが先刻から腹が痛いつて寐たんですが、何大した事はないでせう。御緩り」

代助は門を出た。江戶川迄來ると、河の水がもう暗くなつてゐた。彼は固より平岡を訪ねる氣であつた。

から何時もの樣に川邊を傳はないで、すぐ橋を渡つて、金剛寺坂を上がつた。

實を云ふと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢つてゐた。一遍は平岡から比較的長い手紙を受取つた時であつた。それには、第一に着京以來御世話になつて難有いと云ふ禮が述べてあつた。夫から、——其後色々朋友や先輩の盡力を辱うしたが、近頃ある知人の周旋で、某新聞の經濟部の主任記者にならぬかと云ふ勸誘を受けた。自分も遣つて見たい樣な氣がする。然し着京の當時君に御依頼をした事もあるから、無斷では宜しくあるまいと思つて、一應御相談をすると云ふ意味が後に書いてあつた。代助は、其當時平岡から、兄の會社に周旋してくれと依頼されたのを、其儘にして、斷りもせず今日迄放つて置いたので、其返事を促されたのだと受取つた。一通の手紙で謝絶するのも、あまり冷淡過ぎると云ふ考へもあつたので、翌日出向いて行つて、色々兄の方の事情を話して當分、此方は斷念して呉れる樣に頼んだ。平岡は其時、僕も大方左樣だらうと思つてゐたと云つて、妙な眼をして三千代の方を見た。

もう一遍は、愈新聞の方が極まつたから、一晩緩り君と飲みたい。何日に來て呉れと云ふ平岡の端書が着いた時、折惡しく差支へが出來たからと云つて散歩の序に斷りに寄つたのである。其時平岡は座敷の眞中に引繰り返つて寐てゐた。昨夕どこかの會へ出て、飲み過ごした結果だと云つて、赤い眼をしきりに擦つた。代助を見て、突然、人間は何うしても君の樣に獨身でなけりや仕事は出來ない。僕も一人なら滿洲へでも亞米利加へでも行くんだがと大いに妻帶の不便を鳴らした。三千代は次の間で、こつそり仕事をしてゐた。

三遍目には、平岡の社へ出た留守を訪ねた。其時は用事も何もなかつた。約三十分許り縁へ腰を掛けて

話した。

夫から以後は可成小石川の方面へ立ち回らない事にして今夜に至つたのである。代助は竹早町へ上がつて、それを向うへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云ふ軒燈のすぐ前へ來た。格子の外から聲を掛けると、洋燈を持つて下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。代助は出先も尋ねずに、すぐ引き返して、電車へ乘つて、本郷迄來て、本郷から又神田へ乘り換へて、そこで降りて、あるビヤー・ホールへ這入つて、麥酒をぐい〳〵飲んだ。

翌日眼が覺めると、依然として腦の中心から、半徑の違つた圓が、頭を二重に仕切つてゐる樣な心持がした。斯う云ふ時に代助は、頭の内側と外側が、質の異なつた切り組み細工で出來上がつてゐるとしか感じ得られない癖になつてゐた。夫で能く自分で自分の頭を振つてみて、二つのものを混ぜようと力めたものである。彼は今枕の上へ髮を着けたなり、右の手を固めて、耳の上を二三度敲いた。

代助は斯かる腦髓の異狀を以て、かつて酒の咎に歸した事はなかつた。彼は子供の時から酒に量を得た男であつた。いくら飲んでも、左程平常を離れなかつた。のみならず、一度熟睡さへすれば、あとは身體に何の故障も認める事が出來なかつた。嘗て何かのはずみに、兄と競り飲みをやつて、三合入の德利を十三本倒した事がある。其翌日代助は平氣な顏をして學校へ出た。兄は二日も頭が痛いと云つて苦り切つてゐた。さうして、これを年齡の違ひだと云つた。

昨夕飲んだ麥酒は是に比べると愚なものだと、代助は頭を敲きながら考へた。幸ひに、代助はいくら頭が二重になつても、腦の活動に狂ひを受けた事がなかつた。時としては、たゞ頭を使ふのが億劫になつた。

けれども努力さへすれば、充分複雜な仕事に堪へるといふ自信があつた。だから、斯んな異狀を感じても、腦の組織の變化から、精神に惡い影響を與へるものとしては、悲觀する餘地がなかつた。始めて、こんな感覺があつた時は驚いた。二遍目は寧ろ新奇な經驗として喜んだ。この頃は、此經驗が、多くの場合に、精神氣力の低落に伴なふ樣になつた。内容の充實しない行爲を敢てして、生活する時の徵候になつた。代助にはそこが不愉快だつた。

床の上に起き上がつて、彼は又頭を振つた。朝食の時、門野は今朝の新聞に出てゐた蛇と鷲の戰ひの事を話し掛けたが、代助は應じなかつた。門野は又始まつたなと思つて、茶の間を出た。勝手の方で、

「小母さん、さう働いちや惡いだらう。先生の膳は僕が洗つて置くから、彼方へ行つて休んで御出で」

と婆さんを勞つてゐた。代助は始めて婆さんの病氣の事を思ひ出した。何か優しい言葉でも掛ける所であつたが、面倒だと思つて已めにした。

食刀を置くや否や、代助はすぐ紅茶茶碗を持つて書齋へ這入つた。時計を見るともう九時過ぎであつた。しばらく、庭を眺めながら、茶を啜り延ばしてゐると、門野が來て、

「御宅から御迎ひが參りました」と云つた。代助は宅から迎ひを受ける覺えがなかつた。聞き返して見ても、門野は車夫がとか何とか要領を得ない事を云ふので、代助は頭を振り／＼玄關へ出て見た。すると、そこに兄の車を引く勝と云ふのがゐた。ちやんと、護謨輪の車を玄關へ横附けにして丁寧に御辭儀をした。

「勝、御迎へつて何だい」と聞くと、勝は恐縮の態度で、

「奥樣が車を持つて、迎ひに行つて來いつて、仰しやいました」

「何か急用でも出來たのかい」
勝は固より何事も知らなかつた。
「御出でになれば分るからつて――」と簡潔に答へて、言葉の尻を結ばなかつた。
代助は奧へ這入つた。婆さんを呼んで着物を出させようと思つたが、腹の痛むものを使ふのが厭なので、自分で簞笥の抽出を掻き回して、急いで身支度をして、勝の車に乘つて出た。
其日は風が強く吹いた。勝は苦しさうに、前の方に曲んで馳けた。乘つてゐた代助は、二重の頭がぐる〱回轉する程、風に吹かれた。けれども、音も響もない車輪が美しく動いて、意識に乏しい自分を、半睡の狀態で宙に運んで行く有樣が愉快であつた。青山の家へ着く時分には、起きた頃とは違つて、氣色が餘程晴々して來た。
何か事が起つたのかと思つて、上がり掛けに、書生部屋を覗いて見たら、直木と誠太郎がたつた二人で、白砂糖を振り掛けた苺を食つてゐた。
「やあ、御馳走だな」と云ふと、直木は、すぐ居ずまひを直して、挨拶をした。誠太郎は唇の緣を濡らした儘、突然、
「叔父さん、奧さんは何時貰ふんですか」と聞いた。直木はにや〱してゐる。代助は一寸返答に窮した。已むを得ず、
「今日は何故學校へ行かないんだ。さうして朝つ腹から苺なんぞを食つて」と調戲ふ樣に、叱る樣に云つた。

「だつて今日は日曜ぢやありませんか」と誠太郎は眞面目になつた。

「おや、日曜か」と代助は驚いた。

誠太郎は代助の顏を見てとう／＼笑ひ出した。代助も笑つて、座敷へ來た。そこには誰も居なかつた。替へ立ての疊の上に、丸い紫檀の刳拔盆が一つ出てゐて、中に置いた湯呑には、京都の淺井黙語の模樣畫が染め附けてあつた。からんとした廣い座敷へ朝の緑が庭から射し込んで、凡てが靜かに見えた。戸外の風は急に落ちた樣に思はれた。

座敷を通り拔けて、兄の部屋の方へ來たら、人の影がした。

「あら、だつて、夫ぢや餘りだわ」と云ふ嫂の聲が聞こえた。代助は中へ這入つた。中には兄と嫂と縫子がゐた。兄は角帶に金鎖を卷き附けて、近頃流行る妙な絽の羽織を着て、此方を向いて立つてゐた。代助の姿を見て、

「そら來た。ね。だから一所に連れて行つて御貰ひよ」と梅子に話しかけた。代助には何の意味だか固より分らなかつた。すると、梅子が代助の方に向き直つた。

「代さん、今日貴方、無論暇でせう」と云つた。

「えゝ、まあ暇です」と代助は答へた。

「おや、一所に歌舞伎座へ行つて頂戴」

代助は嫂の此言葉を聞いて、頭の中に、忽ち一種の滑稽を感じた。けれども今日は平常の樣に、嫂に調戯ふ勇氣がなかつた。面倒だから、平氣な顏をして、

「えゝ宜しい、行きませう」と機嫌よく答へた。すると梅子は、
「だつて、貴方は、最早、一遍觀たつて云ふんぢやありませんか」と聞き返した。
「一遍だらうが、二遍だらうが、些とも構はない。行きませう」と代助は梅子を見て微笑した。
「貴方も餘つ程道樂ものね」と梅子が評した。代助は益滑稽を感じた。
兄は用があると云つて、すぐ出て行つた。四時頃用が濟んだら芝居の方へ回る約束なんださうである。それ迄自分と縫子丈で見てゐたら好ささうなものだが、梅子は夫が厭だと云つた。そんなら直木を連れて行けと兄から注意された時、直木は紺絣を着て、袴を穿いて、六づかしく坐つてゐて不可ないと答へた。夫で仕方がないから代助を迎ひに遣つたのだ、と、是は兄が出掛けの說明であつた。代助は少々理窟に合はないと思つたが、たゞ、左樣ですかと答へた。さうして、嫂は幕の合間に話し相手が欲しいのと、夫からいざと云ふ時に、色々用を云ひ附けたいものだから、わざ／＼自分を呼び寄せたに違ひないと解釋した。梅子と縫子は長い時間を御化粧に費やした。代助は根よく御化粧の監督者になつて、兩人の傍に附いてゐた。さうして時々は、面白半分の冷やかしも云つた。縫子からは叔父さん隨分だわを二三度繰り返された。

　父は今朝早くから出て、家にゐなかつた。何處へ行つたのだか、嫂は知らないと云つた。代助は別に知りたい氣もなかつた。たゞ父のゐないのが難有かつた。此間の會見以後、代助は父とはたつた二度程しか顏を合はせなかつた。それも、ほんの十分か十五分に過ぎなかつた。話しが込み入りさうになると、急に丁寧な御辭儀をして立つのを例にしてゐた。父は座敷の方へ出て來て、どうも代助は近頃少しも尻が落ち

附かなくなつた。おれの顔さへ見れば逃げ仕度をすると云つて怒つた。と嫂は鏡の前で夏帶の尻を撫でながら代助に話した。

「ひどく、信用を落としたもんだな」

代助は斯う云つて、嫂と縫子の蝙蝠傘を提げて一足先へ玄關へ出た。車はそこに三挺並んでゐた。代助は風を恐れて鳥打帽を被つて居た。風は漸く歇んで、強い日が雲の隙間から頭の上を照らした。先へ行く梅子と縫子は傘を廣げた。代助は時々手の甲を額の前に翳した。

芝居の中では、嫂も縫子も非常に熱心な觀客であつた。代助は二返目の所爲といひ、此三四日來の腦の狀態からと云ひ、左樣一圖に舞臺ばかりに氣を取られてゐる譯にも行かなかつた。絶えず精神に重苦しい、暑さを感ずるので、屢團扇を手にして、風を襟から頭へ送つてゐた。

幕の合間に縫子が代助の方を向いて時々妙な事を聞いた。何故あの人は盥で酒を飲むんだとか、何故坊さんが急に大將になれるんだとか、大抵說明の出來ない質問のみであつた。梅子はそれを聞くたんびに笑つてゐた。代助は不圖二三日前新聞で見た、ある文學者の劇評を思ひ出した。それには、日本の脚本が、あまりに突飛な筋に富んでゐるので、樂に見物が出來ないと書いてあつた。代助は其時、役者の立場から考へて、何もそんな人に見て貰ふ必要はあるまいと思つた。作者に云ふべき小言を、役者の方へ持つてくるのは、近松の作を知るために、越路の淨瑠璃が聽きたいと云ふ愚物と同じ事だと云つて門野に話した。門野は依然として、左樣なもんでせうかなと云つてゐた。

子供のうちから日本在來の芝居を見慣れた代助は、無論梅子と同じ樣に、單純なる藝術の鑑賞家であつ

た。さうして舞臺に於ける藝術の意味を、役者の手腕に就いてのみ用ひべきものと狹義に解釋してゐた。だから梅子とは大いに話しが合つた。時々顔を見合はして、黑人の樣な批評を加へて、互に感心してゐた。けれども、大體に於て、舞臺にはもう厭きが來てゐた。幕の途中でも、雙眼鏡で、彼方を見たり、此方を見たりしてゐた。雙眼鏡の向ふ所には藝者が澤山ゐた。そのあるものは、先方でも眼鏡の先を此方へ向けてゐた。

代助の右隣には自分と同年配の男が丸髷に結つた美しい細君を連れて來てゐた。代助は其細君の横顔を見て、自分の近附きのある藝者によく似てゐると思つた。左隣には男連が四人許りゐた。さうして、それが、悉く博士であつた。代助は其顔を一々覺えてゐた。其又隣に、廣い所をたつた二人で專領してゐるものがあつた。その一人は、兄と同じ位な年恰好で、正しい洋服を着てゐた。さうして金縁の眼鏡を掛けて、物を見るときには、顎を前へ出して、心持ち仰向く癖があつた。代助は此男を見たとき、何所か見覺えのある樣な氣がした。が、つひに思ひ出さうと力めても見なかつた。其伴侶は若い女であつた。代助はまだ二十になるまいと判定した。羽織を着ないで、普通よりは大きく髷を出して、多くは顎を襟元へぴたりと着けて坐つてゐた。

代助は苦しいので、何遍も席を立つて、後の廊下へ出て、狹い空を仰いだ。兄が來たら、嫂と縫子を引き渡して早く歸りたい位に思つた。一遍は縫子を連れて、其所等をぐる／＼運動して歩いた。仕舞には些と酒でも取り寄せて飲まうかと思つた。

兄は日暮とすれ／＼に來た。大變遲かつたぢやありませんかと云つた時、帶の間から、金時計を出して

見せた。實際六時少し回つた計りであつた。兄は例の如く、平氣な顔をして、方々見回してゐた。が、飯を食ふ時、立つて廊下へ出たぎり、中々歸つて來なかつた。しばらくして、代助が不圖振り返つたら、一軒置いて隣の金縁の眼鏡を掛けた男の所へ這入つて、話しをしてゐた。若い女にも時々話しかける樣であつた。然し女の方では笑ひ顔を一寸見せる丈で、すぐ舞臺の方へ眞面目に向き直つた。代助は嫂に其人の名を聞かうと思つたが、兄は人の集まる所へさへ出れば、何所へでも斯の如く平氣に這入り込む程、世間の廣い、又世間を自分の家の樣に心得てゐる男であるから、氣にも掛けずに默つてゐた。

すると幕の切れ目に、兄が入口迄歸つて來て、代助一寸來いと云ひながら、代助を其金縁の男の席へ連れて行つて、愚弟だと紹介した。それから代助には、是が神戸の高木さんだと云つて引合はした。金縁の紳士は、若い女を顧みて、私の姪ですと云つた。女はしとやかに御辭儀をした。其時兄が、佐川の令孃だと口を添へた。代助は女の名を聞いたとき、旨く掛けられたと腹の中で思つた。が何事も知らぬものの如く裝つて、好い加減に話してゐた。すると嫂が一寸自分の方を振り向いた。

五六分して、代助は兄と共に自分の席に返つた。佐川の娘を紹介される迄は、兄の見え次第逃げる氣であつたが、今では左樣行かなくなつた。餘り現金に見えては、却て好くない結果を引き起しさうな氣がしたので、苦しいのを我慢して坐つてゐた。兄も芝居に就いては全く興味がなささうだつたけれども、例の如く鷹揚に構へて、黑い頭を燻す樣に、葉卷をくゆらした。時々評をすると、縫子あの幕は綺麗だらう位の所であつた。梅子は平生の好奇心にも似ず、高木に就いても、佐川の娘に就いても、何等の質問を掛けず、一言の批評も加へなかつた。代助には其澄ました樣子が却て滑稽に思はれた。彼は今日迄嫂の策略にか

かつた事が時々あつた。けれども、只の一返も腹を立てた事はなかつた。今度の狂言も、平生ならば、退屈紛らしの遊戯程度に解釋して、笑つて仕舞つたかも知れない。夫許りではない。もし自分が結婚する氣なら、却て、此狂言を利用して、自ら人工的に、御目出度い喜劇を作り上げて、生涯自分を嘲つて滿足する事も出來た。然し此姉迄が、今の自分を、父や兄と共謀して、漸々窮地に誘つて行くかと思ふと、流石に此所作をたゞの滑稽として、觀察する譯には行かなかつた。代助は此先、嫂が此事件を何う發展させる氣だらうと考へて、少々弱つた。家のものの中で、嫂が一番斯んな計畫に興味をもつてゐたからである。もし嫂が此方面に向つて代助に肉薄すればする程、代助は漸々家族のものと疎遠にならなければならぬと云ふ恐れが、代助の頭の何處かに潛んでゐた。

芝居の仕舞ひになつたのは十一時近くであつた。外へ出て見ると、風は全く歇んだが、月も星も見えない靜かな晩を、電燈が少し許り照らしてゐた。時間が遲いので茶屋では話しをする暇もなかつた。三人の迎ひは來てゐたが、代助はつひ車を誂へて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸めを斥けて、茶屋の前から電車に乘つた。數寄屋橋で乘り易へようと思つて、黑い路の中に、待ち合はしてゐると、子供を負ぶつた神さんが、退儀さうに向うから近寄つて來た。電車は向う側を二三度通つた。代助と軌道の間には、土か石の積んだものが、高い土手の樣に挾まつてゐた。代助は始めて間違つた所に立つてゐる事を悟つた。

「御神さん、電車へ乘るなら、此所ぢや不可ない。向う側だ」と敎へながら歩き出した。神さんは禮を云つて跟いて來た。代助は手探りでもする樣に暗い所を好い加減に歩いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見附かつた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乘つた。代助はたつた一

入反對の赤坂行へ這入つた。

車の中では、眠くて寐られない樣な氣がした。搖られながらも今夜の睡眠が苦になつた。彼は大いに疲勞して、白晝の凡てに、惰氣を催すにも拘らず、知られざる何物かの興奮の爲に、靜かな夜を恣にする事が出來ない事がよくあつた。彼の腦裏には、今日の日中に、交る〲痕を殘した色彩が、時の前後と形の差別を忘れて、一度に散らついてゐた。さうして、それが何の色彩であるか、何の運動であるか慥かに解らなかつた。彼は眼を眠つて、家へ歸つたら、又ヰスキーの力を借りようと覺悟した。

彼は此取り留めのない花やかな色調の反照として、三千代の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地を見出だした樣な氣がした。けれども其安住の地は、明らかには、彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全體で、それを認めた丈であつた。從つて彼は三千代の顏や、容子や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏めにしたものを、わが情調にしつくり合ふ對象として、發見したに過ぎなかつた。

翌日代助は但馬にゐる友人から長い手紙を受取つた。此友人は學校を卒業すると、すぐ國へ歸つたぎり、今日迄つひぞ東京へ出た事のない男であつた。當人は無論山の中で暮らす氣はなかつたんだが、親の命令で已むを得ず、故鄕に封じ込められて仕舞つたのである。夫でも一年許りの間は、もう一返親父を說き附けて、東京へ出る出ると云つて、うるさい程手紙を寄こしたが、此頃は漸く斷念したと見えて、大した不平がましい訴へもしない樣になつた。家は所の舊家で、先祖から持ち傳へた山林を年々伐り出すのが、重な用事になつてゐるよしであつた。今度の手紙には、彼の日常生活の模樣が委しく書いてあつた。それか

ら一ヶ月前町長に擧げられて、年俸を三百圓頂戴する身分になつた事を、面白半分、殊更に眞面目な句調で吹聽して來た。卒業してすぐ中學の教師になつても、此三倍は貰へると、自分と他の友人との比較がしてあつた。

此友人は國へ歸つてから、約一年許りして、京都在のある財産家から嫁を貰つた。それは無論親の云ひ附けであつた。すると、少時して、直ぐ子供が生れた。女房の事は貰つた時より外に何も云つて來ないが、子供の生長には興味があると見えて、時々代助が可笑しくなる樣な報知をした。代助はそれを讀むたびに、此子供に對して、滿足しつゝある友人の生活を想像した。さうして、此子供の爲に、彼の細君に對する感想が、貰つた當時に比べて、どの位變化したかを疑つた。

友人は時々鮎の乾したのや、柹の乾したのを送つてくれた。代助は其返禮に大概は新しい西洋の文學書を遣つた。すると其返事には、それを面白く讀んだ證據になる樣な批評が屹度あつた。けれども、それが長くは續かなかつた。仕舞には受取つたと云ふ禮狀さへ寄こさなかつた。此方からわざ〳〵問ひ合はせると、書物は難有く頂戴した。讀んでから禮を云はうと思つて、つい遲くなつた。實はまだ讀まない。白狀すると、讀む閑がないと云ふより、讀む氣がしないのである。もう一層露骨に云へば、讀んでも解らなくなつたのである。といふ返事が來た。代助は夫から書物を廢めて、其代りに新しい玩具を買つて送る事にした。

代助は友人の手紙を封筒に入れて、自分と同じ傾向を有つてゐた此舊友が、當時とは丸で反對の思想と行動とに支配されて、生活の音色を出してゐると云ふ事實を、切に感じた。さうして、命の絃の震動から

出る二人の運命を明らかに比較した。

彼は理論家として、友人の結婚を肯つた。山の中に住んで、樹や谷を相手にしてゐるものは、親の取り極めた通りの妻を迎へて、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都會人士には、不幸を持ち來すものと斷定した。其原因を云へば、都會は人間の展覽會に過ぎないからであつた。彼は此前提から此結論に達する爲に斯う云ふ徑路を辿つた。

彼は肉體と精神に於て美の類別を認める男であつた。さうして、あらゆる美の種類に接觸する機會を得るのが、都會人士の權能であると考へた。あらゆる美の種類に接觸して、其たび每に、甲から乙に氣を移し、乙から丙に心を動かさぬものは、感受性に乏しい無鑑賞家であると斷定した。彼は是を自家の經驗に徵して爭ふべからざる眞理と信じた。その眞理から出立して、都會的生活を送る凡ての男女は、兩性間の引力に於て、悉く隨緣臨機に、測りがたき變化を受けつゝあるとの結論に到着した。それを引き延ばすと、既婚の一對は、雙方ともに、流俗に所謂不義の念に冒されて、過去から生じた不幸を、始終嘗めなければならない事になつた。代助は、感受性の尤も發達した、又接觸點の尤も自由な、都會人士の代表者として、藝妓を選んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替へるか分らないではないか。普通の都會人は、より少なき程度に於て、みんな藝妓ではないか。代助は渝らざる愛を、今の世に口にするものを僞善家の第一位に置いた。

此所迄考へた時、代助の頭の中に、突然三千代の姿が浮かんだ。其時代助はこの論理中に、或因數は數へ込むのを忘れたのではなからうかと疑つた。けれども、其因數は何うしても發見する事が出來なかつ

た。すると、自分が三千代に對する情合も、此論理によつて、たゞ現在的のものに過ぎなくなつた。彼の頭は正にこれを承認した。然し彼の心は、慥かに左樣だと感ずる勇氣がなかつた。

十二

代助は嫂の肉薄を恐れた。又三千代の引力を恐れた。避暑にはまだ間があつた。凡ての娯樂には興味を失つた。讀書をしても、自己の影を黒い文字の上に認める事が出來なくなつた。落ち附いて考へれば、考へは蓮の絲を引く如くに出るが、出たものを纏めて見ると、人の恐ろしがるもの計りであつた。仕舞には、斯樣に考へなければならない自分が怖くなつた。代助は蒼白く見える自分の腦髓を、ミルクセークの如く廻轉させる爲に、しばらく旅行しようと決心した。始めは父の別莊に行く積りであつた。然し、是は東京から襲はれる點に於て、牛込に居ると大した變りはないと思つた。代助は旅行案内を買つて來て、自分の行くべき先を調べて見た。が、自分の行くべき先は天下中何處にも無い樣な氣がした。しかし、無理にも何處かへ行かうとした。それには、支度を調へるに若くはないと極めた。代助は電車に乘つて、銀座迄來た。朗らかに風の往來を渡る午後であつた。新橋の勸工場を一回りして、廣い通をぶら〳〵と京橋の方へ下つた。其時代助の眼には、向う側の家が、芝居の書割の樣に平たく見えた。靑い空は、屋根の上にすぐ塗り附けられてゐた。

代助は二三の唐物屋を冷やかして、入用の品を調へた。其中に、比較的高い香水があつた。資生堂で練齒磨を買はうとしたら、若いものが、欲しくないと云ふのに自製のものを出して、頻りに勸めた。代助は

顏をしかめて店を出た。紙包みを腋の下に抱へた儘、銀座の外れ迄遣つて來て、其處から大根河岸を囘つて、鍛冶橋を丸の内へ志した。當てもなく西の方へ歩きながら、是も簡便な旅行と云へるかも知れないと考へた揚句、草臥れて車をと思つたが、何處にも見當らなかつたので又電車へ乘つて歸つた。

家の門を這入ると、玄關に誠太郎のらしい履が丁寧に並べてあつた。門野に聞いたら、へえ左樣です、先刻から待つて御出でですといふ答であつた。代助はすぐ書齋へ來て見た。誠太郎は、代助の坐る大きな椅子に腰を掛けて、洋卓の前で、アラスカ探險記を讀んでゐた。洋卓の上には、蕎麥饅頭と茶盆が一所に乘つてゐた。

「誠太郎、何だい、人のゐない留守に來て、御馳走だね」と云ふと、誠太郎は、笑ひながら、先づアラスカ探險記をポツケツトへ押し込んで、席を立つた。

「其所に居るなら、ゐても構はないよ」と云つても、聞かなかつた。

代助は誠太郎を捕まへて、例の樣に調戲ひ出した。誠太郎は此間代助が歌舞伎座でした欠伸の數を知つてゐた。さうして、

「叔父さんは何時奧さんを貰ふの」と、又先達てと同じ樣な質問を掛けた。

此日誠太郎は、父の使に來たのであつた。其口上は、明日の十一時迄に一寸來て呉れと云ふのであつた。代助はさう〳〵父や兄に呼び附けられるのが面倒であつた。誠太郎に向つて、半分怒つた樣に、

「何だい、苛いぢやないか。用も云はないで、無暗に人を呼びつけるなんて」と云つた。誠太郎は矢つ張りにや〳〵してゐた。代助はそれぎり話しを外へそらして仕舞つた。新聞に出てゐる相撲の勝負が、二

人の題目の重なるものであつた。

晩食を食つて行けと云ふのを學校の下調があると云つて辭退して誠太郎は歸つた。歸る前に、

「それぢや、叔父さん、明日は來ないんですか」と聞いた。代助は已むを得ず、

「うむ。何うだか分らない。叔父さんは旅行するかも知れないからつて、歸つてさう云つて呉れ」と云つた。

「何時」と誠太郎が聞き返したとき、代助は、今日明日のうちと答へた。誠太郎はそれで納得して、玄關迄出て行つたが、沓脱へ下りながら振り返つて、突然

「何處へ入らつしやるの」と代助を見上げた。代助は、

「何處つて、まだ分るもんか。ぐる／＼回るんだ」と云つたので、誠太郎は又にや／＼しながら、格子を出た。

代助は其夜すぐ立たうと思つて、グラツドストーンの中を門野に掃除さして、携帶品を少し詰め込んだ。門野は少なからざる好奇心を以て、代助の革鞄を眺めてゐたが、

「少し手傳ひませうか」と突つ立つたまゝ聞いた。代助は、

「なに、譯はない」と斷りながら、一旦詰め込んだ香水の壜を取り出して、封被を剝いで、栓を拔いて、鼻に當てて嗅いで見た。門野は少し愛想を盡かした樣な具合で、自分の部屋へ引取つた。二三分すると又出て來て、

「先生、車を左樣云つときますかな」と注意した。代助はグラツドストーンを前へ置いて、顏を上げた。

「左樣、少し待つて呉れ給へ」

庭を見ると、生垣の要目の頂に、まだ薄明るい日足がうろついてゐた。代助は外を覗きながら、是から三十分のうちに行く先を極めようと考へた。何でも都合のよささうな時間に出る汽車に乘つて、其汽車の持つて行く所へ降りて、其所で明日迄暮らして、暮らしてるうちに、又新しい運命が、自分を攫ひに來るのを待つ積りであつた。旅費は無論十分でなかつた。代助の旅裝に適した程の宿泊を續けるとすれば、一週間も保たない位であつた。けれども、さう云ふ點になると、代助は無頓着であつた。愈となれば、家から金を取り寄せる氣でゐた。それから、本來が四邊の風氣を換へるのを目的とする移動だから、贅澤の方面へは重きを置かない決心であつた。興に乘れば、荷持を雇つて、一日歩いても可いと覺悟した。

彼は又旅行案内を開いて、細かい數字を丹念に調べ出したが、少しも決定の運びに近寄らないうちに、又三千代の方に頭が滑つて行つた。立つ前にもう一遍樣子を見て、夫から東京を出ようと云ふ氣が起つた。グラッドストーンは今夜中に始末を附けて、明日の朝早く提げて行かれる樣にして置けば構はない事になつた。代助は急ぎ足で玄關迄出た。其音を聞き附けて、門野も飛び出した。代助は不斷着の儘、掛釘から帽子を取つてゐた。

「又御出掛けですか。何か御買物がありませんか。私で可ければ買つて來ませう」と門野が驚いた樣に云つた。

「今夜は已めだ」と云ひ放した儘、代助は外へ出た。外はもう暗かつた。美しい空に星がぽつ／＼影を増して行く樣に見えた。心持の好い風が袂を吹いた。けれども長い足を大きく動かした代助は、二三町も

歩かないうちに額際に汗を覺えた。彼は頭から鳥打を脱つた。黒い髪を夜露に打たして、時々帽子をわざと振つて歩いた。
平岡の家の近所へ來ると、暗い人影が蝙蝠の如く靜かに其所、此所に動いた。粗末な板塀の隙間から、洋燈の灯が往來へ映つた。三千代は其光の下で新聞を讀んでゐた。今頃新聞を讀むのかと聞いたら、二返目だと答へた。
「そんなに閑なんですか」と代助は座蒲團を敷居の上に移して、縁側へ半分身體を出しながら、障子へ倚りかゝつた。
平岡は居なかつた。三千代は今湯から歸つた所だと云つて、團扇さへ膝の傍に置いてゐた。平生の頰に、心持ち暖かい色を出して、もう歸るでせうから緩りしていらつしやいと、茶の間へ茶を入れに立つた。髪は西洋風に結つてゐた。
平岡は三千代の云つた通りには中々歸らなかつた。何時でも斯んなに遲いのかと尋ねたら、笑ひながら、まあ左んな所でせうと答へた。代助は其笑ひの中に一種の淋しさを認めて、眼を正して、三千代の顏を凝と見た。三千代は急に團扇を取つて袖の下を煽いだ。
代助は平岡の經濟の事が氣に掛かつた。正面から、此頃は生活費には不自由はあるまいと尋ねて見た。三千代は左樣ですねと云つて、又前の樣な笑ひ方をした。代助がすぐ返事をしなかつたものだから、
「貴方には、左樣見えて」と今度は向うから聞き直した。さうして、手に持つた團扇を放り出して、湯から出たての綺麗な纖い指を、代助の前に廣げて見せた。其指には代助の贈つた指環も、他の指環も穿め

てゐなかつた。自分の記念を何時でも胸に描いてゐた代助には、三千代の意味がよく分つた。三千代は手を引き込めると同時に、ぽつと赤い顔をした。

「仕方がないんだから、堪忍して頂戴」と云つた。代助は憐れな心持がした。

代助は其夜九時頃平岡の家を辭した。辭する前、自分の紙入の中に有るものを出して、三千代に渡した。其時は、腹の中で多少の工夫を費やした。彼は先づ何氣なく懷中物を胸の所で開けて、中にある紙幣を、勘定もせずに摑んで、之を上げるから御使ひなさいと無雜作に三千代の前へ出した。三千代は、下女を憚る樣な低い聲で、

「そんな事を」と、却て兩手をぴたりと身體へ附けて仕舞つた。代助は然し自分の手を引き込めなかつた。

「指環を受取るなら、これを受取つても、同じ事でせう。紙の指環だと思つて御貰ひなさい」

代助は笑ひながら、斯う云つた。三千代はでも、餘りだからとまだ躊躇した。代助は、平岡に知れると叱られるのかと聞いた。三千代は叱られるか、賞められるか、明らかに分らなかつたので、矢張り愚圖愚圖してゐた。代助は、叱られるなら、平岡に默つてゐたら可からうと注意した。三千代はまだ手を出さなかつた。代助は無論出したものを引き込める譯に行かなかつた。已を得ず、少し及び腰になつて、掌を三千代の胸の側迄持つて行つた。同時に自分の顏も一尺許りの距離に近寄せて、

「大丈夫だから、御取んなさい」と確りした低い調子で云つた。三千代は顎を襟の中へ埋める樣に後へ引いて、無言の儘右の手を前へ出した。紙幣は其上に落ちた。其時三千代は長い睫毛を二三度打ち合はし

たゞさうして、掌に落ちたものを帶の間に挾んだ。

「又來る。平岡君によろしく」と云つて、代助は表へ出た。町を橫斷して小路へ下ると、あたりは暗くなつた。代助は美しい夢を見た樣に、暗い夜を切つて步いた。彼は三十分と立たないうちに、吾家の門前に來た。けれども門を潛る氣がしなかつた。彼は高い星を戴いて、靜かな屋敷町をぐる〳〵徘徊した。自分では、夜半迄步きつゞけても疲れる事はなからうと思つた。兎角するうち、又自分の家の前へ出た。中は靜かであつた。門野と婆さんは茶の間で世間話をしてゐたらしい。

「大變遲うがしたな。明日は何時の汽車で御立ちですか」と玄關へ上がるや否や問を掛けた。代助は、微笑しながら、

「明日も御已めだ」と答へて、自分の室へ這入つた。そこには床がもう敷いてあつた。代助は先刻栓を拔いた香水を取つて、括り枕の上に一滴垂らした。夫では何だか物足りなかつた。壜を持つた儘、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴づゝ振りかけた。斯樣に打ち興じた後、白地の浴衣に着換へて、新しい小搔卷の下に安らかな手足を橫たへた。さうして、薔薇の香のする眠りに就いた。

眼が覺めた時は、高い日が緣に黃金色の震動を射込んでゐた。枕元には新聞が二枚揃へてあつた。代助は、門野が何時、雨戶を引いて、何時新聞を持つて來たか、丸で知らなかつた。代助は長い伸びを一つして起き上がつた。風呂場で身體を拭いてゐると、門野が少し狼狽へた容子で遣つて來て、

「靑山から御兄さんが御見えになりました」と云つた。代助は今直ぐ行く旨を答へて、綺麗に身體を拭き取つた。座敷はまだ掃除が出來てゐるか、ゐないかであつたが、自分で飛び出す必要もないと思つたか

ら、急ぎもせずに、いつもの通り、髪を分けて剃を中てゝ、悠々と茶の間へ歸つた。そこでは流石にゆつくりと膳につく氣も出なかつた。立ちながら紅茶を一杯啜つて、タヱルで一寸口髭を摩つて、それを、其所へ放り出すと、すぐ客間へ出て、

「やあ兄さん」と挨拶をした。兄は例の如く、色の濃い葉卷の、火の消えたのを、指の股に挾んで、平然として代助の新聞を讀んでゐた。代助の顔を見るや否や、

「此室は大變好い香がする樣だが、御前の頭かい」と聞いた。

「僕の頭の見える前からでせう」と答へて、昨夜の香水の事を話した。兄は、落ち附いて、

「はゝあ、大分洒落た事をやるな」と云つた。

兄は滅多に代助の所へ來た事のない男であつた。たまに來れば必ず來なくつてならない用事を持つてゐた。さうして、用を濟ますとさつさと歸つて行つた。今日も何事か起つたに違ひないと代助は考へた。さうして、それは昨日誠太郎を好い加減に胡魔化して返した反響だらうと想像した。五六分雜談をしてゐるうちに、兄はとう／＼斯う云ひ出した。

「昨夕誠太郎が歸つて來て、叔父さんは明日から旅行するつて云ふ話しだから、出て來た」

「えゝ、實は今朝六時頃から出ようと思つてね」と代助は嘘の樣な事を、至極冷靜に答へた。兄も眞面目な顔をして、

「六時に立てる位な早起きの男なら、今時分わざ／＼青山から遣つて來やしない」と云つた。改めて用事を聞いて見ると、矢張り豫想の通り肉薄の遂行に過ぎなかつた。即ち今日高木と佐川の娘を呼んで午餐

を振舞ふ筈だから、代助にも列席しろと云ふ父の命令であつた。兄の語る所によると、昨夕誠太郎の返事を聞いて、父は大いに機嫌を惡くした。梅子は氣を揉んで、代助の立たない前に逢つて、旅行を延ばさせると云ひ出した。兄はそれを留めたさうである。

「なに彼奴が今夜中に立つものか、今頃は革鞄の前へ坐つて考へ込んでゐる位のものだ。明日になつて見ろ、放つて置いても遣つて來るからつて、己が姉さんを安心させたのだよ」と誠吾は落ち附き拂つてゐた。代助は少し忌々しくなつたので、

「ぢや、放つて置いて御覽なされば好いのに」と云つた。

「所が女と云ふものは、氣の短かいもので、御父さんに惡いからつて、今朝起きるや否や、己をせびるんだからね」と誠吾は可笑しい樣な顏もしなかつた。寧ろ迷惑さうに代助を眺めてゐた。代助は行くとも、行かないとも決答を與へなかつた。けれども兄に對しては、誠太郎同樣に、要領を握らせないで返して仕舞ふ勇氣も出なかつた。其上午餐を斷つて、旅行するにしても、もう自分の懷中を當てにする譯には行かなかつた。矢張り、兄とか嫂とか、もしくは父とか、いづれ反對派の誰かを痛めなければ、身動きが取れない位地にゐた。そこで、卽かず離れずに、高木と佐川の娘の評判をした。高木には十年程前に一遍逢つた限りであつたが、妙なもので、何處かに見覺えがあつて、此間歌舞伎座で眼に着いた時は、はてなと思つた。これに反して、佐川の娘の方は、つい先達て、寫眞を手にした許りであるのに、實物に接しても、丸で聯想が浮かばなかつた。寫眞は奇體なもので、先づ人間を知つてゐて、その方から、寫眞の誰彼を極めるのは容易であるが、その逆の、寫眞から人間を定める方は中々六づかしい。是を哲學にすると、死か

ら生を出すのは不可能だが、生から死に移るのは自然の順序であると云ふ眞理に歸着する。

「私は左樣考へた」と代助が云つた。兄は成程と答へたが別段感心した樣子もなかつた。葉卷の短かくなつて、口髭に火が附きさうなのを無暗に啣へ易へて、

「それで、必ずしも今日旅行する必要もないんだらう」と聞いた。

代助はないと答へざるを得なかつた。

「ぢや、今日飯を食ひに來ても好いんだらう」

代助は又好いと答へない譯に行かなかつた。

「ぢや、己はこれから、一寸他所へ廻るから、間違ひのない樣に來てくれ」と相變らず多忙に見えた。

代助はもう度胸を据ゑたから、何うでも構はないといふ氣で、先方に都合の好い返事を與へた。すると兄が突然、

「一體何うなんだ。あの女を貰ふ氣はないのか。好いぢやないか貰つたつて。さう選り好みをする程女房に重きを置くと、何だか元祿時代の色男の樣で可笑しいな。凡てあの時代の人間は男女に限らず非常に窮屈な戀をした樣だが、左樣でもなかつたのかい。――まあ、どうでも好いから、成る可く年寄を怒らせない樣に遣つてくれ」と云つて歸つた。

代助は座敷へ戻つて、しばらく、兄の警句を咀嚼してゐた。自分も結婚に對しては、實際兄と同意見であるとしか考へられない。だから、結婚を勸める方でも、怒らないで放つて置くべきものだと、兄とは反對に、自分に都合の好い結論を得た。

兄の云ふ所によると、佐川の娘は、今度久し振に叔父に連れられて、見物旁上京したので、叔父の商用が濟み次第又連れられて國へ歸るのださうである。父が其機會を利用して、相互の關係に、永遠の利害を結び附けようと企てたのか、又は先達ての旅行先で、此機會をも自發的に拵へて歸つて來たのか、どつちにしても代助は餘り研究の餘地を認めなかつた。自分はたゞ是等の人と同じ食卓で、旨さうに午餐を味はつて見せれば、社交上の義務は其所に終るものと考へた。もしそれより以上に、何等かの發展が必要になつた場合には、其時に至つて、始めて處置を附けるより外に道はないと思案した。

代助は婆さんを呼んで着物を出さした。面倒だと思つたが、敬意を表するために、紋附の夏羽織を着た。袴は一重のがなかつたから、家に行つて、父か兄かのを穿く事に極めた。代助は神經質な割に、子供の時からの習慣で、人中へ出るのを餘り苦にしなかつた。宴會とか、招待とか、送別とかいふ機會があると、大抵は都合して出席した。だから、ある方面に知名な人の顏は大分覺えてゐた。其中には伯爵とか子爵とかいふ貴公子も交つてゐた。彼は斯んな人の仲間入りをして、其仲間なりの交際に、損も得も感じなかつた。言語動作は何處へ出ても同じであつた。外部から見ると、其所が大變能く兄の誠吾に似てゐた。だから、よく知らない人は、此兄弟の性質を、全く同一型に屬するものと信じてゐた。

代助が青山に着いた時は、十一時五分前であつたが、御客はまだ來てゐなかつた。兄もまだ歸らなかつた。嫂丈がちやんと支度をして、座敷に坐つてゐた。代助の顏を見て、

「あなたも、隨分亂暴ね。人を出し拔いて旅行するなんて」と、いきなり遣り込めた。梅子は場合によると、決して論理を有ち得ない女であつた。此場合にも、自分が代助を出し拔いた事には丸で氣が附いて

ゐない挨拶の仕方であつた。それが代助には愛嬌に見えた。で、直ぐそこへ坐り込んで梅子の服裝の品評を始めた。父は奧にゐると聞いたが、わざと行かなかつた。強ひられたとき、

「今に御客さんが來たら、僕が奧へ知らせに行く。其時挨拶をすれば好からう」と云つて、矢つ張り平常の樣な無駄口を叩いてゐた。けれども佐川の娘に關しては、一言も口を切らなかつた。梅子は何とかして、話しを其所へ持つて行かうとした。代助には、それが明らかに見えた。だから、猶空とぼけて讎を取つた。

其うち待ち設けた御客が來たので、代助は約束通りすぐ父の所へ知らせに行つた。父は、案のぢやう、「左樣か」とすぐ立ち上がつた丈であつた。代助に小言を云ふ暇も何も無かつた。代助は座敷へ引き返して來て、袴を穿いて、それから應接間へ出た。客と主人とはそこで悉く顏を合はせた。父と高木とが第一に話しを始めた。梅子は重に佐川の令孃の相手になつた。そこへ兄が今朝の通りの服裝で、のつそりと這入つて來た。

「いや、何うも遲くなりまして」と客の方に挨拶をしたが、席に就いたとき、代助を振り返つて、

「大分早かつたね」と小さな聲を掛けた。

食堂には應接室の次の間を使つた。代助は戸の開いた間から、白い卓布の角の際立つた色を認めて、午餐は洋食だと心づいた。梅子は一寸席を立つて、次の入口を覗きに行つた。それは父に、食卓の準備が出來上つた旨を知らせる爲であつた。

「では何うぞ」と父は立ち上がつた。高木も會釋して立ち上がつた。佐川の令孃も叔父に繼いで立ち上

がつた。代助は其時、女の腰から下の、比較的に細く長い事を發見した。食卓では、父と高木が、眞中に向き合つた。高木の右に梅子が坐つて、父の左に令孃が席を占めた。女同志が向き合つた如く、誠吾と代助も向き合つた。代助は五味臺を中に、少し斜に反れた位地から令孃の顏を眺める事になつた。代助は其顏の肉と色が、著しく後の窓から射す光線の影響を受けて鼻の境に暗過ぎる影を作つた樣に思つた。其代り耳に接した方は、明らかに薄紅であつた。殊に小さい耳が、日の光を透してゐるかの如くデリケートに見えた。皮膚とは反對に、令孃は黑い鳶色の大きな眼を有してゐた。此二つの對照から華やかな特長を生ずる令孃の顏の形は、寧ろ丸い方であつた。

　食卓は、人數が人數だけに、左程大きくはなかつた。部屋の廣さに比例して、寧ろ小さ過ぎる位であつたが、純白な卓布を、取り集めた花で綴つて、其中に肉刀と肉匙の色が冴えて輝いた。

　卓上の談話は重に平凡な世間話であつた。始めのうちは、それさへ餘り興味が乘らない樣に見えた。父は斯う云ふ場合には、よく自分の好きな書畫骨董の話を持ち出すのを常としてゐた。さうして氣が向けばいくらでも、藏から出して來て、客の前に陳べたものである。父の御蔭で、代助は多少斯道に好惡を有てる樣になつてゐた。兄も同樣の原因から、畫家の名前位は心得てゐた。たゞし、此方は掛物の前に立つて、はあ仇英だね、はあ應擧だねと云ふ丈であつた。面白い顏もしないから、面白い樣にも見えなかつた。それから眞僞の鑑定の爲に、蟲眼鏡などを振り舞はさない所は、誠吾も代助も同じ事であつた。父の樣に、こんな波は昔の人は描かないものだから、法にかなつてゐない抔といふ批評は、雙方共に、未だ嘗て如何なる畫に對しても加へた事はなかつた。

父は乾いた會話に色彩を添へるため、やがて好きな方面の問題に觸れて見た。所が一二言で、高木はさう云ふ事に丸で無頓着な男であるといふ事が分つた。父は老功の人だから、すぐ退却した。けれども雙方に安全な領分に歸ると、雙方共に談話の意味を感じなかつた。父は已むを得ず、高木に何んな嗜好があるかを確めた。高木は特別に嗜好を持たない由を答へた。父は萬事休すといふ體裁で、高木を誠吾と代助に託して、しばらく談話の圏外に出た。誠吾は、何の苦もなく、神戸の宿屋やら、楠公神社やら、手當り次第に話題を開拓して行つた。さうして、其中に自然令孃の演ずべき役割を拵へた。令孃はたゞ簡單に、必要な言葉丈を點じては逃げた。代助と高木とは、始め同志社を問題にした。それから亞米利加の大學の狀況に移つた。最後にエマーソンやホーソーンの名が出た。代助は、高木に斯う云ふ種類の知識があるといふ事を確めたけれども、たゞ確めた丈で、それより以上に深入りもしなかつた。從つて文學談は單に二三の人名と書名に終つて、少しも發展しなかつた。

梅子は固より初手から斷えず口を動かしてゐた。其努力の重なるものは、無論自分の前にゐる令孃の遠慮と沈默を打ち崩すにあつた。令孃は禮儀上から云つても、梅子の間斷なき質問に應じない譯に行かなかつた。けれども積極的に自分から梅子の心を動かさうと力めた形迹は殆どなかつた。たゞ物を云ふときに、少し首を横に曲げる癖があつた。それすら代助には媚を賣るとは解釋出來なかつた。

令孃は京都で教育を受けた。音樂は、始めには琴を習つたが、後にはピヤノに易へた。ヴイオリンも少し稽古したが、此方は手の使ひ方が六づかしいので、まあ遣らないと同じである。芝居は滅多に行つた事がなかつた。

「先達ての歌舞伎座は如何でした」と梅子が聞いた時、令孃は何とも答へなかつた。代助には夫が劇を解しないと云ふより、劇を輕蔑してゐる樣に取れた。それだのに、梅子はつゞけて、同じ問題に就いて、甲の役者は何うだの、乙の役者は何だのと評し出した。代助は又嫂が論理を踏み外したと思つた。仕方がないから、横合から、
「芝居は御嫌ひでも、小說は御讀みになるでせう」と聞いて芝居の話しを已めさした。令孃は其時始めて、一寸代助の方を見た。けれども答は案外に判然してゐた。
「いえ小說も」
令孃の答を待ち受けてゐた、主客はみんな聲を出して笑つた。高木は令孃の爲に說明の勞を取つた。その云ふ所によると、令孃の教育を受けたミス何とか云ふ婦人の影響で、令孃はある點では殆ど淸教徒の樣に仕込まれてゐるのださうであつた。だから餘程時代後れだと、高木は說明のあとから批評さへ附け加へた。其時は無論誰も笑はなかつた。耶蘇教に對して、あまり好意を有つてゐない父は、
「それは結構だ」と賞めた。梅子はさう云ふ教育の價値を全く解する事が出來なかつた。にも拘らず、「本當にね」と趣味に適はない不得要領の言葉を使つた。誠吾は梅子の言葉が、あまり重い印象を先方に與へない樣に、すぐ問題を易へた。
「ぢや英語は御上手でせう」
令孃はいゝえと云つて、心持ち顏を赤くした。
食事が濟んでから、主客は又應接間に戻つて、話しを始めたが、蠟燭を繼ぎ足した樣に、新しい方へは

急に火が移りさうにも見えなかつた。梅子は立つて、ピヤノの蓋を開けて、

「何か一つ如何ですか」と云ひながら令嬢を顧た。令嬢は固より席を動かなかつた。

「ぢや、代さん、皮切りに何か御遣り」と今度は代助に云つた。代助は人に聞かせる程の上手でないのを自覺してゐた。けれども、そんな辯解をすると、問答が理窟臭く、しつこくなる許りだから、

「まあ、蓋を開けて御置きなさい。今に遣るから」と答へたなり、何かなしに、無關係の事を話しつゞけてゐた。

一時間程して客は歸つた。四人は肩を揃へて玄關迄出た。奥へ這入る時、

「代助はまだ歸るんぢやなからうな」と父が云つた。代助はみんなから一足後れて、鴨居の上に兩手が屆く樣な伸びを一つした。それから、人のゐない應接間と食堂を少しうろ〳〵して座敷へ來て見ると、兄と嫂が向き合つて何か話しをしてゐた。

「おい、すぐ歸つちや不可ない。御父さんが何か用があるさうだ。奥へ御出で」と兄はわざとらしい眞面目な調子で云つた。梅子は薄笑ひをしてゐる。代助は默つて頭を搔いた。

代助は一人で父の室へ行く勇氣がなかつた。何とか蚊とか云つて、兄夫婦を引つ張つて行かうとした。それが旨く成功しないので、とう〳〵其所へ坐り込んで仕舞つた。所へ小間使が來て、

「あの、若旦那樣に一寸、奥迄入らつしやる樣に」と催促した。

「うん、今行く」と返事をして、それから、兄夫婦に斯ういふ理窟を述べた。――自分一人で父に逢ふと、父があゝ云ふ氣性の所へ持つて來て、自分がこんな圖法螺だから、事によると大いに老人を怒らして

仕舞ふかも知れない。さうすると、兄夫婦だつて、後から面倒くさい調停をしたり何かしなければならない。其方が却て迷惑になる譯だから、骨惜しみをせずに今一寸一所に行つて呉れたら宜からう。

兄は議論が嫌ひな男なので、何だ下らないと云はぬ許りの顔をしたが、

「ぢや、さあ行かう」と立ち上がつた。梅子も笑ひながらすぐに立つた。三人して廊下を渡つて、父の室に行つて、何事も起らなかつたかの如く着座した。

そこでは、梅子が如才なく、代助の過去に父の小言が飛ばない樣な手加減をした。さうして談話の潮流を、成るべく今歸つた來客の品評の方へ持つて行つた。梅子は佐川の令孃を大變大人しさうな可い子だと賞めた。是には父も兄も代助も同意を表した。けれども、兄は、もし亞米利加のミスの教育を受けたといふのが本當なら、もう少しは西洋流にはき〳〵しさうなものだと云ふ疑ひを立てた。代助は其疑ひにも贊成した。父と嫂は默つてゐた。そこで代助は、あの大人しさは、羞恥む性質の大人しさだから、ミスの教育とは獨立に、日本の男女の社交的關係から來たものだらうと說明した。父はそれも左うだと云つた。梅子は令孃の教育地が京都だから、あゝなんぢやないかと推察した。兄は東京だつて、御前見た樣なのは許りはゐないと云つた。此時父は嚴正な顏をして灰吹を叩いた。次に、容色だつて十人並より可いぢやありませんかと梅子が云つた。是には父も兄も異議はなかつた。代助も贊成の旨を告白した。四人は夫から高木の品評に移つた。溫健の好人物と云ふ事で、其方はすぐ方附いて仕舞つた。不幸にして誰も令孃の父母を知らなかつた。けれども、物堅い地味な人だと云ふ丈は、父が三人の前で保證した。父はそれを同縣下の多額納稅議員の某から確めたのださうである。最後に、佐川家の財產に就いても話しが出た。其時父は、

あゝ云ふのは、普通の實業家より基礎が確りしてゐて安全だと云つた。

令孃の資格が略定まつた時、父は代助に向つて、

「大した異存もないだらう」と尋ねた。其口調と云ひ、意味と云ひ、何うするかね位の程度ではなかつた。代助は、

「左樣ですな」と矢つ張り煮え切らない答をした。父はぢつと代助を見てゐたが、段々皺の多い額を曇らした。兄は仕方なしに、

「まあ、もう少し善く考へて見るが可い」と云つて、代助の爲に餘裕を附けて呉れた。

十三

四日程してから、代助は又父の命令で、高木の出立を新橋迄見送つた。其日は眠い所を無理に早く起されて、寐足らない頭を風に吹かした所爲か、停車場に着く頃、髮の毛の中に風邪を引いた樣な氣がした。待合所に這入るや否や、梅子から顏色が可くないと云ふ注意を受けた。代助は何も答へずに、帽子を脱いで、時々濡れた頭を抑へた。仕舞には朝綺麗に分けた髮がもぢや〳〵になつた。

プラットフォームで高木は突然代助に向つて、

「何うです此汽車で、神戸迄遊びに行きませんか」と勸めた。代助はたゞ難有うと答へた丈であつた。愈汽車の出る間際に、梅子はわざと、窓際に近寄つて、とくに令孃の名を呼んで、

「近い内に又是非入らつしやい」と云つた。令孃は窓のなかで、丁寧に會釋したが、窓の外へは別段の

言葉も聞こえなかつた。汽車を見送つて、又改札場を出た四人は、それぎり離れ〴〵になつた。梅子は代助を誘つて青山へ連れて行かうとしたが、代助は頭を抑へて應じなかつた。

車に乘つてすぐ牛込へ歸つて、それなり書齋へ這入つて、仰向けに倒れた。門野は一寸其樣子を覗きに來たが、代助の平生を知つてゐるので、言葉も掛けず、椅子に引つ掛けてある羽織丈を抱へて出て行つた。

代助は寐ながら、自分の近き未來を何うなるものだらうと考へた。斯うして打遣つて置けば、是非共嫁を貰はなければならなくなる。嫁はもう今迄に大分斷つてゐる。此上斷れば、愛想を盡かされるか、本當に怒り出されるか、何方かになるらしい。もし愛想を盡かされて、結婚勸誘をこれ限り斷念して貰へれば、それに越した事はないが、怒られるのは甚だ迷惑である。と云つて、進まぬものを貰ひませうと云ふのは今代人として馬鹿氣てゐる。代助は此ヂレンマの間に低徊した。

彼は父と違つて、當初からある計畫を拵へて、自然を其計畫通りに強ひる古風な人ではなかつた。彼は自然を以て人間の拵へた凡ての計畫よりも偉大なものと信じてゐたからである。だから父が、自分の自然に逆らつて、父の計畫通りを強ひるならば、それは、去られた妻が、離縁狀を楯に夫婦の關係を證據立てようとすると一般であると考へた。けれども、そんな理窟を、父に向つて述べる氣は、丸でなかつた。父を理攻めにする事は困難中の困難であつた。其困難を冒した所で、代助に取つては何等の利益もなかつた。其結果は父の不興を招く丈で、理由を云はずに結婚を拒絶するのと選む所はなかつた。

彼は父と兄と嫂の三人の中で、父の人格に尤も疑ひを置いた。今度の結婚にしても、結婚其物が必ずしも父の唯一の目的ではあるまいと迄推察した。けれども父の本意が何處にあるかは、固より明らかに知る

機嫌を損へられてゐなかつた。彼は子として、父の心意を斟酌する事を、不德義とは考へなかつた。從つて自分の父が、多くの親子のうちで、尤も不幸なものであると云ふ樣な考へは少しも起さなかつた。ただ是がため、今日迄の程度より以上に、父と自分の間が隔たつて來さうなのを不快に感じた。彼は最後の極端として、父子絶緣の狀態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪へ得られない程度のものではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶の方が恐ろしかつた。

もし馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもう駄目であると、代助は平生から考へてゐた。向後父の怒りに觸れて、萬一金錢上の關係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に嚙り付かなければならない。さうして其償ひには自然の愛が殘る丈である。其愛の對象は他人の細君であつた。彼は寐ながら、何時迄も考へた。けれども、彼の頭は何時迄も何處へも到着する事が出來なかつた。彼は自分の壽命を極める權利を持たぬ如く、自分の未來をも極め得なかつた。同時に、自分の壽命に、大抵の見當を附け得る如く、自分の未來にも多少の影を認めた。さうして、徒らに其影を捕捉しようと企てた。其時代助の腦の活動は、夕闇を驚かす蝙蝠の樣な幻像をちらり〱と產み出すに過ぎなかつた。其羽搏きの光を追ひ掛けて寐てゐるうちに、頭が床から浮き上がつて、ふは〱する樣に思はれて來た。さうして、何時の間にか輕い眠りに陷つた。

すると突然誰か耳の傍で半鐘を打つた。代助は火事と云ふ意識さへまだ起らない先に眼を醒ました。けれども跳ね起きもせずに寐てゐた。彼の夢に斯んな音の出るのは殆ど普通であつた。ある時は夫が正氣に

返つた後迄も響いてゐた。五六日前彼は、彼の家の大いに搖れる自覺と共に眠りを破つた。其時彼は明らかに、彼の下に動く畳の様を、肩と腰と脊の一部に感じた。彼は又夢に得た心臓の鼓動を、覺めた後迄持ち傳へる事が屢あつた。そんな場合には聖徒の如く、胸に手を當てて、眼を開けた儘、ぢつと天井を見詰めてゐた。

代助は此時も半鐘の音が、じいんと耳の底で鳴り盡くして仕舞ふ迄横になつて待つてゐた。それから起きた。茶の間へ來て見ると、自分の膳の上に簀蓋が掛けて、火鉢の傍に据ゑてあつた。柱時計はもう十二時廻つてゐた。婆さんは、飯を濟ました後と見えて、下女部屋で御櫃の上に肱を突いて居眠りをしてゐた。門野は何處へ行つたか影さへ見えなかつた。

代助は風呂場へ行つて、頭を濡らしたあと、獨り茶の間の膳に就いた。そこで、淋しい食事を濟まして、再び書齋に戻つたが、久し振に今日は少し書見をしようと云ふ心組であつた。

かねて讀み掛けてある洋書を、栞の挾んである所で開けて見ると、前後の關係を丸で忘れてゐた。代助の記憶に取つて斯う云ふ現象は寧ろ珍らしかつた。彼は學校生活の時代から一種の讀書家であつた。卒業の後も、衣食の煩ひなしに、購讀の利益を適意に收め得る身分を誇りにしてゐた。一頁も眼を通さないで、日を送ることがあると、習慣上何となく荒癈の感を催した。だから大抵な事故があつても、成るべく都合して、活字に親しんだ。ある時は讀書そのものが、唯一なる自己の本領の様な氣がした。

代助は今茫然として、烟草を燻らしながら、讀み掛けた頁を二三枚あとへ繰つて見た。そこに何んな議論があつて、それが何う續くのか、頭を拵へる爲に一寸骨を折つた。其努力は艀から棧橋へ移る程樂では

なかつた。食ひ違つた断面の中に迷付いてゐるものが、急に乙に移るべく余儀なくされた様であつた。代助はそれでも辛抱して、約二時間程眼を頁の上に曝してゐた。が仕舞にとう／＼堪へ切れなくなつた。彼の読んでゐるものは、活字の集合として、ある意味を以て、彼の頭に映ずるには違ひないが、彼の肉や血に廻る気色は一向見えなかつた。彼は氷嚢を隔てて、氷に食ひ附いた時の様に物足らなく思つた。

彼は書物を伏せた。さうして、こんな時に書物を読むのは無理だと考へた。同時にもう安息する事も出来なくなつたと考へた。彼の苦痛は何時ものアンニユイではなかつた。何も為るのが懶いと云ふのとは違つて、何か為なくてはゐられない頭の状態であつた。

彼は立ち上がつて、茶の間へ来て、畳んであつた袷を又引つ掛けた。さうして玄関に脱ぎ棄てた下駄を穿いて馳け出す様に門を出た。時は四時頃であつた。神楽坂を下りて、当てもなく、眼に附いた第一の電車に乗つた。車掌に行先を問はれたとき、口から出任せの返事をした。紙入を開けたら、三千代に遣つた旅行費の余りが、三折の深底の方にまだ這入つてゐた。代助は乗車券を買つた後で、札の数を調べて見た。

彼は其晩を赤坂のある待合で暮らした。其所で面白い話を聞いた。ある若くて美しい女が、去る男と関係して、其種を宿した所が、愈子を生む段になつて、涙を零して悲しがつた。後から其訳を聞いたら、こんな年で子供を生ませられるのは情ないからだと答へた。此女は愛を専らにする時機が余り短か過ぎて、親子の関係が容赦もなく、若い頭の上を襲つて来たのに、一種の無常を感じたのであつた。それは無論堅気の女ではなかつた。代助は肉の美と、霊の愛にのみ己れを捧げて、其他を顧みぬ女の心理状態として、此話を甚だ興味あるものと思つた。

翌日になつて、代助はとう〳〵又三千代に逢ひに行つた。其時彼は腹の中で、先達て置いて來た金の事を、三千代が平岡に話したらうか、話さなかつたらうか、もし話したとすれば、何んな結果を夫婦の上に生じたらうか、それが氣掛りだからと云ふ口實を拵へた。彼は此氣掛りが、自分を驅つて、凝と落ち附かれない樣に、東西を引張り廻した揚句、遂に三千代の方に吹き附けるのだと解釋した。

代助は家を出る前に、昨夕着た肌着も單衣も悉く改めて氣を新にした。外は寒暖計の度盛の目を逐うて騰る頃であつた。歩いてゐると、濕つぽい梅雨が却て待ち遠しい程熾に日が照つた。代助は昨夕の反動で、此陽氣な空氣の中に落ちる自分の黑い影が苦になつた。廣い鍔の夏帽を被りながら、早く雨季に入れば好いと云ふ心持があつた。其雨季はもう二三日の眼前に逼つてゐた。彼の頭はそれを豫報するかの樣に、どんよりと重かつた。

平岡の家の前へ來た時は、曇つた頭を厚く掩ふ髮の根元が息切れてゐた。代助は家に入る前に先づ帽子を脫いだ。格子には締りがしてあつた。物音を目的に裏へ廻ると、三千代は下女と張り物をしてゐた。物置の横へ立て掛けた張板の中途から、細い首を前へ出して、曲みながら、苦茶々々になつたものを丹念に引き伸ばしつゝあつた手を留めて、代助を見た。一寸は何とも云はなかつた。代助も、しばらくは唯立つてゐた。漸くにして、

「又來ました」と云つた時、三千代は濡れた手を振つて、馳け込む樣に勝手から上がつた。同時に表へ回れと眼で合圖をした。三千代は自分で沓脫へ下りて、格子の締りを外しながら、

「無用心だから」と云つた。今迄日の透る澄んだ空氣の下で、手を動かしてゐた所爲で、頰の所が熱つ

て見えた。それが額際へ來て何時もの樣に蒼白く變つてゐる邊に、汗が少し煮染み出した。代助は格子の外から、三千代の極めて薄手な皮膚を眺めて、戸の開くのを靜かに待つた。三千代は、

「御待遠さま」と云つて、代助を誘ふ樣に、一足橫へ退いた。代助は三千代とすれ〳〵になつて内へ這入つた。座敷へ來て見ると、平岡の机の前に、紫の座蒲團がちやんと据ゑてあつた。代助はそれを見た時一寸厭な心持がした。土の和れない庭の色が黄色に光る所に、長い草が見苦しく生えた。

代助は又忙しい所を、邪魔に來て濟まないといふ樣な尋常な云ひ譯を述べながら、此無趣味な庭を眺めた。其時三千代をこんな家へ入れて置くのは實際氣の毒だといふ氣が起つた。三千代は水いぢりで爪先の少しふやけた手を膝の上に重ねて、あまり退屈だから張り物をしてゐた所だと云つた。三千代の退屈といふ意味は、夫が始終外へ出てゐて、單調な留守居の時間を無聊に苦しむと云ふ事であつた。代助はわざと、

「結構な身分ですね」と冷やかした。三千代は自分の荒涼な胸の中を代助に訴へる樣子もなかつた。默つて、次の間へ立つて行つた。用簞笥の環を響かして、赤い天鵞絨で張つた小さい箱を持つて出て來た。代助の前へ坐つて、それを開けた。中には昔代助の遣つた指環がちやんと這入つてゐた。三千代は、たゞ

「可いでせう、ね」と代助に謝罪する樣に云つて、すぐ又立つて次の間へ行つた。さうして、世の中を憚る樣に、記念の指環をそこ〳〵に用簞笥に仕舞つて元の座に戻つた。代助は指環に就いては何事も語らなかつた。庭の方を見て、

「そんなに閑なら、庭の草でも取つたら、何うです」と云つた。すると今度は三千代の方が默つて仕舞つた。それが、少時續いた後で代助は又改めて聞いた。

「此間の事を平岡君に話したんですか」
三千代は低い聲で、
「いゝえ」と答へた。
「ぢや、未だ知らないんですか」と聞き返した。
其時三千代の說明には、話さうと思つたけれども、此頃平岡はつひぞ落ち附いて宅にゐた事がないので、つい話しそびれて未だ知らせずにゐると云ふ事であつた。代助は固より三千代の說明を噓とは思はなかつた。けれども、五分の閑さへあれば夫に話される事を、今日迄それなりに爲てあるのは、三千代の腹の中に、何だか話し惡い或蟠りがあるからだと思はずにはゐられなかつた。自分は三千代を、平岡に對して、それだけ罪のある人にして仕舞つたと代助は考へた。けれども夫は左程に代助の良心を螫すには至らなかつた。法律の制裁はいざ知らず、自然の制裁として、平岡も此結果に對して明らかに責を分たなければならないと思つたからである。
代助は三千代に平岡の近來の模樣を尋ねて見た。三千代は例によつて多くを語る事を好まなかつた。然し平岡の妻に對する仕打ちが結婚當時と變つてゐるのは明らかであつた。代助は夫婦が東京へ歸つた當時既にそれを見拔いた。夫から以後改まつて兩人の腹の中を聞いた事はないが、それが日每に好くない方に、速度を加へて進行しつゝあるのは殆ど爭ふべからざる事實と見えた。夫婦の間に、代助と云ふ第三者が點ぜられたがために、此疎隔が起つたとすれば、代助は此方面に向つて、もつと注意深く働いたかも知れなかつた。けれども代助は自己の悟性に訴へて、さうは信ずる事が出來なかつた。彼は此結果の一部分を三

千代の病氣に歸した。さうして、肉體上の關係が、夫の精神に反響を與へたものと斷定した。又其一部分を子供の死亡に歸した。それから、他の一部分を平岡の遊蕩に歸した。又他の一部分を會社員としての平岡の失敗に歸した。最後に、殘りの一部分を、平岡の放埒から生じた經濟事狀に歸した。凡てを概括した上で、平岡は貰ふべからざる人を貰ひ、三千代は嫁ぐ可からざる人に嫁いだのだと解決した。代助は心の中で痛く自分が平岡の依頼に應じて、三千代を彼の爲に周旋した事を後悔した。けれども自分が三千代の心を動かすが爲に、平岡が妻から離れたとは、何うしても思ひ得なかつた。

同時に代助の三千代に對する愛情は、此夫婦の現在の關係を、必須條件として募りつゝある事もまた一方では否み切れなかつた。三千代が平岡に嫁ぐ前、代助と三千代の間柄は、どの位の程度迄進んでゐたかは、しばらく措くとしても、彼は現在の三千代には決して無頓着でゐる譯には行かなかつた。彼は病氣に冒された三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は子供を亡くなした三千代を只の昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は夫の愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。但し、代助は此夫婦の間を、正面から永久に引き放さうと試みる程大膽ではなかつた。彼の愛はさう逆上してはゐなかつた。

三千代の眼のあたり、苦しんでゐるのは經濟問題であつた。平岡が自力で給し得る丈の生活費を勝手の方へ回さない事は、三千代の口吻で慥かであつた。代助は此點丈でもまづ何うかしなければなるまいと考へた。それで、

「一つ私が平岡君に逢つて、好く話して見よう」と云つた。三千代は淋しい顔をして代助を見た。旨く

行けば結構だが、遣り損なへば益三千代の迷惑になる計りだとは代助も承知してゐたので、強ひて左樣しようとも主張しかねた。三千代は又立つて次の間から一封の書狀を持つて來た。書狀は薄青い狀袋へ這入つてゐた。北海道にゐる父から三千代へ宛てたものであつた。三千代は狀袋の中から長い手紙を出して、代助に見せた。

手紙には向うの思はしくない事や、物價の高くて活計にくい事や、親類も緣者もなくて心細い事や、東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云ふ事や、――凡て憐れな事ばかり書いてあつた。代助は丁寧に手紙を卷き返して、三千代に渡した。其時三千代は眼の中に淚を溜めてゐた。

三千代の父はかつて多少の財產と稱へらるべき田畠の所有者であつた。日露戰爭の當時、人の勸めに應じて、株に手を出して全く遣り損なつてから、潔く祖先の地を賣り拂つて、北海道へ渡つたのである。其後の消息は、代助も今此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類はあれども無きが如しだとは三千代の兄が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果して三千代は、父と平岡ばかりを便りに生きてゐた。

「貴方は羨ましいのね」と瞬きながら云つた。代助はそれを否定する勇氣に乏しかつた。しばらくしてから又、

「何だつて、まだ奧さんを御貰ひなさらないの」と聞いた。代助は此間にも答へる事が出來なかつた。

しばらく默然として三千代の顏を見てゐるうちに、女の頰から血の色が次第に退いて行つて、普通よりは眼に附く程蒼白くなつた。其時代助は三千代と差向ひで、より長く坐つてゐる事の危險に、始めて氣が

附いた。自然の情合から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼等を驅つて、準繩の埒を踏み越えさせるのは、今二三分の裡にあつた。代助は固より夫より先へ進んでも、猶素知らぬ顏で引き返し得る、會話の方を心得てゐた。彼は西洋の小說を讀むたびに、そのうちに出て來る男女の情話が、あまりに露骨で、あまりに放肆で、且あまりに直線的に濃厚なのを平生から怪しんでゐた。原語で讀めば兎に角、日本には譯し得ぬ趣味のものと考へてゐた。從つて彼は自分と三千代との關係を發展させる爲に、舶來の臺詞を用ひる意志は毫もなかつた。少なくとも二人の間では、尋常の言葉で充分用が足りたのである。が、其所に、甲の位地から、知らぬ間に乙の位地に滑り込む危險が潛んでゐた。代助は辛うじて、今一步と云ふ際どい所で、踏み留まつた。歸る時、三千代は玄關迄送つて來て、

「淋しくつて不可ないから、又來て頂戴」と云つた。下女はまだ裏で張り物をしてゐた。

表へ出た代助は、ふら〳〵と一丁程步いた。好い所で切り上げたといふ意識があるべき筈であるのに、彼の心にはさう云ふ滿足が些とも無かつた。と云つて、もつと三千代と對坐してゐて、自然の命ずるが儘に、話し盡くして歸れば可かつたといふ後悔もなかつた。彼は、彼所で切り上げても、五分十分の後切り上げても、必竟は同じ事であつたと思ひ出した。自分と三千代との現在の關係は、此前逢つた時、既に發展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人の過去を順次に溯つて見て、いづれの斷面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪へがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の爲に、足がふらついた。家に歸つた時、門野が、

「大變顏の色が惡い樣ですね、何うかなさいましたか」と聞いた。代助は風呂場へ行つて、若い額から綺麗に汗を拭き取つた。さうして、長く延び過ぎた髮を冷水に浸した。

それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後、電車に乘つて、平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢つて、三千代の爲に充分話しをする決心であつた。給仕に名刺を渡して、埃だらけの受附に待つてゐる間、彼はしば〱袂から手帛を出して、鼻を掩うた。やがて、二階の應接間へ案内された。其所は風通しの惡い、蒸し暑い、陰氣な狹い部屋であつた。代助は此所で煙草を一本吹かした。編輯室と書いた戸口が始終開いて、人が出たり這入つたりした。代助の逢ひに來た平岡も其戸口から現はれた。先達て見た夏服を着て、相變らず綺麗な襟とカフスを掛けてゐた。忙しさうに、

「やあ、暫く」と云つて代助の前に立つた。代助も相手に唆された樣に立ち上がつた。二人は立ちながら一寸話しをした。丁度編輯のいそがしい時で緩り何うする事も出來なかつた。代助は改めて平岡の都合を聞いた。平岡はポッケットから時計を出して見て、

「失敬だが、もう一時間程して來てくれないか」と云つた。代助は帽子を取つて、又暗い埃だらけの階段を下りた。表へ出ると、夫でも涼しい風が吹いた。

代助はあてもなく、其所いらを逍遙いた。さうして、愈平岡と逢つたら、どんな風に話しを切り出さうかと工夫した。代助の意は、三千代に刻下の安慰を、少しでも與へたい爲に外ならなかつた。けれども、夫が爲に、却て平岡の感情を害することがあるかも知れないと思つた。代助は其惡結果の極端として、平岡と自分の間に起り得る破裂をさへ豫想した。然し、其時は何んな具合にして、三千代を救はうかと云ふ

成效はなかつた。代助は三千代と相對づくで、自分等二人の間をあれ以上に何うかする勇氣を有たなかつたと同時に、三千代のために、何かしなくては居られなくなつたのである。だから、今日の會見は、理智の作用から出た安全の策と云ふよりも、寧ろ情の旋風に捲き込まれた冒險の働きであつた。其所に平生の代助と異なる點があらはれてゐた。けれども、代助自身は夫に氣が附いてゐなかつた。一時間の後彼は又編輯室の入口に立つた。さうして、平岡と一所に新聞社の門を出た。

裏通を三町程來た所で、平岡が先へ立つて或家に這入つた。座敷の軒に釣忍が懸かつて、狹い庭が水で一面に濡れてゐた。平岡は上衣を脱いで、すぐ胡坐をかいた。代助は左程暑いとも思はなかつた。團扇は手にした丈で濟んだ。

會話は新聞社内の有樣から始まつた。平岡は忙しい樣で却て樂な商賣で好いと云つた。其語氣には別に負け惜しみの樣子も見えなかつた。代助は、それは無責任だからだらうと調戯つた。平岡は眞面目になつて、辯解をした。さうして、今日の新聞事業程競爭の烈しくて、機敏な頭を要するものはないと云ふ理由を說明した。

「成程たゞ筆が達者な丈ぢや仕樣があるまいよ」と代助は別に感服した樣子を見せなかつた。すると、平岡は斯う云つた。

「僕は經濟方面の係りだが、單にそれ丈でも中々面白い事實が擧がつてゐる。ちと、君の家の會社の内幕でも書いて御覽に入れようか」

代助は自分の平生の觀察から、斯んな事を云はれて、驚く程ぼんやりしては居なかつた。

「書くのも面白いだらう。其代り公平に願ひたいな」と云つた。
「いえ、僕の兄の會社ばかりでなく、一列一體に筆誅して貰ひたいと云ふ意味だ」
平岡は此時邪氣のある笑ひ方をした。さうして、
「日糖事件丈ぢや物足りないからね」と奥齒に物の挾まつた樣に云つた。代助は默つて酒を飮んだ。話しは此調子で段々はずみを失ふ樣に見えた。すると平岡は、實業界の内状に關聯するとでも思つたものか、何かの拍子に、ふと、日清戰爭の當時、大倉組に起つた逸話を代助に吹聽した。その時、大倉組は廣島で、軍隊用の食料品として、何百頭かの牛を陸軍に納める筈になつてゐた。それを毎日何頭かづゝ、納めて置いては、夜になると、そつと行つて偸み出して來た。さうして、知らぬ顏をして、翌日同じ牛を又納めた。役人は毎日々々同じ牛を何遍も買つてゐた。が仕舞に氣が附いて、一遍受取つた牛には燒印を押した。所がそれを知らずに、又偸み出した。のみならず、それを平氣に翌日連れて行つたので、とう／＼露見して仕舞つたのださうである。
代助は此話を聞いた時、その實社會に觸れてゐる點に於て、現代的滑稽の標本だと思つた。平岡はそれから、幸徳秋水と云ふ社會主義の人を、政府がどんなに恐れてゐるかと云ふ事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡査が二三人宛晝夜張番をしてゐる。一時は天幕を張つて、其中から覘つてゐた。秋水が外出すると、巡査が後を附ける。萬一見失ひでもしようものなら非常な事件になる。今本郷に現はれた、今神田へ來たと、夫から夫へと電話が掛かつて東京市中大騷ぎである。新宿警察署では秋水一人の爲に月々百圓

使つてゐる。同じ仲間の飴屋が、大道で飴細工を拵へてゐると、白服の巡査が、飴の前へ鼻を出して、邪魔になつて仕方がない。

是も代助の耳には、真面目な響を与へなかつた。

「矢つ張り現代的滑稽の標本ぢやないか」と平岡は先刻の批評を繰り返しながら、代助を挑んだ。代助はさうさと笑つたが、此方面にはあまり興味がないのみならず、今日は平生の様に普通の世間話をする気でないので、社会主義の事はそれなりにして置いた。先刻平岡の呼ばうと云ふ藝者を無理に已めさしたのも是が為であつた。

「実は君に話したい事があるんだが」と代助は遂に云ひ出した。すると、平岡は急に様子を変へて、落ち附かない眼を代助の上に注いだが、卒然として、

「そりや、僕も疾うから、何うかする積りなんだけれども、今の所ぢや仕方がない。もう少し待つて呉れ玉へ。其代り君の兄さんや御父さんの事も、斯うして書かずにゐるんだから」と代助には意表な返事をした。代助は馬鹿々々しいと云ふよりも、寧ろ一種の憎悪を感じた。

「君も大分変つたね」と冷やかに云つた。

「君の変つた如く変つちまつた。斯う摺れちや仕方がない。だから、もう少し待つて呉れ給へ」と答へて、平岡はわざとらしい笑ひ方をした。

代助は平岡の言語の如何に拘らず、自分の云ふ事丈は云はうと極めた。なまじひ、借金の催促に来たんぢやない抔と辯明すると、又平岡が其裏を行くのが厭だから、向うの推違ひは、推違ひで構はないとして

置いて、此方は此方の歩を進める態度に出た。けれども第一に困つたのは、平岡の勝手元の都合を、三千代の訴へによつて知つたと切り出しては、三千代に迷惑が掛かるかも知れない。と云つて、問題が其所に觸れなければ、忠告も助言も全く無益である。代助は仕方なしに迂回した。

「君は近來斯う云ふ所へ大分頻繁に出はいりをすると見えて、家のものとは、みんな御馴染だね」

「君の樣に金廻りが好くないから、さう豪遊も出來ないが、交際だから仕方がないよ」と云つて、平岡は器用な手附をして猪口を口へ着けた。

「餘計な事だが、それで家の方の經濟は、收支償ふのかい」と代助は思ひ切つて猛進した。

「うん。まあ、好い加減にやつてるさ」

斯う云つた平岡は、急に調子を落として、極めて氣のない返事をした。代助は夫限り食ひ込めなくなつた。已むを得ず、

「不斷は今頃もう家へ歸つてるんだらう。此間僕が訪ねた時は大分遲かつた樣だが」と聞いた。すると、平岡は矢張り問題を回避する樣な語氣で、

「まあ歸つたり、歸らなかつたりだ。職業が斯う云ふ不規則な性質だから、仕方がないさ」と、半ば自分を辯護するためらしく、曖昧に云つた。

「三千代さんは淋しいだらう」

「なに大丈夫だ。彼奴も大分變つたからね」と云つて、平岡は代助を見た。代助は其眸の内に危しい恐れを感じた。ことによると、此夫婦の關係は元に戻せないなと思つた。もし此夫婦が自然の斧で割き限り

に割かれるとすると、自分の運命は取り歸しの附かない未來を眼の前に控へてゐる。夫婦が離れゝば離れる程、自分と三千代はそれ丈接近しなければならないからである。代助は即座の衝動の如くに云つた。

――

「そんな事が、あらう筈がない。いくら、變つたつて、そりや唯年を取つた丈の變化だ。成るべく歸つて三千代さんに安慰を與へて遣れ」

「君はさう思ふか」と云ひさま平岡はぐいと飲んだ。代助は、たゞ、

「思ふかつて、誰だつて左樣思はざるを得んぢやないか」と半ば口から出任せに答へた。

「君は三千代を三年前の三千代と思つてるか。大分變つたよ。あゝ、大分變つたよ」と平岡は又ぐいと飲んだ。代助は覺えず胸の動悸を感じた。

「同じだ、僕の見る所では全く同じだ。少しも變つてゐやしない」

「だつて、僕は宅へ歸つても面白くないから仕方がないぢやないか」

「そんな筈はない」

平岡は眼を丸くして又代助を見た。代助は少し呼吸が逼つた。けれども、罪あるものが雷火に打たれた樣な氣は全くなかつた。彼は平生にも似ず論理に合はない事をたゞ衝動的に云つた。然しそれは眼の前にゐる平岡のためだと固く信じて疑はなかつた。彼は平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便りに、自分と三千代から永く振り放さうとする最後の試みを、半ば無意識的に遣つた丈であつた。自分と三千代の關係を、平岡から隱す爲の、糊塗策とは毫も考へてゐなかつた。代助は平岡に對して、左程に不信な言動を

敢てするには、餘りに高尙であると、優に自己を評價してゐた。しばらくしてから、代助は又平生の調子に歸つた。
「だつて、君がさう外へ計り出てゐれば、自然金も要る。從つて家の經濟も旨く行かなくなる。段々家庭が面白くなくなる丈ぢやないか」
平岡は、白襯衣の袖を腕の中途迄捲くり上げて、
「家庭か。家庭もあまり下さつたものぢやない。家庭を重く見るのは、君の樣な獨身者に限る樣だね」
と云つた。
此言葉を聞いたとき、代助は平岡が惡くなつた。あからさまに自分の腹の中を云ふと、そんなに家庭が嫌ひなら、嫌ひでよし、其代り細君を奪つちまふぞと判然知らせたかつた。けれども二人の問答は、其所迄行くには、まだ中々間があつた。代助はもう一遍外の方面から平岡の内部に觸れて見た。
「君が東京へ來たてに、僕は君から說敎されたね。何か遣れつて」
「うん。さうして君の消極な哲學を聞かされて驚いた」
代助は實際平岡が驚いたらうと思つた。その時の平岡は、熱病に罹つた人間の如く行爲に渇いてゐた。彼は行爲の結果として、富を冀つてゐたか、もしくは名譽、もしくは權勢を冀つてゐたか。夫でなければ、活動としての行爲其物を求めてゐたか。それは代助にも分らなかつた。
「僕の樣に精神的に敗殘した人間は、已むを得ず、あゝ云ふ消極な意見も出すが。――元來意見があつて、人がそれに則るのぢやない。人があつて、其人に適した樣な意見が出て來るのだから、僕の說は僕に

通用する丈だ。決して君の身の上を、あの說で、何うしよう斯うしようのと云ふ譯ぢやない。僕はあの時の昔の意氣に敬服してゐる。君はあの時自分で云つた如く、全く活動の人だ。是非共活動して貰ひたい」

「無論大いに遣る積りだ」

平岡の答はたゞ此一句限りであつた。代助は腹の中で首を傾けた。

「新聞で遣る積りかね」

平岡は一寸躊躇した。が、やがて、判然云ひ放つた。——

「新聞にゐるうちは、新聞で遣る積りだ」

「大いに要領を得てゐる。僕だつて君の一生涯の事を聞いてゐるんぢやないから、返事はそれで澤山だ。然し新聞で君に面白い活動が出來るかね」

「出來る積りだ」と平岡は簡明な挨拶をした。

話しは此所迄來ても、たゞ抽象的に進んだ丈であつた。代助は言葉の上でこそ、要領を得たが、平岡の本體を見屆ける事は些とも出來なかつた。代助は何となく責任のある政府委員か辯護士を相手にしてゐる樣な氣がした。代助は此時思ひ切つた政略的な御世辭を云つた。それには軍神廣瀨中佐の例が出て來た。廣瀨中佐は日露戰爭のときに、閉塞隊に加はつて斃れたため、當時の人から偶像視されて、とう〳〵軍神と迄崇められた。けれども、四五年後の今日に至つて見ると、もう軍神廣瀨中佐の名を口にするものも殆どなくなつて仕舞つた。英雄の流行り廢りはこれ程急劇なものである。と云ふのは、多くの場合に於て、英雄とは其時代に極めて大切な人といふ事で、名前丈は偉さうだけれども、本來は甚だ實際的なものであ

る。だから其大切な時機を通り越すと、世間は其資格を段々奪ひにかゝる。露西亞と戰爭の最中こそ、閉塞隊は大事だらうが、平和克復の曉には、百の廣瀨中佐も全くの凡人に過ぎない。世間は隣人に對して現金である如く、英雄に對しても現金である。だから、斯う云ふ偶像にも亦常に新陳代謝や生存競爭が行はれてゐる。さう云ふ譯で、代助は英雄などに擔がれたい了見は更にない。が、もし玆に野心があり覇氣のある快男子があるとすれば、一時的の劍の力よりも、永久的の筆の力で、英雄になつた方が長持ちがする。新聞は其方面の代表的事業である。

代助は此所迄述べて見たが、元來が御世辭の上に、云ふ事があまり書生らしいので、自分の内心には多少滑稽に取れる位、氣が乘らなかつた。平岡は其返事に、

「いや難有う」と云つた丈であつた。別段腹を立てた樣子も見えなかつたが、些とも感激してゐないのは、此返事でも明らかであつた。

代助は少々平岡を低く見過ぎたのに恥ぢ入つた。實は此側から、彼の心を動かして、旨く油の乘つた所を、中途から轉がして、元の家庭へ滑り込ませるのが、代助の計畫であつた。代助は此迂遠で、又尤も困難の方法の出立點から、程遠からぬ所で、蹉跌して仕舞つた。

其夜代助は平岡と遂に愚圖々々で分かれた。會見の結果から云ふと、何の爲に平岡を新聞社に訪ねたのだか、自分にも分らなかつた。平岡の方から見れば、猶更左樣であつた。代助は必竟何しに新聞社迄出掛けに來たのか、歸る迄つひに問ひ詰めずに濟んで仕舞つた。

代助は翌日になつて獨り書齋で、昨夕の有樣を何遍となく頭の中で繰り返した。二時間も一所に話して

ゐるうちに、自分が平岡に對して、比較的眞面目であつたのは、三千代を辯護した時丈であつた。けれども其眞面目は、單に動機の眞面目で、口にした言葉は矢張り好い加減な出任せに過ぎなかつた。嚴酷に云へば、噓許りと云つても可かつた。自分で眞面目だと信じてゐた動機でさへ、必竟は自分の未來を救ふ手段である。平岡から見れば、固より眞摯なものとは云へなかつた。まして、其他の談話に至ると、始めから、平岡を現在の立場から、自分の望む所へ落し込まうと、たくらんで掛かつた、打算的のものであつた。從つて平岡を何うする事も出來なかつた。

もし思ひ切つて、三千代を引合ひに出して、自分の考へ通りを、遠慮なく正面から述べ立てたら、もつと強い事が云へた。もつと平岡を動搖る事が出來た。もつと彼の肺腑に入る事が出來た。に違ひない。其代り遣り損なへば、三千代に迷惑がかゝつて來る。平岡と喧嘩になる。かも知れない。

代助は知らず／＼の間に、安全にして無能力な方針を取つて、平岡に接してゐた事を腑甲斐なく思つた。もし斯う云ふ態度で平岡に當たりながら、一方では、三千代の運命を、全然平岡に委ねて置けない程の不安があるならば、それは論理の許さぬ矛盾を、厚顏に犯してゐたと云はなければならない。

代助は昔の人が、頭腦の不明瞭な所から、實は利己本位の立場に居りながら、自らは固く人の爲と信じて、泣いたり、感じたり、激したり、して、其結果遂に相手を、自分の思ふ通りに動かし得たのを羨ましく思つた。自分の頭が、その位のぼんやりさ加減であつたら、昨夕の會談にも、もう少し感激して、都合のいゝ效果を收める事が出來たかも知れない。彼は人から、ことに自分の父から、熱誠の足りない男だと云はれてゐた。彼の解剖によると、事實は斯うであつた。――人間に熱誠を以て當たつて然るべき程に、

高尙な、眞摯な、純粹な、動機や行爲を常住に有するものではない。夫よりも、ずつと下等なものである。其下等な動機や行爲を、熱誠に取り扱ふのは、無分別なる幼稚な頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を衒つて、己を高くする山師に過ぎない。だから彼の冷淡は人間としての進歩とは云へまいが、よりよく人間を解剖した結果には外ならなかつた。彼は普通自分の動機や行爲を、よく吟味して見て、其のあまりに、狡黠くつて、不眞面目で、大抵は虛僞を含んでゐるのを知つてゐるから、遂に熱誠な勢力を以てそれを遂行する氣になれなかつたのである。と、彼は斷然信じてゐた。

此所で彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命ずる通り發展させるか、又は全然其反對に出でて、何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は、僞りに始まつて、僞りに終るより外に道はない。悉く社會的に安全であつて、悉く自己に對して無能無力である。と考へた。

彼は三千代と自分の關係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。——醱酵させる事の社會的危險を承知してゐた。天意には叶ふが、人の掟に背く戀は、其戀の主の死によつて、始めて社會から認められるのが常であつた。彼は萬一の悲劇を二人の間に描いて、覺えず慄然とした。

彼は又反對に、三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に從ふ代りに、自己の意志に殉ずる人にならなければ濟まなかつた。彼は其手段として、父や嫂から勸められてゐた結婚に思ひ至つた。さうして、此結婚を肯ふ事が、凡ての關係を新にするものと考へた。

十四

自然の兒にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷つた。彼は彼の主義として、彈力性のない硬張つた方針の下に、寒暑にさへすぐ反應を呈する自己を、器械の樣に束縛するの愚を忌んだ。同時に彼は、彼の生活が、一大斷案を受くべき危機に達して居る事を切に自覺した。

彼は結婚問題に就いて、まあ能く考へて見ろと云はれて歸つたぎり、未だに、それを本氣に考へる閑を作らなかつた。歸つた時、まあ今日も虎口を逃れて難有かつたと感謝したぎり、放り出して仕舞つた。父からはまだ何とも催促されないが、此二三日は又青山へ呼び出されさうな氣がしてならなかつた。代助は固より呼び出される迄何も考へずに居る氣であつた。呼び出されたら、父の顏色と相談の上、又何とか卽席に返事を拵へる心組であつた。代助はあながち父を馬鹿にする了見ではなかつた。あらゆる返事は、斯う云ふ具合に、相手と自分を商量して、臨機に湧いて來るのが本當だと思つてゐた。

もし、三千代に對する自分の態度が、最後の一歩前迄押し詰められた樣な氣持がなかつたなら、代助は父に對して無論さう云ふ處置を取つたらう。けれども、代助は今相手の顏色如何に拘らず、手に持つ賽を投げなければならなかつた。上になつた目が、平岡に都合が惡からうと、父の氣に入らなからうと、賽を投げる以上は、天の法則通りになるより外に仕方はなかつた。賽を手に持つ以上は、又賽が投げられ可く作られたる以上は、賽の目を極めるものは自分以外にあらう筈はなかつた。代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹のうちで定めた。父も兄も嫂も平岡も、決斷の地平線上には出て來なかつた。

彼はたゞ彼の運命に對してのみ卑怯であつた。此四五日は掌に載せた賽を眺め暮らした。今日もまだ握つてゐた。早く運命が戸外から來て、其手を輕く敲いて呉れゝば好いと思つた。が、一方では、まだ握つてゐられると云ふ意識が大層嬉しかつた。

門野は時々書齋へ來た。來る度に代助は洋卓の前に凝としてゐた。

「些と散歩にでも御出でになつたら如何です。左樣御勉強ぢや身體に惡いでせう」と云つた事が一二度あつた。成程顏色が好くなかつた。夏向きになつたので、門野が湯を毎日沸かして呉れた。代助は風呂場に行くたびに、長い間鏡を見た。髯の濃い男なので、少し延びると、自分には大層見苦しく見えた。觸つて、ざら〳〵すると猶不愉快だつた。

飯は依然として、普通の如く食つた。けれども運動の不足と、睡眠の不規則と、それから、腦の屈託とで、排泄機能に變化を起した。然し代助はそれを何とも思はなかつた。生理狀態は殆ど苦にする暇のない位、一つ事をぐる〳〵回つて考へた。それが習慣になると、終局なく、ぐる〳〵回つてゐる方が、埒の外へ飛び出す努力よりも却て樂になつた。

代助は最後に不決斷の自己嫌惡に陷つた。已むを得ないから、三千代と自分の關係を發展させる手段として、佐川の縁談を斷らうかと迄考へて、覺えず驚いた。然し三千代と自分の關係を絶つ手段として、結婚を許諾して見ようかといふ氣は、ぐる〳〵回轉してゐるうちに一度も出て來なかつた。

縁談を斷る方は單獨にも何遍となく決定が出來た。たゞ斷つた後、其反動として、自分をまともに三千代の上に浴びせかけねば已まぬ必然の勢力が來るに違ひないと考へると、其所に至つて、又恐ろしくなつ

た。

代助は父からの催促を心待ちに待つてゐた。しかし父からは何の便りもなかつた。三千代にもう一遍逢はうかと思つた。けれども、それ程の勇氣も出なかつた。

一番仕舞に、結婚は道徳の形式に於て、自分と三千代を遮斷するが、道徳の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼしさうもないと云ふ考へが、段々代助の腦裏に勢力を得て來た。既に平岡に嫁いだ三千代に對して、こんな關係が起り得るならば、此上自分に既婚者の資格を與へたからと云つて、同樣の關係が續かない譯には行かない。それを續かないと見るのはたゞ表向きの沙汰で、心を束縛する事の出來ない形式は、いくら重ねても苦痛を增す許りである。と云ふのが代助の論法であつた。代助は緣談を斷るより外に道はなくなつた。

斯う決心した翌日、代助は久し振に髮を刈つて髭を剃つた。梅雨に入つて二三日凄じく降つた揚句なので、地面にも、木の枝にも、埃らしいものは悉くしつとりと靜まつてゐた。日の色は以前より薄かつた。雲の切れ間から、落ちて來る光線は、下界の濕氣のために、半ば反射力を失つた樣に柔らかに見えた。代助は床屋の鏡で、わが姿を映しながら、例の如くふつくらした頰を撫でて、今日から愈積極的生活に入るのだと思つた。

青山へ來て見ると、玄關に車が二臺程あつた。供待の車夫は蹴込に倚り懸かつて眠つた儘、代助の通り過ぎるのを知らなかつた。座敷には梅子が新聞を膝の上へ乘せて、込み入つた庭の綠をぼんやり眺めてゐた。是もぼかんと眠さうであつた。代助はいきなり梅子の前へ坐つた。

「御父さんは居ますか」
嫂は返事をする前に、一應代助の樣子を、試驗官の眼で見た。
「代さん、少し瘠せた樣ぢやありませんか」と云つた。代助は又頰を撫でて、
「そんな事も無いだらう」と打ち消した。
「だつて、色澤が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顏を覗き込んだ。
「庭の所爲だ。青葉が映るんだ」と庭の植込の方を見たが、「だから貴方だつて、矢つ張り蒼いですよ」
と續けた。
「私、此二三日具合が好くないんですもの」
「道理でぼかんとして居ると思つた。何うかしたんですか。風邪ですか」
「何だか知らないけれど生欠ばかり出て」
梅子は斯う答へて、すぐ新聞を膝から卸ろすと、手を鳴らして、小間使を呼んだ。代助は再び父の在、不在を確めた。梅子は其問をもう忘れてゐた。聞いて見ると、玄關にあつた車は、父の客の乘つて來たものであつた。代助は長く懸からなければ、客の歸る迄待たうと思つた。嫂は判然しないから、風呂場へ行つて、水で顏を拭いて來ると云つて立つた。下女が好い香のする葛の粽を、深い皿に入れて持つて來た。代助は粽の尾をぶら下げて、頻りに嗅いで見た。
梅子が涼しい眼附になつて風呂場から歸つた時、代助は粽の一つを振子の樣に振りながら、今度は、
「兄さんは何うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問に答へる義務がないかの如く、しばらく

椽鼻に立つて、庭を眺めてゐたが、
「二三日の雨で、苔の色が悉皆出た事」と平生に似合はぬ觀察をして、故の席に返つた。さうして、
「兄さんが何うしましたつて」と聞き直した。代助が先の質問を繰り返した時、嫂は尤も無頓着な調子で、
「何うしましたつて、例の如くですわ」と答へた。
「相變らず、留守勝ちですか」
「えゝ、えゝ、朝も晩も滅多に宅に居た事はありません」
「姉さんは夫で淋しくはないですか」
「今更改まつて、そんな事を聞いたつて仕方がないぢやありませんか」と梅子は笑ひ出した。調戯ふんだと思つたのか、あんまり子供染みてゐると思つたのか殆ど取り合ふ氣色はなかつた。代助も平生の自分を振り返つて見て、眞面目に斯んな質問を掛けた今の自分を、寧ろ奇體に思つた。今日迄兄と嫂の關係を長い間目撃してゐながら、つひぞ其所には氣が附かなかつた。嫂も亦代助の氣が附く程物足りない素振りは、見せた事がなかつた。
「世間の夫婦は夫で濟んで行くものかな」と獨り言の樣に云つたが、別に梅子の返事を豫期する氣でもなかつたので、代助は向うの顔も見ず、たゞ疊の上に置いてある新聞に眼を落した。すると梅子は忽ち、
「何ですつて」と切り込む樣に云つた。代助の眼が、其調子に驚いて、ふと自分の方に視線を移した時、
「だから、貴方が奥さんを御貰ひなすつたら、始終宅に計りゐて、たんと可愛がつて御上げなさいな」

と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覺した。それで成るべく不斷の調子を出さうと力めた。

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、其謝絶に次いで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注がれてゐた。從つて、いくら平生の自分に歸つて、梅子の相手になる積りでも、梅子の豫期してゐない、變つた音色が、時々會話の中に、思はず知らず出て來た。

「代さん、貴方今日は何うかしてゐるのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固より嫂の言葉を側面へ摺らして受ける法をいくらでも心得てゐた。然るに、それを遣るのが、輕薄の樣で、又面倒な樣で、今日は厭になつた。却て眞面目に、何處が變か敎へて呉れと賴んだ。梅子は代助の問が馬鹿氣てゐるので妙な顏をした。が、代助が益賴むので、では云つて上げませうと前置きをして、代助の何うかしてゐる例を擧げ出した。梅子は勿論わざと眞面目を裝つてゐるものと代助を解釋した。其中に、

「だつて、兄さんが留守勝ちで、嘸御淋しいでせうなんて、あんまり思ひ遣りが好過ぎる事を仰しやるからさ」と云ふ言葉があつた。代助は其所へ自分を挾んだ。

「いや、僕の知つた女に、左樣云ふのが一人あつて、實は甚だ氣の毒だから、つい他の女の心持も聞いて見たくなつて、伺つたんで、決して冷やかした積りぢやないんです」

「本當に？そりや一寸何てえ方なの」

「名前は云ひ惡いんです」

「ぢや、貴方が其旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛がるやうにして御上げになれば可いのに」

代助は微笑した。
「姉さんも、さう思ひますか」
「當り前ですわ」
「もし其夫が僕の忠告を聞かなかつたら、何うします」
「そりや、何うも仕樣がないわ」
「放つて置くんですか」
「放つて置かなけりや、何うなさるの」
「ぢや、其細君は夫に對して細君の道を守る義務があるでせうか」
「大變理責めなのね。そりや旦那の不親切の度合にも因るでせう」
「もし、其細君に好きな人があつたら何うです」
「知らないわ。馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方へ行つたら好いぢやありませんか」
代助は默つて考へた。しばらくしてから、姉さんと云つた。梅子は其深い調子に驚かされて、改めて代助の顔を見た。代助は同じ調子で猶云つた。
「僕は今度の縁談を斷らうと思ふ」
代助の卷烟草を持つた手が少し顫へた。梅子は寧ろ表情を失つた顔附をして、謝絶の言葉を聞いた。代助は相手の樣子に頓着なく進行した。
「僕は今迄結婚問題に就いて、貴方に何返となく迷惑を掛けた上に、今度も亦心配して貰つてゐる。僕

もう三十だから、貴方の云ふ通り、大抵な所で、御勸め次第になつて好いのですが、少し考へがあるから、この縁談もまあ已めにしたい希望です。御父さんにも、兄さんにも濟まないが、仕方がない。何も當人が氣に入らないと云ふ譯ではないが、斷るんです。此間御父さんによく考へて見ろと云はれて、大分考へて見たが、矢つ張り斷る方が好い樣だから斷ります。實は今日は其用で御父さんに逢ひに來たんですが、今御客の樣だから、序と云つては失禮だが、貴方にも御話しをして置きます」

梅子は代助の樣子が眞面目なので、何時もの如く無駄口も入れずに聞いてゐたが、聞き終つた時、始めて自分の意見を述べた。それが極めて簡單な且極めて實際的な短かい句であつた。

「でも、御父さんは屹度御困りですよ」

「御父さんには僕が直かに話すから構ひません」

「でも、話しがもう此所迄進んでゐるんだから」

「話しが何所迄進んでゐようと、僕はまだ貰ひますと云つた事はありません」

「けれども判然貰はないとも仰しやらなかつたでせう」

「それを今云ひに來た所です」

代助と梅子は向ひ合つたなり、しばらく默つた。

代助の方では、もう云ふ可き事を云ひ盡くした樣な氣がした。少なくとも、是より進んで、梅子に自分を說明しようといふ考へは丸で無かつた。梅子は語るべき事、聞くべき事を澤山持つてゐた。たゞ夫が咄嗟の間に、前の問答に繫がり好く、口へ出て來なかつたのである。

「貴方の知らない間に、縁談が何れ程進んだのか、私にも能く分らないけれど、誰にしたつて、貴方が、さう的確御斷りなさらうとは思ひ掛けないんですもの」と梅子は漸くにして云つた。

「何故です」と代助は冷やかに落ち附いて聞いた。梅子は眉を動かした。

「何故ですつて聞いたつて、理窟ぢやありませんよ」

「理窟でなくつても構はないから話して下さい」

「貴方の樣にさう何遍斷つたつて、詰まり同じ事ぢやありませんか」と梅子は說明した。けれども、其意味がすぐ代助の頭には響かなかつた。不可解の眼を擧げて梅子を見た。梅子は始めて自分の本意を布衍しに掛かつた。

「つまり、貴方だつて、何時か一度は、奥さんを貰ふ積りなんでせう。厭だつて、仕方がないぢやありませんか。其樣何時迄も我儘を云つた日には、御父さんに濟まない丈ですわ。だからね。何うせ誰を持つて行つても氣に入らない貴方なんだから、つまり誰を持たしたつて同じだらうつて云ふ譯なんです。貴方には何んな人を見せても、駄目なんですよ。世の中に一人も氣に入る樣なものは生きてやしませんよ。だから、奥さんと云ふものは、始めから氣に入らないものと、諦めて貰ふより外に仕方がないぢやありませんか。だから私達が一番好いと思ふのを、默つて貰へば、夫で何所も彼所も丸く治まつちまふから、——だから、御父さんが、事によると、今度は、貴方に一から十迄相談して、何か爲さらないかも知れませんよ。御父さんから見れば夫が當り前ですもの。さうでも、爲なくつちや、生きてる内に、貴方の奥さんの顏を見る事は出來ないぢやありませんか」

代助は落ち附いて嫂の云ふ事を聽いてゐた。梅子の言葉が切れても、容易に口を動かさなかつた。若し反駁をする日には、話しが段々込み入る計りで、此方の思ふ所は決して、梅子の耳へ通らないと考へた。けれども向うの云ひ分を肯ふ氣は丸でなかつた。實際問題として、雙方が困る樣になる計りと信じたからである。それで、嫂に向つて、

「貴方の仰しやる所も、一理あるが、私にも私の考へがあるから、まあ打遣つて置いて下さい」と云つた。其調子には梅子の干渉を面倒がる氣色が自然と見えた。すると梅子は默つてゐなかつた。

「そりや代さんだつて、子供ぢやないから、一人前の考への御有りな事は勿論ですわ。私なんぞの要らない差出口は御迷惑でせうから、もう何も申しますまい。然し御父さんの身になつて御覽なさい。月々の生活費は貴方の要ると云ふ丈今でも出して入らつしやるんだから、つまり貴方は書生時代よりも餘計御父さんの厄介になつてる譯でせう。さうして置いて、世話になる事は、元より世話になるが、年を取つて一人前になつたから、云ふ事は元の通りには聞かれないつて威張つたつて通用しないぢやありませんか」

梅子は少し激したと見えて猶も云ひ募らうとしたのを、代助が遮つた。

「だつて、女房を持てば此上猶御父さんの厄介に爲らなくつちやならないでせう」

「宜いぢやありませんか、御父さんが、其方が好いと仰しやるんだから」

「ぢや、御父さんは、いくら僕の氣に入らない女房でも、是非持たせる決心なんですね」

「だつて、貴方に好いたのがあればですけれども、そんなのは日本中探して歩いたつて無いんぢやありませんか」

「何うして、夫が分ります」

梅子は張りの強い眼を据ゑて、代助を見た。さうして、

「貴方は丸で代言人の様な事を仰しやるのね」と云つた。代助は蒼白くなつた額を嫂の傍へ寄せた。

「姉さん、私は好いた女があるんです」と低い聲で云ひ切つた。

代助は今迄冗談に斯んな事を梅子に向つて云つた事が能くあつた。梅子も始めはそれを本氣に受けた。そつと手を廻して眞相を探つて見た抔といふ滑稽もあつた。事實が分つて以後は、代助の所謂好いた女は、梅子に對して一向利き目がなくなつた。代助がそれを云ひ出しても、丸で取り合はなかつた。でなければ、茶化してゐた。代助の方でも夫で平氣であつた。然し此場合丈は彼に取つて、全く特別であつた。顔附と云ひ、眼附と云ひ、聲の低い底に籠もる力と云ひ、此所迄押し逼つて來た前後の關係と云ひ、凡ての點から云つて、梅子をはつと思はせない譯に行かなかつた。嫂は此短かい句を、閃めく懐劍の如くに感じた。

代助は帶の間から時計を出して見た。父の所へ來てゐる客は中々歸りさうにもなかつた。空は又曇つて來た。代助は一旦引き上げて又改めて、父と話しを附けに出直す方が便宜だと考へた。

「僕は又來ます。出直して來て御父さんに御目に掛かる方が好いでせう」と立ちにかゝつた。梅子は其間に回復した。梅子は飽く迄人の世話を焼く實意のある丈に、物を中途で投げる事の出來ない女であつた。抑へる樣に代助を引き留めて、女の名を聞いた。代助は固より答へなかつた。梅子は是非にと逼つた。代助は夫でも應じなかつた。すると梅子は何故其女を貰はないのかと聞き出した。代助は單純に貰へないから、貰はないのだと答へた。梅子は仕舞に涙を流した。他の盡力を出し拔いたと云つて恨んだ。何故始め

から打ち明けて話さないかと云つて責めた。かと思ふと、氣の毒だと云つて同情して呉れた。けれども代助は三千代に就いては、遂に何事も語らなかつた。梅子はとう〳〵我を折つた。代助の愈歸ると云ふ間際になつて、

「ぢや、貴方から直かに御父さんに御話しなさるんですね。それ迄は私は默つてゐた方が好いでせう」と聞いた。代助は默つてゐて貰ふ方が好いか、話して貰ふ方が好いか、自分にも分らなかつた。

「左樣ですね」と躊躇したが、「どうせ、斷りに來るんだから」と云つて嫂の顏を見た。

「ぢあ、若し話す方が都合が好ささうだつたら話しませう。もし又惡い樣だつたら、何も云はずに置くから、貴方が始めから御話しなさい。夫が宜いでせう」と梅子は親切に云つて呉れた。代助は、

「何分宜しく」と賴んで外へ出た。角へ來て、四谷から歩く積りで、わざと、鹽町行の電車に乘つた。練兵場の横を通るとき、重い雲が西で切れて、梅雨には珍らしい夕陽が、眞赤になつて廣い原一面を照らしてゐた。それが向うを行く車の輪に中たつて、輪が囘る度に鋼鐵の如く光つた。車は遠い原の中に小さく見えた。原は車の小さく見える程、廣かつた。日は血の樣に毒々しく照つた。代助は此光景を斜に見ながら、風を切つて電車に持つて行かれた。重い頭の中がふら〳〵した。終點迄來た時は、精神が身體を冒したのか、精神の方が身體に冒されたのか、厭な心持がして早く電車を降りたかつた。代助は雨の用心に持つた蝙蝠傘を、杖の如く引き摺つて歩いた。

歩きながら、自分は今日、自ら進んで、自分の運命の半分を破壞したのも同じ事だと、心のうちに呟いだ。今迄は父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔らかに自我を通して來た。今度は愈本性を露

はずさなければ、それを通し切れなくなつた。同時に、此方面に向つて、在来の満足を求め得る希望は少なくなつた。けれども、まだ逆戻りをする餘地はあつた。たゞ、夫には又父を閉却化す必要が出て來るに違ひなかつた。代助は腹の中で今迄の我を冷笑した。彼は何うしても、今日の告白を以て、自己の運命の半分を破壊したものと認めたかつた。さうして、それから受ける打撃の反動として、思ひ切つて三千代の上に、掩ひ被さる様に烈しく働き掛けたかつた。

彼は此次父に逢ふときに、もう一歩も後へ引けない様に、自分の方を拵へて置きたかつた。それで三千代と會見する前に、又父から呼び出される事を深く恐れた。彼は今日嫂に、自分の意思を父に話す話さないの自由を與へたのを悔いた。今夜にも話されゝば、明日の朝呼ばれるかも知れない。すると今夜中に三千代に逢つて己れを語つて置く必要が出來る。然し夜だから都合がよくない。と思つた。

坂を下りた時、日は暮れ掛かつた。士官學校の前を眞直に濠端へ出て、二三町來ると砂土原町へ曲がる所を、代助はわざと電車路に附いて歩いた。彼は例の如くに宅へ歸つて、一夜を安閑と、書齋の中で暮らすに堪へなかつたのである。濠を隔てゝ高い土手の松が、眼のつゞく限り黒く並んでゐる底の方を、電車がしきりに通つた。代助は輕い箱が、軌道の上を、苦もなく滑つて行つては、又滑つて歸る迅速な手際に、輕快の感じを得た。其代り自分と同じ路を容赦なく往來する外濠線の車を、常よりは騒々しく悪んだ。牛込見附迄來た時、遠くの小石川の森に數點の灯影を認めた。代助は夕飯を食ふ考へもなく、三千代のゐる方角へ向いて歩いて行つた。

約二十分の後、彼は安藤坂を上がつて、傳通院の燒跡の前へ出た。大きな木が、左右から被さつてゐる

間を左へ抜けて、平岡の家の傍近く來ると、板塀から例の如く灯が射してゐた。代助は塀の本に身を寄せて、凝と樣子を窺つた。しばらくは、何の音もなく、家のうちは全く靜かであつた。代助は門を潛つて、格子の外から、頼むと聲を掛けて見ようかと思つた。すると、縁側に近く、ぴしやりと脛を叩く音がした。それから、人が立つて、奥へ這入つて行く氣色であつた。やがて話聲が聞こえた。何の事か善く聽き取れなかつたが、聲は慥かに、平岡と三千代であつた。話聲はしばらくで歇んで仕舞つた。すると又足音が縁側へ近附いて、どさりと尻を卸ろす音が手に取る樣に聞こえた。代助は夫なり塀の傍を退いた。さうして元來た道とは反對の方角に歩き出した。

　しばらくは、何處を何う歩いてゐるか夢中であつた。其間代助の頭には今見た光景ばかりが煎り附く樣に踴つてゐた。それが、少し衰へると、今度は自己の行爲に對して、云ふべからざる汚辱の意味を感じた。彼は何の故に、斯かる下劣な眞似をして、恰も驚かされたかの如くに退却したのかを怪しんだ。彼は暗い小路に立つて、世界が今夜に支配されつゝある事を私かに喜んだ。しかも五月雨の重い空氣に鎖されて、歩けば歩く程、窒息する樣な心持がした。神樂坂上へ出た時、急に眼がぎら／＼した。身を包む無數の人と、無數の光が頭を遠慮なく燒いた。代助は逃げる樣に藁店を上がつた。

　家へ歸ると、門野が例の如く漫然たる顏をして、

　「大分遲うがしたな。御飯はもう御濟みになりましたか」と聞いた。

　代助は飯が欲しくなかつたので、要らない由を答へて、門野を追ひ歸す樣に、書齋から退けたが、二三分立たない内に、又手を鳴らして呼び出した。

「宅から使に來やしなかつたかね」

「いゝえ」

代助は、

「おや、宜しい」と云つた限りであつた。門野は物足りなさうに入口に立つてゐたが、

「先生は、何ですか、御宅へ御出でになつたんぢや無かつたんですか」

「何故」と代助はむづかしい顔をした。

「だつて、御出掛けになるとき、そんな御話してしたから」

代助は門野を相手にするのが面倒になつた。

「宅へは行つたさ。――宅から使が來なければそれで好いぢやないか」

門野は不得要領に、

「はあ左樣ですか」と云ひ放して出て行つた。代助は、父があらゆる世界に對してよりも、自分に對して、性急であるといふ事を知つてゐるので、ことによると、歸つた後から直ぐ使でも寄こしはしまいかと恐れて、聞き糺したのであつた。門野が書生部屋へ引き取つたあとで、明日は是非共三千代に逢はなければならないと決心した。

其夜代助は寐ながら、何う云ふ手段で三千代に逢はうかと云ふ問題を考へた。手紙を車夫に持たせて宅へ呼びに遣れば、來る事は來るだらうが、既に今日嫂との會談が濟んだ以上は、明日にも、兄が嫂の爲に、向うから襲はれないとも限らない。又平岡のうちへ行つて逢ふ事は代助に取つて一種の苦痛があつた。

代助は已むを得ず、自分にも三千代にも關係のない所で逢ふより外に道はないと思つた。
夜半から強く雨が降り出した。釣つてある蚊帳が、却て寒く見える位な音がどう／＼と、家を包んだ。代助は其音の中に夜の明けるのを待つた。

雨は翌日迄晴れなかつた。代助は濕つぽい緣側に立つて、暗い空模樣を眺めて、昨夕の計畫を又變へた。彼は三千代を普通の待合抔へ呼んで、話しをするのが不愉快であつた。已むなくんば、蒼い空の下と思つてゐたが、此天氣では夫も覺束なかつた。と云つて、平岡の家へ出向く氣は始めから無かつた。彼は何うしても、三千代を自分の宅へ連れて來るより外に道はないと極めた。門野が少し邪魔になるが、話しの具合では書生部屋に洩れない樣にも出來ると考へた。

午少し前迄は、ぼんやり雨を眺めてゐた。午飯を濟ますや否や、護謨の合羽を引き掛けて表へ出た。降る中を神樂坂下迄來て青山の宅へ電話を掛けた。明日此方から行く積りであるからと、機先を制して置いた。電話口へは嫂が現はれた。先達ての事は、まだ父に話さないでゐるから、もう一遍よく、考へ直して御覽なさらないかと云はれた。代助は感謝の辭と共に號鈴を鳴らして談話を切つた。次に平岡の新聞社の番號を呼んで、彼の出社の有無を確めた。平岡は社に出てゐると云ふ返事を得た。代助は雨を衝いて又坂を上つた。花屋へ這入つて、大きな白百合の花を澤山買つて、夫を提げて、宅へ歸つた。花は濡れた儘、二つの花瓶に分けて插した。まだ餘つてゐるのを、此間の鉢に水を張つて置いて、莖を短かく切つて、ずぱずぱ放り込んだ。それから、机に向つて、三千代へ手紙を書いた。文句は極めて短かいものであつた。たゞ至急御目に掛かつて、御話ししたい事があるから來て呉れろと云ふ丈であつた。

代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現はれた。手紙を受取りながら、
「大變好い香ですな」と云つた。代助は、
「車を持つて行つて、乘せて來るんだよ」と念を押した。門野は雨の中を乘りつけの帳場迄出て行つた。
代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩ふ強い香の中に、殘りなく自己を放擲した。彼は此嗅覺の刺激のうちに、三千代の過去を分明に認めた。其過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這ひ纏はつてゐた。彼はしばらくして、
「今日始めて自然の昔に歸るんだ」と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃にない安慰を總身に覺えた。何故もつと早く歸る事が出來なかつたのかと思つた。始めから何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた。利害はなかつた。自己を壓迫する道德はなかつた。雲の樣な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。
やがて、夢から覺めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して來た。彼の唇は色を失つた。彼は默然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れてゐる血潮が、ぶる／＼顫へる樣に思はれた。彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩ふ迄嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。彼はやがて、腕を組んで、書齋と座敷の間を往つたり來たりした。彼の胸は始終鼓動を感じてゐた。彼は時々椅子の角や、洋卓の前へ來て留まつた。それから又步き出した。彼の心の動搖は、彼をして長く一所に留まる事を

許さなかつた。同時に彼は何物かを考へる爲に、無暗な所に立ち留まらざるを得なかつた。
其内に時は段々移つた。代助は斷えず置時計の針を見た。又覗く樣に、軒から外の雨を見た。雨は依然として、空から眞直に降つてゐた。空は前よりも稍暗くなつた。重なる雲が一つ所で渦を捲いて、次第に地面の上へ押し寄せるかと怪しまれた。其時雨に光る車を門から中へ引き込んだ。輪の音が、雨を壓して代助の耳に響いた時、彼は蒼白い頬に微笑を洩らしながら、右の手を胸に當てた。
三千代は玄關から、門野に連れられて、廊下傳ひに這入つて來た。銘仙の紺絣に、唐草模樣の一重帶を締めて、此前とは丸で違つた服裝をしてゐるので、一目見た代助には、新しい感じがした。色は不斷の通り好くなかつたが、座敷の入口で、代助と顔を合はせた時、眼も眉も口もぴたりと活動を中止した樣に固くなつた。敷居に立つてゐる間は、足も動けなくなつたとしか受取れなかつた。三千代は固より手紙を見た時から、何事をか豫期して來た。其豫期のうちには恐れと、喜びと、心配とがあつた。車から降りて、座敷へ案内される迄、三千代の顔は其豫期の色をもつて漲つて居た。三千代の表情はそこで、はたと留まつた。代助の樣子は三千代に夫丈の打衝を與へる程に强烈であつた。
代助は椅子の一つを指さした。三千代は命ぜられた通りに腰を掛けた。代助は其向うに席を占めた。二人は始めて相對した。然し良少時は二人とも、口を開かなかつた。
「何か御用なの」と三千代は漸くにして問うた。代助は、たゞ、
「えゝ」と云つた。二人は夫限りで、又しばらく雨の音を聽いた。
「何か急な御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「えゝ」と云つた。雙方共何時もの樣に輕くは話し得なかつた。代助は酒の力を借りて、己を語らなければならない樣な自分を恥ぢた。彼は打ち明ける時は、必ず平生の自分でなければならないものと兼て覺悟をして居た。けれども、改まつて、三千代に對して見ると、始めて、一滴の酒精が戀しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例のヰスキーを洋盃で傾けようかと思つたが、遂に其決心に堪へなかつた。彼は青天白日の下に、尋常の態度で、相手に公言し得る事でなければ自己の誠でないと信じたからである。醉と云ふ牆壁を築いて、其掩護に乘じて、自己を大膽にするのは、卑怯で、殘酷で、相手に汚辱を與へる樣な氣がしてならなかつたからである。彼は社會の習慣に對しては、德義的な態度を取る事が出來なくなつた、其代り三千代に對しては一點も不德義な動機を蓄へぬ積りであつた。否、彼をして卑吝に陷らしむる餘地が丸でない程に、代助は三千代を愛した。けれども、彼は三千代から何の用かを聞かれた時に、すぐ己を傾ける事が出來なかつた。二度聞かれた時に猶躊躇した。三度目には、已むを得ず、

「まあ、緩り話しませう」と云つて、卷烟草に火を點けた。三千代の顏は返事を延ばされる度に惡くなつた。

雨は依然として、長く、密に、物に音を立てて降つた。二人は雨の爲に、雨の持ち來す音の爲に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立の儘、白百合の香の中に封じ込められた。

「先刻表へ出て、あの花を買つて來ました」と代助は自分の周圍を顧た。三千代の眼は代助に隨いて室の中を一回りした。其後で三千代は鼻から強く息を吸ひ込んだ。

「兄さんと貴方と淸水町にゐた時分の事を思ひ出さうと思つて、成るべく澤山買つて來ました」と代助が云つた。

「好い香ですこと」と三千代は翻る樣に綻びた大きな花瓣を眺めてゐたが、夫から眼を放して代助に移した時、ほうと頰を薄赤くした。

「あの時分の事を考へると」と半分云つて已めた。

「覺えてゐますか」

「覺えてゐますわ」

「貴方は派出な半襟を掛けて、銀杏返しに結つてゐましたね」

「だつて、東京へ來立てだつたんですもの。ぢき已めて仕舞つたわ」

「此間百合の花を持つて來て下さつた時も、銀杏返しぢやなかつたですか」

「あら、氣が附いて。あれは、あの時限りなのよ」

「あの時はあんな髷に結ひ度くなつたんですか」

「えゝ、氣迷れに一寸結つて見たかつたの」

「僕はあの髷を見て、昔を思ひ出した」

「さう」と三千代は恥づかしさうに肯つた。

三千代が淸水町にゐた頃、代助と心安く口を聞く樣になつてからの事だが、始めて國から出て來た當時の髮の風を代助から賞められた事があつた。其時三千代は笑つてゐたが、それを聞いた後でも、決して銀

蝶返しには結はなかつた。二人は今も此事をよく記憶してゐた。けれども雙方共口へ出しては何も語らなかつた。

三千代の兄と云ふのは寧ろ豁達な氣性で、懸隔てのない交際振りから、友達には甚く愛されてゐた。ことに代助は其親友であつた。此兄は自分が豁達である丈に、妹の大人しいのを可愛がつてゐた。國から連れて來て、一所に家を持つたのも、妹を教育しなければならないと云ふ義務の念からではなくて、全く妹の未來に對する情合と、現在自分の傍に引き着けて置きたい欲望とからであつた。彼は三千代を呼ぶ前、既に代助に向つて其旨を打ち明けた事があつた。其時代助は普通の青年の樣に、多大の好奇心を以て此計畫を迎へた。

三千代が來てから後、兄と代助とは益親しくなつた。何方が友情の歩を進めたかは、代助自身にも分らなかつた。兄が死んだ後で、當時を振り返つて見る毎に、代助は此親密の裡に一種の意味を認めない譯に行かなかつた。兄は死ぬ時迄それを明言しなかつた。代助も敢て何事をも語らなかつた。斯くして、相互の思はくは、相互の間の祕密として葬られて仕舞つた。兄は存生中に此意味を私かに三千代に洩らした事があるかどうか、其所は代助も知らなかつた。代助はたゞ三千代の擧止動作と言語談話からある特別な感じを得た丈であつた。

代助は其頃から趣味の人として、三千代の兄に臨んでゐた。三千代の兄は其方面に於て、普通以上の感受性を持つて居なかつた。深い話しになると、正直に分らないと自白して、餘計な議論を避けた。何處からか arbiter elegantiarum と云ふ字を見附け出して來て、それを代助の異名の樣に濫用したのは、其頃

の事であつた。三千代は隣の部屋で默つて兄と代助の話しを聞いてゐた。仕舞にはとう〳〵arbiter elegantiarum と云ふ字を覺えた。ある時其意味を兄に尋ねて、驚かれた事があつた。

兄は趣味に關する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。代助を待つて啓發されべき妹の頭腦に、接觸の機會を出來る丈與へるやうに力めた。代助も辭退はしなかつた。後から顧ると、自ら進んで其任に當たつたと思はれる痕迹もあつた。三千代は固より喜んで彼の指導を受けた。三人は斯くして、巴の如くに回轉しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴の輪は回るに從つて次第に狹まつて來た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い圓にならうとする少し前の所で、忽然其一つが缺けた爲、殘る二つは平衡を失つた。

代助と三千代は五年の昔を心置きなく語り始めた。語るに從つて、現在の自己が遠退いて、段々と當時の學生時代に返つて來た。二人の距離は又元の樣に近くなつた。

「あの時兄さんが亡くならないで、未だ達者でゐたら、今頃私は何うしてゐるでせう」と三千代は、其時を戀しがる樣に云つた。

「兄さんが達者でゐたら、別の人になつて居る譯ですか」

「別な人にはなりませんわ。貴方は？」

「僕も同じ事です」

三千代は其時、少し窘める樣な調子で、

「あら噓」と云つた。代助は深い眼を三千代の上に据ゑて、

「僕は、あの時も今も、少しも違つてゐやしないのです」と答へた儘、猶しばらくは眼を相手から離さなかつた。三千代は忽ち視線を外らした。さうして、半ば獨り言の樣に、

「だつて、あの時から、もう違つていらしつたんですもの」と云つた。

三千代の言葉は普通の談話としては餘りに聲が低過ぎた。代助は消えて行く影を踏まへる如くに、すぐ其尾を捕へた。

「違やしません。貴方にはたゞ左樣見える丈です。左樣見えたつて仕方がないが、それは僻目だ」

代助の方は通例よりも熱心に判然した聲で自己を辯護する如くに云つた。三千代の聲は益低かつた。

「僻目でも何でも可くつてよ」

代助は默つて三千代の樣子を窺つた。三千代は始めから、眼を伏せてゐた。代助には其長い睫毛の顫へる樣が能く見えた。

「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。僕は夫丈の事を貴方に話したい爲にわざ〳〵貴方を呼んだのです」

代助の言葉には、普通の愛人の用ひる樣な甘い文彩を含んでゐなかつた。彼の調子は其言葉と共に簡單で素朴であつた。寧ろ嚴肅の域に逼つてゐた。但、夫丈の事を語る爲に、急用としてわざ〳〵三千代を呼んだ所が、玩具の詩歌に類してゐた。けれども、三千代は固より、斯う云ふ意味での俗を離れた急用を理解し得る女であつた。其上世間の小說に出て來る青春時代の修辭には、多くの興味を持つてゐなかつた。代助の言葉が、三千代の官能に華やかな何物をも與へなかつたのは、事實であつた。三千代がそれに渇い

てゐなかつたのも事實であつた。代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。三千代は顫へる睫毛の間から、涙を頰の上に流した。

「僕はそれを貴方に承知して貰ひたいのです。承知して下さい」

三千代は猶泣いた。代助に返事をする所ではなかつた。袂から手帛を出して顏へ當てた。濃い眉の一部分と、額と生え際丈が代助の眼に殘つた。代助は椅子を三千代の方へ摺り寄せた。

「承知して下さるでせう」と耳の傍で云つた。三千代は、まだ顏を蔽つてゐた。しやくり上げながら、

「餘りだわ」と云ふ聲が手帛の中で聞こえた。それが代助の聽覺を電流の如くに冒した。代助は自分の告白が遲過ぎたと云ふ事を切に自覺した。打ち明けるならば三千代が平岡へ嫁ぐ前に打ち明けなければならない筈であつた。彼は涙と涙の間をぼつ／＼綴る三千代の此一語を聞くに堪へなかつた。

「僕は三四年前に、貴方に左樣打ち明けなければならなかつたのです」と云つて、憮然として口を閉ぢた。三千代は急に手帛を顏から離した。瞼の赤くなつた眼を突然代助の上に睜つて、

「打ち明けて下さらなくつても可いから、何故」と云ひ掛けて、一寸躊躇したが、思ひ切つて、「何故棄てて仕舞つたんです」と云ふや否や、又手帛を顏に當てて又泣いた。

「僕が惡い。勘忍して下さい」

代助は三千代の手頸を執つて、手帛を顏から離さうとした。三千代は逆らはうともしなかつた。手帛は膝の上に落ちた。三千代は其膝の上を見た儘、微かな聲で、

「殘酷だわ」と云つた。小さい口元の肉が顫ふ樣に動いた。

「殘酷と云はれても仕方がありません。其代り僕は夫丈の罰を受けてゐます」

三千代は不思議な眼をして顔を上げたが、

「貴方が結婚して三年以上になるが、僕はまだ獨身でゐます」

「何うして」と聞いた。

「だつて、夫は貴方の御勝手ぢやありませんか」

「勝手ぢやありません。貰はうと思つても、貰へないのです。それから以後、宅のものから何遍結婚を勸められたか分りません。けれども、みんな斷つて仕舞ひました。今度も亦一人斷りました。其結果僕と僕の父との間が何うなるか分りません。然し何うなつても構はない、斷るんです。貴方が僕に復讐してゐる間は斷らなければならないんです」

「復讐」と三千代は云つた。此二字を恐るゝものゝ如くに眼を働かした。「私は是でも、嫁に行つてから、今日迄一日も早く、貴方が御結婚なされば可いと思はないで暮らした事はありません」と稍改まつた物の言ひ振りであつた。然し代助はそれに耳を貸さなかつた。

「いや僕は貴方に何所迄も復讐して貰ひたいのです。それが本望なのです。今日斯うやつて、貴方を呼んで、わざ／＼自分の胸を打ち明けるのも、實は貴方から復讐されてゐる一部分としか思やしません。僕は是で社會的に罪を犯したも同じ事です。然し僕はさう生れて來た人間なのだから、罪を犯す方が、僕には自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔する事が出來れば、夫で澤山なんです。是程嬉しい事はないと思つてゐるんです」

三千代は涙の中で始めて笑つた。けれども一言も口へは出さなかつた。代助は猶己れを語る隙を得た。
――
「僕は、今更こんな事を貴方に云ふのは、残酷だと承知してゐます。それが貴方に残酷に聞こえれば聞こえる程僕は貴方に対して成功したも同様になるんだから仕方がない。其上僕はこんな残酷な事を打ち明けなければ、もう生きてゐる事が出来なくなつた。つまり我儘です。だから詫るんです」
「残酷では御座いません。だから詫るのはもう廃して頂戴」
三千代の調子は、此時急に判然した。沈んではゐたが、前に比べると非常に落ち着いた。然ししばらくしてから、又
「たゞ、もう少し早く云つて下さると」と云ひ掛けて涙ぐんだ。代助は其時斯う聞いた。――
「ぢや僕が生涯黙つてゐた方が、貴方には幸福だつたんですか」
「左様ぢやないのよ」と三千代は力を籠めて打ち消した。「私だつて、貴方が左様云つて下さらなければ、生きてゐられなくなつたかも知れませんわ」
今度は代助の方が微笑した。
「夫ぢや構はないでせう」
「構はないより難有いわ。たゞ――」
「たゞ平岡に済まないと云ふんでせう」
三千代は不安らしく首肯いた。代助は斯う聞いた。――

「三千代さん、正直に云つて御覽。貴方は平岡を愛してゐるんですか」
三千代は答へなかつた。見るうちに、顔の色が蒼くなつた。眼も口も固くなつた。凡てが苦痛の表情であつた。代助は又聞いた。
「では、平岡は貴方を愛してゐるんですか」
三千代は矢張り俯向いてゐた。代助は思ひ切つた判斷を、自分の質問の上に與へようとして、既に其言葉が口迄出掛かつた時、三千代は不意に顔を上げた。其顔には今見た不安も苦痛も殆ど消えてゐた。涙さへ大抵は乾いた。頰の色は固より蒼かつたが、唇は確として、動く氣色はなかつた。其間から、低く重い言葉が、繋がらない樣に、一字づゝ出た。
「仕樣がない。覺悟を極めませう」
代助は背中から水を被つた樣に顫へた。社會から逐ひ放たるべき二人の魂は、たゞ二人對ひ合つて、互を穴の明く程眺めてゐた。さうして、凡てに逆らつて、互を一所に持ち來たした力を互と怖れ戰いた。
しばらくすると、三千代は急に物に襲はれた樣に、手を顔に當てて泣き出した。代助は三千代の泣く樣を見るに忍びなかつた。肱を突いて額を五指の裏に隱した。二人は此態度を崩さずに、戀愛の彫刻の如く、凝としてゐた。
二人は斯う凝としてゐる中に、五十年を眼のあたりに縮めた程の精神の緊張を感じた。さうして其緊張と共に、二人が相並んで存在して居ると云ふ自覺を失はなかつた。彼等は愛の刑と愛の賚とを同時に享けて、同時に雙方を切實に味はつた。

しばらくして、三千代は手帛を取つて、涙を綺麗に拭いたが、靜かに、
「私もう歸つてよ」と云つた。代助は、
「御歸りなさい」と答へた。
雨は小降りになつたが、代助は固より三千代を獨り返す氣はなかつた。わざと車を雇はずに、自分で送つて出た。平岡の家迄附いて行く所を、江戸川の橋の上で別れた。代助は橋の上に立つて、三千代が横町を曲がる迄見送つてゐた。それから緩り歩を囘らしながら、腹の中で、
「萬事終る」と宣告した。
雨は夕方歇んで、夜に入つたら、雲がしきりに飛んだ。其中洗つた樣な月が出た。代助は光を浴びる庭の濡葉を長い間椽側から眺めてゐたが、仕舞に下駄を穿いて下へ降りた。固より廣い庭でない上に立木の數が存外多いので、代助の歩く積はたんと無かつた。代助は其眞中に立つて、大きな空を仰いだ。やがて、座敷から、晝間買つた百合の花を取つて來て、自分の周圍に蒔き散らした。白い花瓣が點々として月の光に冴えた。あるものは、木下闇に仄めいた。代助は何をするともなく其間に曲んでゐた。寐る時になつて始めて再び座敷へ上がつた。室の中は花の香がまだ全く拔けて居なかつた。

十五

三千代に逢つて、云ふべき事を云つて仕舞つた代助は、逢はない前に比べると、餘程心の平和に接近し易くなつた。然し是は彼の豫期する通りに行つた迄で、別に意外の結果と云ふ程のものではなかつた。

會見の翌日彼は永らく手に持つてゐた賽を思ひ切つて投げた人の決心を以て起きた。彼は自分と三千代の運命に對して、昨日から一種の責任を帶びねば濟まぬ身になつたと自覺した。しかも夫は自ら進んで求めた責任に違ひなかつた。從つて、それを自分の背に負うて、苦しいとは思へなかつた。その重みに押されるがため、却て自然と足が前へ出る樣な氣がした。彼は自ら切り開いた此運命の斷片を頭に乘せて、父と決戰すべき準備を整へた。父の後には兄がゐた、嫂がゐた。是等と戰つた後には平岡がゐた。是等を切り拔けても大きな社會があつた。個人の自由と情實を毫も斟酌して呉れない器械の樣な社會があつた。代助には此社會が今全然暗黑に見えた。代助は凡てと戰ふ覺悟をした。

彼は自分で自分の勇氣と膽力に驚いた。彼は今日迄、熱烈を厭ふ、危きに近寄り得ぬ、勝負事を好まぬ、用心深い、太平の好紳士と自分を見做してゐた。德義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども、臆病と云ふ自覺はどうしても彼の心から取り去る事が出來なかつた。

彼は通俗な或外國雜誌の購讀者であつた。其中のある號で、mountain accidents と題する一篇に逢つて、かつて心を駭かした。夫には高山を攀ぢ上る冒險者の、怪我過ちが澤山に並べてあつた。雪山の途中雪崩れに壓されて、行き方知れずになつたものの骨が、四十年後に氷河の先へ引懸かつて出た話や、四人の冒險者が懸崖の半腹にある、眞直に立つた大きな平岩を越すとき、肩から肩の上へ猿の樣に重なり合つて、最上の一人の手が岩の鼻へ掛かるや否や、岩が崩れて、腰の繩が切れて、上の三人が折り重なつて、眞逆樣に四番目の男の傍を遙かの下に落ちて行つた話などが、幾何となく載せてあつた。其間に、煉瓦の壁程急な山腹に蝙蝠の樣に吸ひ附いた人間を、二三ヶ所點綴した挿畫があつた。其時代助は其絶壁の横にある白

い空間のあなたに、廣い空や、遙かの谷を想像して、怖ろしさから來る眩暈を、頭の中に再現せずには居られなかつた。

代助は今道德界に於て、是等の登攀者と同一な地位に立つてゐると云ふ事を知つた。けれども自ら其場に臨んで見ると、怯む氣は少しもなかつた。怯んで猶豫する方が彼に取つては幾倍の苦痛であつた。

彼は一日も早く父に逢つて話しをしたかつた。萬一の差支へを恐れて、三千代が來た翌日、又電話を掛けて都合を聞き合はせた。父は留守だと云ふ返事を得た。次の日又問ひ合はせたら、今度は差支へがあると云つて斷られた。其次には此方から知らせる迄は來るに及ばんといふ挨拶であつた。代助は命令通り控へてゐた。其間嫂からも兄からも便りは一向なかつた。代助は始めは家のものが、自分に出來る丈長い、反省の時間を與へる爲の策略ではあるまいかと推察して、平氣に構へてゐた。三度の食事も旨く食つた。夜も比較的安らかな夢を見た。雨の晴れ間には門野を連れて散步を一二度した。然し家からは使も手紙も來なかつた。代助は絕壁の途中で休息する時間の長過ぎるのに安からずなつた。仕舞に思ひ切つて、自分の方から青山へ出掛けて行つた。兄は例の如く留守であつた。嫂は代助を見て氣の毒さうな顏をした。が、例の事件に就いては何も語らなかつた。代助の來意を聞いて、では私が一寸奧へ行つて御父さんの御都合を伺つて來ませうと云つて立つた。梅子の態度に、父の怒りから代助を庇ふ樣にも見えた。又彼を疎外する樣にも取れた。代助は兩方の何れだらうかと煩つて待つてゐた。待ちながらも、何うせ覺悟の前だと何遍も口のうちで繰り返した。

奧から梅子が出て來る迄には、大分暇が掛かつた。代助を見て、又氣の毒さうに、今日は御都合が惡い

さうですと云つた。代助は仕方なしに、何時來たら宜からうかと尋ねた。固より例の樣な元氣はなく悄然とした問ひ振りであつた。梅子は代助の樣子に同情の念を起した調子で、二三日中に乾度自分が責任を以て都合の好い時日を知らせるから今日は歸れと云つた。代助が內玄關を出る時、梅子はわざと送つて來て、

「今度こそ能く考へて入らつしやいよ」と注意した。代助は返事もせずに門を出た。

歸る途中も不愉快で堪らなかつた。此間三千代に逢つて以後、味はふ事を知つた心の平和を、父や嫂の態度で幾分か破壞されたと云ふ心持が路々募つた。自分は自分の思ふ通りを父に告げる。父は父の考へを遠慮なく自分に洩らす、それで衝突する、衝突の結果はどうあらうとも潔く自分で受ける。是が代助の豫期であつた。父の仕打ちは彼の豫期以外に面白くないものであつた。其仕打ちは父の人格を反射する丈だけに、代助を不愉快にした。

代助は途すがら、何を苦しんで、父との會見を左迄に急いだものかと思ひ出した。元來が父の要求に對する自分の返事に過ぎないのだから、便宜は寧ろ、是を待ち受ける父の方にあるべき筈であつた。其父がわざとらしく自分を避ける樣にして、面會を延ばすならば、それは自己の問題を解決する時間が遲くなると云ふ不結果を生ずる外に何も起り樣がない。代助は自分の未來に關する主要な部分は、もう既に片付けて仕舞つた積りでゐた。彼は父から時日を指定して呼び出される迄は、宅の方の處置を其儘にして放つて置く事に極めた。

彼は家に歸つた。父に對しては只薄暗い不愉快の影が頭に殘つてゐた。けれども此影は近き未來に於て

必ず其暗さを増してくるべき性質のものであつた。其他には眼前に運命の二つの潮流を認めた。一つは三千代と自分が是から流れて行くべき方向を示してゐた。一つは平岡と自分を是非共一所に捲き込むべき凄じいものであつた。代助は此間三千代に逢つたなりで、片々の方は捨ててある。よし是から三千代の顏を見るにした所で、――また長い間見ずにゐる氣はなかつたが、――二人の向後取るべき方針に就いて云へば、當分は一歩も現在狀態より踏み出す了見は持たなかつた。此點に關して、代助は我ながら明瞭な計畫を拵へてゐなかつた。平岡と自分とを運び去るべき將來に就いても、彼はたゞ何時、何事にでも用意ありと云ふ丈であつた。無論彼は機を見て、積極的に働き掛ける心組はあつた。けれども具體的な案は一つも準備しなかつた。あらゆる場合に於て、彼の決して仕損じまいと誓つたのは、凡てを平岡に打ち明けると云ふ事であつた。從つて平岡と自分とで構成すべき運命の流は黑く恐ろしいものであつた。一つの心配は此恐ろしい暴風の中から、如何にして三千代を救ひ得べきかの問題であつた。

最後に彼の周圍を人間のあらん限り包む社會に對しては、彼は何の考へも纏めなかつた。事實として、社會は制裁の權を有してゐた。けれども動機行爲の權は全く自己の天分から湧いて出るより外に道はないと信じた。かれは此點に於て、社會と自分との間には全く交渉のないものと認めて進行する氣であつた。

代助は彼の小さな世界の中心に立つて、彼の世界を斯樣に觀て、一順其關係比例を頭の中で調べた上、「善からう」と云つて、又家を出た。さうして一二丁歩いて、乘り附けの帳場迄來て、綺麗で早さうな奴を擇んで飛び乘つた。何處へ行く當てもないのを好い加減な町を名指して二時間程ぐる〳〵乘り廻して歸つた。

翌日も書斎の中で前日同様、自分の世界の中心に立つて、左右前後を一応隈なく見渡した後、
「宜しい」と云つて外へ出て、用もない所を今度は足に任せてぶら／＼歩いて歸つた。
三日目にも同じ事を繰り返した。が、今度は表へ出るや否や、すぐ江戸川を渡つて、三千代の所へ來た。
三千代は二人の間に何事も起らなかつたかの樣に、
「何故夫から入らつしやらなかつたの」と聞いた。代助は寧ろ其落ち附き拂つた態度に驚かされた。三千代はわざと平岡の机の前に据ゑてあつた蒲團を代助の前へ押し遣つて、
「何でそんなに、そは／＼して入らつしやるの」と無理に其上に坐らした。
一時間ばかり話してゐるうちに、代助の頭は次第に穩やかになつた。車へ乘つて、當てもなく乘り回すより、三十分でも好いから、早く此所へ遊びに來れば可かつたと思ひ出した。歸るとき代助は、
「又來ます。大丈夫だから安心して入らつしやい」と三千代を慰める樣に云つた。三千代はたゞ微笑した丈であつた。

其夕方始めて父からの報知に接した。其時代助は婆さんの給仕で飯を食つてゐた。茶碗を膳の上へ置いて、門野から手紙を受取つて讀むと、明朝何時迄に御出でといふ文句があつた。代助は、
「御役所風だね」と云ひながら、わざと端書を門野に見せた。門野は、
「青山の御宅からですか」と丁寧に眺めてゐたが、別に云ふ事がないものだから、表を引つ繰り返して、
「何うも何ですな。昔の人は矢つ張り手蹟が好い樣ですな」と御世辭を置き去りにして、出て行つた。
婆さんは先刻から暦の話しをしきりに爲てゐた。みづのえだのかのとだの、八朔だの友引だの、爪を切る

日だの普請をする日だのと頗る煩いものであつた。代助は固より上の空で聞いてゐた。嫂さんは又門野の職の事を頼んだ。拾圓でも宜いから何方かへ出して遣つて呉れないかと云つた。代助は自分ながら、何んと返事をしたか分らない位氣にも留めなかつた。たゞ心のうちでは、門野所か、この己が危しい位だと思つた。

食事を終るや否や、本郷から寺尾が來た。代助は門野の顏を見て暫く考へてゐた。門野は無雜作に、

「斷りますか」と聞いた。代助は此間から珍らしくある會を一二回缺席した。來客も逢はないで濟むと思ふ分は兩度程謝絶した。

代助は思ひ切つて寺尾に逢つた。寺尾は何時もの樣に、血眼になつて、何か探してゐた。代助は其樣子を見て、例の如く皮肉で持ち切る氣にもなれなかつた。飜譯だらうが燒き直しだらうが、生きてゐるうちは何處迄も遣る覺悟だから、寺尾の方がまだ自分より社會の兒らしく見えた。自分がもし失脚して、彼と同樣の地位に置かれたら、果して何の位の仕事に堪へるだらうと思ふと、代助は自分に對して氣の毒になつた。さうして、自分が遠からず、彼よりも甚く失脚するのは、殆ど未發の事實の如く確かだと諦めてゐたから、彼は侮蔑の眼を以て寺尾を迎へる譯には行かなかつた。

寺尾は、此間の飜譯を漸くの事で月末迄に片附けたら、本屋の方で、都合が悪いから秋迄出版を見合はせると云ひ出したので、すぐ勞力を金に換算する事が出來ずに、困つた結果遣つて來たのであつた。では書肆と契約なしに手を着けたのかと聞くと、全く左樣でもないらしい。と云つて、本屋の方が丸で約束を無視した樣にも云はない。要するに曖昧であつた。たゞ困つてゐる事丈は事實らしかつた。けれども斯う

云ふ手違ひに慣れ拔いた寺尾は、別に德義問題として誰にも不滿を抱いてゐる樣には見えなかつた。失敬だとか怪しからんと云ふのは、たゞ口の先許りで、腹の中の屈託は、全然飯と肉に集注してゐるらしかつた。

代助は氣の毒になつて、當座の經濟に幾分の補助を與へた。寺尾は感謝の意を表して歸つた。歸る前に、實は本屋からも少しは前借りはしたんだが、それは疾の昔に使つて仕舞つたんだと自白した。寺尾の歸つたあとで、代助はあゝ云ふのも一種の人格だと思つた。たゞ斯う樂に活計してゐたつて決してなれる譯のものぢやない。今の所謂文壇が、あゝ云ふ人格を必要と認めて、自然に產み出した程、今の文壇は悲しむべき狀況の下に呻吟してゐるんではなからうかと考へて茫乎した。

代助は其晚自分の前途をひどく氣に掛けた。もし父から物質的に供給の道を鎖された時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑つた。もし筆を執つて寺尾の眞似さへ出來なかつたなら、彼は當然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。

彼は眼を開けて時々蚊帳の外に置いてある洋燈を眺めた。夜中に燐寸を擦つて煙草を吹かした。寐返りを何遍も打つた。固より寐苦しい程暑い晚ではなかつた。雨が又ざあ／＼と降つた。代助は此雨の音で寐附くかと思ふと、又雨の音で不意に眼を覺ました。夜は半醒半睡のうちに明け離れた。

定刻になつて、代助は出掛けた。足駄穿きで雨傘を提げて電車に乘つたが、一方の窓が締め切つてある上に、革紐にぶら下がつてゐる人が一杯なので、しばらくすると胸がむかついて、頭が重くなつた。睡眠不足が影響したらしく思はれるので、手を窮屈に伸ばして、自分の後丈を開け放つた。雨は容赦なく襟か

ら帽子に吹き附けた。二三分の後隣の人の迷惑さうな顏に氣が附いて、又元の通りに硝子窓を上げた。硝子の表側には、彈けた雨の珠が溜まつて、往來が多少歪んで見えた。代助は首から上を摸ち出して眼を外面に着けながら、幾たびか自分の眼を擦つた。然し何遍擦つても、世界の恰好が少し變つて來たと云ふ自覺が取れなかつた。硝子を通して斜に遠方を透かして見るときは猶左樣いふ感じがした。

辨慶橋で乘り換へてからは、人もまばらに、雨も小降りになつた。頭も樂に濡れた世の中を眺める事が出來た。けれども機嫌の惡い父の顏が、色々な表情を以て彼の腦髓を刺激した。想像の談話さへ明らかに耳に響いた。

玄關を上がつて、奧へ通る前に、例の如く一應嫂に逢つた。嫂は、

「鬱陶しい御天氣ぢやありませんか」と愛想よく自分で茶を汲んで呉れた。然し代助は飮む氣にもならなかつた。

「御父さんが待つて御出でゞせうから、一寸行つて話しをして來ませう」と立ち掛けた。嫂は不安らしい顏をして、

「代さん、成らう事なら、年寄に心配を掛けない樣になさいよ。御父さんだつて、もう長い事はありませんから」と云つた。代助は梅子の口から、こんな陰氣な言葉を聞くのは始めてであつた。不意に穴倉へ落ちた樣な心持がした。

父は煙草盆を前に控へて、俯向いてゐた。代助の足音を聞いても顏を上げなかつた。代助は父の前へ出て、丁寧に御辭儀をした。定めて六づかしい眼付をされると思ひの外、父は存外穩やかなもので、

「降るのに御苦勞だつた」と勞つて吳れた。其時始めて氣が附いて見ると、父の頰が何時の間にかぐつと痩けてゐた。元來が肉の多い方だつたので、此變化が代助には餘計目立つて見えた。代助は覺えず、

「何うか爲さいましたか」と聞いた。

父は親らしい色を一寸顏に動かした丈で、別に代助の心配を物にする樣子もなかつたが、少時話してゐるうちに、

「己も大分年を取つてな」と云ひ出した。其調子が何時もの父とは全く違つてゐたので、代助は最前嫂の云つた事を愈重く見なければならなくなつた。

父は年の所爲で健康の衰へたのを理由として、近々實業界を退く意志のある事を代助に洩らした。けれども今は日露戰爭後の商工業膨脹の反動を受けて、自分の經營にかゝる事業が不景氣の極端に達してゐる最中だから、此難關を漕ぎ拔けた上でなくては、無責任の非難を免かれる事が出來ないので、當分已むを得ずに辛抱してゐるより外に仕方がないのだと云ふ事情を委しく話した。代助は父の言葉を至極尤もだと思つた。

父は普通の實業なるものゝ困難と危險と繁劇と、それ等から生ずる當事者の心の苦痛及び緊張の恐るべきを說いた。最後に地方の大地主の、一見地味であつて、其實自分等よりはずつと鞏固の基礎を有して居る事を述べた。さうして、此比較を論據として、新たに今度の結婚を成立させようと力めた。

「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大變な便利で、且此際甚だ必要ぢやないか」と云つた。代助は、父

としては寧ろ露骨過ぎる此政略的結婚の申し出に對して、今更驚く程、始めから父を買ひ被つてはゐなかつた。最後の會見に、父の從來の假面を脱いで掛かつたのを、寧ろ快く感じた。彼自身も、斯んな意味の結婚を敢てし得る程度の人間だと自ら見積つてゐた。

其上父に對して何時にない同情があつた。其顔、其聲、其の代助を動かさうとする努力、凡てに老後の憐れを認める事が出來た。代助はこれをも、父の策略とは受取り得なかつた。私は何うでも宜う御座いますから、貴方の御都合の好い樣に御極めなさいと云ひたかつた。

けれども三千代と最後の會見を遂げた今更、父の意に叶ふ樣な當座の孝行は代助には出來かねた。彼は元來が何方附かずの男であつた。誰の命令も文字通りに拜承した事のない代りには、誰の意見にも露に抵抗した試しがなかつた。解釋のしやうでは、策士の態度とも取れ、優柔の生れ付きとも思はれる遣り口であつた。彼自身さへ、此二つの非難の何れかを聞いた時に、左樣かも知れないと、腹の中で首を捩らぬ譯には行かなかつた。然し其原因の大部分は策略でもなく、優柔でもなく、寧ろ彼に融通の利く兩つの眼が附いてゐて、雙方を一時に見る便宜を有してゐたからであつた。かれは此能力の爲に、今日迄一圖に物に向つて突進する勇氣を挫かれた。即かず離れず現状に立ち竦んでゐる事が屢あつた。此現状維持の外觀が、思慮の缺乏から生ずるのでなくて、却て明白な判斷に本づいて起ると云ふ事實は、彼が犯すべからざる敢爲の氣性を以て、彼の信ずる所を斷行した時に、彼自身にも始めて解つたのである。三千代の場合は、即ち其適例であつた。

彼は三千代の前に告白した己を、父の前で白紙にしようとは想ひ到らなかつた。同時に父に對しては、

心から氣の毒であつた。平生の代助が此際に執るべき方針は云はずして明らかであつた。三千代との關係を撤回する不便なしに、父に滿足を與へる爲の結婚を承諾するに外ならなかつた。代助は斯くして雙方を調和する事が出來た。何方附かずに眞中へ立つて、煮え切らずに前進する事は容易であつた。けれども、今の彼は、不斷の彼とは趣を異にしてゐた。再び半身を埒外に擬て、餘人と握手するのは既に遲かつた。彼は三千代に對する自己の責任を夫程深く重いものと信じてゐた。彼の信念は半ば頭の判斷から來た。半ば心の憧憬から來た。二つのものが大きな濤の如くに彼を支配した。彼は平生の自分から生れ變つた樣に父の前に立つた。

彼は平生の代助の如く、成る可く口數を利かずに控へてゐた。父から見れば何時もの代助と異なる所はなかつた。代助の方では却て父の變つてゐるのに驚いた。實は此間から幾度も會見を謝絶されたのも、自分が父の意志に背く恐れがあるから、父の方でわざと、延ばしたものと推してゐた。今日逢つたら、定めて苦い顏をされる事と覺悟を極めてゐた。ことによれば、頭から叱り飛ばされるかも知れないと思つた。代助には寧ろ其方が都合が好かつた。三分の一は、父の暴怒に對する自己の反動を、心理的に利用して、判然斷らうと云ふ下心さへあつた。代助は父の樣子、父の言葉遣ひ、父の主意、凡てが豫期に反して、自分の決心を鈍らせる傾向に出たのを心苦しく思つた。けれども彼は此心苦しさにさへ打ち勝つべき決心を蓄へた。

「貴方の仰しやる所は一々御尤もだと思ひますが、私には結婚を承諾する程の勇氣がありませんから、斷るより外に仕方がなからうと思ひます」ととう／＼云つて仕舞つた。其時父はたゞ代助の顏を見てゐた。

良あつて、
「勇氣が要るのかい」と手に持つてゐた煙管を疊の上に放り出した。代助は膝頭を見詰めて默つてゐた。
「當人が氣に入らないのかい」と父が又聞いた。代助は猶返事をしなかつた。彼は今迄父に對して己の四半分も打ち明けてはゐなかつた。その御蔭で父と平和の關係を漸く持續して來た。けれども三千代の事丈は始めから決して隱す氣はなかつた。自分の頭の上に當然落ちかゝるべき結果を、策で避ける卑怯が面白くなかつたからである。彼はたゞ自白の期に達してゐないと考へた。從つて三千代の名は丸で口へは出さなかつた。父は最後に、
「ぢや何でも御前の勝手にするさ」と云つて苦い顏をした。
代助も不愉快であつた。然し仕方がないから、禮をして父の前を退らうとした。ときに父は呼び留めて、
「己の方でも、もう御前の世話はせんから」と云つた。座敷へ歸つた時、梅子は待ち構へた樣に、
「何うなすつて」と聞いた。代助は答へ樣もなかつた。

十六

翌日眼が覺めても代助の耳の底には父の最後の言葉が鳴つてゐた。彼は前後の事情から、平生以上の重みを其内容に附着しなければならなかつた。少なくとも、自分丈では、父から受ける物質的の供給がもう絶えたものと覺悟する必要があつた。代助の尤も恐るゝ時期は近づいた。父の機嫌を取り戻すには、今度の結婚を斷るにしても、あらゆる結婚に反對してはならなかつた。あらゆる結婚に反對しても、父を首肯

かせるに足る程の理由を、明白に述べなければならなかつた。代助に取つては二つのうち何れも不可能であつた。人生に對する自家の哲學の根本に觸れる問題に就いて、父を欺くのは猶更不可能であつた。代助は昨日の會見を囘顧して、凡てが進むべき方向に進んだとしか考へ得なかつた。けれども恐ろしかつた。自己が自己に自然な因果を發展させながら、其因果の重みを背中に負つて、高い絶壁の端迄押し出された樣な心持であつた。

彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならないと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云ふ文字がある丈で、職業其物は體を具へて現はれて來なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業を想ひ浮かべて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く丈で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出來なかつた。彼には世間が平たい複雜な色分けの如くに見えた。さうして彼自身は何等の色を帶びてゐないとしか考へられなかつた。

凡ての職業を見渡した後、彼の眼は漂泊者の上に來て、そこで留まつた。彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷ふ乞食の群の中に見出だした。生活の墮落は精神の自由を殺す點に於て彼の尤も苦痛とする所であつた。彼は自分の肉體に、あらゆる醜穢を塗り附けた後、自分の心の状態が如何に落魄するだらうと考へて、ぞつと身振ひをした。

此落魄のうちに、彼は三千代を引つ張り廻さなければならなかつた。三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至る迄彼女に對して責任を負ふ積りであつた。けれども相當の地位を有つてゐる人の不實と、零落の極に達した人の親切とは、結果に於て大した差違はないと今更ながら思は

れた。死ぬ迄三千代に對して責任を負ふと云ふのは、負ふ目的があるといふ迄で、負つた事實には決してなれなかつた。代助は悄然として黒内障に罹つた人の如くに自失した

彼は又三千代を訪ねた。三千代は前日の如く靜かに落ち着いてゐた。微笑と光輝とに滿ちてゐた。春風はゆたかに彼女の眉を吹いた。代助は三千代が己れを擧げて自分に信頼してゐる事を知つた。其證據を又眼のあたりに見た時、彼は愛憐の情と氣の毒の念に堪へなかつた。さうして自己を惡漢の如くに呵責した。思ふ事は全く云ひそびれて仕舞つた。歸るとき、

「又都合して宅へ來ませんか」と云つた。三千代はえゝと首肯いて微笑した。代助は身を切られる程酷かつた。

代助は此間から三千代の訪問する每に、不愉快ながら平岡の居ない時を擇まなければならなかつた。始めはそれを左程にも思はなかつたが、近頃では不愉快と云ふよりも寧ろ、行き惡い度が日每に強くなつて來た。其上留守の訪問が重なれば、下女に不審を起させる恐れがあつた。氣の所爲か、茶を運ぶ時にも、妙に疑り深い眼附をして、見られる樣でならなかつた。然し三千代は全く知らぬ顏をしてゐた。少なくとも上部丈は平氣であつた。

平岡との關係に就いては、無論詳しく尋ねる機會もなかつた。會に一言二言夫となく問を掛けて見ても、三千代は寧ろ應じなかつた。たゞ代助の顏を見れば、見てゐる其間丈の嬉しさに溺れ盡すのが自然の傾向であるかの如くに思はれた。前後を取り圍む黒い雲が、今にも逼つて來はしまいかと云ふ心配は、陰ではいざ知らず、代助の前には影さへ見せなかつた。三千代は元來神經質の女であつた。昨今の態度は、何

うしても此方の手際ではないと思ふと、三千代の周圍の事情が、まだ大程險惡に近づかない證據になるよりも、自分の責任が一層重くなつたのだと解釋せざるを得なかつた。

「すこし又話したい事があるから來て下さい」と前よりは稍眞面目に云つて代助は三千代と別れた。

中二日置いて三千代が來る迄、代助の頭は何等の新しい路を開拓し得なかつた。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で燒き附けられてゐた。それを押し退けると、物質的供給の杜絕がしきりに踊り狂つた。それが影を隱すと、三千代の未來が凄じく荒れた。彼の頭には不安の旋風が吹き込んだ。三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回轉した。其結果として、彼の周圍が悉く回轉しだした。彼は船に乘つた人と一般であつた。回轉する頭と、回轉する世界の中に、依然として落ち附いてゐた。

青山の宅からは何の消息もなかつた。代助は固より夫を豫期してゐなかつた。彼は力めて門野を相手にして他愛ない雜談に耽つた。門野は此暑さに自分の身體を持ち扱つてゐる位、用のない男であつたから、頗る得意に代助の思ふ通り口を動かした。それでも話し草臥れると、

「先生、將棋は何うです」抔と持ち掛けた。夕方には庭に水を打つた。二人共跣足になつて、手桶を一杯宛持つて、無分別に其所等を濡らして歩いた。門野は隣の梧桐の天邊迄水にして御目にかけると云つて、手桶の底を振り上げる拍子に、滑つて尻持を突いた。白粉草が垣根の傍で花を着けた。手水鉢の陰に生えた秋海棠の葉が著しく大きくなつた。梅雨は漸く晴れて、晝は雲の峯の世界となつた。強い日は大きな空を透き通す程燒いて、空一杯の熱を地上に射り附ける天氣となつた。

代助は夜に入つて頭の上の星ばかり眺めてゐた。朝は書齋に這入つた。二三日は朝から蟬の聲が聞こえ

る樣になつた。風呂場へ行つて、度々頭を冷やした。すると門野がもう好い時分だと思つて、

「何うも非常な暑さですな」と云つて、這入つて來た。代助は斯う云ふ上の空の生活を二日程送つた。三日目の日盛りに、彼は書齋の中から、ぎら／＼する空の色を見詰めて、上から吐き下ろす焰の息を嗅いだ時に、非常に恐ろしくなつた。それは彼の精神が此猛烈なる氣候から永久の變化を受けつゝあると考へた爲であつた。

三千代は此暑さを冒して前日の約を履んだ。代助は女の聲を聞き附けた時、自分で玄關迄飛び出した。三千代は傘をつぼめて、風呂敷包みを抱へて、格子の外に立つてゐた。不斷着の儘宅を出たと見えて、質素な白地の浴衣の袂から手帛を出し掛けた所であつた。代助は其姿を一目見た時、運命が三千代の未來を切り拔いて、意地惡く自分の眼の前に持つて來た樣に感じた。われ知らず、笑ひながら、

「馳落でもしさうな風ぢやありませんか」と云つた。三千代は穩やかに、

「でも買物をした序でないと上がり惡いから」と眞面目な答をして、代助の後に跟いて奧迄這入つて來た。代助はすぐ團扇を出した。照り附けられた所爲で三千代の頰が心持よく輝いた。何時もの疲れた色は、何處にも見えなかつた。眼の中にも若い光澤が宿つてゐた。代助は生々した此美しさに、自己の感覺を溺らして、しばらくは何事も忘れて仕舞つた。が、やがて、此美しさを冥々の裡に打崩しつゝあるものは自分であると考へ出したら悲しくなつた。彼は今日も此美しさの一部分を曇らす爲に三千代を呼んだに違ひなかつた。

代助は幾度か己を語る事を躊躇した。自分の前に、これ程幸福に見える若い女を、眉一筋にしろ心配の

宙に動いたのは、代助から云ふと非常な不徳義であつた。もし三千代に対する義務の心が、彼の胸のうちに鋭く働いてゐなかつたなら、彼は夫から以後の事情を打ち明ける事の代りに、先達ての告白を再び同じ言葉のうちに繰り返して、単純なる愛の快感の下に、一切を放擲して仕舞つたかも知れなかつた。

代助は漸くにして思ひ切つた。

「其後貴方と平岡との関係は別に変りはありませんか」

三千代は此問を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて、構はないわ」

「貴方は夫程僕を信用してゐるんですか」

「信用してゐなくつちや、斯うして居られないぢやありませんか」

代助は眩しさうに、熱い鏡の様な遠い空を眺めた。

「僕にはそれ程信用される資格がなささうだ」と苦笑しながら答へたが、頭の中は熱病の如く火照つてゐた。然し三千代は左程に気にも掛けなかつたと見えて、何故とも聞き返さなかつた。たゞ簡単に、

「まあ」とわざとらしく驚いて見せた。代助は真面目になつた。

「僕は白状するが、実を云ふと、平岡君より頼りにならない男なんですよ。買被つてゐられると困るから、みんな話して仕舞ふが」と前置をして、夫から自分と父との今日迄の関係を詳しく述べた上、

「僕の身分は是から先何うなるか分らない。少なくとも当分は一人前ぢやない。半人前にもなれない。だから」と云ひ淀んだ。

「だから、何うなさるんです」
「だから、僕の思ふ通り、貴方に對して責任が盡くせないだらうと心配してゐるんです」
「責任つて、何んな責任なの。もつと判然仰しやらなくつちや解らないわ」
代助は平生から物質的状況に重きを置くの結果、たゞ貧苦が愛人の滿足に價しないと云ふ事丈を知つてゐた。だから富が三千代に對する責任の一つと考へたのみで、夫より外に明らかな觀念は丸で持つてゐなかつた。
「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」
「そんなものは欲しくないわ」
「欲しくないと云つたつて、是非必要になるんです。是から先僕が貴方と何んな新しい關係に移つて行くにしても、物質上の供給が半分は解決者ですよ」
「解決者でも何でも、今更左樣な事を氣にしたつて仕方がないわ」
「口ではさうも云へるが、いざと云ふ場合になると困るのは眼に見えてゐます」
三千代は少し色を變へた。
「今貴方の御父樣の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてゐるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾うから氣が附いていらつしやる筈だと思ひますわ」
代助は返事が出來なかつた。頭を抑へて、
「少し腦が何うかしてゐるんだ」と獨り言の樣に云つた。三千代は少し涙ぐんだ。

「もし、夫が氣になるなら、私の方は何うでも宜う御座んすから、御父樣と仲直りをなすつて、今迄通り御交際になつたら好いぢやありませんか」

代助は急に三千代の手頸を握つてそれを振る樣に力を入れて云つた。――

「そんな事を爲る氣なら始めから心配をしやしない。たゞ氣の毒だから貴方に詫まるんです」

「詫まるなんて」と三千代は聲を顫はしながら遮つた。「私が原因で左樣なつたのに、貴方に詫まらしちや濟まないぢやありませんか」

三千代は聲を立てゝ泣いた。代助は慰撫める樣に、

「ぢや我慢しますか」と聞いた。

「我慢はしません。當り前ですもの」

「是から先まだ變化がありますよ」

「ある事は承知してゐます。何んな變化があつたつて構やしません。私は此間から、――此間から私は、若しもの事があれば、死ぬ積りで覺悟を極めてるるんですもの」

代助は慄然として戰いた。

「貴方に是から先何うしたら好いと云ふ希望はありませんか」と聞いた。

「希望なんか無いわ。何でも貴方の云ふ通りになるわ」

「漂泊――」

「漂泊でも好いわ。死ねと仰しやれば死ぬわ」

代助は又竦とした。
「此儘では」
「此儘でも構はないわ」
「平岡君は全く氣が附いてゐない樣ですか」
「氣が附いてゐるかも知れません。けれども私もう度胸を据ゑてゐるから大丈夫なのよ。だつて何時殺されたつて好いんですもの」
「さう死ぬの殺されるのと安つぽく云ふものぢやない」
「だつて、放つて置いたつて、永く生きられる身體ぢやないぢやありませんか」
代助は硬くなつて、竦むが如く三千代を見詰めた。三千代は歇私的里の發作に襲はれた樣に思ひ切つて泣いた。
一仕切り經つと、發作は次第に收まつた。後は例の通り靜かな、しとやかな、奥行のある、美しい女になつた。眉のあたりが殊に晴れ〴〵しく見えた。其時代助は、
「僕が自分で平岡君に逢つて解決を附けても宜う御座んすか」と聞いた。
「そんな事が出來て」と三千代は驚いた樣であつた。代助は、
「出來る積りです」と確り答へた。
「ぢや、何うでも」と三千代が云つた。
「さうしませう。二人が平岡君を欺いて事をするのは可くない樣だ。無論事實を能く納得出來る樣に話

すべてゞす。さうして、僕の悪い所は[illegible]んと謝つて、其結果は僕の思ふ樣に行かないかも知れない。けれども何う間違つたつて、そんな無暗な事はしない樣にする積りです。斯う中途半端にしてゐては、御互に苦痛だし、平岡君に對しても悪い。たゞ僕が思ひ切つて左樣すると、あなたが、嘸平岡君に面目ないだらうと思つてね。其所が御氣の毒なんだが、然し面目ないと云へば、僕だつて面目ないんだから。自分の所爲に對しては、如何に面目なくつても、徳義上の責任を負ふのが當然だとすれば、外に何等の利益がないとしても、御互の間に有つた事丈は平岡君に話さなければならないでせう。其上今の場合では是からの處置を附ける大事の告白なんだから、猶更必要になると思ひます」

「能く解りましたわ。何うせ間違へば死ぬ積りなんですから」

「死ぬなんて。――よし死なないにしたつて、是から先何の位迫害があるか――又そんな危險がある位なら、なんで平岡君に僕から話すもんですか」

三千代は又泣き出した。

「ぢや能く詫ります」

代助は日の傾くのを待つて三千代を歸した。然し此前の時の樣に送つては行かなかつた。一時間程書齋の中で蟬の聲を聞いて暮らした。三千代に逢つて自分の未來を打ち明けてから、氣分が晴々した。平岡へ手紙を書いて、會見の都合を問ひ合はせようとして、筆を執つて見たが、急に責任の重いのが苦になつて、拜啓以後を書き續ける勇氣が出なかつた。卒然、襯衣一枚になつて素足で庭へ飛び出した。三千代が歸る時は正體なく午睡をしてゐた門野が、

「まだ早いぢやありませんか。日が當たつてゐますぜ」と云ひながら、坊主頭を兩手で抑へて緣端にあらはれた。代助に返事もせずに、庭の隅へ潛り込んで竹の落葉を前の方へ掃き出した。門野も已むを得ず着物を脫いで下りて來た。

狹い庭だけれども、土が乾いてゐるので、たつぷり濡らすには大分骨が折れた。代助は腕が痛いと云つて、好い加減にして足を拭いて上がつた。煙草を吹いて、緣側に休んでゐると、門野が其姿を見て、

「先生心臟の鼓動が少々狂やしませんか」と下から調戲つた。

晚には門野を連れて、神樂坂の緣日へ出掛けて、秋草を二鉢三鉢買つて來て、露の下りる軒の外へ並べて置いた。夜は深く空は高かつた。星の色は濃く繁く光つた。

代助は其晚わざと雨戶を引かずに寐た。無用心と云ふ恐れが彼の頭には全く無かつた。彼は洋燈を消して、蚊帳の中に獨り寐轉びながら、暗い所から暗い空を透かして見た。頭の中には晝の事が鮮やかに輝いた。もう二三日のうちには最後の解決が出來ると思つて幾度か胸を躍らせた。が、そのうち大いなる空と、大いなる夢のうちに、吾知らず吸收された。

翌日の朝彼は思ひ切つて平岡に手紙を出した。たゞ、内々で少し話したい事があるが、君の都合を知らせて貰ひたい。此方は何時でも差支へない。と書いた丈だが、彼はわざとそれを封書にした。狀袋の糊を濕して、赤い切手をとんと張つた時には、愈クライシスに證券を與へた樣な氣がした。彼は門野に云ひ附けて、此運命の使を郵便函に投げ込ました。手渡しにする時、少し手先が顫へたが、渡したあとでは却て茫然として自失した。三年前三千代と平岡の間に立つて斡旋の勞を取つた事を追想すると丸で夢の樣であ

つた。

翌日は平岡の返事を心待ちに待ち暮らした。其明くる日も当てにして終日宅にゐた。三日四日と経つた。が、平岡からは何の便りもなかつた。其中例月の通り、青山へ金を貰ひに行くべき日が来た。代助の懐中は甚だ手薄になつた。代助は此前父に逢つた時以後、もう宅からは補助を受けられないものと覚悟を極めてゐた。今更平気な顔をして、のそ〳〵出掛けて行く了見は丸でなかつた。何二ヶ月や三ヶ月は、書物か衣類を売り払つても何うかなると腹の中で高を括つて落ち付いてゐた。事の落着次第緩くり職業を探すと云ふ分別もあつた。彼は平生から人のよく口癖にする、人間は容易な事で餓死するものぢやない、何うにかなつて行くものだと云ふ半諺の真理を、経験しない前から信じ出した。

五日目に暑さを冒して、電車へ乗つて、平岡の社迄出掛けて行つて見て、平岡は二三日出社しないと云ふ事が分つた。代助は表へ出て薄汚ない編輯局の窓を見上げながら、足を運ぶ前に、一応電話で聞き合はすべき筈だつたと悟つた。先達て出した手紙は、果して平岡の手に渡つたかどうか、夫さへ疑はしくなつた。代助はわざと新聞社宛にして出したからである。帰りに神田へ廻つて、買ひつけの古本屋に、売り払ひたい不用の書物があるから、見に来てくれろと頼んだ。

其晩は水を打つ勇気も失せて、ぼんやり、白い網襯衣を着た門野の姿を眺めてゐた。

「先生今日は御疲れですか」と門野が馬尻を鳴らしながら云つた。代助の胸は不安に圧されて、明らかな返事も出なかつた。夕食のとき、飯の味は殆んどなかつた。呑み込む様に咽喉を通して、箸を投げた。門野を呼んで、

「君、平岡の所へ行つてね、先達ての手紙は御覽になりましたか。御覽になつたら、御返事を願ひますつて、返事を聞いて來て呉れ玉へ」と頼んだ。猶要領を得ぬ恐れがありさうなので、先達てこれ〳〵の手紙を新聞社の方へ出して置いたのだと云ふ事迄説明して聞かした。

門野を出した後で、代助は縁側に出て、椅子に腰を掛けた。門野の歸つた時は、洋燈を吹き消して、暗い中に凝としてゐた。

「行つて參りました」と挨拶をした。「平岡さんは御出でゝした。手紙は御覽になつたさうです。明日の朝行くからといふ事です」

「左樣かい、御苦勞さま」と代助は答へた。

「實はもつと早く出るんだつたが、うちに病人が出來たんで遲くなつたから、宜しく云つてくれろと云はれました」

「病人？」と代助は思はず問ひ返した。門野は暗い中で、

「えゝ、何でも奧さんが御惡い樣です」と答へた。門野の着てゐる白地の浴衣丈がぼんやり代助の眼に入つた。夜の明りは二人の顏を照らすには餘り不充分であつた。代助は掛けてゐる籐椅子の肱掛を兩手で握つた。

「餘程惡いのか」と強く聞いた。

「何うですか、能く分りませんが。何でもさう輕さうでもない樣でした。然し平岡さんが明日御出でになられる位なんだから、大した事ぢやないでせう」

「此間から奥さんの事で貴方も嘸御迷惑なすつたらう。此方でも御父樣始め兄さんや、私は隨分心配をしました。けれども其甲斐もなく先達て御出での時、とう／＼御父さんに斷然御斷りなすつた御樣子、甚だ殘念ながら、今では仕方がないと諦めてゐます。けれども其節御父樣は、もう御前の事は構はないから、其積りでゐろと御怒りなされた由、後で承りました。其後貴方が御出でにならないのも、全く其爲ぢやなからうかと思つてゐます。御月のものを上げる日には何うかとも思ひましたが、矢張り御出でにならないので、心配してゐます。御父さんは打遣つて置けと仰しやいます。兄さんは例の通り呑氣で、困つたら其内來るだらう。其時親爺によく詫らせるが可い。もし來ない樣だつたら、おれの方から行つてよく異見してやると云つてゐます。けれども、結婚の事は三人とももう斷念してゐるんですから、其點では御迷惑になる樣な事はありますまい。尤も御父さんは未だ怒つて御出での樣子です。私の考へでは當分元の通りになる事は、六づかしいと思ひます。それを考へると、貴方が入らつしやらない方が却つて貴方の爲に宜いかも知れません。たゞ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、さう急に自分で御金を取る氣遣ひはなからうと思ふと、差し當り御困りになるのが眼の前に見える樣で、御氣の毒で堪りません。で、私の取計らひで例月分を送つて上げるから、御受取りの上は是で來月迄持ち應へて入らつしやい。其内には御父さんの御機嫌も直るでせう。又兄さんからも、さう云つて頂く積りです。私も好い折があれば、御詫びをして上げます。それ迄は今迄通り遠慮して入らつしやる方が宜う御座います。……」

　まだ後が大分あつたが、女の事だから、大抵は重複に過ぎなかつた。代助は中に這入つてゐた小切手を引き拔いて、手紙丈をもう一遍よく讀み直した上、丁寧に元の如くに卷き收めて、無言の感謝を改めて嫂

に致した。梅子よりと書いた字は寧ろ拙であつた。手紙の體の言文一致なのは、かねて代助の勸めた通りを用ひたのであつた。

代助は洋燈の前にある封筒を、猶つく〲と眺めた。古い壽命が又一ヶ月延びた。晩かれ早かれ、自己を新にする必要のある代助には、嫂の志は難有いにもせよ、却て毒になる計りであつた。たゞ平岡と事を決する前は、麺麭の爲に働く事を肯はない心を持つてゐたから、嫂の贈物が、此際糧食としてことに彼には貴かつた。

其晩も蚊帳へ這入る前にふつと、洋燈を消した。雨戸は門野が立てに來たから、故障も云はずに、其儘にして置いた。硝子戸だから、戸越しにも空は見えた。たゞ昨夕より暗かつた。曇つたのかと思つて、わざ〲椽側迄出て、透かす樣にして軒を仰いだら、光るものが筋を引いて斜に空を流れた。代助は又蚊帳を捲くつて這入つた。寐附かれないので團扇をはた〲云はせた。

家の事は左のみ氣に掛からなかつた。職業もなるが儘になれと度胸を据ゑた。たゞ三千代の病氣と、其原因と其結果が、ひどく代助の頭を惱ました。それから平岡との會見の樣子も、樣々に想像して見た。それも一方ならず彼の腦髓を刺激した。平岡は明日の朝九時頃あんまり暑くならないうちに來るといふ傳言であつた。代助は固より、平岡に向つて何う切り出さうと云ふ形式的の文句を考へる男ではなかつた。話す事は始めから極まつてゐた。唯話す順序は其時の模樣次第だから、決して心配にはならなかつたが、たゞ成る可く穩やかに自分の思ふ事が向ふに徹する樣にしたかつた。それで過度の興奮を忌んで、一夜の安靜を切に貴んだ。成るべく熟睡したいと心掛けて瞼を合はせたが、生憎眼が冴えて昨夕よりは却て寐苦しかつ

た。其内夏の夜がぼうと白み渡つて來た。代助は堪りかねて跳ね起きた。跣足で庭先へ飛び下りて冷たい露を存分に踏んだ。夫から又緣側の籐椅子に倚つて、日の出を待つてゐるうちに、うと〳〵した。門野が寐惚け眼を擦りながら、雨戶を開けに出た時、代助ははつとして、此假睡から覺めた。世界の半面はもう赤い日に洗はれてゐた。

「大變御早うがすな」と門野が驚いて云つた。代助はすぐ風呂場へ行つて水を浴びた。朝飯は食はずに只紅茶を一杯飮んだ。新聞を見たが、殆ど何か書いてあるか解らなかつた。讀むに從つて、讀んだ事が群がつて消えて行つた。たゞ時計の針ばかりが氣になつた。平岡が來る迄にはまだ二時間あまりあつた。代助は其間を何うして暮らさうかと思つた。凝としてはゐられなかつた。けれども何をしても手に附かなかつた。責めて此二時間をぐつと寐込んで、眼を開けて見ると、自分の前に平岡が來てゐる樣にしたかつた。仕舞に何か用事を考へ出さうとした。不圖机の上に乘せてあつた梅子の封筒が眼に附いた。代助は是だと思つて、強ひて机の前に坐つて、嫂へ謝狀を書いた。成るべく丁寧に書く積りであつたが、狀袋へ入れて宛名迄認めて仕舞つて、時計を眺めると、たつた十五分程しか經つてゐなかつた。代助は席に着いた儘、安からぬ眼を空に据ゑて、頭の中で何か搜す樣に見えた。が、急に起つた。

「平岡が來たら、すぐ歸るからつて、少し待たして置いて吳れ」と門野に云ひ置いて表へ出た。強い日が正面から射竦める樣な勢ひで、代助の顏を打つた。代助は步きながら絕えず眼と眉を動かした。牛込見附を這入つて、飯田町を拔けて、九段坂下へ出て、昨日寄つた古本屋迄來て、

「昨日不要の本を取りに來て吳れと賴んで置いたが、少し都合があつて見合はせる事にしたから、其積

りで一と晩でたつた。帰りには、暑さが余り酷かつたので、電車で飯田橋へ回つて、それから揚場を筋違に毘沙門前へ出た。

家の前には車が一台下りてゐた。玄関に靴が揃へてあつた。代助は門野の注意を待たないで、平岡の来てゐる事を悟つた。汗を拭いて、着物を洗ひ立ての浴衣に改めて、座敷へ出た。

「いや、御使でね」と平岡が云つた。矢張り洋服を着て、蒸される様に扇を使つた。

「何うも暑い所を」と代助も自ら表立つた言葉遣ひをしなければならなかつた。

二人はしばらく時候の話しをした。代助はすぐ三千代の様子を聞いて見たかつた。然しそれが何う云ふものか聞き悪かつた。其内通例の挨拶も済んで仕舞つた。話しは呼び寄せた方から、切り出すのが至当であつた。

「三千代さんは病気だつてね」

「うん。夫で社の方も二三日休ませられた様な訳でね。つい君の所へ返事を出すのも忘れて仕舞つた」

「そりや何うでも構はないが、三千代さんはそれ程悪いのかい」

平岡は断然たる答を一言葉でなし得なかつた。さう急に何うの斯うのといふ心配もない様だが、決して軽い方ではないといふ意味を手短かに述べた。

此前暑い盛りに、神楽坂へ買物に出た序に、代助の所へ寄つた明日の朝、三千代は平岡の社へ出掛ける世話をしてゐながら、突然夫の襟飾を持つた儘卒倒した。平岡も驚いて、自分の支度は其儘に三千代を介抱した。十分の後三千代はもう大丈夫だから社へ出て呉れと云ひ出した。口元には微笑の影さへ見えた。

横にはなつてゐたが、心配する程の樣子もないので、もし惡い樣だつたら醫者を呼ぶ樣に、必要があつたら社へ電話を掛ける樣に云ひ置いて平岡は出勤した。其晩は遲く歸つた。三千代は心持が惡いといつて先へ寢てゐた。何んな具合かと聞いても、判然した返事をしなかつた。翌日朝起きて見ると三千代の色澤が非常に可くなかつた。平岡は寧ろ驚いて醫者を迎へた。醫者は三千代の心臟を診察して眉をひそめた。卒倒は貧血の爲だと云つた。隨分強い神經衰弱に罹つてゐると注意した。平岡は夫から社を休んだ。本人は大丈夫だから出て吳れろと賴む樣に云つたが、平岡は聞かなかつた。看護をしてから二日目の晩に、三千代が淚を流して、是非詫らなければならない事があるから、代助の所へ行つて其譯を聞いて吳れろと夫に告げた。平岡は始めて夫を聞いた時には、本當にしなかつた。腦の加減が惡いのだらうと思つて、好し好しと氣休めを云つて慰めてゐた。三日目にも同じ願ひが繰り返された。其時平岡は漸く三千代の言葉に一種の意味を認めた。すると夕方になつて、門野が代助から出した手紙の返事を聞きにわざわざ小石川迄遣つて來た。

「君の用事と三千代の云ふ事と何か關係があるのかい」と平岡は不思議さうに代助を見た。

平岡の話しは先刻から深い感動を代助に與へてゐたが、突然此思はざる問に來た時、代助はぐつと詰つた。平岡の問は實に意表に、無邪氣に、代助の胸に應へた。彼は何時になく少し赤面して俯向いた。然し再び顏を上げた時は、平生の通り靜かな惡びれない態度を回復してゐた。

「三千代さんの君に詫る事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる關係があるだらう。或は同じ事かも知れない。僕は何うしても、それを君に話さなければならない。話す義務があると思ふから話すん

だから、今日迄の友誼に免じて、快く僕に僕の義務を果たさして呉れ給へ」
「何だい。改まつて」と平岡は始めて眉を正した。
「いや前置をすると言譯らしくなつて不可ないから、僕も成る可くなら率直に云つて仕舞ひたいのだが、少し重大な事件だし、夫に習慣に反した嫌ひもあるので、若し中途で君に激されて仕舞ふと、甚だ困るから、是非仕舞迄君に聞いて貰ひたいと思つて」
「まあ何だい。其話しと云ふのは」
好奇心と共に平岡の顔が益眞面目になつた。
「其代り、みんな話した後で、僕は何んな事を君から云はれても、矢張り大人しく仕舞迄聞く積りだ」
平岡は何も云はなかつた。たゞ眼鏡の奥から大きな眼を代助の上に据ゑた。外はぎら／＼する日が照り附けて、縁側迄射返したが、二人は殆ど暑さを度外に置いた。
代助は一段聲を潜めた。さうして、平岡夫婦が東京へ來てから以來、自分と三千代との關係が何んな變化を受けて、今日に至つたかを、詳しく語り出した。平岡は堅く唇を結んで代助の一語一句に耳を傾けた。代助は凡てを語るに約一時間餘を費やした。其間に平岡から四遍程極めて單簡な質問を受けた。
「ざつと斯う云ふ經過だ」と代助の結末を附けた時、平岡はたゞ唸る様に深い溜息を以て代助に答へた。代助は非常に酷かつた。
「君の立場から見れば、僕は君を裏切りした様に當たる。怪しからん友達だと思ふだらう。左様思はれても一言もない。濟まない事になつた」

「すると君は自分のした事を惡いと思つてるんだね」
「無論」
「惡いと思ひながら今日迄歩を進めて來たんだね」と平岡は重ねて聞いた。語氣は前よりも稍切迫してゐた。
「左樣だ。だから、此事に對して、君の僕等に與へようとする制裁は潔く受ける覺悟だ。今のはたゞ事實を其儘に話した丈で、君の處分の材料にする考へだ」
平岡は答へなかつた。しばらくしてから、代助の前へ顏を寄せて云つた。
「僕の毀損された名譽が、回復出來る樣な手段が、世の中にあり得ると、君は思つてゐるのか」
今度は代助の方が答へなかつた。
「法律や社會の制裁は僕には何にもならない」と平岡は又云つた。
「すると君は當事者丈のうちで、名譽を回復する手段があるかと聞くんだね」
「左樣さ」
「三千代さんの心機を一轉して、君を元よりも倍以上に愛させる樣にして、其上僕を蛇蝎の樣に惡ませさへすれば幾分か償ひにはなる」
「夫が君の手際で出來るかい」
「出來ない」と代助は云ひ切つた。
「すると君は惡いと思つてる事を今日迄發展さして置いて、猶其惡いと思ふ方針によつて、極端迄押し

て行かうとするのぢやないか」

「矛盾かも知れない。然し夫は世間の掟と定めてある夫婦關係と、自然の事實として成り上がつた夫婦關係とが一致しなかつたと云ふ矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫る。然し僕の行爲其物に對しては矛盾も何も犯して居ない積だ」

「ぢや」と平岡は稍聲を高めた。「ぢや、僕等二人は世間の掟に叶ふ樣な夫婦關係は結べないと云ふ意見だね」

代助は同情のある氣の毒さうな眼をして平岡を見た。平岡の險しい眉が少し解けた。

「平岡君。世間から云へば、これは男子の面目に關はる大事件だ。だから君が自己の權利を維持する爲に、――故意に維持しようと思はないでも、暗に其心が働いて、自然と激して來るのは已むを得ないが、――けれども、こんな關係の起らない學校時代の君になつて、もう一遍僕の云ふ事をよく聞いて呉れないか」

平岡は何とも云はなかつた。代助も一寸控へてゐた。煙草を一吹き吹いた後で、思ひ切つて、

「君は三千代さんを愛してゐなかつた」と靜かに云つた。

「そりや」

「そりや餘計な事だけれども、僕は云はなければならない。今度の事件に就いて凡ての解決者はそれだらうと思ふ」

「君には責任がないのか」

「僕は三千代さんを愛してゐる」
「他の妻を愛する權利が君にあるか」
「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件ぢやない人間だから、心迄所有する事は誰にも出來ない。本人以外にどんなものが出て來たつて、愛情の增減や方向を命令する譯には行かない。夫の權利は其所迄は屆きやしない。だから細君の愛を他へ移さない樣にするのが、却て夫の義務だらう」
「よし僕が君の期待する通り三千代を愛してゐなかつた事が事實としても」と平岡は强ひて己を抑へる樣に云つた。拳を握つてゐた。代助は相手の言葉の盡きるのを待つた。
「君は三年前の事を覺えて居るだらう」と平岡は又句を更へた。
「三年前は君が三千代さんと結婚した時だ」
「さうだ。其時の記憶が君の頭の中に殘つてゐるか」
代助の頭は急に三年前に飛び返つた。當時の記憶が、闇を回る松明の如く輝いた。
「三千代を僕に周旋しようと云ひ出したものは君だ」
「貰ひたいと云ふ意志を僕に打ち明けたものは君だ」
「それは僕だつて忘れやしない。今に至る迄君の厚意を感謝してゐる」
平岡は斯う云つて、しばらく冥想してゐた。
「二人で、夜上野を拔けて谷中へ下りる時だつた。雨上りで谷中の下は道が惡かつた。博物館の前から話しつゞけて、あの橋の所迄來た時、君は僕の爲に泣いて呉れた」

代助は黙然としてゐた。

「僕は其時程朋友を難有いと思つた事はない。嬉しくつて其晩は少しも寐られなかつた。月のある晩だつたので、月の消える迄起きてゐた」

「僕はあの時は愉快だつた」と代助が夢の様に云つた。それを平岡は打ち切る勢ひで遮つた。――

「君は何だつて、あの時僕の為に泣いて呉れたのだ。なんだつて、僕の為に三千代を周旋しようと盟つたのだ。今日の様な事を引き起す位なら、何故あの時、ふんと云つたなり放つて置いて呉れなかつたのだ。僕は君から是程深刻な復讐を取られる程、君に向つて悪い事をした覚えがないぢやないか」

平岡は声を顫はした。代助の蒼い額に汗の珠が溜まつた。さうして訴へる如くに云つた。

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」

平岡は茫然として、代助の苦痛の色を眺めた。

「其時の僕は、今の僕でなかつた。君から話しを聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、君の望みを叶へるのが、友達の本分だと思つた。夫が悪かつた。今位頭が熟してゐれば、まだ考へ様があつたのだが、惜しい事に若かつたものだから、余りに自然を軽蔑し過ぎた。僕はあの時の事を思つては、非常な後悔の念に襲はれてゐる。自分の為ばかりぢやない。実際君の為に後悔してゐる。僕が君に対して真に済まないと思ふのは、今度の事件より寧ろあの時僕がなまじひに遣り遂げた義侠心だ。君、どうぞ勘弁して呉れ。僕は此通り自然に復讐を取られて、君の前に手を突いて詫つてゐる」

代助は涙を膝の上に零した。平岡の眼鏡が曇つた。

「どうも運命だから仕方がない」
平岡は呻吟く様な聲を出した。二人は漸く顏を見合はせた。
「善後策に就いて君の考へがあるなら聞かう」
「僕は君の前に詫つてゐる人間だ。此方から先へそんな事を云ひ出す權利はない。君の考へから聞くのが順だ」と代助が云つた。
「僕には何もない」と平岡は頭を抑へてゐた。
「では云ふ。三千代さんを吳れないか」と思ひ切つた調子に出た。
平岡は頭から手を離して、肱を棒の樣に洋卓の上に倒した。同時に、
「うん遣らう」と云つた。さうして代助が返事をし得ないうちに、又繰り返した。
「遣る。遣るが、今は遣れない。僕は君の推察通り夫程三千代を愛して居なかつたかも知れない。けれども惡んぢやゐなかつた。三千代は今病氣だ。しかも餘り輕い方ぢやない。寐てゐる病人を君に遣るのは厭だ。病氣が癒る迄君に遣れないとすれば、夫迄は僕が夫だから、夫として看護する責任がある」
「僕は君に詫つた。三千代さんも君に詫つてゐる。君から云へば二人とも、不埒な奴には相違ないが、――幾何詫つても勘辨出來んかも知れないが、――何しろ病氣をして寐てゐるんだから」
「夫は分つてゐる。本人の病氣に附け込んで僕が意趣晴らしに、虐待するとでも思つてるんだらうが、僕だつて、まさか」
代助は平岡の言葉を信じた。さうして腹の中で平岡に感謝した。平岡は次に斯う云つた。

「僕は今日の事がある以上は、世間的の夫の立場からして、もう君と交際する譯には行かない。今日限り絶交するから左樣思つて呉れ玉へ」
「仕方がない」と代助は首を垂れた。
「三千代の病氣は今云ふ通り輕い方ぢやない。此先何んな變化がないとも限らない。君も心配だらう。然し絶交した以上は已むを得ない。僕の在不在に係らず、宅へ出入りする事丈は遠慮して貰ひたい」
「承知した」と代助はよろめく樣に云つた。其頬は益蒼かつた。平岡は立ち上がつた。
「君、もう五分許り坐つて呉れ」と代助が頼んだ。平岡は席に着いた儘無言でゐた。
「三千代さんの病氣は、急に危險な虞れでもありさうなのかい」
「さあ」
「夫丈教へて呉れないか」
「まあ、さう心配しないでも可いだらう」
平岡は暗い調子で、地に息を吐く樣に答へた。代助は堪へられない思ひがした。
「若しだね。若し萬一の事がありさうだつたら、其前にたつた一遍丈で可いから、逢はして呉れないか。外には決して何も頼まない。たゞ夫丈だ。夫丈を何うか承知して呉れ玉へ」
平岡は口を結んだなり、容易に返事をしなかつた。代助は苦痛の遣り所がなくて、兩手の掌を、垢の綯れる程揉んだ。
「夫はまあ其時の場合にしよう」と平岡が重さうに答へた。

「ぢや、時々病人の樣子を聞きに遣つても可いかね」
「夫は困るよ。君と僕とは何も關係がないんだから。僕は是から先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だと思つてるんだから」
代助は電流に感じた如く椅子の上で飛び上がつた。
「あつ。解つた。三千代さんの死骸丈を僕に見せる積りなんだ。それは苛い。それは殘酷だ」
代助は洋卓の緣を回つて、平岡に近づいた。右の手で平岡の背廣の肩を抑へて、前後に搖りながら、
「苛い、苛い」と云つた。
平岡は代助の眼のうちに狂へる恐ろしい光を見出だした。肩を搖られながら、立ち上がつた。
「左んな事があるものか」と云つて代助の手を抑へた。二人は魔に憑かれた樣な顏をして互を見た。
「落ち附かなくつちや不可ない」と平岡が云つた。
「落ち附いてゐる」と代助が答へた。けれども其言葉は喘ぐ息の間を苦しさうに洩れて出た。
暫くして發作の反動が來た。代助は己を支ふる力を用ひ盡くした人の樣に、又椅子に腰を卸ろした。さうして兩手で顏を抑へた。

十七

代助は夜の十時過ぎになつて、こつそり家を出た。
「今から何方へ」と驚いた門野に、

「何うする」と曖昧な答をして、寺町の通迄來た。暑い時分の事なので、町はまだ宵の口であつた。浴衣を着た人が幾人となく代助の前後を通つた。代助には夫が唯動くものとしか見えなかつた。左右の店は悉く明るかつた。代助は眩しさうに、電氣燈の少ない横町へ曲がつた。江戸川の縁へ出た時、暗い風が微かに吹いた。黒い櫻の葉が少し動いた。橋の上に立つて、欄干から下を見下ろしてゐたものが二人あつた。金剛寺坂でも誰にも逢はなかつた。岩崎家の高い石垣が左右から細い坂道を塞いでゐた。

平岡の住んでゐる町は、猶靜かであつた。大抵な家は灯影を洩らさなかつた。向うから來た一臺の空車の輪の音が胸を躍らす樣に響いた。代助は平岡の家の塀際迄來て留まつた。身を寄せて中を窺ふと、中は暗かつた。立て切つた門の上に、軒燈が空しく標札を照らしてゐた。軒燈の硝子に守宮の影が斜に映つた。

代助は今朝も此所へ來た。午からも町内を彷徨いた。下女が買物にでも出る所を捕まへて、三千代の容體を聞かうと思つた。然し下女は遂に出て來なかつた。平岡の影も見えなかつた。塀の傍に寄つて耳を澄まして見ても、夫らしい人聲は聞こえなかつた。醫者を突き留めて、詳しい樣子を探らうと思つたが、醫者らしい車は平岡の門前には留まらなかつた。そのうち、強い日に射附けられた頭が、海の樣に動き始めた。立ち留まつてゐると、倒れさうになつた。歩き出すと、大地が大きな波紋を描いた。代助は苦しさを忍んで這ふ樣に家へ歸つた。夕食も食はずに倒れたなり動かずにゐた。其時恐るべき日は漸く落ちて、夜が次第に星の色を濃くした。代助は暗さと涼しさのうちに始めて蘇生つた。さうして頭を露に打たせながら、又三千代のゐる所迄遣つて來たのである。

代助は三千代の門前を二三度行つたり來たりした。軒燈の下へ來るたびに立ち留まつて、耳を澄ました。

五分乃至十分は凝としてゐた。しかし家の中の樣子は丸で分らなかつた。凡てが寂としてゐた。

代助が軒燈の下へ來て立ち留まるたびに、守宮が軒燈の硝子にぴたりと身體を貼り附けてゐた。黑い影は斜に映つた儘何時でも動かなかつた。

代助は守宮に氣が附く每に厭な心持がした。其動かない姿が妙に氣に掛かつた。彼の精神は銳さの餘りから來る迷信に陷つた。三千代は危險だと想像した。三千代は今苦しみつゝあると想像した。三千代は今死につゝあると想像した。三千代は死ぬ前に、もう一遍自分に逢ひたがつて、死に切れずに息を偸んで生きてゐると想像した。代助は拳を固めて、割れる程平岡の門を敲かずにはゐられなくなつた。忽ち自分は平岡のものに指さへ觸れる權利がない人間だと云ふ事に氣が附いた。代助は恐ろしさの餘り馳け出した。靜かな小路の中に、自分の足音丈が高く響いた。代助は馳けながら猶恐ろしくなつた。足を緩めた時は、非常に呼息が苦しくなつた。

道端に石段があつた。代助は半ば夢中で其處へ腰を掛けたなり、額を手で抑へて、固くなつた。しばらくして、閉いだ眼を開けて見ると、大きな黑い門があつた。門の上から太い松が生垣の外迄枝を張つてゐた。代助は寺の這入り口に休んでゐた。

彼は立ち上がつた。惘然として又步き出した。少し來て、再び平岡の小路へ這入つた。夢の樣に軒燈の前で立ち留まつた。守宮はまだ一つ所に映つてゐた。代助は深い溜息を洩らして遂に小石川を南側へ降りた。

其晚は火の樣に、熱くて赤い旋風の中に、頭が永久に回轉した。代助は死力を盡くして、旋風の中から

逃れ出ようと爭つた。けれども彼の頭は毫も彼の命令に應じなかつた。木の葉の如く、遲疑する樣子もなく、くる／＼と焔の風に卷かれて行つた。

翌日は又燬け附く樣に日が高く出た。外は猛烈な光で一面にいら／＼し始めた。代助は我慢して八時過ぎに漸く起きた。起きるや否や眼がぐらついた。平生の如く水を浴びて、書齋へ這入つて凝と竦んだ。所へ門野が來て、御客さまですと知らせたなり、入口に立つて、驚いた樣に代助を見た。代助は返事をするのも退儀であつた。客は誰だと聞き返しもせずに手で支へた儘の顏を、半分ばかり門野の方へ向き易へた。其時客の足音が椽側にして、案内も待たずに兄の誠吾が這入つて來た。

「やあ、此方へ」と席を勸めたのが代助にはやう／＼であつた。誠吾は席に着くや否や、扇子を出して、上布の襟を開く樣に、風を送つた。此暑さに脂肪が燒けて苦しいと見えて、荒い息遣ひをした。

「暑いな」と云つた。

「御宅でも別に御變りもありませんか」と代助は、左も疲れ果てた人の如くに尋ねた。

二人は少時例の通りの世間話をした。代助の調子態度は固より尋常ではなかつた。けれども兄は決して何うしたとも聞かなかつた。話しの切れ目へ來た時、

「今日は實は」と云ひながら、懷へ手を入れて、一通の手紙を取り出した。

「實は御前に少し聞きたい事があつて來たんだがね」と封筒の裏を代助の方へ向けて、

「此男を知つてるかい」と聞いた。其所には平岡の宿所姓名が自筆で書いてあつた。

「知つてます」と代助は殆ど器械的に答へた。

「元、御前の同級生だつて云ふが、本當か」

「さうです」

「此男の細君も知つてるのかい」

「知つてゐます」

兄は又扇を取り上げて、二三度ばち／＼と鳴らした。それから、少し前へ乘り出す樣に、聲を一段落とした。

「此男の細君と、御前が何か關係があるのかい」

代助は始めから萬事を隱す氣はなかつた。けれども斯う單簡に聞かれたときに、何うして此複雜な經過を、一言で答へ得るだらうと思ふと、返事は容易に口へは出なかつた。兄は封筒の中から、手紙を取り出した。それを四五寸ばかり捲き返して、

「實は平岡と云ふ人が、斯う云ふ手紙を御父さんの處へ宛てて寄こしたんだがね。――讀んで見るか」

と云つて、代助に渡した。代助は默つて手紙を受取つて、讀み始めた。兄は凝と代助の額の所を見詰めてゐた。

手紙は細かい字で書いてあつた。一行二行と讀むうちに、讀み終つた分が、代助の手先から長く垂れた。それが二尺餘りになつても、まだ盡きる氣色はなかつた。代助の眼はちら／＼した。頭が鐵の樣に重かつた。代助は強ひても仕舞迄讀み通さなければならないと考へた。總身が名狀しがたい壓迫を受けて、腋の下から汗が流れた。漸く結末へ來た時は、手に持つた手紙を卷き納める勇氣もなかつた。手紙は廣げられ

た儘洋卓の上に横たはつた。
「其所に書いてある事は本當なのかい」と兄が低い聲で聞いた。代助はたゞ、
「本當です」と答へた。兄は打衝を受けた人の様に一寸扇の音を留めた。しばらくは二人とも口を聞き得なかつた。良あつて兄が、
「まあ、何う云ふ了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ」と呆れた調子で云つた。代助は依然として、口を開かなかつた。
「何んな女だつて、貰はうと思へば、いくらでも貰へるぢやないか」と兄がまた云つた。代助はそれでも猶默つてゐた。三度目に兄が斯う云つた。——
「御前だつて満更道樂をした事のない人間でもあるまい。こんな不始末を仕出かす位なら、今迄折角金を使つた甲斐がないぢやないか」
代助は今更兄に向つて、自分の立場を説明する勇氣もなかつた。彼はつい此間迄全く兄と同意見であつたのである。
「姉さんは泣いてゐるぜ」と兄が云つた。
「さうですか」と代助は夢の様に答へた。
「御父さんは怒つてゐる」
代助は答をしなかつた。たゞ遠い所を見る眼をして、兄を眺めてゐた。
「御前は平生から能く分らない男だつた。夫でも、いつか分る時機が来るだらうと思つて今日迄交際つ

てゐた。然し今度と云ふ今度は、全く分らない人間だと、おれも諦めて仕舞つた。世の中に分らない人間程危險なものはない。何を爲るんだか、何を考へてゐるんだか安心が出來ない。御前は夫が自分の勝手だから可からうが、御父さんやおれの、社會上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名譽と云ふ觀念は有つてるだらう」

兄の言葉は、代助の耳を掠めて外へ零れた。彼はたゞ全身に苦痛を感じた。けれども兄の前に良心の鞭撻を蒙る程動搖してはゐなかつた。凡てを都合よく辯解して、世間的の兄から、今更同情を得ようと云ふ芝居氣は固より起らなかつた。彼は彼の頭の中に、彼自身に正當な道を歩んだといふ自信があつた。彼は夫で滿足であつた。その滿足を理解して吳れるものは三千代丈であつた。三千代以外には、父も兄も社會も人間も悉く敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで燒き殺さうとしてゐる。代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此燄の風に早く己を燒き盡くすのを、此上もない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭を支へて石の樣に動かなかつた。

「代助」と兄が呼んだ。「今日はおれは御父さんの使に來たのだ。御前は此間から家へ寄り附かない樣になつてゐる。平生なら御父さんが呼び附けて聞き糺す所だけれども、今日は顏を見るのが厭だから、此方から行つて實否を確めて來いと云ふ譯で來たのだ。それで――もし本人に辯解があるなら辯解を聞くし。又辯解も何もない、平岡の云ふ所が一々根據のある事實なら、――御父さんは斯う云はれるのだ。――もう生涯代助には逢はない。何處へ行つて、何をしようと當人の勝手だ。其代り、以來子としても取り扱はない。又親とも思つて吳れるな。――尤もの事だ。そこで今御前の話しを聞いて見ると、平岡の手紙には

嘘は一つも書いてないんだから仕方がない。其上御前は、此事に就いて後悔もしなければ、謝罪もしない様に見受けられる。それぢや、おれだつて、歸つて御父さんに取り成し様がない。御父さんから云はれた通り其儘御前に傳へて歸る丈の事だ。好いか。御父さんの云はれる事は分つたか」

「よく分りました」と代助は簡明に答へた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな聲を出した。代助は俯向いた儘顔を上げなかつた。

「愚圖だ」と兄が又云つた。「不斷は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざと云ふ場合には、丸で唖の様に默つてゐる。さうして、陰で親の名譽に關はる様な悪戯をしてゐる。今日迄何の爲に教育を受けたのだ」

兄は洋卓の上の手紙を取つて自分で卷き始めた。靜かな部屋の中に、半切の音がかさ／＼鳴つた。兄はそれを元の如くに封筒に納めて懐中した。

「ぢや歸るよ」と今度は普通の調子で云つた。代助は丁寧に挨拶をした。兄は、

「おれも、もう逢はんから」と云ひ捨てて玄關に出た。

兄の去つた後、代助はしばらく元の儘ぢつと動かずにゐた。門野が茶器を取り片附けに來た時、急に立ち上がつて、

「門野さん。僕は一寸職業を探して來る」と云ふや否や、鳥打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許りに、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から眞直に射下ろした。乾いた埃

が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はぢり／＼と焦げる心持がした。

「焦げる／＼」と歩きながら口の内で云つた。

飯田橋へ來て電車に乘つた。電車は眞直に走り出した。代助は車のなかで、

「あゝ動く、世の中が動く」と傍の人に聞える様に云つた。彼の頭は電車の速力を以て回轉し出した。回轉するに從つて火の様に焙つて來た。是で半日乘り續けたら燒き盡す事が出來るだらうと思つた。

忽ち赤い郵便筒が眼に附いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くる／＼と回轉し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、又代助の頭に飛び込んで、くる／＼と渦を捲いた。四つ角に、大きい眞赤な風船玉を賣つてるものがあつた。電車が急に角を曲がるとき、風船玉は追つ懸けて來て、代助の頭に飛び附いた。小包郵便を載せた赤い車がはつと電車と摺れ違ふとき、又代助の頭の中に吸ひ込まれた。煙草屋の暖簾が赤かつた。賣出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと續いた。仕舞には世の中が眞赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくる／＼と燄の息を吹いて回轉した。代助は自分の頭が燒け盡きる迄電車に乘つて行かうと決心した。

門

四三、三、一——四三、六、一二

一

宗助は先刻から縁側へ座蒲團を持ち出して、日當りの好ささうな處へ氣樂に胡坐をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雜誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋日和と名のつく程の上天氣なので、往來を行く人の下駄の響が、靜かな町丈に、朗らかに聞えて來る。肱枕をして軒から上を見上げると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。其空が自分の寐てゐる縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると非常に廣大である。たまの日曜に斯うして緩り空を見る丈でも、大分違ふなと思ひながら、眉を寄せて、ぎら／＼する日を少時見詰めてゐたが、眩しくなつたので、今度はぐるりと寐返りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしてゐる。

「おい、好い天氣だな」と話し掛けた。細君は、

「えゝ」と云つたなりであつた。宗助も別に話しがしたい譯でもなかつたと見えて、夫なり默つて仕舞つた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちよつと散歩でも爲て入らつしやい」と云つた。然し其時は宗助が唯うんと云ふ生返事を返した丈であつた。

二三分して、細君は障子の硝子の處へ顏を寄せて、縁側に寢て居る夫の姿を覗いて見た。夫はどう云ふ了見か兩膝を曲げて海老の樣に窮屈になつてゐる。さうして兩手を組み合はして、其中へ黑い頭を突つ込

んでゐるから、膝に挟まれて顏がちつとも見えない。

「貴方そんな處へ寢ると風邪を引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京の樣な、東京でない樣な、現代の女學生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は兩肱の中で大きな眼をぱち〳〵させながら、

「寢やせん、大丈夫だ」と小聲で答へた。

夫から又靜かになつた。外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鷄の時音をつくる聲が聞こえた。宗助は仕立卸しの紡績織の脊中へ、自然と浸み込んで來る光線の暖味を、襯衣の下で貪ぼる程味ひながら、表の音を聽くともなく聽いてゐたが、急に思ひ出した樣に、障子越しの細君を呼んで、

「お米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君は別に呆れた樣子もなく、若い女に特有なけたゝましい笑聲も立てず、

「近江のあふの字ぢやなくつて」と答へた。

「其近江のあふの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、其先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「斯うでせう」と云つた限り、物指の先を、字の留まつた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顏も見ずに、

「矢つ張り左樣か」と云つたが、冗談でもなかつたと見えて、別に笑ひもしなかつた。細君も近の字は

丸で氣にならない樣子で、
「本當に好い御天氣だわね」と半ば獨り言の樣に云ひながら、障子を開けた儘又裁縫を始めた。すると宗助は肱で挾んだ頭を少し擡げて、
「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顏を見た。
「何故」
「何故つて、幾何容易しい字でも、こりや變だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大變迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぢつと眺めてゐると、何だか違つた樣な氣がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて來る。――御前そんな事を經驗した事はないかい」
「まさか」
「己丈かな」と宗助は頭へ手を當てた。
「貴方何うかして入らつしやるのよ」
「矢つ張り神經衰弱の所爲かも知れない」
「左樣よ」と細君は夫の顏を見た。夫は漸く立ち上がつた。
針箱と絲屑の上を飛び越す樣に跨いで、茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。南が玄關で塞がれてゐるので、突き當りの障子が、日向から急に這入つて來た眸には、うそ寒く映つた。其所を開けると廂に逼る樣な勾配の崖が、縁鼻から聳えてゐるので、朝の內は當たつて然るべき筈の日も容易に影を落さない。崖には草が生えてゐる。下からして一側も石で疊んでないから、何時壞れるか分らない虞れがあるのだけ

れども、不思議にまだ壞れた事がないさうで、その爲か家主も長い間昔の儘にして放つてある。尤も元は一面の竹藪だつたとかで、それを切り開く時に根丈は掘り返さずに土堤の中に埋めて置いたから、地は存外緊まつてゐますからねと、町内に二十年も住んでゐる八百屋の爺が、勝手口でわざ〳〵說明して呉れた事がある。其時宗助は、だつて根が殘つてゐれば、又竹が生えて藪になりさうなものぢやないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、あゝ切り開かれて見ると、さう甘く行くもんぢやありませんよ。然し崖丈は大丈夫です。どんな事があつたつて壞えつこはねえんだからと、恰も自分のものを辯護でもする様に力んで歸つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく樣子もない。たゞ青い草の匂が褪めて、不揃にもぢや〳〵する許りである。薄だの蔦だのと云ふ洒落たものに至つては更に見當らない。其代り昔の名殘りの孟宗が中途に二本、上の方に三本程すつくりと立つてゐる。夫が多少黄に染まつて、幹に日の射すときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味を眺められる樣な心持がする。宗助は朝出て四時過に歸る男だから、日の詰まる此頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手水鉢の水を手に受けながら、不圖廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思ひ出した。幹の頂に濃かな葉が集まつて、丸で坊主頭の樣に見える。それが秋の日に醉つて重く下を向いて、寂りと重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉てゝ、座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云ひながら客を通すから左樣名づける迄で、實は書齋とか居間とか云ふ方が穩當である。北側に床があるので、申し譯の爲に變な軸を掛けて、其前に朱泥の色をした拙な花活が飾つてある。欄間には額も何もない。唯眞鍮の折れ釘丈が二本光つてゐる。

其他は硝子戸の張つた書棚が一つある。けれども中には別に是と云つて、目立つ程の立派なものも這入つてゐない。

宗助は銀金具の附いた机の抽出を開けて頻りに中を檢べ出したが、別に何も見附け出さないうちに、はたりと締めて仕舞つた。夫から硯箱の蓋を取つて、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、一寸考へたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だつたかね」と襖越しに細君に聞いた。

「二十五番地ぢやなくつて」と細君は答へたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙ぢや駄目よ。行つて好く話しをして來なくつちや」と附け加へた。

「まあ、駄目迄も手紙を一本出して置かう。夫で不可なかつたら出掛けるとするさ」と云ひ切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、夫で好いだらう」と念を押した。

細君は惡いとも云ひ兼ねたと見えて、其上爭ひもしなかつた。宗助は郵便を持つた儘座敷から直ぐ玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、是は茶の間の緣傳ひに玄關に出た。

「一寸散歩に行つて來るよ」

「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。

三十分許りして格子ががらりと開いたので、お米は又裁縫の手を已めて、緣傳ひに玄關へ出て見ると、歸つたと思ふ宗助の代りに、高等學校の制帽を被つた、弟の小六が這入つて來た。袴の裾が五六寸しか出

ない位の、長い黒羅紗のマントの釦を外しながら、
「暑い」と云つてゐる。
「だつて醉狂だわね。此御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」
「何、日が暮れたら寒いだらうと思つてね」と小六は云ひ譯を半分しながら、嫂の後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼を着けて、
「相變らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢の前へ胡坐をかいた。嫂は裁縫を隅の方へ押し遣つて置いて、小六の向うへ來て、一寸鐵瓶を卸ろして炭を繼ぎ始めた。
「御茶なら澤山です」と小六が云つた。
「厭？」と女學生流に念を押したお米は、
「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。
「有るんですか」と小六が聞いた。
「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、思ひ出した樣に、「待つて頂戴、有るかも知れないわ」と云ひながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六はお米の後姿の、羽織が帶で高くなつた邊を眺めてゐた。何を探すのだか、中々手間が取れさうなので、
「ぢや御菓子も廢しにしませう。それよりか、今日は兄さんは何うしました」と聞いた。
「兄さんは今一寸」と後向きの儘答へて、お米は矢張り戸棚の中を探してゐる。やがてはたりと戸を締めて、

「駄目よ。何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」と云ひながら、又火鉢の向うへ歸つて來た。
「ぢや晩に何か御馳走なさい」
「えゝ爲てよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。お米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。小六は默つて嫂の顏を見てゐた。彼は實際嫂の御馳走には餘り興味を持ち得なかつたのである。
「姉さん、兄さんは佐伯へ行つて吳れたんですかね」と聞いた。
「此間から行く行くつて云つてる事は云つてるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に歸るんでせう。歸ると草臥れちまつて、御湯に行くのも大儀さうなんですもの。だから、さう責めるのも實際御氣の毒よ」
「そりや兄さんも忙しいには違ひなからうけれども、僕もあれが極まらないと氣掛りで落ち附いて勉强も出來ないんだから」と云ひながら、小六は眞鍮の火箸を取つて、火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。お米は其動く火箸の先を見てゐた。
「だから先刻手紙を出して置いたのよ」と慰める樣に云つた。
「何て」
「そりや私もつい見なかつたの。けれども、屹度あの相談よ。今に兄さんが歸つて來たら聞いて御覽なさい。屹度左樣よ」
「もし手紙を出したのなら、其用には違ひないでせう」
「えゝ、本當に出したのよ。今兄さんが其手紙を持つて、出しに行つた所なの」
小六はこれ以上辯解の樣な慰藉の樣な、嫂の言葉に耳を借したくなかつた。散步に出る閑があるなら、

手紙の代りに自分で足を運んで呉れたら、よささうなものだと思ふと、餘り好い心持でもなかつた。座敷へ來て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々頁を剝ぐつて見てゐた。

二

其處に氣の附かなかつた宗助は、町の角迄來て、切手と「敷島」を同じ店で買つて、郵便丈はすぐ出したが、其足で又同じ道を戻るのが何だか不足だつたので、啣へ煙草の煙を秋の日に搖つかせながら、ぶらぶら歩いてゐるうちに、どこか遠くへ行つて、東京と云ふ所はこんな所だと云ふ印象を、はつきり頭の中へ刻み附けて、さうして夫を今日の日曜の土産に、家へ歸つて寢ようと云ふ氣になつた。彼は年來東京の空氣を吸つて生きてゐる男であるのみならず、毎日役所の行き通ひには電車を利用して、賑やかな町を二度づゝは屹度往つたり來たりする習慣になつてゐるのではあるが、身體と頭に樂がないので、何時でも上の空で素通りをする事になつてゐるから、自分が其賑やかな町の中に活きてゐると云ふ自覺は近來とんと起つた事がない。尤も平生は忙しさに追はれて、別段氣にも掛からないが、七日に一返の休日が來て、心がゆつたりと落ち附ける機會に出逢ふと、不斷の生活が急にそは〳〵した上調子に見えて來る。必竟自分は東京の中に住みながら、ついまだ東京といふものを見た事がないんだといふ結論に到着すると、彼は其處に何時も妙な物淋しさを感ずるのである。

さう云ふ時には彼は急に思ひ出した樣に町へ出る。其上懷に多少餘裕でもあると、是で一つ豪遊でもして見ようかと考へる事もある。けれども彼の淋しみは、彼を思ひ切つた極端に驅り去る程に、強烈の程

度なものでないから、彼が其處迄漕進する前に、それも馬鹿々々しくなつて已めて仕舞ふ。のみならず、斯んな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、輕擧を戒める程度内に膨らんでゐるので、億劫な工夫を凝らすよりも、懷手をしてぶらりと家へ歸る方が、つい樂になる。だから宗助の淋しみは、單なる散歩か勸工場縱覽位な所で、次の日曜迄は何うか斯うか慰藉されるのである。

此日も宗助は兎も角もと思つて電車へ乘つた。所が日曜の好天氣にも拘らず、平常よりは乘客が少ないので、例になく乘り心地が好かつた。其上乘客が皆平和な顏をして、どれもこれも悠りと落ち附いてゐる樣に見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を爭つて席を奪ひ合ひながら、丸の内方面へ向ふ自分の運命を顧た。出勤刻限の電車の道伴程殺風景なものはない。革にぶら下がるにしても、天鵞絨に腰を掛けるにしても、人間的な優しい心持の起つた試しは未だ嘗てない。自分も夫で澤山だと考へて、器械か何ぞと膝を突き合はせ肩を並べたかの如くに、行きたい所迄同席して不意と下りて仕舞ふ丈であつた。前の御婆さんが八つ位になる孫娘の耳の所へ口を附けて何か云つてゐるのを、傍に見てゐた三十恰好の商家の御神さんらしいのが、可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋ねたりする所を眺めてゐると、今更ながら別の世界に來た樣な心持がした。

頭の上には廣告が一面に枠に嵌めて掛けてあつた。宗助は平生これにさへ氣が附かなかつた。何心なしに一番目のを讀んで見ると、引越は容易に出來ますと云ふ移轉會社の引札であつた。其次には經濟を心得る人は、衞生に注意する人は、火の用心を好むものは、と三行に並べて置いて、其後に瓦斯竈を使へと書いて、瓦斯竈から火の出てゐる畫迄添へてあつた。三番目には露國文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と

云ふのと、バンカラ喜劇小辰大一座と云ふのが、赤地に白で染め拔いてあつた。

宗助は約十分も掛かつて、凡ての廣告を丁寧に三遍程讀み直した。別に行つて見ようと思ふものも、買つて見たいと思ふものも無かつたが、たゞ是等の廣告が判然と自分の頭に映つて、さうして夫を一々讀み終せた時間のあつた事と、それを悉く理解し得たと云ふ心の餘裕が、宗助には少なからぬ滿足を與へた。彼の生活は是程の餘裕にすら誇りを感ずる程に、日曜以外の出入りには、落ち附いてゐられないものであつた。

宗助は駿河臺下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子の中に、美しく並べてある洋書に眼が附いた。宗助はしばらく其前に立つて、赤や青や縞や模樣の上に、鮮やかに叩き込んである金文字を眺めた。表題の意味は無論解るが、手に取つて、中を檢べて見ようといふ好奇心はちつとも起らなかつた。本屋の前を通ると、屹度中へ這入つて見たくなつたり、中へ這入ると必ず何か欲しくなつたりするのは、宗助から云ふと、既に一昔前の生活である。たゞ History of Gambling（博奕史）と云ふのが、殊更に美裝して、一番眞中に飾られてあつたので、それが幾分か彼の頭に突飛な新し味を加へた丈であつた。

宗助は微笑しながら、急忙しい通りを向う側へ渡つて、今度は時計屋の店を覗き込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、是もたゞ美しい色や恰好として、彼の眸に映る丈で、買ひたい了簡を誘致するには至らなかつた。其癖彼は一々絹糸で釣るした價格札を讀んで、品物と見較べて見た。さうして實際金時計の安價なのに驚いた。

蝙蝠傘屋の前にも一寸立ち留まつた。西洋小間物を賣る店先では、禮帽の傍に懸けてあつた襟飾に眼が

附いた。自分の毎日掛けてゐるのよりも、大變柄が好かつたので、價を聞いて見ようかと思つて、半分店の中へ這入りかけたが、明日から襟飾などを懸け替へた所が、下らない事だと思ひ直すと、急に蟇口の口を開けるのが厭になつて行き過ぎた。呉服店でも大分立見をした。鶉御召だの、高貴織だの、清凌織だの、自分の今日迄知らずに過ぎた名を澤山覺えた。京都の襟新と云ふ家の出店の前で、窓硝子へ帽子の鍔を突き附ける樣に近く寄せて、精巧に刺繡をした女の半襟を、いつ迄も眺めてゐた。その中に丁度細君に似合ひさうな上品なのがあつた。買つて行つて遣らうかといふ氣が一寸起るや否や、そりや五六年前の事だと云ふ考へが後から出て來て、折角心持の好い思ひ附きをすぐ揉み消して仕舞つた。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れて又歩き出したが、それから半町程の間は何だか詰らない樣な氣がして、往來にも店先にも格段の注意を拂はなかつた。

不圖氣が附いて見ると角に大きな雜誌屋があつて、其軒先には新刊の書物が大きな字で廣告してある。梯子の樣な細長い枠へ紙を張つたり、ペンキ塗の一枚板へ模樣畫見た樣な色彩を施したりしてある。宗助はそれを一々讀んだ。著者の名前も作物の名前も、一度は新聞の廣告で見た樣でもあり、又全く新奇の樣でもあつた。

此店の曲り角の影になつた所で、黑い山高帽を被つた三十位の男が地面の上へ氣樂さうに胡坐をかいて、えゝ御子供衆の御慰みと云ひながら、大きな護謨風船を膨らましてゐる。それが膨れると自然と達磨の恰好になつて、好い加減な所に眼口迄墨で書いてあるのに宗助は感心した。其上一度息を入れると、何時迄も膨れてゐる。且指の先へでも、手の平の上へでも自由に尻が据わる。それが尻の穴へ楊枝の樣な細いも

のを突つ込けと、しゆうつと一度に收縮して仕舞ふ。忙しい往来の人は何人でも通るが、誰も立ち留まつて見る程のものはない。山高帽の男は賑やかな町の隅に、冷やかに胡坐をかいて、身の周囲に何事が起りつゝあるかを感ぜざるものの如くに、しゆう／＼と子供衆の御慰みと云つては、蛸坊主を膨らましてゐる。宗助は一錢五厘出して其風船を一つ買つて、しゆうと縮ましてもらつて、それを袂へ入れた。綺麗な床屋へ行つて、髪を刈りたくなつたが、何處にそんな綺麗なのがあるか、一寸見當らないうちに、日が陰つて来たので、又電車へ乘つて、宅の方へ向つた。

宗助が電車の終點迄来て、運轉手に切符を渡した時には、もう空の色が光を失ひかけて、濕つた往来に、暗い影が射し募る頃であつた。降りようとして、鐵の柱を握つたら、急に寒い心持がした。一所に降りた人は、皆離れ／＼になつて、事ある氣に忙しく歩いて行く。町のはづれを見ると、左右の家の軒から屋根へかけて、仄白い烟が大氣の中に動いてゐる樣に見える。宗助も樹の多い方角に向いて早足に歩を移した。今日の日曜も、暢びりした御天氣も、もう既に御仕舞だと思ふと、少し果敢ない樣な又淋しい樣な一種の氣分が起つて来た。さうして明日から又例に依つて例の如く、せつせと働かなくてはならない身體だと考へると、今日半日の生活が急に惜しくなつて、殘る六日半の非精神的な行動が、如何にも詰らなく感ぜられた。歩いてゐるうちにも、日當りの惡い、窓の乏しい、大きな部屋の模樣や、隣に坐つてゐる同僚の顔や、野中さん一寸と云ふ上官の樣子ばかりが眼に浮かんだ。

魚勝と云ふ魚屋の前を通り越して、其五六軒先の路次とも横町とも附かない所を曲がると、行き當りが高い崖で、其左右に四五軒同じ構の貸家が並んでゐる。つい此間迄は疎らな杉垣の奥に、御家人でも住み

古したと思はれる、物寂びた家も一つ地所のうちに混つてゐたが、崖の上の坂井といふ人が此處を買つてから、忽ち萱葺を壞して、杉垣を引き拔いて、今の樣な新しい普請に建て易へて仕舞つた。宗助の家は横町を突き當たつて、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰氣ではあるが、其代り通からは最も隔たつてゐる丈に、まあ幾分か閑靜だらうと云ふので、細君と相談の上、とくに其處を擇んだのである。

宗助は七日に一返の日曜ももう暮れかゝつたので、早く湯にでも入つて、暇があつたら髪でも刈つて、さうして緩り晩飯を食はうと思つて、急いで格子を開けた。臺所の方で皿小鉢の音がする。上がらうとする拍子に、小六の脱ぎ棄てた下駄の上へ、氣が附かずに足を乘せた。曲んで位置を調へて居る所へ小六が出て來た。臺所の方でお米が、

「誰？兄さん？」と聞いた。宗助は、

「やあ、來てゐたのか」と云ひながら座敷へ上がつた。先刻郵便を出してから、神田を散歩して、電車を降りて家へ歸る迄、宗助の頭には小六の小の字も閃めかなかつた。宗助は小六の顏を見た時、何となく悪い事でもした樣に極りが好くなかつた。

「お米、お米」と細君を臺所から呼んで、

「小六が來たから、何か御馳走でもするが好い」と云ひ附けた。細君は、忙しさうに、臺所の障子を開け放した儘出て來て、座敷の入口に立つてゐたが、此分り切つた注意を聞くや否や、

「えゝ今直き」と云つたなり、引き返さうとしたが、又戻つて來て、

「其代り小六さん、憚り樣。座敷の戸を閉てて、洋燈を點けて頂戴。今私も淸も手が放せない所だから」

と依頼んだ。小六は簡單に、

「はあ」と云つて立ち上がつた。

勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥樣是は何方へ移します」と云ふ聲がする。「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云ふ小六の聲がする。しゆうと湯が沸つて七輪の火へ懸かつた樣子である。

宗助は暗い座敷の中で默然と手焙へ手を翳してゐた。灰の上に出た火の塊り丈が色づいて赤く見えた。其時裏の崖の上の、家主の家の御孃さんがピアノを鳴らし出した。宗助は思ひ出した樣に立ち上がつて、座敷の雨戸を引きに緣側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を亂す上に、一つ二つの星が燦めいた。ピアノの音は孟宗竹の後から響いた。

三

宗助と小六が手拭を下げて、風呂から歸つて來た時は、座敷の眞中に眞四角な食卓を据ゑて、お米の手料理が手際よく其上に並べてあつた。手焙の火も出掛けよりは濃い色に燃えてゐた。洋燈も明るかつた。

宗助が机の前の座蒲團を引き寄せて、其上に緩々と胡坐を搔いた時、手拭と石鹸を受取つたお米は、

「好い御湯だつた事？」と聞いた。宗助はたゞ一言、

「うん」と答へた丈であつたが、其樣子は素氣ないと云ふよりも、寧ろ湯上りで、精神が弛緩した氣味に見えた。

「中々好い湯でした」と小六がお米の方を見て調子を合はせた。

「然しあゝ込んぢや溜らない」と宗助が机の端へ肱を持たせながら、倦怠さうに云つた。宗助が風呂に行くのは、いつでも役所が退けて、家へ歸つてからの事だから、丁度人の立て込む夕飯前の黄昏である。彼は此二三ケ月間、つひぞ、日の光に透かして湯の色を眺めた事がない。夫ならまだしもだが、稍ともすると三日も四日も丸で錢湯の敷居を跨がずに過ごして仕舞ふ。日曜になつたら、朝早く起きて何よりも第一に綺麗な湯に首丈浸かつて見ようと、常は考へてゐるが、偖其日曜が來て見ると、たまに悠り寢られるのは、今日ばかりぢやないかと云ふ氣になつて、つい床のうちで愚圖々々してゐるうちに時間が遠慮なく過ぎて、えゝ面倒だ、今日は已めにして、其代り今度の日曜に行かうと思ひ直すのが、殆ど惰性の樣になつてゐる。

「どうかして朝湯に丈は行きたいね」と宗助が云つた。

「其癖朝湯に行ける日は、屹度寢坊なさるのね」と細君は調戯ふ樣な口調であつた。小六は腹の中で是が兄の生來の弱點であると思ひ込んでゐた。彼は自分で學校生活をしてゐるにも拘らず、兄の日曜が、如何に兄にとつて貴いかを會得出來なかつた。六日間の暗い精神作用を、只此一日で暖かに回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでゐる。だから遣りたい事があり過ぎて、十の二三も實行出來ない。否、其二三にしろ進んで實行にかゝると、却てその爲に費やす時間の方が惜しくなつて來て、つい又手を引つ込めて、凝としてゐるうちに日曜は何時か暮れて仕舞ふのである。自分の氣晴らしや保養や、娯樂もしくは好尙に就いてですら、斯樣に節儉しなければならない境遇にある宗助が、小六の爲に盡くさ

ないのは、盡くさないのではない、頭に盡くす餘裕のないのだとは、小六から見ると、何うしても受取れなかつた。兄はたゞ手前勝手な男で、暇さへあればぶら／＼して細君と遊んで許りゐて、一向頼りにも力にもなつて呉れない、眞底は情合に薄い人だ位に考へてゐた。

けれども、小六がさう感じ出したのは、つい近頃の事で、實を云ふと、佐伯との交渉が始まつて以來の話である。年の若い丈凡てに性急な小六は、兄に頼めば今日明日にも方が付くものと、思ひ込んでゐたのに、何日迄も埒が明かないのみか、まだ先方へ出掛けても呉れないので、大分不平になつたのである。

所が今日歸りを待ち受けて逢つて見ると、其所が兄弟で、別に御世辭も使はないうちに、何處か暖か味のある仕打ちも見えるので、つい云ひたい事も後廻しにして、一所に湯になんぞ這入つて、穩やかに打ち解けて話せる樣になつて來た。

兄弟は寛いで膳に就いた。お米も遠慮なく食卓の一隅を領した。宗助も小六も猪口を二三杯づゝ干した。飯に移る前に、宗助は笑ひながら、

「うん、面白いものが有つたつけ」と云ひながら、袂から買つて來た護謨風船の達磨を出して、大きく膨らませて見せた。さうして、それを椀の蓋の上へ載せて、其特色を説明して聞かせた。お米も小六も面白がつて、ふは／＼した玉を見てゐた。仕舞に小六が、ふうつと吹いたら達磨は膳の上から疊の上へ落ちた。それでも、まだ覆らなかつた。

「それ御覽」と宗助が云つた。

お米は女だけに聲を出して笑つたが、御櫃の蓋を開けて夫の飯を盛ひながら、

「兄さんも隨分呑氣ね」と小六の方を向いて、半ば夫を辯護する樣に云つた。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言の辯解もなく食事を始めた。小六も正式に箸を取り上げた。

達磨はそれぎり話題に上らなかつたが、これが緒になつて、三人は飯の濟む迄無邪氣に長閑な話しをつづけた。仕舞に小六が氣を換へて、

「時に伊藤さんも飛んだ事になりましたね」と云ひ出した。宗助は五六日前、伊藤公暗殺の號外を見たとき、お米の働いてゐる臺所へ出て來て、「おい大變だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持つた號外をお米のエプロンの上に乘せたなり書齋へ這入つたが、其語氣からいふと、寧ろ落ち附いたものであつた。

「貴方大變だつて云ふ癖に、些とも大變らしい聲ぢやなくつてよ」とお米が後から冗談半分にわざ〳〵注意した位である。其後日毎の新聞に、伊藤公の事が五六段づゝ出ない事はないが、宗助はそれに目を通してゐるんだか、ゐないんだか分らない程、暗殺事件に就いては平氣に見えた。夜歸つて來て、お米が飯の御給仕をするとき抔に、「今日も伊藤さんの事が何か出てゐて」と聞く事があるが、其時には「うん大分出てゐる」と答へる位だから、夫の隱袋の中に疊んである今朝の讀殼を、後から出して讀んで見ないと、其日の記事は分らなかつた。お米もつまりは夫が歸宅後の會話の材料として、伊藤公を引合ひに出す位の所だから、宗助が進まない方向へは、たつて話しを引つ張りたくはなかつた。それで此二人の間には、號外發行の當日以後、今夜小六がそれを云ひ出した迄は、公には天下を動かしつゝある問題も、格別の興味を以て迎へられてゐなかつたのである。

「どうして、まあ殺されたんでせう」とお米は號外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事を又小六に向つ

て聞いた。
「短銃をポン／＼連發したのが命中したんです」と小六は正直に答へた。
「だけどさ、何うして、まあ殺されたんでせう」
小六は要領を得ないやうな顔をしてゐる。宗助は落ち付いた調子で、
「矢つ張り運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨さうに飲んだ。お米はこれでも納得が出來なかつたと見えて、
「どうして又滿洲抔へ行つたんでせう」と聞いた。
「本當にな」と宗助は腹が張つて充分物足りた樣子であつた。
「何でも露西亞に祕密な用があつたんださうです」と小六が眞面目な顔をして云つた。お米は、
「さう。でも厭ねえ。殺されちや」と云つた。
「己見た樣な腰辨は、殺されちや厭だが、伊藤さん見た樣な人は、哈爾賓へ行つて殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。
「あら、何故」
「何故つて伊藤さんは殺されたから、歷史的に偉い人になれるのさ。たゞ死んで御覽、斯うは行かないよ」
「成程そんなものかも知れないな」と小六は少し感服した樣だつたが、やがて、
「兎に角滿洲だの、哈爾賓だのつて物騷な處ですね。僕は何だか危險な樣な心持がしてならない」と云

つた。
「そりや、色んな人が落ち合つてるからね」
此時お米は妙な顏をして、斯う答へた夫の顏を見た。宗助もそれに氣が附いたらしく、
「さあ、もう御膳を下げたら好からう」と細君を促して、先刻の達磨を又疊の上から取つて、人指し指の先へ載せながら、
「どうも妙だよ。よく斯う調子好く出來るものだと思つてね」と云つてゐた。
臺所から清が出て來て、食ひ散らした皿小鉢を食卓ごと引いて行つた後で、お米も茶を入れ替へるために、次の間へ立つたから、兄弟は差向ひになつた。
「あゝ綺麗になつた。何うも食つた後は汚いものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顏をした。勝手の方で清がしきりに笑つてゐる。
「何がそんなに可笑しいの、清」とお米が障子越しに話し掛ける聲が聞こえた。清はへえと云つて猶笑ひ出した。兄弟は何も云はず、半ば下女の笑ひ聲に耳を傾けてゐた。
しばらくして、お米が菓子皿と茶盆を兩手に持つて、又出て來た。藤蔓の着いた大きな急須から、胃にも頭にも應へない番茶を、湯呑程な大きな茶碗に注いで、兩人の前へ置いた。
「何だつて、あんなに笑ふんだい」と夫が聞いた。けれどもお米の顏は見ずに、却て菓子皿の中を覗いてゐた。
「貴方があんな玩具を買つて來て、面白さうに指の先へ乘せて入らつしやるからよ。子供もない癖に」

宗助は意にも留めない樣に、輕く「さうか」と云つたが、後から緩り、

「是でも元は子供が有つたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味はつてゐる風に附け足して、生温い眼を擧げて細君を見た。お米はぴたりと默つて仕舞つた。

「あなた御菓子食べなくつて」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「えゝ食べます」と云ふ小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立つて行つた。兄弟は又差向ひになつた。

電車の終點から步くと二十分近くも掛かる山の手の奧丈あつて、まだ宵の口だけれども、四隣は存外靜かである。時々表を通る薄齒の下駄の響が冴えて、夜寒が次第に增して來る。宗助は懷手をして、

「晝間は暖かいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿ぢやもう蒸氣を通してゐるかい」と聞いた。

「いえ、未だです。學校ぢや餘つ程寒くならなくつちや、蒸氣なんか焚きやしません」

「さうかい。夫ぢや寒いだらう」

「えゝ。然し寒い位何うでも構はない積りですが」と云つた儘、小六はすこし云ひ澁んでゐたが、仕舞にとう〳〵思ひ切つて、

「兄さん、佐伯の方は一體どうなるんでせう。先刻姉さんから聞いたら、今日手紙を出して下すつたさうですが」

「あゝ出した。二三日中に何とか云つて來るだらう。其上で又己が行くとも何うともしようよ」

小六は兄の平氣な態度を、心の中では飽き足らず眺めた。然し宗助の樣子に何處と云つて、他を激させ

る樣な鋭い所も、自らを庇護ふ樣な卑しい點もないので、喰つて掛かる勇氣は更に出なかつた。たゞ、
「ぢや今日迄あの儘にしてあつたんですか」と單に事實を確めた。
「うん、實に濟まないがあの儘だ。手紙も今日やつとの事で書いた位だ。何うも仕方がないよ。近頃神經衰弱でね」と眞面目に云ふ。小六は苦笑した。
「もし駄目なら、僕は學校を已めて、一層今のうち、滿洲か朝鮮へでも行かうかと思つてるんです」
「滿洲か朝鮮？ひどく又思ひ切つたもんだね。だつて、御前先刻滿洲は物騷で厭だつて云つたぢやないか」
用談はこんな處を往つたり來たりして遂に要領を得なかつた。仕舞に宗助が、
「まあ、好いや。さう心配しないでも、何うかなるよ。何しろ返事の來次第、己がすぐ知らせてやる。其上で又相談するとしよう」と云つたので、談話に區切りが附いた。
小六が歸りがけに茶の間を覗いたら、お米は何もしずに、長火鉢に倚り掛かつてゐた。
「姉さん、左樣なら」と聲を掛けたら、「おや御歸り」と云ひながら漸く立つて來た。

四

小六の苦にしてゐた佐伯からは、豫期の通り二三日して返事があつたが、それは極めて簡單なもので、端書でも用の足りる所を、鄭重に封筒へ入れて三錢の切手を貼つた、叔母の自筆に過ぎなかつた。
役所から歸つて、筒袖の仕事着を、窮屈さうに脫ぎ易へて、火鉢の前へ坐るや否や、抽出から一寸程あ

ざと餘して差し込んであつた狀袋に眼が着いたので、お米の汲んで出す番茶を一口呑んだ儘、宗助はすぐ封を切つた。

「へえ、安さんは神戸へ行つたんだつてね」と手紙を讀みながら云つた。

「何時？」とお米は湯呑を夫の前へ出した時の姿勢の儘で聞いた。

「何時とも書いてないがね。何しろ遠からぬうちには歸京仕るべく候間と書いてあるから、もうぢき歸つて來るんだらう」

「遠からぬうちなんて、矢つ張り叔母さんね」

宗助はお米の批評に同意も不同意も表しなかつた。讀んだ手紙を卷き納めて、投げる樣にそこへ放り出して、四五日目になる、ざら〳〵した顋を、氣味わるさうに撫で廻した。

お米はすぐ其手紙を拾つたが、別に讀まうともしなかつた。それを膝の上へ乘せた儘、夫の顏を見て、

「遠からぬうちには歸京仕るべく候間、何うだつて云ふの」と聞いた。

「何れ歸つたら、安之助と相談して何とか御挨拶を致しますと云ふのさ」

「遠からぬうちぢや曖昧ね。何時歸るとも書いてなくつて」

「いゝや」

お米は念の爲、膝の上の手紙を始めて開いて見た。さうして夫を元の樣に疊んで、

「一寸其狀袋を」と手を夫の方へ出した。宗助は自分と火鉢の間に挾まつてゐる青い封筒を取つて細君に渡した。お米はそれをふつと吹いて、中を膨らまして手紙を收めた。さうして臺所へ立つた。

宗助は夫限り手紙の事には氣を留めなかつた。今日役所で同僚が、此間英吉利から來遊したキチナー元帥に、新橋の傍で逢つたと云ふ話を思ひ出して、あゝ云ふ人間になると、世界中何處へ行つても、世間を騷がせる樣に出來てゐる樣だが、實際さういふ風に生れ附いて來たものかも知れない。自分の過去から引き摺つて來た運命や又、其續きとして、是から自分の眼前に展開されべき將來を取つて、キチナーと云ふ人のそれに比べて見ると、到底同じ人間とは思へない位懸け隔たつてゐる。

斯う考へて宗助はしきりに煙草を吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲つて來る樣な音がする。それが時々已むと、已んだ間は寂として、吹き荒れる時よりは猶淋しい。宗助は腕組をしながら、もうそろ〳〵火事の半鐘が鳴り出す時節だと思つた。

臺所へ出て見ると、細君は七輪の火を赤くして、肴の切身を燒いてゐた。清は流し元に曲んで漬物を洗つてゐた。二人とも口を利かずにせつせと自分の遣る事を遣つてゐる。宗助は障子を開けたなり、少時肴から垂れる汁か膏の音を聞いてゐたが、無言の儘又障子を閉てて元の座へ戻つた。細君は眼さへ肴から離さなかつた。

食事を濟まして、夫婦が火鉢を間に向ひ合つた時、お米は又

「佐伯の方は困るのね」と云ひ出した。

「まあ仕方がない。安さんが神戸から歸る迄待つより外に道はあるまい」

「其前に一寸叔母さんに逢つて話しをして置いた方が好かなくつて」

「さうさ。まあ其内何とか云つて來るだらう。夫迄打遣つて置かうよ」

「小六さんが怒つてよ。可くつて」とお米はわざと念を押して置いて微笑した。宗助は下眼を使つて、手に持つた小楊枝を着物の襟へ差した。

中一日置いて、宗助は漸く佐伯からの返事を小六に知らせてやつた。其時も手紙の尻に、まあ其内何うかなるだらうと云ふ意味を、例の如く附け加へた。さうして當分は此事件に就いて肩が拔けた樣に感じた。自然の經過が又窮屈に眼の前に押し寄せて來る迄は、忘れてゐる方が面倒がなくつて好い位な顏をして、毎日役所へ出ては又役所から歸つて來た。歸りも遲いが、歸つてから出掛ける抔といふ億劫な事は滅多になかつた。客は殆ど來ない。用のない時は淸を十時前に寢かす事さへあつた。夫婦は毎夜同じ火鉢の兩側に向き合つて、食後一時間位話しをした。話しの題目は彼等の生活狀態に相應した程度のものであつた。けれども米屋の拂ひを、此三十日には何うしたものだらうといふ、苦しい世帶話は、未だ嘗て一度も彼等の口には上らなかつた。と云つて、小說や文學の批評は勿論の事、男と女の間を陽炎の樣に飛び廻る、花やかな言葉の遣り取りは殆ど聞かれなかつた。彼等は夫程の年配でもないのに、もう其處を通り拔けて、日毎に地味になつて行く人の樣にも見えた。又は最初から、色彩の薄い極めて通俗の人間が、習慣的に夫婦の關係を結ぶために寄り合つた樣にも見えた。

上部から見ると、夫婦ともさう物に屈託する氣色はなかつた。それは彼等が小六の事に關して取つた態度に就いて見ても略想像がつく。流石女丈にお米は一二度、

「安さんは、まだ歸らないんでせうかね。貴方今度の日曜位に番町迄行つて御覽なさらなくつて」と注意した事があるが、宗助は、

「うん、行つても好い」位な返事をする丈で、其行つても好い日曜が來ると、丸で忘れた樣に濟ましてゐる。お米もそれを見て、責める樣子もない。天氣が好いと、

「ちと散歩でもして入らつしやい」と云ふ。雨が降つたり、風が吹いたりすると、

「今日は日曜で仕合せね」と云ふ。

幸ひにして小六は其後一度もやつて來ない。此靑年は至つて凝り性の神經質で、斯うと思ふと何處迄も進んで來る所が、書生時代の宗助によく似てゐる代りに、不圖氣が變ると、昨日の事は丸で忘れた樣に引つ繰り返つて、けろりとした顏をしてゐる。其處も兄弟丈あつて、昔の宗助に其儘である。それから、頭腦が比較的明瞭で、理路に感情を注ぎ込むのか、又は感情に理窟の枠を張るのか、何方か分らないが、兎に角物に筋道を附けないと承知しないし、また一返筋道が附くと、其筋道を生かさなくつては置かない樣に熱中したがる。其上體質の割合に精力がつゞくから、若い血氣に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる樣な氣がしてならなかつた。時には、はら〳〵する事もあつた。又苦々しく思ふ折もあつた。さう云ふ場合には、心のうちに、當時の自分が一途に振舞つた苦い記憶を、出來る丈屢呼び起させるために、とくに天が小六を自分の眼の前に据ゑ附けるのではなからうかと思つた。さうして非常に恐ろしくなつた。此奴も或は己と同一の運命に陷るために生れて來たのではなからうかと考へると、今度は大いに心掛りになつた。時によると心掛りよりは不愉快であつた。

けれども、今日迄宗助は、小六に對して異見がましい事を云つた事もなければ、將來に就いて注意を與

へた事もなかつた。彼の弟に對する行過方はたゞ普通凡庸のものであつた。彼の今の生活が彼の樣な過去を有つてゐる人とは思へない程に、沈んでゐる如く、彼の弟を取り扱ふ樣子にも、過去と名のつく程の經驗を有つた年長者の素振は容易に出なかつた。

宗助と小六の間には、まだ二人程男の子が挾まつてゐたが、何れも早世して仕舞つたので、兄弟とは云ひながら、年は十許り違つてゐる。其上宗助はある事情のために、一年の時京都へ轉學したから、朝夕一所に生活してゐたのは、小六の十二三の時迄である。宗助は剛情な聽かぬ氣の腕白小僧としての小六を未だに記憶してゐる。其時分は父も生きてゐたし、家の都合も惡くはなかつたので、抱車夫を邸內の長屋に住まはして、樂に暮らしてゐた。此車夫に小六よりは三つ程年下の子供があつて、始終小六の御相手をして遊んでゐた。ある夏の日盛りに、二人して長い竿のさきへ菓子袋を括り附けて、大きな柿の木の下で蟬の捕りくらをしてゐるのを、宗助が見て、兼坊そんなに頭を日に照らし附けると霍亂になるよ、さあ是を被れと云つて、小六の古い夏帽を出してやつた。すると、小六は自分の所有物を兄が無斷で他に遣つたのが、癪に障つたので、突然兼坊の受取つた帽子を引つたくつて、それを地面の上へ擲げつけるや否や、馳け上がる樣に其上へ乘つて、くしやりと麥藁帽を踏み潰して仕舞つた。宗助は緣から跣足で飛んで降りて、小六の頭を擲り附けた。其時から宗助の眼には、小六が小惡らしい小僧として映つた。

二年の時宗助は大學を去らなければならない事になつた。東京の家へも歸れない事になつた。京都からすぐ廣島へ行つて、其處に半歲ばかり暮らしてゐるうちに父が死んだ。母は父よりも六年程前に死んでゐた。だから後には二十五六になる妾と、十六になる小六が殘つた丈であつた。

佐伯から電報を受け取つて、久し振に出京した宗助は、葬式を濟ました上、家の始末をつけようと思つて段々調べて見ると、有ると思つた財産は案外に少なくつて、却つて無い積りの借金が大分あつたに驚かされた。叔父の佐伯に相談すると、仕方がないから邸を賣るが好からうと云ふ話しであつた。妾は相當の金を遣つてすぐ暇を出す事に極めた。小六は當分叔父の家に引き取つて世話をして貰ふ事にした。然し肝心の家屋敷はすぐ右から左へと賣れる譯には行かなかつた。仕方がないから、叔父に一時の工面を頼んで、當座の片を附けて貰つた。叔父は事業家で色々な事に手を出しては失敗する、云はゞ山氣の多い男であつた。宗助が東京にゐる時分も、よく宗助の父を說き附けては、旨い事を云つて金を引き出したものである。宗助の父にも慾があつたかも知れないが、此傳で叔父の事業に注ぎ込んだ金高は、決して少ないものではなかつた。

父の亡くなつた此際にも、叔父の都合は元と餘り變つてゐない樣子であつたが、生前の義理もあるし、又斯う云ふ男の常として、いざと云ふ場合には比較的融通の附くものと見えて、叔父は快く整理を引き受けて吳れた。其代り宗助は自分の家屋敷の賣却方に附いて、一切の事を叔父に一任して仕舞つた。早く云ふと急場の金策に對する報酬として、土地家屋を提供した樣なものである。叔父は、

「何しろ、斯う云ふものは買手を見て賣らないと損だからね」と云つた。

道具類も積ばかり取つて、金目にならないものは、悉く賣り拂つたが、五六幅の掛物と十二三點の骨董品丈は、矢張り氣長に欲しがる人を探さないと損だと云ふ叔父の意見に同意して、叔父に保管を頼む事にした。凡てを差引いて手元に殘つた有り金は、約二千圓程のものであつたが、宗助は其內の幾分を、小六

の學資として、使はなければならないと氣が附いた。然し月々自分の方から送るとすると、今日の位置が堅固でない當時、甚だ實行しにくい結果に陷りさうなので、苦しくはあつたが、思ひ切つて、半分丈を叔父に渡して、何分宜しくと頼んだ。自分が中途で失敗つたから、切めて弟丈は物にしてやりたい氣もあるので、此千圓が盡きたあとは、又何うにか心配も出來ようし、又して呉れるだらう位の不慥かな希望を殘して、又廣島へ歸つて行つた。

それから半年ばかりして、叔父の自筆で、家はとう〳〵賣れたから安心しろと云ふ手紙が來たが、幾何に賣れたとも何とも書いてないので、折り返して聞き合はせると、二週間程經つての返事に、優に例の立替へを償ふに足る金額だから心配しなくても好いとあつた。宗助は此返事に對して少なからず不滿を感じたには感じたが、同じ書信の中に、委細は何れ御面會の節云々とあつたので、すぐにも東京へ行きたい樣な氣がして、實は斯う〳〵だがと、細君に話して見ると、お米は氣の毒さうな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例の如く微笑した。其時宗助は始めて細君から宣告を受けた人の樣に、しばらく腕組をして考へたが、何う工夫したつて、拔ける事の出來ない樣な位地と事情の下に束縛されてゐたので、つい夫なりになつて仕舞つた。

仕方がないから、猶三四回書面で往復を重ねて見たが、結果はいつも同じ事で、版行で押した樣に何れ御面會の節を繰り返して來る丈であつた。

「是ぢや仕樣がないよ」と宗助は腹が立つた樣な顔をしてお米を見た。三ヶ月ばかりして、漸く都合が附いたので、久し振にお米を連れて、出京しようと思ふ矢先に、つい風邪を引いて寢たのが元で、腸窒扶

斯に變化したため、六十日餘りを床の上に暮らした上に、あとの三十日程は充分仕事も出來ない位衰へて仕舞つた。

病氣が本復してから間もなく、宗助は又廣島を去つて福岡の方へ移らなければならない身となつた。移る前に、好い機會だから一寸東京迄出たいものだと考へてゐるうちに、今度も色々の事情に制せられて、つい夫も遂行せずに、矢張り下り列車の走る方に自己の運命を託した。其頃は東京の家を疊むとき、懷にして出た金は、殆ど使ひ果たしてゐた。彼の福岡生活は前後二年を通じて、中々の苦闘であつた。彼は書生として京都にゐる時分、種々の口實の下に、父から臨時隨意に多額の學資を請求して、勝手次第に消費した昔をよく思ひ出して、今の身分と比較しつゝ、頻りに因果の束縛を恐れた。ある時は私かに過ぎた春を回顧して、あれが己の榮華の頂點だつたんだと、始めて醒めた眼に遠い霞を眺める事もあつた。愈苦しくなつた時、

「お米、久しく放つて置いたが、又東京へ掛け合つて見ようかな」と云ひ出した。お米は無論逆らひはしなかつた。たゞ下を向いて、

「駄目よ。だつて、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細さうに答へた。

「向うぢや此方に信用がないかも知れないが、此方ぢや又向うに信用がないんだ」と宗助は威張つて云ひ出したが、お米の俯目になつてゐる樣子を見ると、急に勇氣が挫ける風に見えた。こんな問答を最初は月に一二返位繰り返してゐたが、後には二月に一返になり、三月に一返になり、とう〳〵、

「好いや、小六さへ何うかして吳れゝば。あとの事は何れ東京へ出たら、遇つた上で話しを附けらあ。

ねえ、お米、左うすると、しようがないぢやないか」と云ひ出した。

「それで、好ござんすとも」とお米は答へた。

宗助は佐伯の事をそれなり放つて仕舞つた。單なる無心は、自分の過去に對しても、叔父に向つて云ひ出せるものでないと、宗助は考へてゐた。從つて其方の談判は、始めから未だ曾て筆にした事がなかつた。小六からは時々手紙が來たが、極めて短かい形式的のものが多かつた。宗助は父の死んだ時、東京で逢つた小六を覺えてゐる丈だから、未だに小六を他愛ない子供位に想像するので、自分の代理に叔父と交涉させよう抔と、云ふ氣は無論起らなかつた。

夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに堪へかねて、抱き合つて暖を取る樣な具合に、御互同志を頼りとして暮らしてゐた。苦しい時には、お米が何時でも宗助に、

「でも仕方がないわ」と云つた。宗助はお米に、

「まあ我慢するさ」と云つた。

二人の間には諦めとか、忍耐とか云ふものが、斷えず動いてゐたが、未來とか希望と云ふものの影は、殆んど射さない樣に見えた。彼等は餘り多く過去を語らなかつた。時としては申し合はせた樣に、それを回避する風さへあつた。お米が時として、

「其内には又屹度好い事があつてよ。さう〳〵惡い事ばかり續くものぢやないから」と夫を慰める樣に云ふ事があつた。すると、宗助にはそれが、眞心ある妻の口を藉りて、自分を翻弄する運命の毒舌の如くに感ぜられた。宗助はさう云ふ場合には、何も答へずにたゞ苦笑する丈であつた。お米が夫でも氣が附か

ずに、なにか云ひ續けると、

「我々は、そんな好い事を豫期する權利のない人間ぢやないか」と思ひ切つて投げ出して仕舞ふ。細君は漸く氣が附いて口を噤んで仕舞ふ。さうして二人が默つて向き合つてゐると、何時の間にか、自分達は自分達の拵へた、過去といふ暗い大きな窖の中に落ちてゐる。

彼等は自業自得で、彼等の未來を塗抹した。だから歩いてゐる先の方には、花やかな色彩を認める事が出來ないものと諦めて、たゞ二人手を携へて行く氣になつた。叔父の賣り拂つたと云ふ地面家作に就いても、固より多くの期待は持つてゐなかつた。時々考へ出した樣に、

「だつて、近頃の相場なら、捨賣りにしたつて、あの時叔父の拵へて呉れた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿々々しいからね」と宗助が云ひ出すと、お米は淋しさうに笑つて、

「又地面？何時もあの事ばかり考へて入らつしやるのね。だつて、貴方が萬事宜しく願ひますと、叔父さんに仰しやつたんでせう」と云ふ。

「そりや仕方がないさ。あの場合あゝでも爲なければ方が附かないんだもの」と宗助が云ふ。

「だからさ。叔父さんの方では、御金の代りに家と地面を貰つた積りで入らつしやるかも知れなくつてよ」とお米が云ふ。

さう云はれると、宗助も叔父の處置に一理ある樣にも思はれて、口では「その積りが好くないぢやないか」と答辯する樣なものゝ、此問題は其都度次第々々に背景の奧に遠ざかつて行くのであつた。

夫婦がこんな風に淋しく睦まじく暮らして來た二年目の末に、宗助はもとの同級生で、學生時代には大

變な意であつた杉原と云ふ男に偶然出逢つた。杉原は卒業後高等文官試驗に合格して、其時既に或省に奉職してゐたのだが、公務上福岡と佐賀へ出張することになつて、東京からわざ〳〵遣つて來たのである。宗助は新聞で、杉原の何時着いて、何處に泊つてゐるかを好く知つてはゐたが、失敗者としての自分に顧みて、成功者の前に頭を下げる對照を恥づかしく思つた上に、自分は在學當時の舊友に逢ふのを、特に避けたい理由を持つてゐたので、彼の旅館を訪ねる氣は毛頭なかつた。

所が杉原の方では、妙な引掛りから、宗助の此處に燻ぶつてゐることを聞き出して、強いて面會を希望するので、宗助も已を得ず我を折つた。宗助が福岡から東京へ移れる樣になつたのは、全く此杉原の御蔭である。杉原から手紙が來て、愈事が極まつたとき、宗助は箸を置いて、

「お米、とう〳〵東京へ行けるよ」と云つた。

「まあ結構ね」とお米が夫の顏を見た。

東京に着いてから二三週間は、眼の回る樣に日が經つた。新しく世帶を有つて、新しい仕事を始める人に、あり勝ちな急忙しなさと、自分達を包む大都の空氣の、日夜劇しく震盪する刺激とに驅られて、何事をも凝と考へる閑もなく、又落ち着いて手を下す分別も出なかつた。

夜汽車で新橋へ着いた時は、久し振りに叔父夫婦の顏を見たが、夫婦とも灯の所爲か晴れやかな色には宗助の眼に映らなかつた。途中に事故があつて、着の時間が珍らしく三十分程後れたのを、宗助の過失ででもあるかの樣に、待ち草臥れた氣色であつた。

宗助が此時叔母から聞いた言葉は、

「おや宗さん、少時御目に掛からないうちに、大變御老けなすつた事」といふ一句であつた。お米は其折始めて叔父夫婦に紹介された。

「これが彼の……」と叔母は逡巡つて宗助の方を見た。お米は何と挨拶のしやうもないので、無言の儘唯頭を下げた。

小六も無論叔父夫婦と共に二人を迎へに來てゐた。宗助は一目其姿を見たとき、何時の間にか自分を凌ぐ樣に大きくなつた、弟の發育に驚かされた。小六は其時中學を出て、是から高等學校へ這入らうといふ間際であつた。宗助を見て、「兄さん」とも「御歸りなさい」とも云はないで、たゞ不器用に挨拶をした。

宗助とお米は一週ばかり宿屋住居をして、夫から今の所に引き移つた。其時は叔父夫婦が色々世話を燒いて呉れた。細々した臺所道具の樣なものは買ふ迄もあるまい。古いので可ければと云ふので、小人數に必要な丈一通り取り揃へて送つて來た。其上、

「御前も新世帶だから、嘸物要りが多からう」と云つて金を六十圓呉れた。

家を持つて彼是取紛れてゐるうちに、早半月餘も經つたが、地方にゐる時分あんなに氣にしてゐた家邸の事は、ついまだ叔父に言ひ出さずにゐた。ある時お米が、

「貴方あの事を叔父さんに仰しやつて」と聞いた。宗助はそれで急に思ひ出した樣に、

「うん、未だ云はないよ」と答へた。

「妙ね、あれ程氣にして入らしつたのに」とお米がうす笑ひをした。

「だつて、落ち附いて、そんな事を云ひ出す暇がないんだもの」と宗助が辯解した。

又十日程經つた。すると今度は宗助の方から、

「お米、あの事は未だ云はないよ。どうも云ふのが面倒で厭になつた」と云ひ出した。

「厭なものを無理に仰しやらなくつても可いわ」とお米が答へた。

「好いかい」と宗助が聞き返した。

「好いかいつて、もと／＼貴方の事ぢやなくつて。私は先から何うでも好いんだわ」とお米が答へた。

其時宗助は、

「そりや、遠慮らしく云ひ出すのも何だか妙だから、其内機會があつたら、聞くとしよう。なに其内聞いて見る機會が屹度出て來るよ」と云つて延ばして仕舞つた。

小六は何不足なく叔父の家に寢起きしてゐた。試驗を受けて高等學校へ這入れれば、寄宿へ入舍しなければならないと云ふので、其相談迄既に叔父と打ち合せがしてある樣であつた。新しく出京した兄からは、別段學資の世話を受けない所爲か、自分の身の上に就いては叔父程に親しい相談も持ち込んで來なかつた。從兄弟の安之助とは、今迄の關係上大變仲が好かつた。却つて此方が兄弟らしかつた。

宗助は自然叔父の家に足が遠くなる樣になつた。たまに行つても、義理一遍の訪問に終る事が多いので、歸り路には何時も詰らない氣がしてならなかつた。仕舞には時候の挨拶を濟ますと、すぐ歸りたくなる事もあつた。かう云ふ時には三十分と坐つて、世間話に時間を繋ぐのにさへ骨が折れた。向うでも何だか氣が置けて窮屈だと云ふ風が見えた。

「まあ可いぢやありませんか」と叔母が留めてくれるのが例であるが、さうすると、猶更居にくい心持

がした。それでも、たまには行かないと、心のうちで氣が咎める樣な不安を感ずるので、又行くやうになつた。折々は、

「何うも小六が御厄介になりまして」と此方から頭を下げて禮を云ふ事もあつた。けれどもそれ以上は、弟の將來の學資に就いても、又自分が叔父に賴んで留守中に賣り拂つて貰つた地所家作に就いても、口を切るのがつい面倒になつた。然し宗助が興味を有たない叔父の所へ、不精無精にせよ、時たま出掛けて行くのは、單に叔父甥の血族關係を世間並に持ち堪へるための義務心からではなくつて、いつか機會があつたら、片を附けたい或物を胸の奧に控へてゐた結果に過ぎないのは明らかであつた。

「宗さんは何うも悉皆變つちまひましたね」と叔母が叔父に話す事があつた。すると叔父は、

「左うよなあ。矢つ張り、あゝ云ふ事があると、永く迄後へ響くものだからな」と答へて、因果は恐ろしいと云ふ風をする。叔母は重ねて、

「本當に、怖いもんですね。元はあんな寢入つた子ぢやなかつたが――どうも燥急ぎ過ぎる位活潑でしたからね。それが二三年見ないうちに、丸で別の人見た樣に老けちまつて。今ぢや貴方より御爺さん御爺さんしてゐますよ」と云ふ。

「眞逆」と叔父が又答へる。

「いえ、頭や顏は別として、樣子がさ」と叔母が又辯解する。

こんな會話が老夫婦の間に取り換はされたのは、宗助が出京して以來一度や二度ではなかつた。實際彼は叔父の處へ來ると、老人の眼に映る通りの人間に見えた。

お米は何う云ふものか、新橋へ着いた時、老人夫婦に紹介されたぎり、曾て叔父の家の敷居を跨いだ事がない。向うから見えれば叔父さん叔母さんと丁寧に接待するが、歸りがけに、

「何うです、些と御出掛けなすつちや」などと云はれると、たゞ、

「難有う」と頭を下げる丈で、遂ぞ出掛けた試しはなかつた。流石の宗助さへ一度は、

「叔父さんの處へ一度行つて見ちや、何うだい」と勸めた事があるが、

「でも」と變な顔をするので、宗助は夫限り決して其事を云ひ出さなかつた。

兩家族はこの狀態で約一年ばかりを送つた。すると宗助よりも氣分は若いと許された叔父が突然死んだ。病症は脊髓腦膜炎とかいふ劇症で、二三日風邪の氣味で寢てゐたが、便所へ行つた歸りに手を洗はうとして、柄杓を持つた儘卒倒したなり、一日經つか經たないうちに、冷たくなつて仕舞つたのである。

「お米、叔父はとう／＼話しをしずに死んで仕舞つたよ」と宗助が云つた。

「貴方まだ、あの事を聞く積りだつたの。貴方も隨分執念深いのね」とお米が云つた。

夫から又一年ばかり經つたら、叔父の子の安之助が大學を卒業して、小六が高等學校の二年生になつた。叔母は安之助と一所に中六番町に引き移つた。

三年目の夏休みに小六は房州の海水浴へ行つた。そこに一月餘りも滯在してゐる中に、九月になり掛けたので、保田から向うへ突つ切つて、上總の海岸を九十九里傳ひに、銚子迄來たが、そこから思ひ出した樣に東京へ歸つた。宗助の處へ見えたのは、歸つてからまだ二三日しか立たない、殘暑の強い午後である。眞黑に焦げた顏の中に、眼だけ光らして見違へる樣に蠻色を帶びた彼は、比較的日の遠い座敷へ這入つた

なり横になつて、兄の歸りを待ち受けてゐたが、宗助の顏を見るや否や、むつくり起き上がつて、
「兄さん、少し御話しがあつて來たんですが」と開き直られたので、宗助は少し驚いた氣味で、暑苦しい洋服さへ脱ぎ更へずに、小六の話しを聞いた。

小六の云ふ所によると、二三日前彼が上總から歸つた晩、彼の學資は此暮限り、氣の毒ながら出して遣れないと、叔母から申し渡されたのださうである。小六は父が死んで、すぐと叔父に引き取られて以來、學校へも行けるし、着物も自然に出來るし、小遣も適宜に貰へるので、父の存生中と同じ樣に、何不足なく暮らせて來た惰性から、其日其晩迄も、つひぞ學資と云ふ問題を、頭に思ひ浮かべた事がなかつたため、叔母の宣告を受けた時は、茫然して兎角の挨拶さへ出來なかつたのだと云ふ。

叔母は氣の毒さうに、何故小六の世話が出來なくなつたかを、女丈に、一時間も掛かつて委しく說明して呉れたさうである。それには叔父の亡くなつた事やら、續いて起る經濟上の變化やら、又安之助の卒業やら、卒業後に控へてゐる結婚問題やらが這入つてゐたのだと云ふ。

「出來るならば、切めて高等學校を卒業する迄と思つて、今日迄色々骨を折つたんだけれども」

叔母は斯う云つたと小六は繰り返した。小六は其時不圖兄が、先年父の葬式の時に出京して、萬事を片附けた後廣島へ歸るとき、小六に、御前の學資は叔父さんに預けてあるからと云つた事があるのを思ひ出して、叔母に始めて聞いて見ると、叔母は案外な顏をして、

「そりや、あの時、宗さんが若干か置いて行きなすつた事は、行きなすつたが、夫はもう有りやしないよ。叔父さんの未だ生きて御出での時分から、御前の學資は融通して來たんだから」と答へた。

小六には自分の學資が何んな程あつて、何年分の勘定で、叔父に預けられたかを、聞いて置かなかつたから、叔母から斯う云はれて見ると、一言も返し樣がなかつた。

「御前も一人ぢやなし、兄さんもある事だから、よく相談をして見たら好いだらう。其代り私も宗さんに逢つて、篤り譯を話しませうから。どうも、宗さんも餘り近頃は御出でないし、私も御無沙汰許りしてゐるのでね、つい御前の事は御話しをする譯にも行かなかつたんだよ」と叔母は最後に附け加へたさうである。

小六から一部始終を聞いた時、宗助はたゞ弟の顏を眺めて、一口、

「困つたな」と云つた。昔の樣に赫と激して、すぐ叔母の所へ談判に押し掛ける氣色もなければ、今迄自分に對して、世話にならないでも濟む人の樣に、餘所々々しく仕向けて來た弟の態度が、急に方向を轉じたのを、惡いと思ふ樣子も見えなかつた。

自分の勝手に作り上げた美しい未來が、半分壞れかゝつたのを、さも傍の人の所爲でもあるかの如く、心を亂してゐる小六の歸る姿を見送つた宗助は、暗い玄關の敷居の上に立つて、格子の外に射す夕日をしばらく眺めてゐた。

其晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪つて來て、それを座敷の緣に敷いて、其上にお米と並んで涼みながら、小六の事を話した。

「叔母さんは、此方で、小六さんの世話をしろつて云ふ氣なんぢやなくつて」とお米が聞いた。

「まあ、逢つて聞いて見ないうちは、何う云ふ料簡か分らないがね」と宗助が云ふと、お米は、

「屹度左うよ」と答へながら、暗がりで團扇をはた〳〵動かした。宗助は何も云はずに、頸を延ばして。庇と崖の間に細く映る空の色を眺めた。二人は其儘しばらく默つて居たが、良あつて、

「だつて夫ぢや無理ね」とお米が又云つた。

「人間一人大學を卒業させるなんて、己の手際ぢや到底駄目だ」と宗助は自分の能力丈を明らかにした。

會話はそこで別の題目に移つて、再び小六の上にも叔母の上にも歸つて來なかつた。それから二三日すると丁度土曜が來たので、宗助は役所の歸りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。叔母は、

「おや〳〵。まあ御珍らしい事」と云つて、何時もよりは愛想よく宗助を款待して呉れた。其時宗助は厭なのを我慢して、此四五年來溜めて置いた質問を始めて叔母に掛けた。叔母は固より出來る丈は辯解しない譯に行かなかつた。

叔母の云ふ所によると、宗助の邸宅を賣り拂つた時、叔父の手に這入つた金は、慥かには覺えてゐないが、何でも、宗助のために急場の間に合はせた借財を返した上、猶四千五百圓とか四千三百圓とか餘つたさうである。所が叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たとひ幾何餘らうと、餘つた分は自分の所得と見傚して差支へない。然し宗助の邸宅を賣つて儲けたと云はれては心持が惡いから、是は小六の名義で保管して置いて、小六の財産にして遣る。宗助はあんな事をして、廢嫡に迄されかゝつた奴だから、一文だつて取る權利はない。

「宗さん怒つちや不可ませんよ。たゞ叔父さんの云つた通りを話すんだから」と叔母が斷つた。宗助は默つてあとを聞いてゐた。

小六の名義で保管されべき財産は、不幸にして、叔父の手腕で、すぐ神田の賑やかな表通りの家屋に變形した。さうして、まだ保險を附けないうちに、火事で燒けて仕舞つた。小六には始めから話してない事だから、其儘にして、わざと知らせずに置いた。

「さう云ふ譯でね、まことに宗さんにも、御氣の毒だけれども、何しろ取つて返しの附かない事だから仕方がない。運だと思つて諦めて下さい。尤も叔父さんさへ生きてゐれば、又何うともなるんでせうさ。小六一人位[illegible]譯はありますまいよ。よしんば叔父さんが居なさらない、今にしたつて、此方の都合さへ好ければ、燒けた家と同じ丈のものを、小六に返すか、それでなくつても、當人の卒業する迄位は、何うにかして世話も出來るんですけれども」と云つて叔母は又外の内幕話をして聞かせた。それは安之助の職業に就いてであつた。

安之助は叔父の一人息子で、此夏大學を出た計りの青年である。家庭で暖かに育つた上に、同級の學生位より外に交際のない男だから、世の中の事には寧ろ迂濶と云つても可いが、其迂濶な所に何處か鷹揚な趣を具へて、實社會へ顏を出したのである。專門は工科の機械學だから、企業熱の下火になつた今日と雖も、日本中に澤山ある會社に、相應の口の一つや二つあるのは勿論であるが、親讓りの山氣が何處かに潛んでゐるものと見えて、自分で自分の仕事をして見たくてならない矢先へ、同じ科の出身で、小規模ながら專有の工場を月島邊に建てて、獨立の經營をやつてゐる先輩に出逢つたのが緣となつて、其先輩と相談の上、自分も幾分かの資本を注ぎ込んで、一所に仕事をして見ようといふ考へになつた。叔母の内幕話と云つたのは、其處である、

「でね、少し有つた株をみんな其方へ廻す事にしたもんだから、今ぢや本當に一文なし同然な仕儀でゐるんですよ。それは世間から見ると、人數は少ないし、家邸は持つてゐるし、樂に見えるのも無理のない所でせうさ。此間も原の御母さんが來て、まあ貴方程氣樂な方はない、何時來て見ても萬年青の葉ばかり丹念に洗つてゐるつてね。眞逆左うでもないんですけれども」と叔母が云つた。

宗助が叔母の説明を聞いた時は、ぼんやりして兎角の返事が容易に出なかつた。心の中で、是は神經衰弱の結果、昔の樣に機敏で明快な判斷を、すぐ作り上げる頭が失くなつた證據だらうと自覺した。叔母は自分の云ふ通りが、宗助に本當と受けられないのを氣にする樣に、安之助から持ち出した資本の高迄話した。それは五千圓程であつた。安之助は當分の間、僅かな月給と、此五千圓に對する利益配當とで暮らさなければならないのださうである。

「其配當だつて、まだ何うなるか判りやしないんですからね。旨く行つた所で、一割か一割五分位なものでせうし、又一つ間違へば丸で烟にならないとも限らないんですから」と叔母が附け加へた。

宗助は叔母の仕打ちに、是と云ふ目立つた阿漕な所も見えないので、心の中では少なからず困つたが、小六の將來に就いて一口の掛合ひもせずに歸るのは、如何にも馬鹿々々しい氣がした。そこで今迄の問題は其處に据ゑつきりにして置いて、自分が當時小六の學資として叔父に預けて行つた千圓の處置を聞き糺して見ると、叔母は、

「宗さん、あれこそ本當に小六が使つちまつたんですよ。小六が高等學校へ這入つてからでも、もう彼是七百圓は掛かつてゐるんですもの」と答へた。

宗助は序だから、それと同時に、叔父に保管を頼んだ書畫や骨董品の成行を確めて見た。すると、叔母は、

「ありやあ飛んだ馬鹿な目に逢つてね」と云ひかけたが、宗助の樣子を見て、

「宗さん、何ですか、彼の事はまだ御話しをしなかつたんでしたかね」と聞いた。宗助がいゝえと答へると、

「おや／＼、夫ぢや叔父さんが忘れちまつたんですよ」と云ひながら、其顛末を語つて聞かした。

宗助が廣島へ歸ると間もなく、叔父は其賣捌き方を眞田とかいふ懇意の男に依頼した。此男は書畫骨董の道に明るいとかいふので、平生そんなものゝ賣買の周旋をして諸方へ出入りするさうであつたが、すぐさま叔父の依頼を引き受けて、誰某が何を欲しいと云ふから、一寸拜見とか、何々氏が斯う云ふ物を希望だから、見せませうとか號して、品物を持つて行つたぎり、返して來ない。催促すると、まだ先方から戻つて參りませんからとか何とか言ひ譯をする丈で、嘗て埒の明いた試しがなかつたが、とう／＼持ち切れなくなつたと見えて、何處かへ姿を隱して仕舞つた。

「でもね、未だ屏風が一つ殘つてゐますよ。此間引越の時に、氣が附いて、こりや宗さんのだから、今度序があつたら屆けて上げたら可いだらうつて、安がさう云つてゐましたつけ」

叔母は宗助の預けて行つた品物には、丸で重きを置いてゐない樣な、物の云ひ方をした。宗助も今日迄放つて置く位だから、あまり其方面には興味を有ち得なかつたので、少しも良心に惱まされてゐる氣色のない叔母の樣子を見ても、別に腹は立たなかつた。それでも、叔母が、

「宗さん、何うせ家ぢや使つてゐないんだから、なんなら持つて御出でなすつちや何うです。此頃は彼あいふものが、大變價が出たと云ふ話ぢやありませんか」と云つたときは、實際それを持つて歸る氣になつた。

納戸から取り出して貰つて、明るい所で眺めると、慥かに見覺えのある二枚折であつた。下に萩、桔梗、芒、葛、女郎花を隙間なく描いた上に、眞丸な月を銀で出して、其横の空いた處へ、野路や空月の中なる女郎花、其一と題してある。宗助は膝を突いて銀の色の黑く焦けた邊から、葛の葉の風に裏を返してゐる色の乾いた樣から、大福程な大きな丸い朱の輪廓の中に抱一と行書で書いた落欵をつく〴〵と見て、父の生きてゐる當時を憶ひ起さずにはゐられなかつた。

父は正月になると、屹度此屏風を薄暗い藏の中から出して、玄關の仕切に立てて、其前へ紫檀の角な名刺入を置いて、年賀を受けたものである。其時は目出度いからと云ふので、客間の床には必ず虎の雙幅を懸けた。是は岸駒ぢやない岸岱だと父が宗助に云つて聞かせた事があるのを、宗助は未だ記憶してゐた。此虎の畫には墨が着いてゐた。虎が舌を出して谷の水を呑んでゐる鼻柱が少し汚されたのを、父は苛く氣にして、宗助を見る度に、御前此處へ墨を塗つた事を覺えてゐるか、是は御前の小さい時分の惡戲だぞと云つて、可笑しい樣な恨めしい樣な一種の表情をした。

宗助は屏風の前に畏まつて、自分が東京にゐた昔の事を考へながら、

「叔母さん、ぢや此屏風は頂戴して行きませう」と云つた。

「あゝ〳〵、御持ちなさいとも。何なら使に持たせて上げませう」と叔母は好意から申し添へた。

宗助は然るべく叔母に頼んで、其日は夫で切り上げて歸つた。晩食の後お米と一所に又縁側へ出て、暗い處で白地の浴衣を並べて、涼みながら、晝の話をした。

「安さんには、御逢ひなさらなかつたの」とお米が聞いた。

「あゝ、安さんは土曜でも何でも夕方迄、工場にゐるんださうだ」

「隨分骨が折れるでせうね」

お米は左う云つたなり、叔父や叔母の處置に就いては、一言の批評も加へなかつた。

「小六の事は何うしたものだらう」と宗助が聞くと、

「さうね」と云ふ丈であつた。

「理窟を云へば、此方にも云ひ分はあるが、云ひ出せば、とゞの詰りは裁判沙汰になる計りだから、證據も何もなければ勝てる譯のものぢやなし」と宗助が極端な豫想をすると、

「裁判なんかに勝たなくたつても可いわ」とお米がすぐ云つたので、宗助は苦笑して已めた。

「つまり己があの時東京へ出られなかつたからの事さ」

「さうして東京へ出られた時は、もうそんな事は何うでも可かつたんですもの」

夫婦はこんな話をしながら、又細い空を廂の下から覗いて見て、明日の天氣を語り合つて蚊帳に這入つた。

次の日曜に宗助は小六を呼んで、叔母の云つた通りを殘らず話して聞かせて、

「叔母さんが御前に詳しい説明をしなかつたのは、短兵急な御前の性質を知つてる所爲か、夫ともまだ

子供だと思つてわざと略して仕舞つたのか、其處は己にも分らないが、何しろ事實は今云つた通りなんだよ」と敎へた。
小六には如何に詳しい說明も腹の足しにはならなかつた。たゞ、
「左うですか」と云つて六づかしい不滿な顏をして宗助を見た。
「仕方がないよ。叔母さんだつて、安さんだつて、さう惡い料簡はないんだから」
「そりや、分つてゐます」と弟は峻しい物の云ひ方をした。
「ぢや己が惡いつて云ふんだらう。己は無論惡いよ。昔から今日迄惡い所だらけな男だもの」
宗助は橫になつて煙草を吹かしながら、是より以上は何とも語らなかつた。小六も默つて、座敷の隅に立ててあつた二枚折の抱一の屛風を眺めてゐた。
「御前あの屛風を覺えてゐるかい」とやがて兄が聞いた。
「えゝ」と小六が答へた。
「一昨日佐伯から屆けて吳れた。御父さんの持つてたもので、おれの手に殘つたのは、今ぢや是だけだ。是が御前の學資になるなら、今すぐにでも遣るが、剝げた屛風一枚で大學を卒業する譯にも行かずな」と宗助が云つた。さうして苦笑しながら、
「此暑いのに、斯んなものを立てて置くのは、氣狂じみてゐるが、入れて置く所がないから、仕方がない」と云ふ述懷をした。
小六は此の氣樂な樣な、愚圖の樣な、自分とは餘りに懸け隔つてゐる兄を、何時も物足りなくは思ふも

ので、いざといふ場合に、決して喧嘩はし得なかつた。此時も急に癇癪の角を折られた氣味で、

「自轉車は何うでも好いが、是れから先は何うしたもんでせう」と聞き出した。

「夫は問題だ。何しろ此年一杯に極まれば好い事だから、まあよく考へるさ。おれも考へて置かう」と宗助が云つた。

弟は彼の性質として、そんな中ぶらりんの姿は嫌ひである。學校へ出ても落ち附いて稽古も出來ず、下調べも手に附かない樣な境遇は、到底自分には堪へられないと云ふ訴へを切に遣り出したが、宗助の態度は依然として變らなかつた。小六があまり調子の高い不平を並べると、

「其位な事で夫程不平が並べられゝば、何處へ行つたつて大丈夫だ。學校を已めたつて、一向差支へない。御前の方が己より餘つ程偉いよ」と兄が云ふので、話しは其限頓挫して、小六はとう／＼本郷へ歸つて行つた。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食を濟まして、夜は近所の緣日へお米と一所に出掛けた。さうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つ宛持つて歸つて來た。夜露に中てた方が可からうと云ふので、崖下の雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。

蚊帳の中へ這入つた時、お米は、

「小六さんの事は何うなつて」と夫に聞くと、

「まだ何うも極らないさ」と宗助は答へたが、十分許りの後夫婦ともすや／＼寢入つた。

翌日眼が覺めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考へる暇を有たなかつた。家へ歸つて、

のつそりしてゐる時ですら、此問題を確的眼の前に描いて明らかにそれを眺める事を憚つた。髪の毛の中に包んである彼の腦は、其煩はしさに堪へなかつた。昔は數學が好きで、隨分込み入つた幾何の問題を、頭の中で明瞭な圖にして見る丈の根氣があつた事を憶ひ出すと、時日の割には非常に烈しく來た此變化が自分にも恐ろしく映つた。

それでも日に一度位は、小六の姿がぼんやり頭の奧に浮いて來る事があつて、其時丈は、彼奴の將來も何とか考へて置かなくつちやならないと云ふ氣も起つた。然しすぐあとから、まあ急ぐにも及ぶまい位に、自分と打消して仕舞ふのが常であつた。さうして、胸の筋が一本鈎に引つ掛かつた樣な心を抱いて、日を暮らしてゐた。

其內九月も末になつて、毎晩天の河が濃く見えるある宵の事、空から降つた樣に安之助が遣つて來た。宗助にもお米にも思ひ掛けない位稀な客なので、二人とも何か用があつての訪問だらうと推したが、果して小六に關する件であつた。

此間月島の工場へひよつくり小六が遣つて來て云ふには、自分の學資に就いての詳しい話は兄から聞いたが、自分も今迄學問を遣つて來て、とう〳〵大學へ這入れず仕舞ひになるのは如何にも殘念だから、借金でも何でもして、行ける處迄行きたいが、何か好い工夫はあるまいかと相談を掛けるので、安之助はよく宗さんにも話して見ようと答へると、小六は忽ちそれを遮つて、兄は到底相談になつて呉れる人ぢやない。自分が大學を卒業しないから、他も中途で已めるのは當然だ位に考へてる。元來今度の事も元を糺せば兄が責任者であるのに、あの通り一向平氣なもので、他が何を云つても取り合つて呉れない。だから、

たゞ頼りにするのは君丈だ。叔母さんに正式に斷られながら、又君に依頼するのは可笑しい樣だが、君の方が叔母さんより話しが分るだらうと思つて來たと云つて、中々動きさうもなかつたさうである。

安之助は、そんな事はない、宗さんも君の事では大分心配して、近い中又宅へ相談に來る筈になつてゐるんだからと慰めて、小六を歸したんだと云ふ。歸るときに、小六は袂から半紙を何枚も出して、缺席屆が入用だから是に判を押して呉れと請求して、僕は退學か在學か片が附く迄は勉強が出來ないから、毎日學校へ出る必要はないんだと云つたさうである。

安之助は忙しいとかで、一時間足らず話して歸つて行つたが、小六の處置に就いては、兩人の間に具體的の案は別に出なかつた。何れ緩りみんなで寄つて極めよう、都合がよければ小六も列席するが好からうといふのが別れる時の言葉であつた。二人になつたとき、お米は宗助に、

「何を考へて入らつしやるの」と聞いた。宗助は兩手を兵兒帶の間に挾んで、心持ち肩を聳かしたなり、

「己ももう一遍小六見た樣になつて見たい」と云つた。「此方ぢや、向うが己の樣な運命に陷るだらうと思つて心配してゐるのに、向うぢや兄貴なんざあ眼中にないから偉いや」

お米は茶器を引いて臺所へ出た。夫婦はそれぎり話しを切り上げて、又床を延べて寢た。夢の上に高い銀河が涼しく懸かつた。

次の週間には、小六も來ず、佐伯からの音信もなく、宗助の家庭は又平日の無事に歸つた。夫婦は毎朝露の光る頃起きて、美しい日を廂の上に見た。夜は煤竹の臺を着けた洋燈の兩側に、長い影を描いて坐つてゐた。話しが途切れた時はひそりとして、柱時計の振子の音丈が聞こえる事も稀ではなかつた。

夫でも夫婦は此間に小六の事を相談した。小六がもし何うしても學問を續ける氣なら無論の事、さうでなくても、今の下宿を一時引き上げなければならなくなるのは知れてゐるが、左うすれば又佐伯へ歸るか、或は宗助の所へ置くより外に途はない。佐伯では一旦あゝ云ひ出した樣なものゝ、賴んで見たら、當分宅へ置く位の事は、好意上爲てくれまいものでもない。が、其上修業をさせるとなると、月謝小遣其他は宗助の方で擔任しなければ義理が惡い。所が夫は家計上宗助の堪へる所でなかつた。月々の收支を事細かに計算して見た兩人は、

「到底駄目だね」

「何うしたつて無理ですわ」と云つた。

夫婦の坐つてゐる茶の間の次が臺所で、臺所の右に下女部屋、左に六疊が一間ある。下女を入れて三人の小人數だから、此六疊には餘り必要を感じないお米は、東向きの窓側に何時も自分の鏡臺を置いた。宗助も朝起きて顏を洗つて、飯を濟ますと、此處へ來て着物を脫ぎ更へた。

「夫よりか、あの六疊を空けて、あすこへ來ちや不可なくつて」とお米が云ひ出した。お米の考へでは、斯うして自分の方で部屋と食物丈を分擔して、あとの所を月々幾何か佐伯から助けて貰つたら、小六の望み通り大學卒業迄遣つて行かれようと云ふのである。

「着物は安さんの古いのや、貴方のを直して上げたら、何うかなるでせう」とお米が云ひ添へた。實は宗助にも斯んな考へが、多少頭に浮かんで居た。たゞお米に遠慮がある上に、夫程氣が進まなかつたので、つい口へ出さなかつた迄だから、細君から斯う反對に相談を掛けられて見ると、固よりそれを拒む丈の勇

氣にならなかつた。

小六に其通りを通知して、御前さへそれで差支へなければ、己がもう一遍佐伯へ行つて掛け合つて見るが、、手紙で問ひ合はせると、小六は郵便の着いた晩、すぐ雨の降る中を、傘に音を立てゝ遣つて來て、もう學資が出來でもした樣に嬉しがつた。

「何、叔母さんの方ぢや、此方で何時迄も貴方の事を放り出したまんま、構はずに置くもんだから、それで彼あ仰しやるのよ。なに兄さんだつて、もう少し都合が好ければ、疾うにも何うにか爲たんですけれども、御存じの通りだから實際已むを得なかつたんですわ。然し此方から斯う云つて行けば、叔母さんだつて、安さんだつて、夫でも否だとは云はれないわ。屹度出來るから安心して入らつしやい。私受合ふわ」

お米にかう受合つて貰つた小六は、又雨の音を頭の上に受けて本郷へ歸つて行つた。しかし中一日置いて、兄さんは未だ行かないんですかと聞きに來た。又三日許り過ぎてから、今度は叔母さんの處へ行つて聞いたら、兄さんは未だ來ないさうだから、成るべく早く行く樣に勸めて呉れと催促して行つた。

宗助が行く行くと云つて、日を暮らしてゐるうちに世の中は漸く秋になつた。その朗らかな或日曜の午後に、宗助はあまり佐伯へ行くのが後れるので、此要件を手紙に認めて番町へ相談したのである。すると、叔母から安之助は神戸へ行つて留守だと云ふ返事が來たのである。

五

佐伯の叔母の尋ねて來たのは、土曜の午後の二時過ぎであつた。其日は例になく朝から雲が出て、突然

と風が北に變つた樣に寒かつた。叔母は竹で編んだ丸い火桶の上へ手を翳して、

「何ですね、お米さん、此御部屋は夏は涼しさうで結構だが、是からはちと寒う御座んすね」と云つた。

叔母は癖のある髮を、綺麗に髷に結つて、古風な丸打の羽織の紐を、胸の處で結んでゐた。酒の好きな質で、今でも少し宛は晩酌を遣る所爲か、光澤もよく、でつぷり肥つてゐるから、年よりは餘程若く見える。お米は叔母が來るたんびに、叔母さんは若いのねと、後でよく宗助に話した。すると宗助が何時でも、若い筈だ、あの年になる迄、子供をたつた一人しか生まないんだからと説明した。お米は實際さうかも知れないと思つた。さうして斯う云はれた後では、折々そつと六疊へ這入つて、自分の顏を鏡に映して見た。其時は何だか自分の頰が見る度に痩けて行く樣な氣がした。お米には自分と子供とを連想して考へる程辛い事はなかつたのである。裏の家主の宅に、小さい子供が大勢ゐて、夫が崖の上の庭へ出て、ブランコへ乘つたり、鬼ごつこを遣つたりして騷ぐ聲が、よく聞こえると、お米は何時でも、果敢ない樣な恨めしい樣な心持になつた。今自分の前に坐つてゐる叔母は、たつた一人の男の子を生んで、その男の子が順當に育つて、立派な學士になつたればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顏をして、腮などは二重に見える位に豐かなのである。御母さんは肥つてゐるから剣呑だ、氣を附けないと卒中で遣られるかも知れないと、安之助が始終心配するさうだけれども、お米から云はせると、心配する安之助も、心配される叔母も、共に幸福を享け合つてゐるものとしか思はれなかつた。

「安さんは」とお米が聞いた。

「えゝ漸くね、あなた。一昨日の晩歸りましてね。夫でつい〳〵御返事も後れちまつて、まことに濟み

ませんやうな譯で」と云つたが、返事の方は夫なりにして、話しは又安之助へ戻つて來た。

「あれもね、お蔭さまで漸く學校丈は卒業しましたが、是からが大事の所で、心配で御座います。——夫でも此九月から、月島の工場の方へ出る事になりましたから、まあ幸ひと此分で勉強さへして行つて呉れゝば、此末ともに、さう惡い事も無からうと思つてるんですけれども、まあ若いものの事ですから、是から先何う變化るか分りやしませんよ」

お米はたゞ結構で御座いますとか、御目出たう御座いますとか云ふ言葉を、間に挾んでゐた。

「神戸へ參つたのも、全く其方の用向なので。石油發動機とか何とか云ふものゝ、鰹船へ据ゑ附けるんだとかつてね貴方」

お米には丸で意味が分らなかつた。分らない乍らたゞへえゝと受けてゐると、叔母はすぐ後を話した。

「私にも何の事だか、些とも分らなかつたんですが、安之助の講釋を聞いて始めて、おやさうかいと云ふ樣な譯でしてね。——尤も石油發動機は今以て分らないんですけれども」と云ひながら、大きな聲を出して笑つた。「何でも石油を焚いて、それで船を自由にする器械なんださうですが、聞いて見ると餘つ程重寶なものらしいんですよ。それさへ附ければ、船を漕ぐ手間が丸で省けるとかでね。五里も十里も沖へ出るのに、大變樂なんですとさ。所が貴方、此日本全國で鰹船の數つたら、それこそ大したものでせう。其鰹船が一つ宛此器械を具へ附ける樣になつたら、莫大な利益だつて云ふんで、此頃は夢中になつて其方ばつかりに掛かつてゐる樣ですよ。莫大な利益は難有いが、さう凝つて身體でも惡くしちや詰らないぢやないかつて、此間も笑つた位で」

叔母はしきりに鰹節と安之助の話をした。さうして大變得意の樣に見えたが、小六の事は中々云ひ出さなかつた。もう疾うに歸る筈の宗助も何うしたか歸つて來なかつた。

彼は其日役所の歸り掛けに駿河臺下迄來て、電車を下りて、酸いものを頰張つた樣な口を窄めて一二町歩いた後、ある齒醫者の門を潛つたのである。三四日前彼はお米と差向ひで、夕飯の膳に着いて、話しながら箸を取つてる際に、何うした拍子か、前齒を逆にぎりゝと噛んでから、それが急に痛み出した。指で搖かすと、根がぐら／＼する。食事の時には湯茶が染みる。口を開けて息をすると風も染みた。宗助は此朝齒を磨くために、わざと痛い所を避けて楊枝を使ひながら、口の中を鏡に照らして見たら、廣島で銀を埋めた二枚の奥齒と、研いだ樣に磨り減らした不揃ひの前齒とが、俄に寒く光つた。洋服に着換へる時、

「お米、己は齒の性が餘つ程惡いと見えるね。斯うやると大抵動くぜ」と下齒を指で動かして見せた。

お米は笑ひながら、

「もう御年の所爲よ」と云つて白い襟を後へ廻つて襯衣へ着けた。

宗助は其日の午後とう／＼思ひ切つて、齒醫者へ寄つたのである。應接間へ通ると、大きな洋卓の周圍に天鵞絨で張つた腰掛が竝んでゐて、待ち合はしてゐる三四人が、うづくまる樣に腮を襟に埋めてゐた。それが皆女であつた。綺麗な茶色の瓦斯暖爐には火がまだ焚いてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色を斜に見て、番の來るのを待つてゐたが、あまり退屈になつたので、洋卓の上に重ねてあつた雜誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いづれも婦人用のものであつた。宗助は其口繪に出てゐる女の寫眞を、何枚も繰り返して眺めた。夫から「成功」と云ふ雜誌を取り上げた。其初めに、成功の祕訣といふ

様なものが箇條書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくつては不可ないと云ふ一ヶ條と、たゞ猛進しても不可ない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云ふ一ヶ條を讀んで、それなり雜誌を伏せた。「成効」と宗助は非常に縁の遠いものであつた。宗助は斯ういふ名の雜誌があると云ふ事さへ、今日迄知らなかつた。それで又珍らしくなつて、一旦伏せたのを又開けて見ると、不圖假名の交らない四角な字が二行程並んでゐた。夫には風吹碧落浮雲盡、月上東山玉一團とあつた。宗助は詩とか歌とかいふものには、元から餘り興味を持たない男であつたが、どう云ふ譯か此二句を讀んだ時に大變感心した。對句が旨く出來たとか何とか云ふ意味ではなくつて、斯んな景色と同じ様な心持になれたら、人間も嘸嬉しからうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心から此句の前に附いてゐる論文を讀んで見た。然し夫は丸で無關係の様に思はれた。只此二句が雜誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊した。彼の生活は實際此四五年來、斯ういふ景色に出逢つた事がなかつたのである。

其時向うの戸が開いて、紙片を持つた書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。

中へ這入ると、其處は應接間よりは倍も廣かつた。光線が成るべく餘計取れる様に明るく拵へた部屋の二側に、手術用の椅子を四臺程据ゑて、白い胸掛をかけた受持の男が、一人づゝ別々に療治をしてゐた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内されて、是へと云はれるので、踏段の様なものの上へ乗つて、椅子へ腰を卸した。書生が厚い縞入の前掛で丁寧に膝から下を包んで呉れた。

斯う穩やかに寢かされた時、宗助は例の歯が左程苦になる程痛んでゐないと云ふ事を發見した。夫ばかりか、肩も背も、腰の周りも、心安く落ち附いて、如何にも樂に調子が取れてゐる事に氣が附いた。彼は

たゞ仰向いて天井から下がつてゐる瓦斯管を眺めた。さうして此構と設備では、歸りがけに思つたより高い療治代を取られるかも知れないと氣遣つた。

所へ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥つた男が出て來て、大變丁寧に挨拶をしたので、宗助は少し椅子の上で狼狽てた樣に首を動かした。肥つた男は一應容體を聞いて、口中を檢査して、宗助の痛いと云ふ齒を一寸搖つて見たが、

「何うも斯う弛みますと、到底元の樣に緊まる譯には參りますまいと思ひますが。何しろ中が壞疽になつて居りますから」と云つた。

宗助は此宣告を淋しい秋の光の樣に感じた。もうそんな年なんでせうかと聞いて見たくなつたが、少し極りが惡いのでたゞ、

「ぢや癒らないんですか」と念を押した。肥つた男は笑ひながら斯う云つた。

「まあ癒らないと申し上げるより外に仕方が御座んせんな。已むを得なければ、思ひ切つて拔いて仕舞ふんですが、今の所では、まだ夫程でも御座いますまいから、たゞ御痛みだけを留めて置きませう。何しろ壞疽――壞疽と申しても御分りにならないかも知れませんが、中が丸で腐つて居ります」

宗助は、左うですかと云つて、たゞ肥つた男のなすが儘にして置いた。すると彼は器械をぐる〳〵廻して、宗助の齒の根へ穴を開け始めた。而して其中へ細長い針の樣なものを刺し通しては、其先を嗅いでゐたが、仕舞に絲程な筋を引き出して、神經が是丈取れましたと云ひながら、それを宗助に見せて呉れた。それから藥で其穴を埋めて、明日又入らつしやいと注意を與へた。

階下へ下りるとき、身體が眞直になつたので、視線の位置が天井から不圖庭先に移つたら、其處にあつた高さ五尺もあらうと云ふ大きな鉢植の松が宗助の眼に這入つた。其根方の所を、草鞋掛けの植木屋が丁寧に薦で包んでゐた。段々露が凝つて霜になる時節なので、餘裕のあるものは、もう今時分から手當をするのだと氣が附いた。

歸りがけに玄關脇の藥局で、粉藥の儘含嗽劑を受取つて、それを百倍の微温湯に溶解して、一日十數回使用すべき注意を受けた時、宗助は會計の請求した治療代の案外廉なのを喜んだ。是ならば向うで云ふ通り四五回通つた所で、さして困難でもないと思つて、靴を穿かうとすると、今度は靴の底が何時の間にか破れてゐる事に氣が附いた。

宅へ着いた時は一足違ひで叔母がもう歸つたあとであつた。宗助は、

「あゝ、左うだつたか」と云ひながら、甚だ面倒さうに洋服を脱ぎ更へて、何時もの通り火鉢の前に坐つた。お米は襯衣や洋袴や靴足袋を一抱へにして六疊へ這入つた。宗助はぼんやりして烟草を吹かし始めたが、向うの部屋で、刷毛を掛ける音がし出した時、

「お米、佐伯の叔母さんは何とか云つて來たのかい」と聞いた。

齒痛が自ら治まつたので、秋に襲はれる樣な寒い氣分は、少し輕くなつたけれども、やがてお米が隱袋から取り出して來た粉藥を、温ま湯に溶いて貰つて、しきりに含嗽を始めた。其時彼は縁側へ立つた儘、

「何うも日が短かくなつたなあ」と云つた。

やがて日が暮れた。晝間からあまり車の音を聞かない町内は、宵の口から寂としてゐた。夫婦は例の通

り洋燈の下に寄つた。廣い世の中で、自分達の坐つてゐる所丈が明るく思はれた。さうして此明るい灯影に、宗助はお米丈を、お米は又宗助丈を意識して、洋燈の力の屆かない暗い社會は忘れてゐた。彼等は毎晩かう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出だしてゐたのである。

此靜かな夫婦は、安之助の神戸から土産に買つて來たと云ふ養老昆布の罐をがら〳〵振つて、中から山椒入りの小さく結んだ奴を選り出しながら、緩り佐伯からの返事を語り合つた。

「然し月謝と小遣位は都合して遣つて呉れても好ささうなもんぢやないか」

「それが出來ないんだつて。何う見積つても兩方寄せると、十圓にはなる。十圓と云ふ纒まつた御金を、今の所月々出すのは骨が折れるつて云ふのよ」

「夫ぢや此年の暮迄二十何圓づゝか出して遣るのも無理ぢやないか」

「だから、無理をしても、もう一二ヶ月の所丈は間に合はせるから、其内に何うかして下さいと、安さんが左う云ふんだつて」

「實際出來ないのかな」

「そりや私には分らないわ。何しろ叔母さんが、左う云ふのよ」

「鰹船で儲けたら、其位譯なささうなもんぢやないか」

「本當ね」

お米は低い聲で笑つた。宗助も一寸口の端を動かしたが、話しはそれで途切れて仕舞つた。しばらくしてから、

「何しろ小六は家へ来ると極めるより外に道はあるまいよ。後は延し上げ付け、今じゃ学校へは出てゐるんだね」と宗助が云つた。

「さうでせう」とお米が答へたのを聞き流して、彼は珍らしく書斎に這入つた。一時間程してお米がそつと襖を開けて覗いて見ると、机に向つて何か読んでゐた。

「勉強？もう御休みなさらなくつて」と誘はれた時、彼は振り返つて、

「うん、もう寝よう」と答へながら立ち上がつた。

寝る時、着物を脱いで、寝巻の上に、絞りの兵児帯をぐる／＼巻きつけながら、

「今夜は久し振に論語を読んだ」と云つた。

「論語に何かあつて」とお米が聞き返した。宗助は、

「いや何にもない」と答へた。それから「おい、己の歯は矢つ張り年の所為だとさ。ぐら／＼するのは到底癒らないさうだ」と云ひつゝ、黒い頭を枕の上に着けた。

六

小六は兎も角も都合次第下宿を引き払つて、兄の家へ移る事に相談が調つた。お米は六畳に置き付けた桑の鏡台を眺めて、一寸残り惜しい顔をしたが、

「斯うなると少し遣り場に困るのね」と訴へる様に宗助に告げた。実際此処を取り上げられては、お米の御化粧をする場所が無くなつて仕舞ふのである。宗助は何の工夫も附かずに、立ちながら、向うの窓側

に据ゑてある鏡の裏を斜に眺めた。すると角度の具合で、其處にお米の襟元から片頰が映つてゐた。それが如何にも血色のわるい横顔なのに驚かされて、

「御前、何うかしたのかい。大變色が惡いよ」と云ひながら、鏡から眼を放して、實際のお米の姿を見た。鬢が亂れて、襟の後の邊が垢で少し汚れてゐた。お米はたゞ

「寒い所爲なんでせう」と答へて、すぐ西側に附いてゐる一間の戸棚を明けた。下には古い創だらけの箪笥があつて、上には支那鞄と柳行李が二つ三つ載つてゐた。

「こんなもの、何うしたつて片附け様がないわね」

「だから其儘にして置くさ」

小六の此處へ引き移つて來るのは、斯う云ふ點から見て、夫婦の何れにも、多少迷惑であつた。だから來ると云つて約束して置きながら、今だに小六に對しては、別段の催促もしなかつた。一日延びれば延びた丈窮屈が逃けた樣な氣が何處かでした。小六にも丁度それと同じ憚りがあつたので、居られる間は下宿にゐる方が便利だと胸を極めたものか、つい一日々々と引越を前へ送つてゐた。其癖彼の性質として、兄夫婦の如く、荏苒の境に落ち附いてはゐられなかつたのである。

其内薄い霜が降りて、裏の芭蕉を見事に摧いた。朝は崖上の家主の庭の方で、鵯が鋭い聲を立てた。夕方には表を急ぐ豆腐屋の喇叭に交つて、圓明寺の木魚の音が聞こえた。日は益短かくなつた。さうしてお米の顔色は、宗助が鏡の中に認めた時よりも、爽やかにはならなかつた。夫が役所から歸つて來て見ると、六疊で寢てゐる事が一二度あつた。何うかしたかと尋ねると、たゞ少し心持が惡いと答へる丈であつた。

醫者に見て貰へと勸めると、夫には及ばないと云つて取り合はなかつた。

宗助は心配した。役所へ出てゐても好く、お米の事が氣に掛かつて、用の邪魔になるのを意識する時もあつた。所がある日歸りがけに突然電車の中で膝を拍つた。その日は例になく元氣よく格子を開けて、すぐと勢ひよく今日は何うだいとお米に聞いた。お米が何時もの通り服や靴足袋を一纏めにして、六疊へ這入る後から追いて來て、

「お米、御前子供が出來たんぢやないか」と笑ひながら云つた。お米は返事もせずに俯向いてしきりに夫の背廣の埃を拂つた。刷毛の音が已んでも中々六疊から出て來ないので、又行つて見ると、薄暗い部屋の中で、お米はたつた一人寒さうに、鏡臺の前に坐つてゐた。はいと云つて立つたが、其聲が泣いた後の聲の樣であつた。

其晩夫婦は火鉢に掛けた鐵瓶を、兩方から手で掩ふ樣にして差し向つた。

「何うですか世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。お米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が綺麗に浮かんだ。

「ちつと、面白くしようぢやないか。此頃は如何にも不景氣だよ」と宗助が又云つた。二人は夫から今度の日曜には一所に何處へ行かうか、此處へ行かうかと、しばらく夫許り話し合つてゐた。夫から二人の春着の事が題目になつた。宗助の同僚の高木とか云ふ男が、細君に小袖とかを強請られた時、おれは細君の虛榮心を滿足させる爲に稼いでるんぢやないと云つて跳ね附けた所、細君がそりや非道い、實際寒くなつても着て出るものがないんだと辯解するので、寒ければ已むを得ない、夜具を着るとか、毛布を被るとか

して、當分我慢しろと云つた話を、宗助は可笑しく繰り返してお米を笑はした。お米は夫の此樣子を見て、昔が又眼の前に戻つた樣な氣がした。

「高木の細君は夜具でも構はないが、おれは一つ新しい外套を拵へたいな。此間齒醫者へ行つたら、植木屋が薦で盆栽の松の根を包んでゐたので、つく〴〵さう思つた」

「外套が欲しいつて」

「あゝ」

お米は夫の顏を見て、さも氣の毒だと云ふ風に、

「御拵へなさいな。月賦で」と云つた。宗助は、

「まあ止さうよ」と急に侘びしく答へた。さうして「時に小六は何時から來る氣なんだらう」と聞いた。

「來るのは厭なんでせう」とお米が答へた。お米には、自分が始めから小六に嫌はれてゐると云ふ自覺があつた。それでも夫の弟だと思ふので、成るべくは反りを合はせて、少しでも近づける樣に樣にと、今日迄仕向けて來た。その爲か、今では以前と違つて、まあ普通の小舅位の親しみはあると信じてゐる樣なものゝ、斯んな場合になると、つい實際以上にも氣を回して、自分が小六の來ない唯一の原因の樣に考へられるのであつた。

「そりや下宿からこんな處へ移るのは好かあないだらうよ。丁度此方が迷惑を感ずる通り、向うでも窮屈を感ずる譯だから。おれだつて、小六が來ないとすれば、今のうち思ひ切つて外套を作る丈の勇氣があるんだけれども」

宗助は男丈に思ひ切つて斯う云つて仕舞つた。けれども是丈ではお米の心を盡くしてゐなかつた。お米は返事もせずに、しばらく默つてゐたが、細い腮を襟の中へ埋めた儘、上眼を使つて、

「小六さんは、まだ私の事を惡んでいらつしやるのでせうか」と聞き出した。宗助が東京へ來た當座は、時々是に類似の質問をお米から受けて、其都度慰めるのに大分骨の折れた事もあつたが、近來は全く忘れた樣に何も云はなくなつたので、宗助もつい氣に留めなかつたのである。

「又ヒステリーが始まつたね。好いぢやないか、小六なんぞが何う思つたつて。己さへ附いてれば」

「論語にさう書いてあつて」

お米は斯んな時に、斯ういふ冗談を云ふ女であつた。宗助は

「うん、書いてある」と答へた。夫で二人の會話が仕舞になつた。

翌日宗助が眼を覺ますと、亞鉛張りの庇の上で寒い音がした。お米が襷掛けの儘枕元へ來て、

「さあ、もう時間よ」と注意したとき、彼は此點滴の音を聞きながら、もう少し暖かい蒲團の中に溫もつてゐたかつた。けれども血色の可くないお米の、甲斐々々しい姿を見るや否や、

「おい」と云つて直ぐ起き上がつた。

外は濃い雨に鎖されてゐた。崖の上の孟宗竹が時々鬣を振るふ樣に、雨を吹いて動いた。此佗びしい空の下へ濡れに出る宗助に取つて、力になるものは、暖かい味噌汁と暖かい飯より外になかつた。

「又靴の中が濡れる。何うしても二足持つてゐないと困る」と云つて、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿いて、洋袴の裾を一寸許りまくり上げた。

午過ぎに歸つて來て見ると、お米は金盥の中に雑巾を浸けて、六疊の鏡臺の傍に置いてゐた。其上の所丈天井の色が變つて、時々雫が落ちて來た。
「靴ばかりぢやない。家の中迄濡れるんだね」と云つて宗助は苦笑した。お米は其晩夫の爲に置炬燵へ火を入れて、スコッチの靴下と縞羅紗の洋袴を乾かした。
明くる日も亦同じ様に雨が降つた。夫婦も亦同じ様に同じ事を繰り返した。其明くる日もまだ晴れなかつた。三日目の朝になつて、宗助は眉を縮めて舌打ちをした。
「何時迄降る氣なんだ。靴がじめ〳〵して我慢にも穿けやしない」
「六疊だつて困るわ、あゝ漏つちや」
夫婦は相談して、雨が晴れ次第、家根を繕つて貰ふ様に家主へ掛け合ふ事にした。けれども靴の方は何とも仕様がなかつた。宗助はきしんで這入らないのを無理に穿いて出て行つた。
幸ひに其日は十一時頃からからりと晴れて、垣に雀の鳴く小春日和になつた。宗助が歸つた時、お米は例より冴え〳〵しい顔色をして、
「貴方、あの屏風を賣つちや不可なくつて」と突然聞いた。抱一の屏風は先達て佐伯から受取つた儘、元の通り書齋の隅に立てゝあつたのである。二枚折だけれども、座敷の位置と廣さから云つても、實は寧ろ邪魔な装飾であつた。南へ廻すと、玄關からの入口を半分塞いで仕舞ふし、東へ出すと暗くなる。と云つて、殘る一方へ立てれば床の間を隠すので、宗助は、
「折角親爺の記念だと思つて、取つて來た様なものゝ、仕様がないね是ぢや、場塞げで」と零した事も

二三度あつた。其都度お米は眞丸な縁の燒けた銀の月と、絹地から殆ど區別出來ない樣な穗芒の色を眺めて、斯んなものを珍重する人の氣が知れないと云ふ樣な見えをした。けれども、夫を憚つて、明白さまには何とも云ひ出さなかつた。たゞ一返

「是でも可い繪なんでせうかね」と聞いた事があつた。其時宗助は始めて抱一の名をお米に說明して聞かした。然しそれは自分が昔父から聞いた覺えのある、朧氣な記憶を好い加減に繰り返すに過ぎなかつた。實際の畫の價値や、又抱一に就いての詳しい歷史などに至ると、宗助にも其實甚だ覺束なかつたのである。

所がそれが偶然お米の爲に妙な行爲の動機を構成る原因となつた。過去一週間夫と自分の間に起つた會話に、不圖此知識を結び附けて考へ得た彼女は、一寸微笑んだ。この日雨が上がつて、日脚がさつと茶の間の障子に射した時、お米は不斷着の上へ、妙な色の肩掛とも襟卷とも附かない織物を纏つて外へ出た。通を二丁目程來て、それを電車の方角へ曲がつて眞直に來ると、乾物屋と麺麭屋の間に、古道具を賣つてゐる可なり大きな店があつた。お米はかつて其處で足の疊み込める食卓を買つた記憶がある。今火鉢に掛けてある鐵瓶も、宗助が此處から提げて歸つたものである。

お米は手を袖にして道具屋の前に立ち留まつた。見ると相變らず新しい鐵瓶が澤山並べてあつた。其外には時節柄とでも云ふのか、火鉢が一番多く眼に着いた。然し骨董と名のつく程のものは、一つもない樣であつた。ひとり何とも知れぬ大きな龜の甲が、眞向に釣るしてあつて、其下から長い黃ばんだ拂子が尻尾の樣に出てゐた。それから紫檀の茶棚が一つ二つ飾つてあつたが、何れも狂ひの出さうな生なもの許りであつた。然しお米にはそんな區別は一向映らなかつた。たゞ掛物も屛風も一つも見當たらない事丈確

めて、中へ這入つた。
お米には無論夫が佐伯から受取つた屏風を、幾何かに賣り拂ふ積りでわざ〳〵此處迄足を運んだのであるが、廣島以來から云ふ事に大分經驗を積んだ御蔭で、普通の細君の樣な努力も苦痛も感ぜずに、思ひ切つて亭主と口を利く事が出來た。亭主は五十恰好の色の黑い頰の瘠けた男で、鼈甲の緣を取つた馬鹿に大きな眼鏡を掛けて、新聞を讀みながら、疣だらけの唐金の火鉢に手を翳してゐた。
「さうですな、拜見に出ても可うがす」と輕く受合つたが、別に氣の乘つた樣子もないので、お米は腹の中で少し失望した。然し自分からが既に大した望みを抱いて出て來た譯でもないので、斯う簡易に受けられると、此方から賴む樣にしても、見て貰はなければならなかつた。
「可うがす。ぢや後程伺ひませう。今小僧が一寸出て居りませんからな」
お米は此存在な言葉を聞いて其儘宅へ歸つたが、心の中では、果して道具屋が來るか來ないか甚だ疑はしく思つた。一人で何時もの樣に簡單な食事を濟まして、淸に膳を下げさしてゐると、いきなり御免下さいと云つて、大きな聲を出して道具屋が玄關から遣つて來た。座敷へ上げて、例の屏風を見せると、成程と云つて裏だの緣だのを撫でてゐたが、
「御拂ひになるなら」と少し考へて、「六圓に頂いて置きませう」と否々さうに値を附けた。お米には道具屋の附けた相場が至當の樣に思はれた。けれども一應宗助に話してからでなくつては、餘り專斷過ぎると心附いた上、品物の歷史が歷史だけに、猶更遠慮して、何れ歸つたら好く相談して見た上でと答へた儘、道具屋を歸さうとした。道具屋は出掛けに、

「ぢや、奧さん折角だから、もう一圓奮發しませう。夫で御拂ひ下さい」と云つた。お米は其時思ひ切つて、

「でも、道具屋さん、ありや抱一ですよ」と答へて、腹の中ではひやりとした。道具屋は平氣で、

「抱一は近來流行りませんからな」と受け流したが、じろ〳〵お米の姿を眺めた上、

「ぢや猶好く御相談なすつて」と云ひ捨てて歸つて行つた。

お米は其時の模樣を詳しく話した後で、

「賣つちや不可なくつて」と又無邪氣に聞いた。

宗助の頭の中には、此間から物質上の欲求が、絶えず動いてゐた。たゞ地味な生活をしなれた結果として、足らぬ家計を足ると諦める癖が附いてゐるので、毎月極まつて這入るものの外には、臨時に不意の工面をしてまで、少しでも常以上に寛いで見ようと云ふ働きは出なかつた。話しを聞いたとき彼は寧ろお米の機敏な才覺に驚かされた。同時に果して夫丈の必要があるかを疑つた。お米の思はくを聞いて見ると、此處で十圓足らずの金が入れば、宗助の穿く新しい靴を誂へた上、銘仙の一反位は買へると云ふのである。宗助は夫もさうだと思つた。けれども親から傳はつた抱一の屛風を一方に置いて、片方に新しい靴及び新しい銘仙を並べて考へて見ると、此二つを交換する事が如何にも突飛で且滑稽であつた。

「賣るなら賣つて可いがね。どうせ家に在つたつて邪魔になる許りだから。けれども己はまだ靴は買はないでも濟むよ。此間中見た樣に、降り續けに降られると困るが、もう天氣も好くなつたから」

「だつて又降ると困るわ」

宗助はお米に對して永久に天氣を保證する譯にも行かなかつた。お米も降らない前に是非屏風を賣れとも云ひかねた。二人は顏を見合はして笑つてゐた。やがて、

「安過ぎるでせうか」とお米が聞いた。

「左うさな」と宗助が答へた。

彼は安いと云はれゝば、安い樣な氣がした。もし買手があれば、買手の出す丈の金は幾何でも取りたかつた。彼は新聞で、近來古書畫の入札が非常に高價になつた事を見た樣な心持がした。切めてそんなものが一幅でもあつたらと思つた。けれども夫は自分の呼吸する空氣の屆くうちには、落ちてゐないものと諦めてゐた。

「買手にも因るだらうが、賣手にも因るんだよ。いくら名畫だつて、己が持つてゐた分には到底さう高く賣れつこはないさ。然し七圓や八圓てえな、餘り安い樣だね」

宗助は抱一の屏風を辯護すると共に、道具屋をも辯護する樣な語氣を洩らした。さうしてたゞ自分丈が辯護に價しないものの樣に感じた。お米も少し氣を腐らした氣味で、屏風の話しは夫なりにした。

翌日宗助は役所へ出て、同僚の誰彼に此話しをした。すると皆申し合はせた樣に、夫は價ぢやないと云つた。けれども誰も自分が周旋して、相當の價に賣り拂つてやらうと云ふものはなかつた。又どう云ふ筋を通れば、馬鹿な目に逢はないで濟むといふ手續を教へて呉れるものもなかつた。宗助は矢つ張り横町の道具屋に屏風を賣るより外に仕方がなかつた。それでなければ元の通り、邪魔でも何でも座敷へ立てて置くより外に仕方がなかつた。彼は元の通りそれを座敷へ立てて置いた。すると道具屋が來て、あの屏風を

十五圓に賣つてくれと云ひ出した。夫婦は顏を見合はして微笑んだ。もう少し賣らずに置いて見ようぢやないかと云つて賣らずに置いた。すると道具屋が又來た。又賣らなかつた。お米は斷るのが面白くなつて來た。四度目には知らない男を一人連れて來たが、其男とこそ〳〵相談して、とう〳〵三十五圓に値を附けた。其時夫婦も立ちながら相談した。さうして遂に思ひ切つて屛風を賣り拂つた。

七

圓明寺の杉が焦けた樣に赭黑くなつた。天氣の好い日には、風に洗はれた空の端づれに、白い筋の嶮しく見える山が出た。年は宗助夫婦を驅つて日毎に寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆賣の聲が、瓦を鎖す霜の色を連想せしめた。宗助は床の中で其聲を聞きながら、又冬が來たと思ひ出した。お米は臺所で、今年も去年の樣に水道の栓が氷つて呉れなければ助かるがと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした。夜になると夫婦とも炬燵にばかり親しんだ。さうして廣島や福岡の暖かい冬を羨んだ。

「丸で前の本多さん見た樣ね」とお米が笑つた。前の本多さんと云ふのは、矢張り同じ構内に住んで、同じ坂井の貸家を借りてゐる隱居夫婦であつた。小女を一人使つて、朝から晩迄ことりと音もしない樣に靜かな生活を立ててゐた。お米が茶の間で、たつた一人裁縫をしてゐると、時々御爺さんと云ふ聲がした。それは此本多の御婆さんが夫を呼ぶ聲であつた。門口で行き逢ふと、丁寧に時候の挨拶をして、ちと御話しに入らつしやいと云ふが、遂ぞ行つた事もなければ、向うからも來た試しがない。從つて夫婦の本多さんに關する知識は極めて乏しかつた。たゞ息子が一人あつて、それが朝鮮の統監府とかで、立派な役人

になつてゐるから、月々其方の仕送りで、氣樂に暮らして行かれるのだと云ふ事丈を、出入りの商人のあるものから耳にした。

「御爺さんは矢つ張り植木を弄つてゐるかい」

「段々寒くなつたから、もう已めたんでせう。緣の下に植木鉢が澤山竝んでゐるわ」

話しは夫から前の家を離れて、家主の方へ移つた。是は、本多とは丸で反對で、夫婦から見ると、此上もない賑やかさうな家庭に思はれた。此頃は庭が荒れてゐるので、大勢の子供が崖の上へ出て騷ぐ事はなくなつたが、ピアノの音は每晚の樣にする。折々は下女か何ぞの、臺所の方で高笑ひをする聲さへ、宗助の茶の間迄響いて來た。

「ありや一體何をする男なんだい」と宗助が聞いた。此問は今迄も幾度かお米に向つて繰り返されたものであつた。

「何もしないで遊んでるんでせう。地面や家作を持つて」とお米が答へた。此答も今迄にもう何遍か宗助に向つて繰り返されたものであつた。

宗助は是より以上立ち入つて、坂井の事を聞いた事がなかつた。學校を已めた當座は、順境にゐて得意な振舞をするものに逢ふと、今に見ろと云ふ氣も起つた。それが少時すると、單なる憎惡の念に變化した。所が一二年此方は全く自他の差違に無頓着になつて、自分は自分の樣に生れ附いたもの、先は先の樣な運を持つて世の中へ出て來たもの、兩方共始めから別種類の人間だから、たゞ人間として生息する以外に、何の利害も交涉もないのだと考へる樣になつて來た。たまに世間話の序として、ありや一體何をしてゐる

人だ位は聞きもするが、それより先は、教へて貰ふ努力さへ出すのが面倒だつた。お米にもこれと同じ傾きがあつた。けれども其夜は珍らしく、坂井の主人は四十恰好の髯のない人であると云ふ事やら、ピアノを弾くのは惣領の娘で十二三になると云ふ事やら、又外の家の子供が遊びに来ても、ブランコへ乗せて遣らないと云ふ事やらを話した。

「何故外の家の子供はブランコへ乗せないんだい」

「詰り吝なんでせう。早く悪くなるから」

宗助は笑ひ出した。彼は其位吝嗇な家主が、屋根が漏ると云へば、すぐ瓦師を寄こして呉れる。垣が腐つたと訴へればすぐ植木屋に手を入れさして呉れるのは、矛盾だと思つたのである。

其晩宗助の夢には、本多の植木鉢も坂井のブランコもなかつた。彼は十時半頃床に入つて、萬象に疲れた人の様に鼾をかいた。此間から頭の具合がよくないため、寝附きの悪いのを苦にしてゐたお米は、時々眼を開けて薄暗い部屋を眺めた。細い灯が床の間の上に乗せてあつた。夫婦は夜中燈火を點けて置く習慣が附いてゐるので、寝る時はいつでも心を細目にして洋燈を此處へ上げた。

お米は氣にする様に枕の位置を動かした。さうして其度に下にしてゐる方の肩の骨を、蒲團の上で滑らした。仕舞には腹這ひになつた儘、両肱を突いて、しばらく夫の方を眺めてゐた。夫から起き上がつて、夜具の裾に掛けてあつた不斷着を、寝巻の上へ羽織つたなり、床の間の洋燈を取り上げた。

「貴方々々」と宗助の枕元へ来て曲みながら呼んだ。其時夫はもう鼾をかいてゐなかつた。けれども、元の通り深い眠りから来る呼吸を續けてゐた。お米は又立ち上がつて、洋燈を手にした儘、間の襖を開け

て茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手元の灯に照らされた時、お米は鈍く光る簞笥の環を認めた。夫を通り過ぎると黒く燻ぶつた臺所に、腰障子の紙丈が白く見えた。お米は火の氣のない眞中に少時佇んでゐたが、やがて右手に當たる下女部屋の戸を、音のしない樣にそつと引いて、中へ洋燈の灯を翳した。下女は縞も色も判然映らない夜具の中に、土龍の如く塊まつて寢てゐた。今度は左側の六疊を覗いた。がらんとして淋しい中に、例の鏡臺が置いてあつて、鏡の表が夜中丈に凄く眼に應へた。

お米は家中を一回り回つた後、凡てに異狀のない事を確めた上、又床の中へ戻つた。さうして漸く眼を眠つた。今度は好い具合に、眼蓋のあたりに氣を遣はないで濟む樣に覺えて、少時するうちにうと〳〵とした。

すると又不圖眼が開いた。何だかづしんと枕元で響いた樣な心持がする。耳を枕から離して考へると、それはある大きな重いものが、裏の崖から自分達の寢てゐる座敷の縁の外へ、轉がり落ちたとしか思はれなかつた。しかも今眼が覺めるすぐ前に起つた出來事で、決して夢の續きぢやないと考へた時、お米は急に氣味を惡くした。さうして傍に寢てゐる夫の夜具の袖を引いて、今度は眞面目に宗助を起し始めた。

宗助は夫迄全くよく寢てゐたが、急に眼が覺めると、お米が、

「貴方一寸起きて下さい」と搖つてゐたので、半分は夢中に、

「おい好し」とすぐ蒲團の上へ起き直つた。お米は小聲で先刻からの樣子を話した。

「音は一遍した限りなのかい」

「だつて今した許りなのよ」

二人はそれで默つた。たゞ凝と外の樣子を伺つてゐた。けれども世間は森と靜かであつた。いつまで耳を峙ててゐても、再び物の落ちて來る氣色はなかつた。宗助は寒いと云ひ乍ら、單衣の寢衣の上へ羽織を被つて、緣側へ出て雨戸を一枚繰つた。外を覗くと何も見えない。たゞ暗い中から寒い空氣が俄に肌に逼つて來た。宗助はすぐ戸を閉てた。鐶を卸ろして座敷へ戻るや否や、また蒲團の中へ潛り込んだが、

「何も變つた事はありやしない。多分御前の夢だらう」と云つて、宗助は橫になつた。お米は決して夢でないと主張した。慥かに頭の上で大きな音がしたのだと固執した。宗助は夜具から半分出した顏を、お米の方へ振り向けて、

「お米、御前は神經が過敏になつて、近頃何うかしてゐるよ。もう少し頭を休めて、よく寢る工夫でもしなくつちや不可ない」と云つた。

其時次の間の柱時計が二時を打つた。其音で二人とも一寸言葉を途切らして、默つて見ると、夜は更に靜まり返つた樣に思はれた。二人は眼が冴えて、すぐ寢附かれさうにもなかつた。お米が、

「でも貴方は氣樂ね。橫になると十分經たないうちに、もう寢て入らつしやるんだから」と云つた。

「寢る事は寢るが、氣が樂で寢られるんぢやない。つまり疲れるからよく寢るんだらう」と宗助が答へた。

斯んな話をしてゐる中に、宗助は又寢入つて仕舞つた。お米は依然として、のつそつ床の中で動いてゐた。すると表をがら〳〵と烈しい音を立てて車が一臺通つた。近頃お米は時々夜明前の車の音を聞いて、

驚かされる事があつた。さうして夫を思ひ合はせると、何時も似寄つた刻限なので、必竟は毎朝同じ車が同じ處を通るんだらうと推測した。多分牛乳を配達するためか抔で、あゝ急ぐに違ひないと極めてゐたから、此音を聞くと等しく、もう夜が明けて、隣人の活動が始まつた如くに、心丈夫になつた。さう斯うしてゐると、何處かで鷄の聲が聞こえた。又少時すると、下駄の音を高く立てて往來を通るものがあつた。そのうち清が下女部屋の戸を開けて厠へ起きた模樣だつたが、やがて茶の間へ來て時計を見てゐるらしかつた。此時床の間に置いた洋燈の油が減つて、短かい心に屆かなくなつたので、お米の寢てゐる所は眞暗になつてゐた。其處へ清の手にした灯火の影が、襖の間から射し込んだ。

「清かい」とお米が聲を掛けた。

清は夫からすぐ起きた。三十分程經つてお米も起きた。又三十分程經つて宗助も遂に起きた。平常は好い時分にお米が遣つて來て、

「もう起きても可くつてよ」と云ふのが例であつた。日曜とたまの旗日には、それが、

「さあ最う起きて頂戴」に變る丈であつた。然し今日は昨夕の事が何となく氣にかゝるので、お米の迎へに來ないうち、宗助は床を離れた。さうして直ぐ崖下の雨戸を繰つた。

下から覗くと、寒い竹が朝の空氣に鎖されて凝としてゐる後から、霜を破る日の色が射して、幾分か頂を染めてゐた。其二尺程下の勾配の一番急な處に生えてゐる枯草が、妙に摺り剝けて、赤土の肌を生々しく露出した樣子に、宗助は一寸驚かされた。それから一直線に降りて、丁度自分の立つてゐる縁鼻の土が、霜柱を摧いた樣に荒れてゐた。宗助は大きな犬でも上から轉がり落ちたのぢやなからうかと思つた。然し

犬にしては幾何大きいにしても、餘り勢ひが烈し過ぎると思つた。

宗助は玄關から下駄を提げて來て、すぐ庭へ下りた。緣の先へ便所が折れ曲がつて突き出してゐるので、いとゞ狹い崖下が、裏へ拔ける半間程の所は猶更狹苦しくなつてゐた。お米は掃除屋が來るたびに、此曲り角を氣にしては、

「彼處がもう少し廣いと可いけれども」と危險がるので、よく宗助から笑はれた事があつた。

其處を通り拔けると、眞直に臺所迄細い路が附いてゐる。元は枯枝の交つた杉垣があつて、隣の庭の仕切りになつてゐたが、此間家主が手を入れた時、穴だらけの杉葉を綺麗に取り拂つて、今では節の多い板塀が片側を勝手口迄塞いで仕舞つた。日當りの惡い上に、樋から雨滴ばかり落ちるので、夏になると秋海棠が一杯生える。其盛りな頃は青い葉が重なり合つて、殆ど通り路がなくなる位茂つて來る。始めて越した年は、宗助もお米も此景色を見て驚かされた位である。此秋海棠は杉垣のまだ引き拔かれない前から、何年となく地下に蔓つてゐたもので、古家の取り毀たれた今でも、時節が來ると昔の通り芽を吹くものと解つた時、お米は、

「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、此の記念の多い横手へ出た時、彼の眼は細長い路次の一點に落ちた。さうして彼は日の通はない寒さの中にはたと留まつた。

彼の足元には黑塗の蒔繪の手文庫が放り出してあつた。中味はわざ〳〵其處へ持つて來て置いて行つた樣に、霜の上にちやんと据わつてゐるが、蓋は二三尺離れて、塀の根に打ち附けられた如くに引つ繰り返

つて、中を張つた千代紙の模様が判然見えた。文庫の中から洩れた手紙や書附類か、其處いらに遠慮なく散らばつてゐる中に、比較的長い一通が、わざ〳〵二尺許り廣げられて、其先が紙屑の如く丸めてあつた。宗助は近附いて、此揉み苦茶になつた紙の下を覗いて覺えず苦笑した。下には大便が垂れてあつた。土の上に散らばつてゐる書類を一纏めにして、文庫の中へ入れて、霜と泥に汚れた儘宗助は勝手口迄持つて來た。腰障子を開けて、清に、

「おい是を一寸其處へ置いて呉れ」と渡すと、清は妙な顏をして、不思議さうにそれを受取つた。お米は奥で座敷へ拂塵を掛けてゐた。宗助はそれから懷手をして、玄關だの門の邊をよく見廻つたが、何處にも平常と異なる點は認められなかつた。

宗助は漸く家へ入つた。茶の間へ來て例の通り火鉢の前へ坐つたが、すぐ大きな聲を出してお米を呼んだ。お米は、

「起き拔けに何處へ行つて入らしつたの」と云ひながら奥から出て來た。

「おい昨夜枕元で大きな音がしたのは、矢つ張り夢ぢやなかつたんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖の上から宅の庭へ飛び下りた音だ。今裏へ回つて見たら、此文庫が落ちてゐて、中に這入つてゐた手紙なんぞが、無茶苦茶に放り出してあつた。御負けに御馳走迄置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出してお米に見せた。それには皆坂井の名宛が書いてあつた。お米は喫驚して立て膝の儘、

「坂井さんぢや外に何か取られたでせうか」と聞いた。宗助は腕組をして、

「ことに困ると、まだ何か遣られたね」と答へた。

夫婦は兎も角もと云ふので、文庫を其處へ置いたなり朝飯の膳に着いた。然し箸を動かす間も泥棒の話しは忘れなかつた。お米は自分の耳と頭の慥かな事を夫に誇つた。宗助は耳と頭の慥かでない事を幸福とした。

「さう仰しやるけれど、是が坂井さんでなくつて、宅で御覽なさい。貴方見た樣に、ぐう／＼寢て入らしつたら困るぢやないの」とお米が宗助を遣り込めた。

「なに、宅なんぞへ這入る氣遣ひはないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。

其處へ淸が突然臺所から顏を出して、

「此間拵へた旦那樣の外套でも取られようものなら、夫こそ騷ぎで御座いましたね。御宅でなくつて坂井さんだつたから、本當に結構で御座います」と眞面目に悅びの言葉を述べたので、宗助もお米も少し挨拶に窮した。

食事を濟ましても、出勤の時刻にはまだ大分間があつた。坂井では定めて騷いでるだらうと云ふので、文庫は宗助が自分で持つて行つて遣る事にした。蒔繪ではあるが、たゞ黑地に龜甲形を金で置いた丈の事で、別に大して金目の物とも思へなかつた。お米は唐棧の風呂敷を出してそれを包んだ。風呂敷が少し小さいので、四隅を向う同志繫いで、眞中にこま結びを二つ拵へた。宗助がそれを提げた所は、丸で進物の菓子折の樣であつた。

座敷で見ればすぐ崖の上だが、表から廻ると通を半町許り來て、坂を上つて、又半町程逆に戾らなけれ

ば、坂井の門前へは出られなかつた。宗助は石の上へ芝を盛つて、扇骨木を綺麗に植ゑ附けた垣に沿うて門内に入つた。

家の内は寧ろ靜か過ぎる位しんとしてゐた。摺硝子の戸が閉ててある玄關へ來て、ベルを二三度押して見たが、ベルが利かないと見えて誰も出て來なかつた。宗助は仕方なしに勝手口へ廻つた。其處にも摺硝子の嵌まつた腰障子が二枚閉ててあつた。中では器物を取り扱ふ音がした。宗助は戸を開けて、瓦斯七輪を置いた板の間に蹲踞んでゐる下女に挨拶をした。

「是は此方のでせう。今朝私の家の裏に落ちてゐましたから持つて來ました」と云ひながら、文庫を出した。

下女は「左樣で御座いましたか、どうも」と簡單に禮を述べて、文庫を持つた儘板の間の仕切迄行つて、仲働らしい女を呼び出した。其處で小聲に說明をして、品物を渡すと、仲働はそれを受取つたなり、一寸宗助の方を見たがすぐ奥へ入つた。入れ違ひに、十二三になる丸顏の眼の大きな女の子と、其妹らしい揃ひのリボンを懸けた子が一所に驅けて來て、小さい首を二つ竝べて臺所へ出した。さうして宗助の顏を眺めながら、泥棒よと耳語きあつた。宗助は文庫を渡して仕舞へば、もう用が濟んだのだから、奥の挨拶はどうでも可いとして、すぐ歸らうかと考へた。

「文庫は御宅のでせうね。可いんでせうね」と念を押して、何も知らない下女を氣の毒がらしてゐる所へ、最前の仲働が出て來て、

「何うぞ御通り下さい」と丁寧に頭を下げたので、今度は宗助の方が少し痛み入る樣になつた。下女は

愈しとやかに同じ請求を繰り返した。宗助は痛み入る境を通り越して、遂に迷惑を感じ出した。所へ主人が自分で出て來た。

主人は豫想通り血色の好い下膨れの福相を具へてゐたが、御米の云つた樣に髭のない男ではなかつた。鼻の下に短かく刈り込んだのを生やして、たゞ頰から腮を綺麗に蒼くしてゐた。

「いや何うも飛んだ御手數で」と主人は眼尻に皺を寄せながら禮を述べた。米澤の絣を着た膝を板の間に突いて、宗助から色々樣子を聞いてゐる態度が、如何にも緩くりしてゐた。宗助は昨夕から今朝へ掛けての出來事を、一通り掻い撮んで話した上、文庫の外に何か取られた物があるか無いかを尋ねて見た。主人は机の上に置いた金時計を一つ取られた由を答へた。けれども丸で他のものでも失くした時の樣に、一向關つたと云ふ氣色はなかつた。時計よりは寧ろ宗助の敍述の方に多くの興味を有つて、泥棒が果して崖を傳つて裏から逃げる積りだつたらうか、又は逃げる拍子に、崖から落ちたものだらうかと云ふ樣な質問を掛けた。宗助は固より返答が出來なかつた。

其所へ最前の仲働が、奥から茶や莨を運んで來たので、宗助は又歸りはぐれた。主人はわざ／＼座蒲團迄取り寄せて、とう／＼其上へ宗助の尻を据ゑさした。さうして今朝早く來た刑事の話をし始めた。刑事の判定によると、賊は宵から邸内に忍び込んで、何でも物置かなぞに隱れてゐたに違ひない。這入り口は矢張り勝手である。燐寸を擦つて蠟燭を點して、それを臺所にあつた小桶の中へ立てゝ、茶の間へ出たが、次の部屋には細君と子供が寐てゐるので、廊下傳ひに主人の書齋へ來て、其所で仕事をしてゐると、此間生れた末の男の子が、乳を飮む時刻が來たものか、眼を覺まして泣き出したため、賊は書齋の戸を明

けて庭へ逃げたらしい。
「平常の樣に犬がゐると好かつたんですがね。生憎病氣なので、四五日前病院へ入れて仕舞つたもんですから」と主人は殘念がつた。宗助も、
「夫は惜しい事でした」と答へた。すると主人は其犬の種やら血統やら、時々獵に連れて行く事や、色色な事を話し始めた。
「獵は好きですから。尤も近來は神經痛で少し休んでゐますが。何しろ秋口から冬へ掛けて鴫なぞを打ちに行くと、どうしても腰から下は田の中へ浸かつて、二時間も三時間も暮らさなければならないんですから、全く身體には好くない樣です」
主人は時間に制限のない人と見えて、宗助が成程とか、左うですかとか云つてゐると、何時迄も話してゐるので、宗助は已むを得ず中途で立ち上がつた。
「是から又例の通り出掛けなければなりませんから」と切り上げると、主人は始めて氣が附いた樣に、忙しい所を引き留めた失禮を謝した。さうして何れ又刑事が現狀を見に行くかも知れないから、其時はよろしく願ふと云ふやうな事を述べた。最後に、
「何うかちと御話しに。私も近頃は寧ろ閑な方ですから、又御邪魔に出ますから」と丁寧に挨拶をした。
門を出て急ぎ足に宅へ歸ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分程後れてゐた。
「貴方何うなすつたの」とお米が氣を揉んで玄關へ出た。宗助はすぐ着物を脫いで洋服に着換へながら、
「あの坂井と云ふ人は餘つ程氣樂な人だね。金があるとあゝ緩り出來るもんかな」と云つた。

八

「小六さん、茶の間から始めて。夫とも座敷の方を先にして」とお米が聞いた。

小六は四五日前とう〳〵兄の所へ引き移つた結果として、今日の障子の張り替へを手傳はなければならない事となつた。彼は昔叔父の家に居た時、安之助と二所になつて、自分の部屋の唐紙を張り替へた經驗がある。其時は糊を盆に溶いたり、篦を使つて見たり、大分本式に遣り出したが、首尾好く乾かして、いざ元の所へ建てるといふ段になると、二枚とも反り返つて、敷居の溝へ嵌まらなかつた。それから是も安之助と共同して失敗した仕事であるが、叔母の言ひ付けで、障子を張らせられたときには、水道でざぶ〳〵枠を洗つたため、矢つ張り乾いた後で、總體に歪みが出來て非常に困難した。

「姉さん、障子を張るときは、餘程愼重にしないと失策るです。洗つちや駄目ですぜ」と云ひながら、小六は茶の間の縁側からびり〳〵破き始めた。

縁先は右の方に小六のゐる六疊が折れ曲がつて、左には玄關が突き出してゐる。其向うを塀が縁と平行に塞いでゐるから、まあ四角な圍内と云つて可い。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色を喜んだ事もあるし、又塀の下へ細い竹を立てて、それへ朝顏を絡ませた事もある。其時は起き拔けに、今朝咲いた花の數を勘定し合つて二人で樂しみにした。けれども秋から冬へ掛けては、花も草も丸で枯れて仕舞ふので、小さな沙漠見た樣に、眺めるのも氣の毒な位淋しくなる。小六は此霜ばかり降りた四角な地面を背にして、しきりに障子の紙を剝がしてゐた。

時々寒い風が來て、後から小六の坊主頭と襟の邊を襲つた。其度に彼は吹き曝しの縁から六疊の中へ引つ込みたくなつた。彼は赤い手を無言の儘働かしながら、馬尻の中で雜巾を絞つて障子の桟を拭き出した。

「寒いでせう。御氣の毒さまね。生憎御天氣が時雨れたもんだから」とお米が愛想を云つて、鐵瓶の湯を注ぎ〳〵、昨日煮た糊を溶いた。

小六は實際こんな用をするのを、内心では大いに輕蔑してゐた。ことに昨今自分が已むなく置かれた境遇からして、此際多少自己を侮辱してゐるかの感を抱いて雜巾を手にしてゐた。昔叔父の家で、是と同じ事を遣らせられた時は、暇潰しの慰みとして、不愉快どころか却て面白かつた記憶さへあるのに、今ぢや此位な仕事より外にする能力のないものと、強ひて周圍から諦めさせられた樣な氣がして、縁側の寒いのが猶の事癪に觸つた。

それで嫂には快い返事さへ碌にしなかつた。さうして頭の中で、自分の下宿にゐた法科大學生が、一寸散歩に出る序に、資生堂へ寄つて、三つ入りの石鹸と齒磨を買ふのにさへ、五圓近くの金を拂ふ華奢を思ひ浮かべた。すると何うしても自分一人が、こんな窮境に陷るべき理由がない樣に感ぜられた。それから、斯んな生活状態に甘んじて、一生を送る兄夫婦が如何にも憫然に見えた。彼等は障子を張る美濃紙を買ふのにさへ、氣兼ねをしやしまいかと思はれる程、小六から見ると消極的な暮らし方をしてゐた。

「斯んな紙ぢや、又すぐ破けますね」と云ひながら、小六は卷いた小口を一尺ほど日に透かして、二三度力任せに鳴らした。

「さう？でも宅ぢや子供がないから、夫程でもなくつてよ」と答へたお米は、糊を含ました刷毛を取つ

てとん／＼／＼と棧の上を渡した。

二人は長く繼いだ紙を雙方から引き合つて、成るべく垂るみの出來ない樣に力めたが、小六が時々面倒臭さうな顏をすると、お米はつい遠慮が出て、好い加減に髮剃で小口を切り落として仕舞ふ事もあつた。從つて出來上がつたものには、所々のぶく／＼が大分目に附いた。お米は情なささうに、戶袋に立て懸けた張り立ての障子を眺めた。さうして心の中で、相手が小六でなくつて、夫であつたならと思つた。

「皺が少し出來たのね」

「何うせ僕の御手際ぢや旨くは行かない」

「なに兄さんだつて、さう御上手ぢやなくつてよ。それに兄さんは貴方より餘つ程無精ね」

小六は何とも答へなかつた。臺所から淸が持つて來た含嗽茶碗を受取つて、戶袋の前へ立つて、紙が一面に濡れる程霧を吹いた。二枚目を張つたときは、先に霧を吹いた分が略乾いて、皺が大方平になつてゐた。三枚目を張つたとき、小六は腰が痛くなつたと云ひ出した。實を云ふとお米の方は今朝から頭が痛かつたのである。

「もう一枚張つて、茶の間丈濟ましてから休みませう」と云つた。

茶の間を濟ましてゐるうちに午になつたので、二人は食事を始めた。小六が引移つてから此四五日、お米は宗助のゐない午飯を、何時も小六と差向ひで食べる事になつた。宗助と一所になつて以來、お米の毎日膳を共にしたものは、夫より外になかつた。夫の留守の時は、たゞ獨り箸を執るのが多年の習慣であつた。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顏を見合はせながら、口を動かすのが、お米に

取つては一種異な經驗であつた。それも下女が臺所で働いてるるときは未だしもだが、清の影も音もしないとなると、猶の事變に窮屈な感じが起つた。無論小六よりもお米の方が年上であるし、又從來の關係から云つても、兩性を絡み附ける艷つぽい空氣は、箝束的な初期に於てすら、二人の間に起り得べき筈のものではなかつた。お米は小六と差向ひに膳に着くときの、此氣ぶつせいな心持が、何時になつたら消えるだらうと、心の中で私かに疑つた。小六が引き移る迄は、こんな結果が出ようとは、丸で氣が附かなかつたのだから猶更當惑した。仕方がないから成るべく食事中に話しをして、切めて手持無沙汰な隙間丈でも補はうと力めた。不幸にして今の小六は、此嫂の態度に對して程の好い調子を出す丈の餘裕と分別を頭の中に發見し得なかつたのである。

「小六さん、下宿は御馳走があつて」

こんな質問に逢ふと、小六は下宿から遊びに來た時分の樣に、淡泊な遠慮のない答をする譯に行かなくなつた。已むを得ず、

「なに左うでもありません」ぐらゐにして置くと、其語氣がからりと澄んでゐないので、お米の方では、自分の待遇が惡い所爲かと解釋する事もあつた。それが又無言の間に、小六の頭に映る事もあつた。

ことに今日は頭の具合が好くないので、膳に向つても、お米は何時もの樣に力めるのが退儀であつた。力めて失敗するのは猶厭であつた。それで二人とも障子を張るときよりも、言葉少なに食事を濟ました。

午後は手が慣れた所爲か、朝に比べると仕事が少し捗取つた。然し二人の氣分は飯前よりも却て縁遠くなつた。ことに寒い天氣が二人の頭に應へた。起きた時は、日を載せた空が次第に遠退いて行くかと思は

れる位に、好く晴れてゐたが、それが眞赤に色づく頃から急に雲が出て、暗い中で粉雪でも釀してゐる樣に、日の目を密封した。二人は交る〳〵火鉢に手を翳した。

「兄さんは來年になると月給が上がるんでせう」

不圖小六が斯んな問をお米に掛けた。お米は其時疊の上の紙片を取つて、糊に汚れた手を拭いてゐたが、全く思ひも寄らないといふ顔をした。

「何うして」

「でも新聞で見ると、來年から一般に官吏の増俸があると云ふ話しぢやありませんか」

お米はそんな消息を全く知らなかつた。小六から詳しい説明を聞いて、始めて成程と首肯いた。

「全くね。是ぢや誰だつて、遣つて行けないわ。御肴の切身なんか、私が東京へ來てからでも、もう倍になつてるんですもの」と云つた。肴の切身の値段になると、小六の方が全く無識であつた。お米に注意されて始めて、さう無暗に高くなるものかと思つた。

小六に一寸した好奇心の出たため、二人の會話は存外素直に流れて行つた。お米は裏の家主の十八九時代に、物價の大變安かつた話を、此間宗助から聞いた通り繰り返した。其時分は蕎麥を食ふにしても、盛かけが八厘、種ものが二錢五厘であつた。牛肉は普通が一人前四錢で、ロースは六錢であつた。寄席は三錢か四錢であつた。學生は月に七圓位國から貰へば中の部であつた。十圓も取ると既に贅澤と思はれた。

「小六さんも、其時分だと譯もなく大學が卒業出來たのにね」とお米が云つた。

「兄さんも其時分だと大變暮らし易い譯ですね」と小六が答へた。

座敷の張替へが濟んだときにはもう三時過ぎになつた。さう斯うしてゐるうちには、宗助も歸つて來るし、晩の支度も始めなくてはならないので、二人はこれを一段落として、糊や髪剃を片附けた。小六は大きな伸びを一つして、握り拳で自分の頭をこん〳〵と叩いた。

「何うも御苦勞さま。疲れたでせう」とお米は小六を勞つた。小六は夫よりも口淋しい思ひがした。此間文庫を屆けてやつた禮に、坂井から呉れたと云ふ菓子を、戸棚から出して貰つて食べた。お米は御茶を入れた。

「坂井と云ふ人は大學出なんですか」

「えゝ、矢つ張り左樣なんですつて」

小六は茶を飮んで煙草を吹いた。やがて、

「兄さんは增俸の事をまだ貴方に話さないんですか」と聞いた。

「いゝえ、些とも」とお米が答へた。

「兄さん見た樣になれたら好いだらうな。不平も何もなくつて」

お米は特別の挨拶もしなかつた。小六は其儘起つて六疊へ這入つたが、やがて火が消えたと云つて、火鉢を抱へて又出て來た。彼は兄の家に厄介になりながら、もう少し立てば都合が附くだらうと慰めた安之助の言葉を信じて、學校は表向き休學の體にして一時の始末をつけたのである。

九

裏の坂井と宗助とは、文庫が縁になつて思はぬ關係が附いた。夫迄は月に一度此方から淸に家賃を持たして遣ると、向うから其受取を寄こす丈の交渉に過ぎなかつたのだから、崖の上に西洋人が住んでゐると同樣で、隣人としての親しみは、丸で存在してゐなかつたのである。

宗助が文庫を屆けた日の午後に、坂井の云つた通り、刑事が宗助の家の裏手から崖下を檢べに來たが、其時坂井も一所だつたので、お米は始めて噂に聞いた家主の顏を見た。髭のないと思つたのに、髭を生やしてゐるのと、自分なぞに對しても、存外丁寧な言葉を使ふのが、お米には少し案外であつた。

「貴方、坂井さんは矢つ張り髭を生やしてゐてよ」と宗助が歸つたとき、お米はわざ〳〵注意した。

それから二日ばかりして、坂井の名刺を添へた立派な菓子折を持つて、下女が禮に來たが、先達ては色色御世話になりまして、難有う存じます、何れ主人が自身に伺ふ筈で御座いますが、と云ひ置いて歸つて行つた。

其晩宗助は到來の菓子折の蓋を開けて、唐饅頭を頰張りながら、

「斯んなものを呉れる所をもつて見ると、夫程吝でもないやうだね。他の家の子をブランコへ乘せて遣らないつて云ふのは嘘だらう」と云つた。お米も、

「屹度嘘よ」と坂井を辯護した。

夫婦と坂井とは泥棒の這入らない前より、是丈親しみの度が增した樣なもの丶、それ以上に接近しようと云ふ念は、宗助の頭にも、お米の胸にも宿らなかつた。利害の打算から云へば無論の事、單に隣人の交際とか情誼とか云ふ點から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇氣を有たなかつたのである。もし自然が

崖の上と崖の下に互の家が懸け隔たる如く、互の心も離れ〴〵になつたに違ひなかつた。

所がそれから又二日置いて、三日目の暮れ方に、獺の襟の着いた暖かさうな外套を着て、突然坂井が宗助の所へ遣つて來た。夜間客に襲はれ附けない夫婦は、輕微の狼狽を感じた位驚かされたが、座敷へ上げて話して見ると、坂井は丁寧に先日の禮を述べた後、

「御蔭で取られた品物が又戻りましたよ」と云ひながら、白縮緬の兵兒帶に巻き附けた金鎖を外して、兩蓋の金時計を出して見せた。

規則だから警察へ屆ける事は屆けたが、實は大分古い時計なので、取られても夫程惜しくもない位に諦めてゐたら、昨日になつて、突然差出人不明な小包が着いて、其中にちやんと自分の失くしたのが包んであつたんだと云ふ。

「泥棒も持ち扱つたんでせう。それとも餘り金にならないんで、已むを得ず返して呉れる氣になつたんですかね。何しろ珍らしい事で」と坂井は笑つてゐた。それから、

「何私から云ふと、實はあの文庫の方が寧ろ大切な品でしてね。祖母が昔御殿へ勤めてゐた時分、戴いたんだとか云つて、まあ記念の樣なものですから」と云ふ樣な事も說明して聞かした。

其晩坂井はそんな話しを約二時間もして歸つて行つたが、相手になつた宗助も、茶の間で聞いてゐたお米も、大變談話の材料に富んだ人だと思はぬ譯に行かなかつた。後で、

「世間の廣い方ね」とお米が評した。

「閑だからさ」と宗助が解釋した。

翌日宗助が役所の歸りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前迄來ると、例の獺の襟を着けた坂井の外套が一寸眼に着いた。横顔を往來の方へ向けて、主人を相手に何か云つてゐる。主人は大きな眼鏡を掛けた儘、下から坂井の顔を見上げてゐる。宗助は挨拶をすべき折でもないと思つたから、其儘行き過ぎようとして、店の正面迄來ると、坂井の眼が往來へ向いた。

「やあ昨夜は。今御歸りですか」と氣輕に聲を掛けられたので、宗助も愛想なく通り過ぎる譯にも行かなくなつて、一寸歩調を緩めながら帽子を取つた。すると坂井は、用はもう濟んだと云ふ風をして店から出て來た。

「何か御求めですか」と宗助が聞くと、

「いえ、何」と答へた儘宗助と並んで家の方へ歩き出した。六七間來たとき、

「あの爺、中々猾い奴ですよ。崋山の僞物を持つて來て、押し附けようとしやがるから、今叱り附けて遣つたんです」と云ひ出した。宗助は始めて、此坂井も餘裕ある人に共通な好事を、道樂にしてゐるのだと心附いた。さうして此間賣り拂つた抱一の屏風も、最初から斯う云ふ人に見せたら好かつたらうにと、腹の中で考へた。

「あれは書畫には明るい男なんですか」

「なに書畫どころか、丸で何も分らない奴です。あの店の樣子を見ても分るぢやありませんか。骨董らしいものは一つも並んでゐやしない。もとが紙屑屋から出世してあれ丈になつたんですからね」

坂井は道具屋の素性をよく知つてゐた。出入りの八百屋の阿爺の話しによると、坂井の家は舊幕の頃何とかの守と名乘つたもので、此界隈では一番古い門閥家なのださうである。瓦解の際、駿府へ引き上げなかつたんだとか、或は引き上げて又出て來たんだとか云ふ事も耳にした樣であるが、それは判然宗助の頭に殘つてゐなかつた。

「小さい内から惡戯ものでね。あいつが餓鬼大將になつて好く喧嘩をしに行つた事がありますよ」と坂井は御互の子供の時の事迄一口洩らした。それが又何うして華山の贋物を賣り込まうと巧んだのかと聞くと、坂井は笑つて斯う說明した。——

「なに親父の代から贔屓にして遣つてるものですから、時々何だ蚊だつて持つて來るんです。所が眼が利かない癖に、只慾ばりたがつてね、まことに取り扱ひ惡い代物です。それについ此間抱一の屛風を買つて貰つて、味を占めたんでね」

宗助は驚いた。けれども話しの途中を遮る譯には行かなかつたので、默つてゐた。坂井は道具屋がそれ以來乘り氣になつて、自身に分りもしない書畫類をしきりに持ち込んで來る事やら、大阪出來の高麗燒を本物だと思つて、大事に飾つて置いた事やら話した末、

「まあ臺所で使ふ食卓か、たかゞ新の鐵瓶位しか、彼んな所ぢや買へたもんぢやありません」と云つた。

其内二人は坂の上へ出た。坂井は其所を右へ曲がる。宗助は其所を下へ下りなければならなかつた。宗助はもう少し一所に步いて、屛風の事を聞きたかつたが、わざ／＼廻り路をするのも變だと心附いて、夫なり分かれた。分かれる時、

「近い中御邪魔に出ても宜う御座いますか」と聞くと、坂井は、
「どうぞ」と快く答へた。
其日は風もなく一仕切り日も照つたが、家にゐると底冷のする寒さに襲はれるとか云つて、お米はわざわざ置炬燵に宗助の着物を掛けて、それを座敷の眞中に据ゑて、夫の歸りを待ち受けてゐた。
此冬になつて、晝のうち炬燵を拵へたのは、其日が始めてであつた。夜は疾うから用ひてゐたが、何時も六疊に置く丈であつた。
「座敷の眞中にそんなものを据ゑて、今日は何うしたんだい」
「でも、御客も何もないから可いでせう。だつて六疊の方は小六さんが居て、塞がつてゐるんですもの」
宗助は始めて自分の家に小六の居る事に氣が附いた。襯衣の上から暖かい紡績織を掛けて貰つて、帶をぐる〳〵巻き附けたが、
「此處は寒帶だから炬燵でも置かなくつちや凌げない」と云つた。小六の部屋になつた六疊は、疊こそ綺麗でないが、南と東が開いてゐて、家中で一番暖かい部屋なのである。
宗助はお米の汲んで來た熱い茶を、湯呑から二口程飲んで、
「小六はゐるのかい」と聞いた。小六は固より居た筈である。けれども六疊はひつそりして人のゐる樣にも思はれなかつた。お米が呼びに立たうとするのを、用はないから可いと留めた儘、宗助は炬燵蒲團の中へ潜り込んで、すぐ横になつた。一方口に崖を控へてゐる座敷には、もう暮れ方の色が萌してゐた。宗助は手枕をして何を考へるともなく、たゞ此暗く狹い景色を眺めてゐた。するとお米と淸が臺所で働く音

が、自分に關係のない隣の人の活動の如くに聞こえた。そのうち、障子丈がたゞ薄白く宗助の眼に映る樣に、部屋の中が暮れて來た。彼はそれでも凝として動かずにゐた。聲を出して洋燈の催促もしなかつた。彼が暗い處から出て、晩食の膳に着いた時は、小六も六疊から出て來て兄の向うに坐つた。お米が忙しいのでつい忘れたと云つて、座敷の戶を締めに立つた。宗助は弟に夕方になつたら、ちと洋燈を點けるとか戶を閉てるとかして、忙しい姉の手傳ひでもしたら好からうと注意したかつたが、昨今引き移つた許りのものに、氣まづい事を云ふのも惡からうと思つて已めた。

お米が座敷から歸つて來るのを待つて、兄弟は始めて茶碗に手を着けた。其時宗助は漸く今日役所の歸りがけに、道具屋の前で坂井に逢つた事と、坂井があの大きな眼鏡を掛けてゐる道具屋から、抱一の屛風を買つたと云ふ話しをした。お米は、

「まあ」と云つたなり、しばらく宗助の顏を見てゐた。

「ぢや屹度あれよ。屹度あれに違ひないわね」

小六は始めのうち何も口を出さなかつたが、段々兄夫婦の話しを聞いてゐるうちに、略關係が明瞭になつたので、

「全體幾何で賣つたのです」と聞いた。お米は返事をする前に一寸夫の顏を見た。

食事が終ると、小六はぢきに六疊へ這入つた。宗助は又炬燵へ歸つた。しばらくしてお米も足を溫めに來た。さうして次の土曜か日曜には坂井へ行つて、一つ屛風を見て來たら可いだらうと云ふ樣な事を話し合つた。

次の日曜になると、宗助は例の通り一週に一返の樂寢を貪つたため、午前半日をとう〳〵空に潰して仕舞つた。お米は又頭が重いとか云つて、火鉢の縁に倚りかゝつて、何をするのも懶さうに見えた。斯んな時に六疊が空いてゐれば、朝からでも引つ込む場所があるのにと思ふと、宗助は小六に六疊を宛てがつた事が、間接にお米の避難場を取り上げたと同じ結果に陷るので、ことに濟まない樣な氣がした。

心持が惡ければ、座敷へ床を敷いて寢たら好からうと注意しても、お米は遠慮して容易に應じなかつた。それでは又炬燵でも拵へたら何うだ、自分も當たるからと云つて、とう〳〵櫓と掛蒲團を清に云ひ附けて、座敷へ運ばした。

小六は宗助が起きる少し前に、何處かへ出て行つて、今朝は顏さへ見せなかつた。宗助はお米に向つて別段其行先を聞き糺しもしなかつた。此頃では小六に關係した事を云ひ出して、お米に其返事をさせるのが、氣の毒になつて來た。お米の方から進んで弟の讒訴でもする樣だと、叱るにしろ、慰めるにしろ、却つて始末が好いと考へる時もあつた。

午になつてもお米は炬燵から出なかつた。宗助は一層靜かに寢かして置く方が身體のために可からうと思つたので、そつと臺所へ出て、清に一寸上の坂井迄行つてくるからと告げて、不斷着の上へ、袂の出る短かいインヴネスを纏つて表へ出た。

今迄陰氣な室にゐた所爲か、通へ來ると急にからりと氣が晴れた。肌の筋肉が寒い風に抵抗して、一時に緊縮する樣な冬の心持の鋭く出るうちに、或快感を覺えたので、宗助はお米もあゝ家にばかり置いては善くない、氣候が好くなつたら、ちと戶外の空氣を呼吸させる樣にしてやらなくては毒だと思ひながら歩

いた。

坂井の家の門を入つたら、玄關と勝手口の仕切になつてる生垣の目に、冬に似合はないぱつとした赤いものが見えた。傍へ寄つてわざ〳〵檢べると、それは人形に掛ける小さい夜具であつた。細い竹を袖に通して、落ちない樣に扇骨木の枝に寄せ掛けた手際が、如何にも女の子の所作らしく殊勝に思はれた。かう云ふ惡戲をする年頃の娘は固よりの事、子供と云ふ子供を育て上げた經驗のない宗助は、此小さい赤い夜具の尋常に日に干してある有樣を、しばらく立つて眺めてゐた。さうして二十年も昔に父母が、死んだ妹の爲に飾つた、赤い雛段と五人囃と、模樣の美しい干菓子と、それから甘い樣で辛い白酒を思ひ出した。

坂井の主人は在宅ではあつたけれども、食事中だと云ふので、しばらく待たせられた。宗助は座に着くや否や、隣の室で小さい夜具を干した人達の騷ぐ聲を耳にした。下女が茶を運ぶために襖を開けると、襖の陰から大きな眼が四つ程既に宗助を覗いてゐた。火鉢を持つて出ると、其後から又違つた顏が見えた。始めての所爲か、襖の開閉の度に出る顏が悉く違つてるので、子供の數が何人あるか分らない樣に思はれた。漸く下女が退りきりに退ると、今度は誰だか唐紙を一寸程細目に開けて、黑い光る眼丈を其間から出した。宗助も面白くなつて、默つて手招きをして見た。すると唐紙をぴたりと閉てて、向う側で三四人が聲を合はして笑ひ出した。

やがて一人の女の子が、

「よう、御姉樣又何時もの樣に叔母さんごつこ爲ませうよ」と云ひ出した。すると姉らしいのが、

「えゝ、今日は西洋の御祖母さんごつこよ。東作さんは御父さまだからパヽで、雪子さんは御母さまだからマヽつて云ふのよ。可くつて」と説明した。其時又別の聲で、

「可笑しいわね。マヽだつて」と云つて嬉しさうに笑つたものがあつた。

「私夫でも何時も御祖母さまなのよ。御祖母さまの西洋の名がなくつちや不可ないわねえ。御祖母さまは何て云ふの」と聞いたものがあつた。

「御祖母さまは矢つ張りバヾで可いでせう」と誰か又説明した。

夫から當分の間は、御免下さいましだの、何方からいらつしやいましたのと、盛に挨拶の言葉が交換されてゐた。其間にはちりん〳〵と云ふ電話の假聲も交つた。凡てが宗助には陽氣で珍らしく聞こえた。

其處へ奥の方から足音がして、主人が此方へ出て來たらしかつたが、次の間へ入るや否や、

「さあ、御前達は此處で騒いぢやいけない。彼方へ行つて御出で。御客さまだから」と制した。其時誰だかすぐに、

「厭だよ。御父ちやんべい。大きい御馬買つて呉れなくつちや、彼方へ行かないよ」と答へた。聲は小さい男の子の聲であつた。年が行かない爲か、舌が能く廻らないので、抗辯のしやうが如何にも億劫で手間が掛かつた。宗助は其處を特に面白く思つた。

主人が席に着いて、長い間待たした失禮を詫びてゐる間に、子供は遠くへ行つて仕舞つた。

「大變御賑やかで結構です」と宗助が今自分の感じた通りを述べると、主人はそれを愛嬌と受取つたものと見えて、

「いや御覽の如く亂雜な有樣で」と言譯らしい返事をしたが、それを緒に、子供の世話の燒けて、夥しく手の掛かる事などを色々宗助に話して聞かした。其中で綺麗な支那製の花籠の中へ、炭團を一杯盛つて床の間に飾つたと云ふ滑稽と、主人の編上の靴のなかへ水を汲み込んで、金魚を放したと云ふ惡戲が、宗助には大變耳新しかつた。然し、女の子が多いので服裝に物が要るとか、二週間も旅行して歸つてくると、急にみんなの脊が一寸づゝも伸びてゐるので、何だか後から追ひ附かれる樣な心持がするとか、もう少しすると嫁入の支度で忙殺されるのみならず、屹度貧殺されるだらうとか云ふ話になると、子供のない宗助の耳には夫程の同情も起し得なかつた。却て主人が口で子供を煩さがる割に、少しもそれを苦にする樣子の、顏にも態度にも見えないのを羨ましく思つた。

好い加減な頃を見計らつて宗助は、先達て話しのあつた屛風を一寸見せて貰へまいかと、主人に申し出た。主人は早速引き受けて、ぱち／＼と手を鳴らして召使を呼んだが、藏の中に仕舞つてあるのを取り出して來る樣に命じた。さうして宗助の方を向いて、

「つい二三日前迄其處へ立てて置いたのですが、例の子供が面白半分にわざと屛風の影へ集まつて、色色な惡戲をするものですから、傷でも附けられちや大變だと思つて仕舞ひ込んでしまひました」と云つた。

宗助は主人の此言葉を聞いた時、今更手數をかけて屛風を見せて貰ふのが、氣の毒にもなり、又面倒にもなつた。實を云ふと彼の好奇心は、夫程強くなかつたのである。成程一旦他の所有に歸したものは、たとひ元が自分のであつたにしろ、無かつたにしろ、其處を突き留めた所で、實際上には何の效果もない話に違ひなかつた。

けれども屏風は宗助の申し出た通り、間もなく奥から縁傳ひに運び出されて、彼の眼の前に現はれた。さうして夫が豫想通り、つい此間迄自分の座敷に立ててあつた物であつた。此事實を發見した時、宗助の頭には、是と云つて大した感動も起らなかつた。たゞ自分が今坐つてゐる疊の色や、天井の柾目や、床の置物や、襖の模樣などの中に、此屏風を立てて見て、夫に、召使が二人がゝりで、藏の中から大事さうに取り出して來たと云ふ所作を附け加へて考へると、自分が持つてゐた時よりは、慥かに十倍以上貴い品の樣に眺められた丈であつた。彼は即座に云ふ可き言葉を見出だし得なかつたので、いたづらに見慣れたものゝ上に、更に新しくもない眼を据ゑてゐた。

主人は宗助を以てある程度の鑑賞家と誤解した。立ちながら屏風の縁へ手を掛けて、宗助の面と屏風の面とを比較してゐたが、宗助が容易に批評を下さないので、

「是は素性の慥かなものです。出が出ですからね」と云つた。宗助は、たゞ

「成程」と云つた。

主人はやがて宗助の後へ回つて來て、指で其處此處を指しながら、品評やら説明やらした。其中には、さすが御大名丈あつて、好い繪の具を惜し氣もなく使ふのが此畫家の特色だから、色が如何にも美事であると云ふ樣な、宗助には耳新しいけれども、普通一般に知れ渡つた事も大分交つてゐた。

宗助は好い加減な頃を見計らつて、丁寧に禮を述べて元の席に復した。主人も蒲團の上に直つた。さうして、今度は野路や空云々といふ題句やら書體やらに就いて語り出した。宗助から見ると、主人は書にも俳句にも多くの興味を有つてゐた。何時の間に是程の知識を頭の中へ貯へ得らるゝかと思ふ位、凡てに心

得のある男らしく思はれた。宗助は己を恥ぢて、成るべく物數を云はない樣にして、たゞ向うの話し丈に耳を借す事を力めた。

主人は客が此方面の興味に乏しい樣子を見て、再び話しを畫の方へ戾した。碌なものはないけれども、望みならば所藏の畫帖や幅物を見せても可いと親切に申し出した。宗助は折角の好意を辭退しない譯に行かなかつた。其代りに、失禮ですがと前置きをして、主人が此屛風を手に入れるに就いて、何れ程の金額を拂つたかを尋ねた。

「まあ掘出し物ですね。八十圓で買ひました」と主人はすぐ答へた。

宗助は主人の前に坐つて、此屛風に關する一切の事を自白しようか、しまいかと思案したが、ふと打ち明けるのも一興だらうと心附いて、とう〳〵實は是々だと今迄の顚末を詳しく話し出した。主人は時々へえ、へえと驚いた樣な言葉を挾んで聞いてゐたが、仕舞に、

「ぢや貴君は別に書畫が好きで、見に入らしやつた譯でもないんですね」と自分の誤解を、さも面白い經驗でもした樣に笑ひ出した。同時に、さう云ふ譯なら、自分が直かに宗助から相當の値で讓つて貰へば可かつたに、惜しい事をしたと云つた。最後に横町の道具屋をひどく罵つて、怪しからん奴だと云つた。

宗助と坂井とは是から大分親しくなつた。

十

佐伯の叔母も安之助も其後頓と宗助の宅へは見えなかつた。宗助は固より麹町へ行く餘暇を有たなかつ

た。又夫丈の興味もなかつた。親類とは云ひながら、別々の日が二人の家を照らしてゐた。

たゞ小六丈が時々話しに出掛ける樣子であつたが、是とてもさう繁々足を運ぶ譯でもないらしかつた。それに彼は歸つて來て、叔母の家の消息を殆どお米に語らないのを常として居つた。お米はこれを故意から出る小六の仕打ちかとも疑つた。然し自分が佐伯に對して特別の利害を感じない以上、お米は叔母の動靜を耳にしない方を、却て喜んだ。

それでも時々は先方の樣子を、小六と兄の對話から聞き込む事もあつた。一週間程前に、小六は兄に、安之助がまた新發明の應用に苦心してゐる話をした。それは印氣の助けを借らないで、鮮明な印刷物を拵へるとか云ふ、一寸聞くと頗る重寶な器械に就いてゞあつた。話題の性質から云つても、自分とは全く利害の交渉のない六づかしい事なので、お米は例の通り默つて口を出さずにゐたが、宗助は男だけに幾分か好奇心が動いたと見えて、何うして印氣を使はずに印刷が出來るか抔と問ひ糺してゐた。

專門上の知識のない小六が、精密な返答をし得る筈は無論なかつた。彼はたゞ安之助から聞いた儘を、覺えてゐる限り念を入れて説明した。此印刷術は近來英國で發明になつたもので、根本的にいふと矢張り電氣の利用に過ぎなかつた。電氣の一極を活字と結び附けて置いて、他の一極を紙に通じて、其紙を活字の上へ壓し附けさへすれば、すぐ出來るのだと小六が云つた。色は普通黒であるが、手加減次第で赤にも靑にもなるから、色刷抔の場合には、繪の具を乾かす時間が省ける丈でも大變重寶で、是を新聞に應用すれば、印氣や印氣ロールの費えを節約する上に、全體から云つて、少なくとも從來の四分の一の手數がなくなる點から見ても、前途は非常に有望な事業であると、小六は又安之助の話した通りを繰り返した。さ

うして其有望な前途を、安之助が既に手の中に握つたかの如き口氣であつた。かつ其多望な安之助の未來のなかには、同じく多望な自分の影が、含まれてゐる樣に眼を輝かした。其時宗助は何時もの調子で、寧ろ穩やかに、弟の云ふ事を聞いてゐたが、聞いてしまつた後でも、別に是といふ眼立つた批評は加へなかつた。實際斯んな發明は、宗助から見ると、本當の樣でもあり、又噓の樣でもあり、愈それが世間に行はれる迄は、贊成も反對も出來かねたのである。

「ぢや鰹船の方はもう止したの」と、今迄默つてゐたお米が、此時始めて口を出した。

「止したんぢやないんですが、あの方は費用が隨分掛かるので、いくら便利でもさう誰も彼も拵へる譯に行かないんださうです」と小六が答へた。小六は幾分か安之助の利害を代表してゐる樣な口振であつた。

夫から三人の間に、しばらく談話が交換されたが、仕舞に、

「矢つ張り何をしたつて、さう旨く行くもんぢやあるまいよ」と云つた宗助の言葉と、

「坂井さん見た樣に、御金があつて遊んでゐるのが一番可いわね」と云つたお米の言葉を聞いて、小六は又自分の部屋へ歸つて行つた。

斯う云ふ機會に、佐伯の消息は折々夫婦の耳へ漏れる事はあるが、其外には、全く何をして暮らしてゐるか、互に知らないで過ごす月日が多かつた。

或時お米は宗助に斯んな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行くたんびに、小遣でも貰つて來るんでせうか」

今迄小六に就いて、夫程の注意を拂つてゐなかつた宗助は、突然此問に逢つて、すぐ「何故」と聞き返

した。お米はしばらく躊躇つた末、

「だつて、此頃よく御酒を飲んで歸つて來る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の發明や、金儲けの話をするとき、其聞き賃に奢るのかも知れない」と云つて宗助は笑つてゐた。會話はそれなりでつい發展せずに仕舞つた。

越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時を外して歸つて來なかつた。しばらく待ち合はせてゐたが、宗助はつひに空腹だとか云ひ出して、一寸湯にでも行つて時間を延ばしたらといふ、お米の小六に對する氣兼ねに頓着なく、食事を始めた。其時お米は夫に、

「小六さんに御酒を止める樣に、貴方から云つちや不可なくつて」と切り出した。

「そんなに異見しなければならない程飲むのか」と宗助は少し案外な顏をした。

お米は夫程でもないと、辯護しなければならなかつた。けれども實際は誰もゐない晝間のうち抔に、あまり顏を赤くして歸つて來られるのが、不安だつたのである。宗助は夫なり放つて置いた。然し腹の中では、果してお米の云ふ如く、何處かで金を借りるか貰ふかして、夫程好きもしないものを、わざと飲むのではなからうかと疑つた。

其うち年が段々片寄つて、夜が世界の三分の二を領する樣に押し詰まつて來た。風が毎日吹いた。其音を聞いてゐるだけでも、生活に陰氣な響を與へた。小六はどうしても、六疊に籠もつて、一日を送るに堪へなかつた。落ち附いて考へれば考へる程、頭が淋しくつて、居たたまれなくなる計りであつた。茶の間へ出て嫂と話すのは猶厭であつた。已むを得ず外へ出た。さうして友達の宅をぐる〳〵廻つて歩いた。友

達も始めのうちは、平生の小六に對する樣に、若い學生のしたがる面白い話しを幾何でもした。けれども小六はさう云ふ話しが盡きても、まだ遣つて來た。それで仕舞には友達が、小六は退屈の餘りに訪問をして、談話の復習に耽るものだと評した。たまには學校の下讀やら研究やらに追はれてゐる、多忙の身だと云ふ風もして見せた。小六は友達からさう呑氣な怠けものの樣に取り扱はれるのを、大變不愉快に感じた。けれども宅に落ち附いては、讀書も思索も、丸で出來なかつた。要するに彼位の年配の青年が、一人前の人間になる階梯として、修むべき事、力むべき事には、内部の動搖やら、外部の束縛やらで、一切手が着かなかつたのである。

夫でも冷たい雨が横に降つたり、雪融の道がはげしく泥つたりする時は、着物を濡らさなければならず、足袋の泥を乾かさなければならない面倒があるので、如何な小六も時によると、外出を見合せる事があつた。さう云ふ日には、實際困却すると見えて、時々六疊から出て來て、のそりと火鉢の傍へ坐つて、茶などを注いで飲んだ。さうして其處にお米でもゐると、世間話の一つや二つはしないとも限らなかつた。

「小六さん御酒好き」とお米が聞いた事があつた。

「もう直き御正月ね。貴方御雜煮いくつ上つて」と聞いた事もあつた。

さう云ふ場合が度重なるに連れて、二人の間は少しづゝ近寄る事が出來た。仕舞には、姉さん一寸こゝを縫つて下さいと小六の方から進んで、お米に物を賴む樣になつた。さうしてお米が絣の羽織を受取つて、袖口の綻びを繕つてゐる間、小六は何もせずに其處へ坐つて、お米の手先を見詰めてゐた。これが夫だと、何時迄も默つて針を動かすのが、お米の例であつたが、相手が小六の時には、さう投遣りに出來ないのが、

又お米の性質であつた。だからそんな時には力めても話しをした。話しの題目で、動ともすると小六の口に宿りたがるものは、彼の未來を何うしたら好からうと云ふ心配であつた。

「だつて小六さんなんか、まだ若いぢやありませんか。何をしたつて是からだわ。そりや兄さんの事よ。さう悲觀しないでも可いわ」

お米は二度許り斯ういふ慰め方をした。三度目には、

「來年になれば、安さんの方で何うか都合して上げるつて受合つて下すつたんぢやなくつて」と聞いた。

小六は其時不慥かな表情をして、

「そりや安さんの計畫が、口でいふ通り旨く行けば譯はないんでせうが、段々考へると、何だか少し當てにならない樣な氣がし出してね。鰹節もあんまり儲からない樣だから」と云つた。お米は小六の憮然としてゐる姿を見て、それを時々酒氣を帶びて歸つて來る、何處かに殺氣を含んだ、しかも何が癪に障るんだか譯が分らないでゐて、甚だ不平らしい小六と比較すると、心の中で氣の毒にもあり、又可笑しくもあつた。其時は、

「本當にね。兄さんにさへ御金があると、何うでもして上げる事が出來るんだけれども」と、御世辭でも何でもない、同情の意を表した。

其夕暮であつたか。小六は又寒い身體を外套に包んで出て行つたが、八時過ぎに歸つて來て、兄夫婦の前で、袂から白い細長い袋を出して、寒いから蕎麥掻きを拵へて食はうと思つて、佐伯へ行つた歸りに買つて來たと云つた。さうしてお米が湯を沸かしてゐるうちに、煮出しを拵へるとか云つて、しきりに鰹節

を掻いた。
　其時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとう／＼春迄延びた事を聞いた。此縁談は安之助が學校を卒業すると間もなく起つたもので、小六が房州から歸つて、叔母に學資の供給を斷られる時分には、もう大分話しが進んでゐたのである。正式の通知が來ないので、何時纏まつたか、宗助は丸で知らなかつたが、たゞ折々佐伯へ行つては、何か聞いて來る小六を通じてのみ、彼は年内に式を擧げる筈の新夫婦を豫想した。其他には、嫁の里がある會社員で、有福な生計をしてゐる事と、其學校が女學館であるといふ事と、兄弟が澤山あると云ふ事丈を、同じく小六を通じて耳にした。寫眞にせよ顏を知つてゐるのは小六計りであつた。
「好い器量？」とお米が聞いた事がある。
「まあ好い方でせう」と小六が答へた事がある。
　其晩は何故暮のうちに式を濟まさないかと云ふのが、蕎麥搔きの出來上がる間、三人の話題になつた。お米は方位でも惡いのだらうと臆測した。宗助は押し詰まつて日がないからだらうと考へた。獨り小六丈が、
「矢つ張り物質的の必要かららしいです。先が何でも餘程派出な家なんで、叔母さんの方でもさう單簡に濟まされないんでせう」と何時にない世帶じみた事を云つた。

十一

お米のぶら／＼し出したのは、秋も半ば過ぎて、紅葉の赤黒く縮れる頃であつた。京都に居た時分は別として、廣島でも福岡でも、あまり健康な月日を送つた經驗のないお米は、此點に掛けると、東京へ歸つてからも、矢張り仕合せとは云へなかつた。この女には生れ故郷の水が、性に合はないのだらうと、疑れば疑られる位、お米は一時惱んだ事もあつた。

近頃はそれが段々落ち附いて來て、宗助の氣を揉む機會も、年に幾度と勘定が出來る位少なくなつたから、宗助は役所の出入りに、お米は又夫の留守の立ち居に、等しく安心して時間を過ごす事が出來たのである。だから此年の秋が暮れて、薄い霜を渡る風が、つらく肌を吹く時分になつて、又少し心持が惡くなり出しても、お米は夫程苦にもならなかつた。始めのうちは宗助にさへ知らせなかつた。宗助が見附けて、醫者に掛かれと勸めても、容易に掛からなかつた。

其處へ小六が引越して來た。宗助は其頃のお米を觀察して、體質の狀態やら、精神の模樣やら、夫丈によく知つてゐたから、成るべくは、人數を殖やして宅の中を混雜かせたくないとは思つたが、事情已むを得ないので、成るが儘にして置くより外に、手段の講じやうもなかつた。たゞ口の先で、成るべく安靜にしてゐなくては不可ないと云ふ矛盾した助言は與へた。お米は微笑して、

「大丈夫よ」と云つた。此答を得た時、宗助は猶の事安心が出來なくなつた。所が不思議にも、お米の氣分は、小六が引越して來てから、すつと引き立つた。自分に責任の少しでも加はつたため、心が緊張したものと見えて、却て平生よりは、甲斐々々しく夫や小六の世話をした。小六には夫が丸で通じなかつたが、宗助から見ると、お米が在來よりもどれ程力めてゐるかが好く解つた。宗助は心のうちで、此まめやか

な細君に新しい感謝の念を抱くと同時に、かう氣を張り過ぎる結果が、一度に身體に障る樣な騷ぎでも引き起して呉れなければ可いがと心配した。

不幸にも、此心配が暮の二十日過ぎになつて、突然事實になりかけたので、宗助は豫期の恐怖に火が點いた樣に、いたく狼狽した。其日は判然土に映らない空が、朝から重なり合つて、重い寒さが終日人の頭を抑へ附けてゐた。お米は前の晩にまた寐られないで、休ませ損なつた頭を抱へながら、辛抱して働き出したが、起つたり動いたりするたびに、多少腦に應へる苦痛はあつても、比較的明るい外界の刺激に紛れた爲か、凝と寐てゐながら、頭丈が冴えて痛むよりは、却て凌ぎ易かつた。兎角して夫を送り出す迄は、しばらくしたら又何時もの樣に折り合つて來る事と思つて我慢してゐた。所が宗助がゐなくなつて、自分の義務に一段落が着いたといふ氣の弛みが出ると等しく、濁つた天氣がそろ〳〵お米の頭を攻め始めた。空を見ると凍つてゐる樣であるし、家の中にゐると、陰氣な障子の紙を透して、寒さが浸み込んで來るかと思はれる位だのに、お米の頭はしきりに熱つて來た。仕方がないから、今朝あげた蒲團を又出して來て、座敷へ延べたまゝ横になつた。夫でも堪へられないので、清に濡手拭を絞らして頭へ乘せた。それが直き生溫くなるので、枕元に金盥を取り寄せて時々絞り易へた。

午迄こんな姑息手段で斷えず額を冷やして見たが、一向はか〴〵しい驗もないので、お米は小六のためにわざ〳〵起きて、一所に食事をする根氣もなかつた。清にいひ附けて膳立てをさせて、それを小六に薦めさした儘、自分は矢張り床を離れずにゐた。さうして、平生夫のする柔らかい括り枕を持つて來て貰つて、堅いのと取り替へた。お米は髮の損れるのを、女らしく苦にする勇氣にさへ乏しかつたのである。

小六は六疊から出て來て、一寸襖を開けて、お米の姿を覗き込んだが、お米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞いでゐたので、寐付いたとでも思つたものか、一言の口も利かずに、又そつと襖を閉めた。さうして、たつた一人大きな食卓を專領して、始めからさら／＼と茶漬を掻き込む音をさせた。

二時頃になつて、お米は漸つとの事とろ／＼と眠つたが、眼が覺めたら額を捲いた濡手拭が殆ど乾く位暖かになつてゐた。其代り頭の方は少し樂になつた。たゞ肩から脊筋へ掛けて、全體に重苦しい樣な感じが新たに加はつた。お米は何でも精を附けなくては毒だといふ考へから、一人で起きて遲い午飯を輕く食べた。

「御氣分は如何で御座います」と清が御給仕をしながら、しきりに聞いた。お米は大分可い樣だつたので、床を上げて貰つて、火鉢に倚つたなり、宗助の歸りを待ち受けた。

宗助は例刻に歸つて來た。神田の通りで、門並旗を立てて、もう暮の賣出しを始めた事だの、勸工場で紅白の幕を張つて、樂隊に景氣を附けさしてゐる事だのを話した末、「賑やかだよ。一寸行つて御覽。なに電車に乘つて行けば譯はない」と勸めた。さうして自分は寒さに腐蝕された樣に赤い顏をしてゐた。

お米は宗助から勞られた時、何だか自分の身體の惡い事を訴へるに忍びない心持がした。實際又大した程苦しくもなかつた。それで何時もの通り何氣ない顏をして、夫に着物を着換へさしたり、洋服を疊んだりして夜に入つた。

所が九時近くになつて、突然宗助に向つて、少し加減が惡いから先へ寐たいと云ひ出した。今迄平生の

通り機嫌よく話してゐただけに、宗助は此言葉を聞いて一寸驚いたが、大した事でもないと云ふお米の保證に、漸く安心してすぐ休む支度をさせた。

お米が床へ這入つてから、約二十分許りの間、宗助は耳の傍に鐵瓶の音を聞きながら、靜かな夜を丸心の洋燈に照らしてゐた。彼は來年度に一般官吏に増俸の沙汰があるといふ評判を思ひ浮かべた。又其前に改革か淘汰が行はれるに違ひないといふ噂に思ひ及んだ。さうして自分は何方の方へ編入されるだらうと疑つた。彼は自分を東京へ呼んで呉れた杉原が、今も猶課長として本省にゐないのを遺憾とした。彼は東京へ移つてから不思議とまだ病氣をした事がなかつた。從つてまだ缺勤屆を出した事がなかつた。學校を中途で已めたなり、本は殆ど讀まないのだから、學問は人並に出來ないが、役所でやる仕事に差支へる程の頭腦ではなかつた。

彼は色々な事情を綜合して考へた上、まあ大丈夫だらうと腹の中で極めた。さうして爪の先で輕く鐵瓶の縁を敲いた。其時座敷で、

「貴方一寸」と云ふお米の苦しさうな聲が聞こえたので、我知らず立ち上がつた。

座敷へ來て見ると、お米は眉を寄せて、右の手で自分の肩を抑へながら、胸迄蒲團の外へ乘り出してゐた。宗助は殆ど機械的に、同じ所へ手を出した。さうしてお米の抑へてゐる上から、固く骨の角を攫んだ。

「もう少し後の方」とお米が訴へるやうに云つた。宗助の手がお米の思ふ所へ落ち附く迄には、二度も三度も其處此處と位置を易へなければならなかつた。指で壓して見ると、頸と肩の繼目の少し背中へ寄つた局部が、石の樣に凝つてゐた。お米は男の力一杯にそれを抑へて呉れと賴んだ。宗助の額からは汗が煮

染み出した。それでもお米の滿足する程は力が出なかつた。

宗助は昔の言葉で早打肩といふのを覺えてゐた。小さい時祖父から聞いた話に、或侍が馬に乘つて何處かへ行く途中で、急に此早打肩に冒されたので、すぐ馬から飛んで下りて、忽ち小柄を拔くや否や、肩先を切つて血を出したため、危い命を取り留めたといふのがあつたが、其話が今明らかに記憶の燒點に浮かんで出た。其時宗助は是はならんと思つた。けれども果して刃物を用ひて肩の肉を突いて可いものやら、惡いものやら、決しかねた。

お米は何時になく逆上せて、耳迄赤くしてゐた。頭が熱いかと聞くと苦しさうに熱いと答へた。宗助は大きな聲を出して清に氷嚢へ冷たい水を入れて來いと命じた。氷嚢が生憎無かつたので、清は朝の通り金盥に手拭を浸けて持つて來た。清が頭を冷やしてゐるうち、宗助は矢張り精一杯肩を抑へてゐた。時々少しは可いかと聞いても、お米は微かに苦しいと答へる丈であつた。宗助は全く心細くなつた。思ひ切つて、自分で馳け出して醫者を迎へに行かうとしたが、後が心配で一足も表へ出る氣にはなれなかつた。

「清、御前急いで通へ行つて、氷嚢を買つて醫者を呼んで來い。まだ早いから起きてるだらう」

清はすぐ立つて茶の間の時計を見て、

「九時十五分で御座います」と云ひながら、それなり勝手口へ回つて、ごそ〳〵下駄を探してゐる所へ、旨い具合に外から小六が歸つて來た。例の通り兄には挨拶もしないで、自分の部屋へ這入らうとするのを、宗助はおい小六と烈しく呼び止めた。小六は茶の間で少し躊躇してゐたが、兄から又二聲程續けざまに大きな聲を掛けられたので、已むを得ず低い返事をして、襖から顏を出した。其顏は酒氣のまだ醒めない赤

い色を眼の縁に帶びてゐた。部屋の中を覗き込んで、始めて喫驚した樣子で、

「何うかなすつたんですか」と醉ひが一時に去つた樣な表情をした。

宗助は淸に命じた通りを、小六に繰り返して、早くして吳れと急き立てた。小六は外套も脫がずに、すぐ玄關へ取つて返した。

「兄さん、醫者迄行くのは急いでも時間が掛かりますから、坂井さんの電話を借りて、すぐ來る樣に賴みませう」

「あゝ、左うして吳れ」と宗助は答へた。さうして小六の歸る間、淸に何返となく金盥の水を易へさしては、一生懸命にお米の肩を壓し附けたり、揉んだりして見た。お米の苦しむのを、何もせずにたゞ見てゐるに堪へなかつたから、斯うして自分の氣を紛らしてゐたのである。

此時の宗助に取つて、醫者の來るのを今か今かと待ち受ける心ほど苛いものはなかつた。彼はお米の肩を揉みながらも、絕えず表の物音に氣を配つた。

漸く醫者が來たときは、始めて夜が明けた樣な心持がした。醫者は商賣柄丈あつて、少しも狼狽へた樣子を見せなかつた。小さい折鞄を脇に引き附けて、落ち附き拂つた態度で、漫性病の患者でも取り扱ふ樣に緩りした診察をした。其逼らない顏色を見てゐた所爲か、わく〳〵した宗助の胸も漸く治まつた。

醫者は芥子を局部へ貼る事と、足を濕布で溫める事と、夫から頭を氷で冷やす事とを、應急手段として宗助に注意した。さうして自分で芥子を搔いて、お米の肩から頸の根へ貼り附けて吳れた。濕布は淸と小六とで受持つた。宗助は手拭の上から氷囊を額の上に當てがつた。

兎角するうち約一時間も經つた。醫者はしばらく經過を見て行かうと云つて、夫迄お米の枕元に坐つてゐた。世間話も折々は交へたが、大方は無言の儘、二人共にお米の容體を見守る事が多かつた。夜は例の如く靜かに更けた。

「大分冷えますな」と醫者が云つた。宗助は氣の毒になつたので、あとの注意をよく聞いた上、遠慮なく引き取つて貰へる樣に頼んだ。其時お米は先刻よりは大分輕快になつてゐたからである。

「もう大丈夫でせう。頓服を一囘上げますから今夜飲んで御覽なさい。多分寢られるだらうと思ひます」

と云つて醫者は歸つた。小六はすぐ其後を追つて出て行つた。

小六が藥取りに行つた間に、お米は、

「もう何時」と云ひながら枕元の宗助を見上げた。宵とは違つて頰から血が退いて、洋燈に照らされた所が、ことに蒼白く映つた。宗助は黑い髮の毛の亂れた所爲だらうと思つて、わざ／＼鬢の毛を搔き上げて遣つた。さうして、

「少しは可いだらう」と聞いた。

「え、餘つ程樂になつたわ」とお米は何時もの通り微笑を漏らした。お米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかつた。茶の間では、清が突つ伏したまゝ、鼾をかいてゐた。

「清を寢かして遣つて下さい」とお米が宗助に頼んだ。

小六が藥取りから歸つて來て、醫者の云ひ附け通り服藥を濟ましたのは、もう彼是十二時近くであつた。それから二十分と經たないうちに、病人はすや／＼寢入つた。

「好い鹽梅だ」と宗助がお米の顏を見ながら云つた。小六もしばらく嫂の樣子を見守つてゐたが、
「もう大丈夫でせう」と答へた。二人は氷嚢を額から卸ろした。

やがて小六は自分の部屋へ這入る。宗助はお米の傍へ床を延べて何時もの如く寢た。五六時間の後冬の夜は錐の樣な霜を挾んで、からりと明け渡つた。それから一時間すると、大地を染める太陽が、遮るもののない蒼空に憚りなく上つた。お米はまだすや／＼寢てゐた。

そのうち朝飼も濟んで、出勤の時刻が漸く近づいた。けれどもお米は眠りから覺める氣色もなかつた。宗助は枕邊に曲んで、深い寢息を聞きながら、役所へ行かうか休まうかと考へた。

十二

朝の内は役所で常の如く事務を執つてゐたが、折々昨夕の光景が眼に浮かぶに連れて、自然お米の病氣が氣に懸かるので、仕事は思ふ樣に運ばなかつた。時には變な間違ひをさへした。宗助は午になるのを待つて、思ひ切つて宅へ歸つて來た。

電車の中では、お米の眼が何時頃覺めたらう、覺めた後は心持が大分好くなつたらう、發作ももう起る氣遣ひなからうと、凡て惡くない想像ばかり思ひ浮かべた。何時もと違つて、乘客の非常に少ない時間に乘り合はせたので、宗助は周圍の刺激に氣を使ふ必要が殆どなかつた。それで自由に頭の中へ現はれる畫を何枚となく眺めた。其うちに電車が終點に來た。

宅の門口迄來ると、家の中はひつそりして、誰もゐない樣であつた。格子を開けて、靴を脱いで、玄關

に上がつても、出て來るものはなかつた。宗助は何時もの樣に緣側から茶の間へ行かずに、すぐ取附きの襖を開けて、お米の寢てゐる座敷へ這入つた。見ると、お米は依然として寢てゐた。枕元の朱塗の盆に散藥の袋と洋杯が載つてゐて、其洋杯の水が半分殘つてゐる所も朝と同じであつた。頭を床の間の方へ向けて、左の頰と芥子を貼つた襟元が少し見える所も朝と同じであつた。呼息より外に現實世界と交通のない樣に思はれる深い眠りも朝見た通りであつた。凡てが今朝出掛けに頭の中へ收めて行つた光景と少しも變つてゐなかつた。宗助は外套も脫がずに、上から曲んで、すう／＼いふお米の寢息をしばらく聞いてゐた。お米は容易に覺めさうにも見えなかつた。宗助は昨夕お米が散藥を飮んでから以後の時間を指を折つて勘定した。さうして漸く不安の色を面に表はした。昨夕迄は寢られないのが心配になつたが、斯う前後不覺に長く寢る所を眼のあたりに見ると、寢た方が何かの異狀ではないかと考へ出した。

宗助は蒲團へ手を掛けて二三度輕くお米を搖振つた。お米の髮が括り枕の上で、波を打つ樣に動いたが、お米は依然としてすう／＼寢てゐた。宗助はお米を置いて、茶の間から臺所へ出た。流し元の小桶の中に茶碗と塗椀が洗はない儘浸けてあつた。下女部屋を覗くと、清が自分の前に小さな膳を控へたなり、御櫃に倚りかゝつて突つ伏してゐた。宗助は又六疊の戶を引いて首を差し込んだ。其處には小六が掛蒲團を一枚頭から引つ被つて寢てゐた。

宗助は一人で着物を着換へたが、脫ぎ捨てた洋服も、人手を借りずに自分で疊んで、押入に仕舞つた。それから火鉢へ火を繼いで、湯を沸かす用意をした。二三分は火鉢に倚れて考へてゐたが、やがて立ち上がつて、先づ小六から起しに掛かつた。次に清を起した。二人とも驚いて飛び起きた。小六にお米の今朝

から今迄の樣子を聞くと、實は餘り眠いので、十一時半頃飯を食つて寢たのだが、夫迄はお米もよく熟睡してゐたのだと云ふ。

「醫者へ行つてね。昨夜の藥を戴いてから寢出して、今になつても眼が覺めませんが、差支へないでせうかつて聞いて來て呉れ」

「はあ」

小六は簡單な返事をして出て行つた。宗助は又座敷へ來て、お米の顏を熟視した。起して遣らなくつては惡い樣な、又起しては身體へ障る樣な、分別の附かない惑ひを抱いて腕組をした。

間もなく小六が歸つて來て、醫者は丁度往診に出掛ける所であつた。譯を話したら、では今から一二軒寄つてすぐ行かうと答へた、と告げた。宗助は醫者が見える迄、斯うして放つて置いて構はないのかと小六に問ひ返したが、小六は醫者が以上より外に何も語らなかつたと云ふ丈なので、已むを得ず元の如く枕邊に凝と坐つてゐた。さうして心の中で、醫者も小六も不親切過ぎる樣に感じた。彼は其上昨夕お米を介抱してゐる時に歸つて來た小六の顏を思ひ出して、猶不愉快になつた。小六が酒を飮む事は、お米の注意で始めて知つたのであるが、其後氣を附けて弟の樣子をよく見てゐると、成程何だか眞面目でない所もある樣なので、何時かみつちり異見でもしなければなるまい位に考へてはゐたが、面白くもない二人の顏をお米に見せるのが氣の毒なので、今日迄わざと遠慮してゐたのである。

「云ひ出すならお米の寢てゐる今である。今ならどんな氣不味いことを雙方で言ひ募つたつて、お米の神經に障る氣遣ひはない」

此處迄考へ附いたけれども、血色のないお米の顏を見ると、又其方が氣掛りになつて、すぐにでも起したい心持がするので、つい決し兼てぐづ／＼してゐた。其處へ漸く醫者が來て吳れた。

昨夕の折鞄を又丁寧に傍へ引き附けて、緩り卷煙草を吹かしながら、宗助の云ふことを、はあはあと聞いてゐたが、どれ拜見致しませうとお米の方へ向き直つた。彼は普通の場合の樣に病人の脈を取つて、長い間自分の時計を見詰めてゐた。それから黑い聽診器を心臟の上に當てた。それを丁寧に彼方此方と動かした。最後に丸い穴の開いた反射鏡を出して、宗助に蠟燭を點けて吳れと云つた。宗助は蠟燭を持たないので、淸に洋燈を點けさした。醫者は眠つてゐるお米の眼を押し開けて、仔細に反射鏡の光を睫の奧に集めた。診察は夫で終つた。

「少し藥が利き過ぎましたね」と云つて宗助の方へ向き直つたが、宗助の眼の色を見るや否や、すぐ、「然し御心配になる事はありません。斯う云ふ場合に、もし惡い結果が起るとすると、屹度心臟か腦を冒すものですが、今拜見した所では雙方共異狀は認められませんから」と說明して吳れた。宗助はそれで漸く安心した。醫者は又自分の用ひた眠り藥が比較的新しいもので、學理上、他の睡眠劑の樣に有害でない事や、又其效き目が患者の體質に因つて、程度に大變な相違のある事などを話して歸つた。歸るとき宗助は、

「では寢られる丈寢かして置いても差支へありませんか」と聞いたら、醫者は用さへなければ別に起す必要もあるまいと答へた。

醫者が歸つたあとで、宗助は急に空腹になつた。茶の間へ出ると、先刻掛けて置いた鐵瓶がちん／＼沸

つてゐた。清を呼んで膳を出せと命ずると、清は困つた顔附をして、まだ何の用意も出來てゐないと答へた。成程晩食には少し間があつた。宗助は樂々と火鉢の傍に胡坐を掻いて、大根の香の物を嚙みながら湯漬を四杯ほどつゞけ樣に搔き込んだ。それから約三十分程したらお米の眼がひとりでに覺めた。

十三

新年の頭を拵へようといふ氣になつて、宗助は久し振に髮結床の敷居を跨いだ。暮の所爲か客が大分立て込んでゐるので、鋏の音が二三ヶ所で、同時にちよき／＼鳴つた。此寒さを無理に乘り越して、一日も早く春に入らうと焦慮るやうな表通の活動を、宗助は今見て來たばかりなので、其鋏の音が、如何にも忙しない響となつて彼の鼓膜を打つた。

暫く煖爐の傍で煙草を吹かして待つてゐる間に、宗助は自分と關係のない大きな世間の活動に否應なしに捲き込まれて、已むを得ず年を越さなければならない人の如くに感じた。正月を眼の前に控へた彼は、實際是といふ新しい希望もないのに、徒らに周圍から誘はれて、何だかざわ／＼した心持を抱いてゐたのである。

お米の發作は漸く落ち附いた。今では平日の如く外へ出ても、家の事がそれ程氣に掛からない位になつた。餘所に比べると閑靜な春の支度も、お米から云へば、年に一度の忙しさには違ひなかつたので、或は何時も通りの準備さへ拔いて、常よりも簡單に年を越す覺悟をした宗助は、蘇生つた樣にはつきりした妻の姿を見て、恐ろしい悲劇が一歩遠退いた時の如くに、胸を撫で卸ろした。然し其悲劇が又何時如何なる

形で、自分の家族を捕へに來るか分らないと云ふ、ぼんやりした懸念が、折々彼の頭のなかに霧となつて懸かつた。

年の暮に、事を好むとしか思はれない世間の人が、故意と短かい日を前へ押し出したがつて齷齪する樣子を見ると、宗助は猶の事この茫漠たる恐怖の念に襲はれた。成らうことなら、自分丈は陰氣な暗い師走の中に一人殘つてゐたい思ひさへ起つた。漸く自分の番が來て、彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出だした時、不圖此影は本來何者だらうと眺めた。首から下は眞白な布に包まれて、自分の着てゐる着物の色も縞も全く見えなかつた。其時彼は又床屋の亭主が飼つてゐる小鳥の籠が、鏡の奧に映つてゐる事に氣が附いた。鳥が止り木の上をちらり／＼と動いた。

頭へ香のする油を塗られて、景氣のいゝ聲を後から掛けられて、表へ出たときは、それでも清々した心持であつた。お米の勸め通り髮を刈つた方が、結局氣を新にする效果があつたのを、冷たい空氣の中で宗助は自覺した。

水道稅の事で一寸聞き合はせる必要が生じたので、宗助は歸り路に坂井へ寄つた。下女が出て來て、此方へと云ふから、何時もの座敷へ案內するかと思ふと、其處を通り越して、茶の間へ導いていつた。すると茶の間の襖が二尺ばかり開いてゐて、中から三四人の笑ひ聲が聞こえた。坂井の家庭は相變らず陽氣であつた。

主人は光澤の好い長火鉢の向う側に坐つてゐた。細君は火鉢を離れて、少し緣側の障子の方へ寄つて、矢張り此方を向いてゐた。主人の後に細長い黑い枠に嵌めた柱時計が懸かつてゐた。時計の右が壁で、左

が袋戸棚になつてゐた。其張交ぜに石摺だの、俳畫だの、扇の骨を拔いたものなどが見えた。
主人と細君の外に、筒袖の揃ひの模樣の被布を着た女の子が二人、肩を擦り附け合つて坐つてゐた。片方は十二三で、片方は十位に見えた。大きな眼を揃へて、襖の蔭から入つて來た宗助の方を向いたが、二人の眼元にも口元にも今笑つた計りの影が、まだゆたかに殘つてゐた。宗助は一應室の内を見回して、此親子の外に、まだ一人妙な男が、一番入口に近い處に畏まつてゐるのを見出だした。
宗助は坐つて五分と立たないうちに、先刻の笑ひ聲は、此變な男と坂井の家族との間に取り換はされた問答から出る事を知つた。男は砂埃でざらつきさうな赤い毛と、日に燒けて生涯褪めつこない強い色を有つてゐた。瀨戸物の釦の着いた白木綿の襯衣を着て、手織の硬い布子の襟から財布の紐見たやうな長い丸打を懸けた樣子は、滅多に東京抔へ出る機會のない遠い山の國のものとしか受取れなかつた。其上男は此寒いのに膝小僧を少し出して、紺の落ちた小倉の帶の尻に差した手拭を拔いては鼻の下を擦つた。
「是は甲斐の國から反物を背負つてわざ〳〵東京迄出て來る男なんです」と坂井の主人が紹介すると、男は宗助の方を向いて、
「何うか旦那、一つ買つて御呉れ」と挨拶をした。
成程銘仙だの御召だの、白紬だのが其處ら一面に取り散らしてあつた。宗助は此男の形裝や言葉遣ひの可笑しい割に、立派な品物を背中へ乘せて歩くのを寧ろ不思議に思つた。主人の細君の說明によると、此織屋の住んでゐる村は燒石ばかりで、米も粟も收れないから、已むを得ず桑を植ゑて蠶を飼ふんださうであるが、餘程貧しい所と見えて、柱時計を持つてゐる家が一軒丈で、高等小學へ通ふ子供が三人しかない

といふ話であつた。

「字の書けるものは、此人ぎりなんださうですよ」と云つて細君は笑つた。すると織屋も、

「本當のこんだよ、奥さん。讀み書きの出來るものは、己より外にねえんだからね。全く非道い處にや違ひない」と眞面目に細君の云ふ事を首肯つた。

織屋は色々の反物を主人や細君の前へ突き附けては、「買つて御呉れ」といふ言葉をしきりに繰り返した。そりや高いよ何々に御負けなどと云はれると「値ぢやねえよ」とか、「拜むからそれで買つて御呉れ」とか、「まあ目方を見て御呉れ」とか凡て異様な田舍びた答をした。その度に皆が笑つた。主人夫婦は又閑だと見えて、面白半分に何時迄も織屋を相手にした。

「織屋、御前さうして荷を背負つて、外へ出て、時分どきになつたら、矢つ張り御膳を食べるんだらうね」と細君が聞いた。

「飯を食はねえでゐられるもんぢやないよ。腹の減る事ちうたら」

「何んな處で食べるの」

「何んな處で食べるちうて、矢つ張り茶屋で食ふだね」

主人は笑ひながら茶屋とは何だと聞いた。織屋は、飯を食はす處が茶屋だと答へた。それから東京へ出立てには、飯が非常に旨いので、腹を据ゑて食ひ出すと、大抵の宿屋は叶はない。三度々々食つちや氣の毒だと云ふ樣な事を話して、また皆を笑はした。

織屋は仕舞に撚絲の紬と、白絽を一匹細君に賣り附けた。宗助は此押し詰まつた暮に、夏の絽を買ふ人

を見て、餘裕のあるものは又格別だと感じた。すると、主人が宗助に向つて、
「何うです貴方も、序に何か一つ。奥さんの不斷着でも」と勸めた。細君もかう云ふ機會に買つて置くと、幾割か値安に買へる便宜を說いた。さうして、
「なに御拂ひは何時でも可いんです」と受合つて呉れた。宗助はとう〳〵お米のために、銘仙を一反買ふ事にした。主人はそれを散々値切つて三圓に負けさした。織屋は負けた後で又、
「全く値ぢやねえね。泣きたくなるね」と云つたので、大勢がまた一度に笑つた。
織屋は何處へ行つても、斯ういふ鄙びた言葉を使つて通してゐるらしかつた。毎日馴染の家をぐる〳〵廻つて步いてゐる中には、背中の荷が段々輕くなつて、仕舞に紺の風呂敷と眞田紐が殘る。其時分には丁度舊の正月が來るので、一先國元へ歸つて、古い春を山の中で越して、夫から又新しい反物を背負へる丈背負つて出て來るのだと云つた。さうして養蠶の忙しい四月の末か五月の初迄に、それを悉皆金に換へて、又富士の北陰の燒石計りころがつてゐる小村へ、歸つて行くのださうである。
「宅へ來出してから、もう四五年になりますが、何時見ても同じ事で、少しも變らないんですよ」と細君が注意した。
「實際珍らしい男です」と主人も評語を添へた。三日も外へ出ないと、町幅が何時の間にか取り廣げられてゐたり、一日新聞を讀まないと、電車の開通を知らずに過ごしたりする今の世に、年に二度も東京へ出ながら、斯う山男の特色を何處迄も維持して行くのは、實際珍らしいに違ひなかつた。宗助はつく〴〵此織屋の容貌やら、態度やら、服裝やら、言葉使ひやらを觀察して、一種氣の毒な思ひをなした。

彼は坂井を辭して、家へ歸る途中にも、折々インヴネスの羽根の下に抱へて來た銘仙の包を持ち易へながら、それを三圓といふ安い價で賣つた男の、粗末な布子の縞と、赤くてばさ〳〵した髮の毛と、其の脂氣のない硬い髮の毛が、何ういふ譯か、頭の眞中で立派に左右に分けられてる樣を、絶えず眼の前に浮かべた。

宅ではお米が、宗助に着せる春の羽織を漸く縫ひ上げて、壓の代りに坐蒲團の下へ入れて、自分で其上へ坐つてゐる處であつた。

「貴方今夜敷いて寢て下さい」と云つて、お米は宗助を顧た。夫から、坂井へ來てゐた甲斐の男の話しを聞いた時は、お米も流石に大きな聲を出して笑つた。さうして宗助の持つて歸つた銘仙の縞柄と地合を飽かず眺めては、安い〳〵と云つた。銘仙は全く品の良いものであつた。

「何うして、さう安く賣つて割に合ふんでせう」と仕舞に聞き出した。

「なに中へ立つ呉服屋が儲け過ぎてるのさ」と宗助は其道に明るい樣な事を、此一反の銘仙から推斷して答へた。

夫婦の話しはそれから、坂井の生活に餘裕のある事と、其餘裕のために、横町の道具屋などに意外な儲け方をされる代りに、時とすると斯う云ふ織屋などから、差し向き不用のものを廉價に買つて置く便宜を有してゐる事などに移つて、仕舞に其家庭の如何にも陽氣で、賑やかな模樣に落ちて行つた。宗助は其時突然語調を更へて、

「何金があるばかりぢやない。一つは子供が多いからさ。子供さへあれば、大抵貧乏な家でも陽氣にな

るものだ」とお米を覺した。
　其云ひ方が、自分達の淋しい生涯を、多少自ら窘める樣な苦い調子を、お米の耳に傳へたので、お米は覺えず膝の上の反物から手を放して夫の顏を見た。宗助は坂井から取つて來た品が、お米の嗜好に合つたので、久し振に細君を喜ばせて遣つた自覺があるばかりだつたから、別段そこには氣が附かなかつた。お米も一寸宗助の顏を見たなり、其時は何も云はなかつた。けれども夜に入つて寢る時間が來る迄、お米はそれをわざと延ばして置いたのである。
　二人は何時もの通り十時過ぎ床に入つたが、夫の眼がまだ覺めてゐる頃を見計らつて、お米は宗助の方を向いて話しかけた。
「貴方先刻子供がないと淋しくつて不可ないと仰しやつてね」
　宗助は是に類似の事を普汎的に云つた覺えは慥かにあつた。けれどもそれは強ちに、自分達の身の上に就いて、特にお米の注意を惹く爲に口にした、故意の觀察でないのだから、斯う改まつて聞き糺されると、困るより外はなかつた。
「何も宅の事を云つたのぢやないよ」
　此返事を受けたお米は、しばらく默つてゐた。やがて、
「でも宅の事を始終淋しい淋しいと思つていらつしやるから、必竟あんな事を仰しやるんでせう」と前と略似た樣な問を繰り返した。宗助は固よりさうだと答へなければならない或物を頭の中に有つてゐた。けれどもお米を憚つて、それ程明白地な自白を敢てし得なかつた。此病氣上りの細君の心を休める爲には、

卻つてそれを冗談にして笑つて仕舞ふ方が善からうと考へたので、

「淋しいと云へば、そりや淋しくないでもないがね」と調子を易へて成るべく陽氣に出たが、其處で詰まつたぎり、新しい文句も、面白い言葉も容易に思ひ附けなかつた。已むを得ず、

「まあ可いや。心配するな」と云つた。お米はまた何とも答へなかつた。宗助は話題を變へようと思つて、

「昨夕も火事があつたね」と世間話を仕出した。するとお米は急に、

「私は實に貴方に御氣の毒で」と切なさうに言譯を半分して、又それなり黙つて仕舞つた。洋燈は何時もの様に床の間の上に据ゑてあつた。お米は灯に背いてゐたから、宗助には、顔の表情が判然分らなかつたけれども、其聲は多少涙でうるんでゐる様に思はれた。今迄仰向いて天井を見てゐた彼は、すぐ妻の方へ向き直つた。さうして薄暗い影になつたお米の顔を凝と眺めた。お米も暗い中から凝と宗助を見てゐた。さうして、

「疾うから貴方に打ち明けて謝罪らう謝罪らうと思つてゐたんですが、つい言ひ悪かつたもんだから、夫なりにして置いたのです」と途切れ／＼に云つた。宗助には何の意味か丸で分らなかつた。多少はヒステリーの所爲かとも思つたが、全然さうとも決しかねて、しばらく茫然してゐた。するとお米が思ひ詰めた調子で、

「私にはとても子供の出來る見込みはないのよ」と云ひ切つて泣き出した。

宗助は此可憐な自白を何う慰めて可いか、分別に餘つて當惑してゐたうちにも、お米に對して甚だ氣の

毒だといふ思ひが非常に高まつた。

「子供なんざ、無くても可いぢやないか。上の坂井さん見た樣に澤山生れて御覽、傍から見てゐても氣の毒だよ。丸で幼稚園の樣で」

「だつて一人も出來ないと極まつちまつたら、貴方だつて好かないでせう」

「まだ出來ないと極まりやしないぢやないか。是から生れるかも知れないやね」

お米は猶と泣き出した。宗助も途方に暮れて、發作の治まるのを穩やかに待つてゐた。さうして、緩りお米の說明を聞いた。

夫婦は和合同棲といふ點に於て、人並以上に成功したと同時に、子供にかけては、一般の隣人よりも不幸であつた。それも始めから宿る種がなかつたのなら、まだしもだが、育つべきものを中途で取り落としたのだから、更に不幸の感が深かつた。

始めて身重になつたのは、二人が京都を去つて廣島に瘠世帶を張つてゐる時であつた。懷妊と事が極まつたとき、お米は此新しい經驗に對して、恐ろしい未來と、嬉しい未來を、一度に夢に見る樣な心持を抱いて日を過ごした。宗助はそれを眼に見えない愛の精に、一種の確證となるべき形を與へた事實と、ひとり解釋して少なからず喜んだ。さうして自分の命を吹き込んだ肉の塊が、目の前に踴る時節を指を折つて樂しみに待つた。處が胎兒は夫婦の豫期に反して、五箇月迄育つて突然下りて仕舞つた。其時分の夫婦の活計は苦しい苛い月ばかり續いてゐた。宗助は流產したお米の蒼い顏を眺めて、是も畢竟は世帶の苦勞から起るんだと判じた。さうして愛情の結果が、貧のために打崩されて、永く手の裡に捕へる事の出來なく

なつたのを残念がつた。お米はひたすら泣いた。

福岡へ移つてから間もなく、お米は又酸いものを嗜む人となつた。一度流産すると癖になると聞いたので、お米は萬に注意して、つゝましやかに振舞つてゐた。其所爲か經過は至極順當に行つたが、どうした譯か、是といふ原因もないのに、月足らずで生れて仕舞つた。産婆は首を傾けて、一度醫者に見せる樣に勸めた。醫者に診て貰ふと、發育が充分でないから、室内の溫度を一定の高さにして、晝夜とも變らない位、人工的に暖めなければ不可ないと云つた。宗助の手際では、室内に煖爐を据ゑ附ける設備をする丈でも容易ではなかつた。夫婦はわが時間と算段の許す限りを盡くして、專念に赤兒の命を護つた。けれども凡ては徒勞に歸した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊は遂に冷たくなつた。お米は幼兒の亡骸を抱いて、

「何うしませう」と啜り泣いた。宗助は再度の打擊を男らしく受けた。冷たい肉が灰になつて、其灰が又黑い土に和する迄、一口も愚痴らしい言葉は出さなかつた。其内何時となく、二人の間に挾まつてゐた影の樣なものが、次第に遠退いて、程なく消えて仕舞つた。

すると三度目の記憶が來た。宗助が東京に移つて始めての年に、お米は又懷姙したのである。出京の當座は、大分身體が衰へてゐたので、お米は勿論、宗助もひどく其處を氣遣つたが、今度こそはといふ腹は兩方にあつたので、張りのある月を無事に段々と重ねて行つた。處が丁度五月目になつて、お米は又意外の失敗を遣つた。其頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。お米はある日裏にゐる下女に云ひ附ける用が出來たので、井戸流しの傍に置い

た盥の傍迄行つて話しをした序に、流しを向うへ渡らうとして、青い苔の生えてゐる濡れた板の上へ尻持を突いた。お米はまた遣り損なつたとは思つたが、自分の粗忽を面目ながつて、宗助にはわざと何事も語らずに其場を通した。けれども此震動が、何時迄經つても胎兒の發育に是といふ影響も及ぼさず、從つて自分の身體にも少しの異狀を引き起さなかつた事が慥かに分つた時、お米は漸く安心して、過去の失を改めて宗助の前に告げた。宗助は固より妻を咎める意もなかつた。たゞ、

「よく氣を附けないと危いよ」と穩やかに注意を加へて過ぎた。

兎角するうちに月が滿ちた。愈生れるといふ間際迄日が詰まつたとき、宗助は役所へ出ながらも、お米の事が頻りに氣に掛かつた。歸りには何時も、今日はことによると留守のうちに抔と案じ續けては、自分の家の格子の前に立つた。さうして半ば豫期してゐる赤兒の泣聲が聞こえないと、却て何かの變でも起つたらしく感じて、急いで宅へ飛び込んで、自分と自分の粗忽を恥づる事があつた。

幸ひにお米の產氣づいたのは、宗助の外に用のない夜中だつたので、傍にゐて世話の出來ると云ふ點から見れば甚だ都合が好かつた。產婆も緩り間に合ふし、脫脂綿其他の準備も悉く不足なく取り揃へてあつた。產も案外輕かつた。けれども肝心の小兒は、たゞ子宮を逃れて廣い處へ出たといふ迄で、浮世の空氣を一口も呼吸しなかつた。產婆は細い硝子の管の樣なものを取つて、小さい口の内へ強い呼息をしきりに吹き込んだが、效目は丸でなかつた。生れたものは肉丈であつた。夫婦は此肉に刻み附けられた、眼と鼻と口とを髣髴した。然し其咽喉から出る聲は遂に聞く事が出來なかつた。

產婆は出產のあつた一週間前に來て、丁寧に胎兒の心臟迄聽診して、至極御健全だと保證して行つ

たのである。よし産婆の云ふ事に間違ひがあつて、腹の兒の發育が今迄のうちに何處かで止まつてゐたにした處で、それが直ぐ取り出されない以上、母體は今日迄平氣に持ち應へる譯がなかつた。其處を段々調べて見て、宗助は自分が未だ嘗て聞いた事のない事實を發見した時に、思はず恐れ驚いた。胎兒は出る間際迄健康であつたのである。けれども臍帶纏絡と云つて、俗に云ふ胞を頸へ捲き附けてゐた。斯う云ふ異常の場合には、固より産婆の腕で切り拔けるより外に仕樣のないもので、經驗のある婆さんなら、取り上げる時に、旨く頸に掛かつた胞を外して引き出す筈であつた。宗助の頼んだ産婆も可なり年を取つてゐる丈に、此位のことは心得てゐた。然し胎兒の頸を絡んでゐた臍帶は、時たまある如く一重ではなかつた。二重に細い咽喉を卷いてゐる胞を、あの細い所を通す時に外し損なつたので、小兒はぐつと氣管を絞められて窒息して仕舞つたのである。

罪は産婆にもあつた。けれども半ば以上はお米の落度に違ひなかつた。臍帶纏絡の變狀は、お米が井戸端で滑つて痛く尻持を突いた五箇月前既に自ら釀したものと知れた。お米は産後の蓐中に其始末を聞いて、たゞ輕く首肯いたぎり何も云はなかつた。さうして、疲勞に少し落ち込んだ眼を霑ませて、長い睫毛をしきりに動かした。宗助は慰めながら手帛で頰に流れる涙を拭いて遣つた。

是が子供に關する夫婦の過去であつた。此苦い經驗を嘗めた彼等は、それ以後幼兒に就いて餘り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、此記憶のために淋しく染め附けられて、容易に剝げさうには見えなかつた。時としては、彼我の笑聲を通してさへ、御互の胸に、此裏側が薄暗く映る事もあつた。斯ういふ譯だから、過去の歷史を今夫に向つて新たに繰り返さうとは、お米も思ひ寄らなかつたの

である。宗助も、今更妻からそれを聞かせられる必要は、少しも認めてゐなかつたのである。

お米は夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有してゐた事實に就いてではなかつた。彼女は三度目の胎兒を失つた時、夫から其折の模樣を聞いて、如何にも自分が殘酷な母であるかの如く感じた。自分が手を下した覺えがないにせよ、考へ樣によつては、自分と生を與へたものの生を奪ふために、暗闇と明海の途中に待ち受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。斯う解釋した時、お米は恐ろしい罪を犯した惡人と己を見傚さない譯に行かなかつた。さうして思はざる德義上の苛責を人知れず受けた。しかも其苛責を分かつて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。お米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。

彼女は其時普通の產婦の樣に、三週間を床の中で暮らした。それは身體から云ふと極めて安靜の三週間に違ひなかつた。同時に心から云ふと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡兒のために、小さい柩を拵へて、人の眼に立たない葬儀を營んだ。しかる後、又死んだもののために小さな位牌を作つた。位牌には黑い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つてゐた。けれども俗名は兩親といへども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の簞笥の上に載せて、役所から歸ると絕えず線香を焚いた。其香が六疊に寢てゐるお米の鼻に時々通つた。彼女の官能は當時それ程に銳くなつてゐたのである。しばらくしてから宗助は何を考へたか、小さい位牌を簞笥の抽出の底へ仕舞つてしまつた。其所には福岡で亡くなつた子供の位牌と、東京で死んだ父の位牌が、別々に綿で包んで丁寧に入れてあつた。東京の家を疊むとき、宗助は先祖の位牌を一つ殘らず携へて、諸所を漂泊するの煩はしさに堪へなかつたので、新しい父の分丈を

鞄の中に收めて、其他は悉く寺へ預けて置いたのである。

お米は宗助のする凡てを、寢ながら見たり聞いたりしてゐた。而して蒲團の上に仰向けになつた儘、此二つの小さい位牌を、眼に見えない因果の絲を長く引いて互に結び附けた。夫から其絲を猶遠く延ばして、是は位牌にもならずに流れて仕舞つた、始めから形のない、ぼんやりした影の樣な死兒の上に投げかけた。お米は廣島と福岡と東京に殘る一つ宛の記憶の底に、動かしがたい運命の嚴かな支配を認めて、其嚴かな支配の下に立つ、幾月日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると觀じた時、時ならぬ呪咀の聲を耳の傍に聞いた。彼女が三週間の安靜を、蒲團の上に貪らなければならないやうに、生理的に強ひられてゐる間、彼女の鼓膜は此呪咀の聲で殆ど絶えず鳴つてゐた。三週間の安臥は、お米に取つて實に比類のない忍耐の三週間であつた。

お米は此苦しい半月餘りを、枕の上で凝と見詰めながら過ごした。仕舞には我慢して横になつてゐるのが、如何にも苛かつたので、看護婦の歸つた明くる日に、こつそり起きてぶら／＼して見たが、それでも心に逼る不安は、容易に紛らせなかつた。退儀な身體を無理に動かす割に、頭の中は少しも動いて呉れないので、又落膽して、つひには取り放しの夜具の下へ潛り込んで、人の世を遠ざける樣に、眼を堅く閉つて仕舞ふ事もあつた。

其内定期の三週間も過ぎて、お米の身體は自らすつきりなつた。お米は綺麗に床を拂つて、新しい氣のする眉を再び鏡に照らした。それは更衣の時節であつた。お米も久し振に綿の入つた重いものを脫ぎ棄てて、肌に垢の觸れない輕い氣持を爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽氣な日本の風物は、淋しい

お米の頭にも幾分かの反響を與へた。けれども、夫はたゞ沈んだものを掻き立てて、賑やかな光のうちに浮かした迄であつた。お米の暗い過去の中に、其時一種の好奇心が萌したのである。

天氣の勝れて美しいある日の午前、お米は何時もの通り宗助を送り出してから直きに、表へ出た。もう女は日傘を差して外を行くべき時節であつた。急いで日向を歩くと額の邊が少し汗ばんだ。お米は歩き歩き、着物を着換へる時、簞笥を開けたら、思はず一番目の抽出の底に仕舞つてあつた、新しい位牌に手が觸れた事を思ひつゞけて、とう／＼ある易者の門を潛つた。

彼女は多數の文明人に共通な迷信を子供の時から持つてゐた。けれども平生は其迷信が又多數の文明人と同じ樣に、遊戯的に外に現はれる丈で濟んでゐた。それが實生活の嚴かな部分を冒す樣になつたのは、全く珍らしいと云はなければならなかつた。お米は其時眞面目な態度と眞面目な心を有つて、易者の前に坐つて、自分が將來子を生むべき、又子を育てるべき運命を天から與へられるだらうかを確めた。易者は大道に店を出して、往來の人の身の上を一二錢で占なふ人と、少しも違つた樣子もなく、算木を色々に竝べて見たり、筮竹を揉んだり數へたりした後で、仔細らしく腮の下の髯を握つて何か考へたが、終りにお米の顏をつく〴〵眺めた末、

「貴方には子供は出來ません」と落ち附き拂つて宣告した。お米は無言の儘、しばらく易者の言葉を頭の中で嚙んだり碎いたりした。それから顏を上げて、

「何故でせう」と聞き返した。其時お米は易者が返事をする前に、又考へるだらうと思つた。所が彼はまともにお米の眼の間を見詰めたまゝ、すぐ

「貴方は人に對して濟まない事をした覺があるのよ。其罪が祟つてゐるから、子供は決して育たない」と云ひ切つて、お米は此一言に心臓を射拔かれる思ひがあつた。くしやりと首を折つたなり家へ歸つて、其夜は夫の顔さへ碌々見上げなかつた。

お米の宗助に打ち明けないで、今迄通こしたといふのは、此易者の判斷であつた。宗助は床の間に乘せた細い洋燈の灯が、夜の中に沈んで行きさうな靜かな晩に、始めてお米の口から其話を聞いたとき、流石に好い氣味はしなかつた。

「神經の起つた時、わざ〳〵そんな馬鹿な所へ出掛けるからさ。錢を出して下らない事を云はれて、詰らないぢやないか。其後もその占ひの宅へ行くのかい」

「恐ろしいから、もう決して行かないわ」

「行かないが可い。馬鹿氣てる」

宗助はわざと鷹揚な答をして又寢て仕舞つた。

十四

宗助とお米とは仲の好い夫婦に違ひなかつた。一所になつてから今日迄六年程の長い月日を、まだ半日も氣不味く暮らした事はなかつた。言逆に顔を赤らめ合つた試しは猶なかつた。二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれども其他には一般の社會に待つ所の極めて少ない人間であつた。彼等は、日常の必要品を供給する以上の意味に於て、社會の存在を殆ど認めてゐなかつた。彼等に

取つて絶對に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた。彼等は山の中にゐる心を抱いて、都會に住んでゐた。

自然の勢ひとして、彼等の生活は單調に流れない譯に行かなかつた。彼等は複雜な社會の煩ひを避け得たと共に、其社會の活動から出る樣々の經驗に直接觸れる機會を、自分と塞いで仕舞つて、都會に住みながら、都會に住む文明人の特權を棄てた樣な結果に到着した。彼等も自分達の日常に變化のない事は折々自覺した。御互が御互に飽きるの、物足りなくなるのといふ心は微塵も起らなかつたけれども、御互の頭に受け入れる生活の內容には、刺激に乏しい或物が潛んでゐる樣な鈍い訴へがあつた。それにも拘らず、彼等が每日同じ判を同じ胸に押して、長の月日を倦まず渡つて來たのは、彼等が始めから一般の社會に興味を失つてゐたためではなかつた。社會の方で彼等を二人限りに切り詰めて、其二人に冷やかな背を向けた結果に外ならなかつた。外に向つて生長する餘地を見出し得なかつた二人は、內に向つて深く延び始めたのである。彼等の生活は廣さを失ふと同時に、深さを增して來た。彼等は六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歲月を擧げて、互の胸を掘り出した。彼等の命は、いつの間にか互の底に迄喰ひ入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出來ない一つの有機體になつた。二人の精神を組み立てる神經系は、最後の纖維に至る迄、互に抱き合つて出來上がつてゐた。彼等は大きな水盤の表に滴つた二點の油の樣なものであつた。水を彈いて二つが一所に集まつたと云ふよりも、水に彈かれた勢ひで、丸く寄り添つた結果、離れる事が出來なくなつたと評する方が適當であつた。

彼等は此抱合の中に、尋常の夫婦に見出し難い親和と飽滿と、それに伴なふ倦怠とを兼具へてゐた。而して其倦怠の懶い氣分に支配されながら、自己を幸福と評價する事丈は忘れなかつた。倦怠は彼等の意識に眠の樣な幕を掛けて、二人の愛をうつとり霞ます事はあつた。けれども簓で神經を洗はれる不安は、決して起し得なかつた。要するに彼等は世間に疎い丈それ丈仲の好い夫婦であつたのである。

彼等は人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繋いで行きながら、常は其處に氣が附かずに顏を見合はせてゐる樣なものゝ、時々自分達の睦ましがる心を、自分で確と認める事があつた。その場合には必ず今迄睦まじく過ごした長の歳月を溯つて、自分達が如何な犧牲を拂つて、結婚を敢てしたかと云ふ當時を憶ひ出さない譯には行かなかつた。彼等は自然が彼等の前に齎した恐るべき復讐の下に、戰きながら跪いた。同時に此復讐を受けるために得た互の幸福に對して、愛の神に一瓣の香を焚く事を忘れなかつた。彼等は鞭うたれつゝ死に赴くものであつた。たゞ其鞭の先に、凡てを癒やす甘い蜜の着いてゐる事を覺つたのである。

宗助は相當に資産のある東京ものの子弟として、彼等に共通な派出な嗜好を、學生時代に遠慮なく充たした男である。彼は其時服裝にも、動作にも、思想にも、悉く當世らしい才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げつゝ、行かうと思ふ邊を濶歩した。彼の襟の白かつた如く、彼の洋袴の裾が綺麗に折り返されてゐた如く、其下から見える彼の靴足袋が模樣入りのカシミヤであつた如く、彼の頭は華奢な世間向きであつた。

彼は生れ附き理解の好い男であつた。從つて大した勉強をする氣にはなれなかつた。學問は社會へ出る

ための方便と心得てゐたから、社會を一歩退かなくつては達する事の出來ない、學者といふ地位には、餘り多くの興味を有つてゐなかつた。彼はたゞ教場へ出て、普通の學生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅へ歸つて來て、それを讀み直したり、手を入れたりした事は滅多になかつた。休んで拔けた所さへ大抵は其儘にして放つて置いた。彼は下宿の机の上に、此ノートブックを綺麗に積み上げて、何時見ても整然と秩序の附いた書齋を空にしては、外を出歩いた。友達は多く彼の寛濶を羨んだ。宗助も得意であつた。彼の未來は虹の樣に美しく彼の眸を照らした。

其頃の宗助は今と違つて多くの友達を持つてゐた。實を云ふと、輕快な彼の眼に映ずる凡ての人は、殆ど誰彼の區別なく友達であつた。彼は敵といふ言葉の意味を正當に解し得ない樂天家として、若い世をのびのびと渡つた。

「なに不景氣な顏さへしなければ、何處へ行つたつて驩迎されるもんだよ」と學友の安井によく話した事があつた。實際彼の顏は、他を不愉快にする程深刻な表情を示し得た試しがなかつた。

「君は身體が丈夫だから結構だ」とよく何處かに故障の起る安井が羨ましがつた。此安井といふのは國は越前だが、長く横濱に居たので、言葉や樣子は毫も東京ものと異なる點がなかつた。着物道樂で、髮の毛を長くして眞中から分ける癖があつた。高等學校は違つてゐたけれども、講義のときよく隣合せに並んで、時々聞き損なつた所抔を後から質問するので、口を利き出したのが元になつて、つい懇意になつた。それが學年の始りだつたので、京都へ來て日のまだ淺い宗助には大分の便宜であつた。彼は安井の案内で新しい土地の印象を酒の如く吸ひ込んだ。二人は毎晩の樣に三條とか四條とかいふ賑やかな町を歩いた。

時によると京極も通り抜けた。橋の眞中に立つて鴨川の水を眺めた。東山の上に出る靜かな月を見た。さうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きい樣に感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹藪に綠の籠もる深い姿を喜んだ。松の幹の染めた樣に赤いのが、日を照り返して幾本となく並ぶ風情を樂しんだ。ある時は大悲閣へ登つて、即非の額の下に仰向きながら、谷底の流れを下る櫓の音を聞いた。其音が鴈の鳴聲によく似てゐるのを二人とも面白がつた。ある時は、平八茶屋迄出掛けて行つて、そこに一日寐てゐた。さうして不味い河魚の串に刺したのを、かみさんに燒かして酒を飲んだ。其かみさんは、手拭を被つて、紺の立附け見た樣なものを穿いてゐた。

宗助は斯んな新しい刺激の下に、しばらくは慾求の滿足を得た。けれども一通り古い都の臭を嗅いで歩くうちに、凡てがやがて、平板に見えだして來た。其時彼は美しい山の色と淸い水の色が、最初程鮮明な影を自分の頭に宿さないのを物足らず思ひ始めた。彼は暖かな若い血を抱いて、其熱りを冷ます深い綠に逢へなくなつた。さうかといつて、此情熱を焚き盡くす程の烈しい活動には無論出會はなかつた。彼の血は高い脈を打つて、徒らにむづ痒く彼の身體の中を流れた。彼は腕組をして、坐ながら四方の山を眺めた。さうして、

「もう斯んな古臭い所には厭きた」と云つた。

安井は笑ひながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは淨瑠璃に間の土山雨が降るとある有名な宿の事であつた。朝起きてから夜寐る迄、眼に入るものは山より外にない所で、丸で擂鉢の底に住んでゐると同じ有樣だと告げた上、安井は其友達の小さい時分の經驗と

して、五月雨の降りつゞく折抔は、子供心に、今にも自分の住んでゐる宿が、四方の山から流れて來る雨の中に浸かつて仕舞ひさうで、心配でならなかつたと云ふ話をした。宗助はそんな擂鉢の底で一生を過ごす人の運命程、情ないものはあるまいと考へた。

「さう云ふ所に、人間がよく生きてゐられるな」と不思議さうな顏をして安井に云つた。安井も笑つてゐた。さうして土山から出た人物の中では、千兩函を摩り替へて磔になつたのが一番大きいのだと云ふ一口話を、矢張り友達から聞いた通り繰り返した。狹い京都に飽きた宗助は、單調な生活を破る色彩として、さう云ふ出來事も百年に一度位は必要だらうと迄思つた。

其時分の宗助の眼は、常に新しい世界にばかり注がれてゐた。だから自然が一通り四季の色を見せて仕舞つた跡では、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉を迎へる必要がなくなつた。強く烈しい命に生きたと云ふ證券を飽く迄握りたかつた彼には、活きた現在と、是から生れようとする未來が、當面の問題であつたけれども、消えかゝる過去は、夢同樣に價の乏しい幻影に過ぎなかつた。彼は多くの剝げかゝつた社と、寂び果てた寺を見盡くして、色の褪めた歷史の上に、黑い頭を振り向ける勇氣を失ひかけた。寢耄けた昔に低徊する程、彼の氣分は枯れてゐなかつたのである。

學年の終りに宗助と安井とは再會を約して手を分かつた。安井は一先郷里の福井へ歸つて、夫から横濱へ行く積りだから、若し其時には手紙を出して通知をしよう、さうして成るべくなら一所の汽車で京都へ下らう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩り遊んで行かうと云つた。宗助は大いに可からうと答へて、腹のなかでは既に安井の端書を手にする時の心持

さへ豫想した。

宗助が東京へ歸つたときは、父は固よりまだ丈夫であつた。小六は子供であつた。彼は一年ぶりに殷な都の炎熱と煤烟を呼吸するのを却て嬉しく感じた。燬く樣な日の下に、渦を捲いて狂ひ出しさうな瓦の色が、幾里となく續く景色を、高い所から眺めて、是でこそ東京だと思ふ事さへあつた。今の宗助なら目を眩しかねない事々物々が、悉く壯快の二字を彼の額に燒き附けべく、其時は反射して來たのである。

彼の未來は封じられた蕾のやうに、開かない先は他に知れないばかりでなく、自分にも確とは分らなかつた。宗助はたゞ洋々の二字が彼の前途に棚引いてゐる氣がした丈であつた。彼は此暑い休暇中にも、卒業後の自分に對する謀を忽せにはしなかつた。彼は大學を出てから、官途に就かうか、又は實業に從はうか、それすらまだ判然と心に極めてゐなかつたに拘らず、何方の方面でも構はず、今のうちから、進める丈進んで置く方が利益だと心附いた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接に其知人の紹介を得た。さうして自分の將來を影響し得る樣な人を物色して、二三の訪問を試みた。彼等のあるものは、避暑といふ名義の下に、既に東京を離れてゐた。あるものは不在であつた。又あるものは多忙のため時を期して、勤務先で會はうと云つた。宗助は日のまだ高くならない七時頃に、昇降器で煉瓦造の三階へ案内されて、其處の應接間に、もう七八人も自分と同じ樣に、同じ人を待つてゐる光景を見て驚いた事もあつた。彼は斯うして新しい所へ行つて、新しい物に接するのが、用向きの成否に關らず、今迄眼に附かずに過ぎた活きた世界の斷片を、頭へ詰め込む樣な氣がして何となく愉快であつた。

父の云ひ附けで、毎年の通り蟲干の手傳ひをさせられるのも、斯んな時には、却つて興味の多い仕事の一

部分に數へられた。彼は冷たい風の吹き通す土藏の戸前の濕つぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所圖會と、江戸砂子といふ本を物珍らしさうに眺めた。疊迄熱くなつた座敷の眞中へ胡坐を搔いて、下女の買つて來た樟腦を、小さな紙片に取り分けては、醫者で呉れる散藥の樣な形に疊んだ。宗助は子供の時から、此樟腦の高い香と、汗の出る土用と、炮烙灸と、蒼空を緩く舞ふ鳶とを連想してゐた。

兎角するうちに節は立秋に入つた。二百十日の前には、風が吹いて雨が降つた。空には薄墨の煮染んだ樣な雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がり切りに下がつた。宗助はまた行李を麻繩で絡げて、京都へ向ふ支度をしなければならなくなつた。

彼は此間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家へ歸つた當座は、まだ二ヶ月も先の事だからと緩り構へてゐたが、段々時日が逼るに從つて、安井の消息が氣になつてきた。安井は其後一枚の端書さへ寄こさなかつたのである。宗助は安井の鄕里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事は遂に來なかつた。宗助は横濱の方へ問ひ合はせて見ようと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、何うする事も出來なかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通り、普通の旅費以外に、途中で二三日滯在した上、京都へ着いてからの當分の小遣ひを渡して、

「成る丈節儉しなくちや不可ない」と諭した。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時の如くに聞いた。父は又、

「來年また歸つて來る迄は會はないから、隨分氣を附けて」と云つた。其歸つて來る時節には、宗助は

もう歸れなくなつてゐたのである。さうして歸つて來た時は、父の亡骸がもう冷たくなつてゐたのである。宗助は今に到る迄、其時の父の面影を思ひ浮かべては濟まない樣な氣がした。

愈立つと云ふ間際に、宗助は安井から一通の封書を受取つた。開いて見ると、約束通り一所に歸る積りでゐたが、少し事情があつて先へ立たなければならない事になつたからと云ふ斷りを述べた末に、何れ京都で緩り會はうと書いてあつた。宗助はそれを洋服の内隱に押し込んで汽車に乘つた。約束の興津へ來たとき彼は一人でプラットフォームへ降りて、細長い一筋町を清見寺の方へ歩いた。夏も既に過ぎた九月の初なので、大方の避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑靜であつた。宗助は海の見える一室の中に腹這ひになつて、安井へ送る繪端書へ二三行の文句を書いた。其内に、君が來ないから僕一人で此處へ來たといふ言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保と龍華寺を見物して、京都へ行つてから安井に話す材料を出來る丈拵へた。然し天氣の所爲か、當てにした連のないためか、海を見ても山へ登つても、夫程面白くなかつた。宿に凝としてゐるのは、猶退屈であつた。宗助は匆々に又宿の浴衣を脱ぎ棄てて、絞りの三尺と共に欄干に掛けて、興津を去つた。

京都へ着いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、往來の日影を知らずに暮らした。二日目になつて漸く學校へ出て見ると、教師はまだ出揃つてゐなかつた。學生も平日よりは數が不足であつた。不審な事には、自分より三四日前に歸つてゐるべき筈の安井の顏さへ何處にも見えなかつた。宗助はそれが氣にかゝるので、歸りにわざ〳〵安井の下宿へ廻つて見た。安井の居る處は樹と水の多い加茂の社の傍

であつた。彼は夏休み前から、少し閑靜な町外れへ移つて勉強する積りだとか云つて、わざ〳〵此不便な村同樣な田舍へ引つ込んだのである。彼の見附け出した家からが寂びた土塀を二方に圍らして、既に古風に片附いてゐた。宗助は安井から、其處の主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云ふ話しを聞いた。非常に能辯な京都言葉を操る四十許りの細君がゐて、安井の世話をしてゐた。

「世話つて、たゞ不味い菜を拵へて、三度づゝ室へ運んで呉れる丈だよ」と安井は移り立てから此細君の悪口を利いてゐた。宗助は安井を此處に二三度訪ねた縁故で、彼の所謂不味い菜を拵へる主を知つてゐた。細君の方でも宗助の顏を覺えてゐた。細君は宗助を見るや否や、例の柔らかい舌で慇懃な挨拶を述べた後、此方から聞かうと思つて來た安井の消息を却つて向うから尋ねた。細君の云ふ處によると、彼は郷里へ歸つてから、當日に至る迄、一片の音信さへ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思ひで自分の下宿へ歸つて來た。

夫から一週間程は、學校へ出るたんびに、今日は安井の顏が見えるか、明日は安井の聲がするかと、毎日漠然とした豫期を抱いては教室の戸を開けた。さうして毎日又漠然とした不足を感じては歸つて來た。尤も最後の三四日に於ける宗助は、早く安井に會ひたいと思ふよりも、少し事情があるから失敬して先へ立つとわざ〳〵通知しながら、何時迄待つても影も見せない彼の安否を、關係者として寧ろ氣に掛けてゐたのである。彼は學友の誰彼に萬遍なく安井の動靜を聞いて見た。然し誰も知るものはなかつた。たゞ一人が、昨夕四條の人込みの中で、安井によく似た浴衣がけの男を見たと答へた事があつた。然し宗助にはそれが安井だらうとは信じられなかつた。處が其話しを聞いた翌日、即ち宗助が京都へ着いてから約一週

間の後、話しの通りの服裝をした安井が、突然宗助の處へ尋ねて來た。

宗助は着流しの儘麥藁帽を手に持つた友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顏の上に、新しい何物かが更に附け加へられた樣な氣がした。安井は黑い髮に油を塗つて、目立つ程綺麗に頭を分けてゐた。さうして今床屋へ行つて來た所だと言譯らしい事を云つた。

其晩彼は宗助と一時間餘りも雜談に耽つた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚つて、思ひ切れない樣な話し振、「然るに」と云ふ口癖、凡て平生の彼と異なる點はなかつた。たゞ彼は何故宗助より先へ橫濱を立つたかを語らなかつた。又途中何處で暇取つた爲、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。然し彼は三四日前漸く京都へ着いた事丈を明らかにした。さうして、夏休み前にゐた下宿へはまだ歸らずにゐると云つた。

「夫で何處に」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊つてゐる宿屋の名前を、宗助に教へた。それは三條邊の三流位の家であつた。宗助は其名前を知つてゐた。

「何うして、其樣な所へ這入つたのだ。當分其處にゐる積りなのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はたゞ少し都合があつてと許り答へたが、

「下宿生活はもう已めて、小さい家でも借りようかと思つてゐる」と思ひがけない計畫を打ち明けて、宗助を驚かした。

それから一週間ばかりの中に、安井はとう／＼宗助に話した通り、學校近くの閑靜な所に一戸を構へた。それは京都に共通な暗い陰氣な作りの上に、柱や格子を黑赤く塗つて、わざと古臭く見せた狹い貸家であ

つた。門口に誰の所有とも附かない柳が一本あつて、長い枝が殆ど軒に觸りさうに風に吹かれる樣を宗助は見た。庭も東京と違つて、少しは整つてゐた。石の自由になる所だけに、比較的大きなのが座敷の眞正面に据ゑてあつた。其下には涼しさうな苔がいくらでも生えた。裏には敷居の腐つた物置が空の儘がらんと立つてゐる後に、隣の竹藪が便所の出入りに望まれた。

宗助の此處を訪問したのは、十月に少し間のある學期の始めであつた。殘暑がまだ強いので宗助は學校の往復に、蝙蝠傘を用ひてゐた事を今に記憶してゐた。彼は格子の前で傘を疊んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが眞直に裏迄突き拔けてゐるのだから、這入つてすぐ右手の玄關めいた上り口を上がらない以上は、暗いながら一筋に奥の方迄見える譯であつた。宗助は浴衣の後影が、裏口へ出る所で消えてなくなる迄其處に立つてゐた。それから格子を開けた。玄關へは安井自身が現はれた。

座敷へ通つてしばらく話してゐたが、さつきの女は全く顏を出さなかつた。聲も立てず、音もさせなかつた。廣い家でないから、つい隣の部屋位にゐたのだらうけれども、居ないのと丸で違はなかつた。この影の樣に靜かな女がお米であつた。

安井は郷里の事、東京の事、學校の講義の事、何くれとなく話した。けれども、お米の事に就いては一言も口にしなかつた。宗助も聞く勇氣に乏しかつた。其日はそれなり別れた。

次の日二人が顏を合はしたとき、宗助は矢張り女の事を胸の中に記憶してゐたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何氣ない風をしてゐた。懇意な若い青年が心易立てに話し合ふ遠慮のない題目は、

是迄二人の間に何度となく交換されたにも拘らず、安井はこゝへ來て、息詰まつた如くに見えた。宗助も其處を無理にこじ開ける程の強い好奇心は有たなかつた。從つて女は二人の意識の間に挾まりながら、つい話頭に上らないで、又一週間ばかり過ぎた。

其日曜に彼は又安井を訪うた。それは二人の關係してゐる或會に就いて用事が起つたためで、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊な訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ處へ坐らせられて、垣根に沿うた小さな梅の木を見ると、此前來た時の事が明らかに思ひ出された。其日も座敷の外は、しんとして靜かであつた。宗助は其靜かなうちに忍んでゐる若い女の影を想像しない譯に行かなかつた。同時にその若い女は此前と同じ樣に、決して自分の前に出て來る氣遣ひはあるまいと信じてゐた。

此豫期の下に、宗助は突然お米に紹介されたのである。此時お米は此間の樣に粗い浴衣を着てはゐなかつた。是から餘所へ行くか、又は今外から歸つて來たと云ふ風な裝ひをして、次の間から出て來た。宗助にはそれが意外であつた。然し大した綺羅を着飾つた譯でもないので、衣服の色も、帶の光も、夫程彼を驚かす迄には至らなかつた。其上お米は若い女に有り勝の嬌羞といふものを、初對面の宗助に向つて、あまり多く表はさなかつた。たゞ普通の人間を靜かにして言葉寡なに切り詰めた丈に見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでゐる時と、あまり區別のない程落ち付いた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、お米のひつそりしてゐたのは、穴勝ち恥づかしがつて、人の前へ出るのを避けるため許りでもなかつたんだと思つた。

安井はお米を紹介する時、

「是は僕の妹だ」といふ言葉を用ひた。宗助は四五分對坐して、少し談話を取り換はしてゐるうちに、お米の口調の何處にも、國訛りらしい音の交つてゐない事に氣が附いた。

「今迄御國の方に」と聞いたら、お米が返事をする前に安井が、

「いや横濱に長く」と答へた。

其日は二人して町へ買物に出ようと云ふので、お米は不斷着を脱ぎ更へて、暑い所をわざ〳〵新しい白足袋迄穿いたものと知れた。宗助は折角の出懸けを喰ひ留めて、邪魔でもした樣に氣の毒な思ひをした。

「なに宅を持ち立てだものだから、毎日々々要るものを新しく發見するんで、一週に一二返は是非都迄買ひ出しに行かなければならない」と云ひながら安井は笑つた。

「途迄一所に出掛けよう」と宗助はすぐ立ち上がつた。序に家の樣子を見てくれと安井の云ふに任せた。宗助は次の間にある亞鉛の落しの附いた四角な火鉢や、黄な安つぽい色をした眞鍮の藥罐や、古びた流しの傍に置かれた新し過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。安井は門口へ錠を卸ろして、鍵を裏の家へ預けるとか云つて、走けて行つた。宗助とお米は待つてゐる間、二言三言、尋常な口を利いた。

宗助は此三四分間に取り換はした互の言葉を、いまだに覺えてゐた。それは只の男が只の女に對して人間たる親しみを表はすために、遣り取りする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水の樣に淡いものであつた。彼は今日迄路傍道上に於て、何かの折に觸れて、知らない人を相手に、是程の挨拶をどの位繰り返して來たか分らなかつた。

宗助は極めて短かい其時の談話を、一々思ひ浮かべるたびに、其一々が、殆ど無着色と云つていゝ程に、

平淡であつた事を認めた。さうして、斯く透明な聲が、二人の未來を、何うしてあゝ眞赤に塗り附けたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を經て昔の鮮やかさを失つてゐた。互を焚き焦がした焔は、自然と變色して黑くなつてゐた。二人の生活は斯樣にして暗い中に沈んでゐた。宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、此淡泊な挨拶が、如何に自分等の歷史を濃く彩つたかを、胸の中で飽く迄味はひつゝ、平凡な出來事を重大に變化させる運命の力を恐ろしがつた。

宗助は二人で門の前に佇んでゐる時、彼等の影が折れ曲がつて、半分許り土塀に映つたのを記憶してゐた。お米の影が蝙蝠傘で遮られて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶してゐた。少し傾きかけた初秋の日が、じり／＼二人を照り附けたのを記憶してゐた。お米は傘を差した儘、それ程涼しくもない柳の下に寄つた。宗助は白い筋を縁に取つた紫の傘の色と、まだ褪め切らない柳の葉の色を、一歩遠退いて眺め合はした事を記憶してゐた。

今考へると凡てが明らかであつた。從つて何等の奇もなかつた。二人は土塀の影から再び現はれた安井を待ち合はして、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。お米は草履を引いて後に落ちた。話しも多くは男丈で受け持つた。それも長くはなかつた。途中迄來て宗助は一人分かれて、自分の家に歸つたからである。

けれども彼の頭には其日の印象が長く殘つてゐた。家へ歸つて湯に入つて、燈火の前に坐つた後にも、折々色の着いた平たい畫として、安井とお米の姿が眼先にちらついた。それのみか床に入つてからは、妹だと云つて紹介されたお米が、果して本當の妹であらうかと考へ始めた。安井に問ひ詰めない限り、此疑

ひの解決は容易でなかつたけれども、臆斷はすぐ附いた。宗助は此臆斷を許すべき餘地が、安井とお米の間に充分存在し得るだらう位に考へて、寐ながら可笑しく思つた。しかし其臆斷に、腹の中で低徊する事の馬鹿々々しいのに氣が附いて、消し忘れた洋燈を漸くふつと吹き消した。

斯う云ふ記憶の、次第に沈んで痕迹もなくなる迄、御互の顏を見ずに過ごす程、宗助と安井とは疎遠ではなかつた。二人は毎日學校で出合ふ計りでなく、依然として夏休み前の通り往來を續けてゐた。けれども宗助が行くたびに、お米は必ず挨拶に出るとは限らなかつた。三遍に一遍位、顏を見せないで、始めての時の樣に、ひつそり隣の室に忍んでゐる事もあつた。宗助は別にそれを氣にも留めなかつた。夫にも拘らず、二人は漸く接近した。幾何ならずして冗談を云ふ程の親しみが出來た。

其内又秋が來た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかつた宗助は、安井とお米に誘はれて茸狩に行つた時、朗らかな空氣のうちに又新しい香を見出だした。紅葉も三人で觀た。嵯峨から山を拔けて高雄へ歩く途中で、お米は着物の裾を捲くつて、長襦袢丈を足袋の上迄牽いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、お米は、「京都は好い所ね」と云つて二人を顧た。それを一所に眺めた宗助にも、京都は全く好い所の樣に思はれた。

斯う揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家の中で顏を合はせる事は猶屢あつた。或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、お米ばかり淋しい秋の中に取り殘された樣に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上がり込んで、一つ火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長

話しをして歸つた。或時宗助がぽかんとして、下宿の机に倚りかゝつた儘、珍らしく時間の使ひ方に困つてゐると、ふとお米が遣つて來た。其處迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩り寛いだ話しをして歸つた。

斯んな事が重なつて行くうちに、木の葉が何時の間にか落ちて仕舞つた。さうして高い山の頂が、ある朝眞白に見えた。吹き曝しの河原が白くなつて、橋を渡る人の影が細く動いた。其年の京都の冬は、音を立てずに肌を透す陰忍な質のものであつた。安井は此惡性の寒氣に中てられて、惡いインフルエンザに罹つた。熱が普通の風邪よりも餘程高かつたので、始めはお米も驚いたが、それは一時の事ですぐ退いたから、是でもう全快と思ふと、何時迄立つても判然しなかつた。安井は瘧の樣な熱に絡み附かれて、毎日其差し引きに苦しんだ。

醫者は少し呼吸器を冒されてゐる樣だからと云つて、切に轉地を勸めた。安井は心ならず押入の中の柳行李に麻繩を掛けた。お米は手提鞄に錠を卸ろした。宗助は二人を七條迄見送つて、汽車が出る迄室の中へ這入つて、わざと陽氣な話しをした。プラットフォームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに來給へ」と安井が云つた。

「何うぞ是非」とお米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の前をそろ〳〵過ぎて、忽ち神戸の方に向つて煙を吐いた。

病人は轉地先で年を越した。繪葉書は着いた日から毎日の樣に寄こした。それに何時でも遊びに來いと繰り返して書いてない事はなかつた。お米の文字も一二行宛は必ず交つてゐた。宗助は安井とお米から屆

いた繪葉書を別にして机の上に重ねて置いた。外から歸るとそれが直ぐ眼に着いた。時々それを一枚宛順に讀み直したり、見直したりした。仕舞にもう悉皆癒つたから歸る。然し折角此處迄來ながら、此處で君の顏を見ないのは遺憾だから、此手紙が着き次第、一寸で可いから來いといふ葉書が來た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十數言で充分であつた。宗助は汽車を利用して其夜のうちに安井の宿に着いた。明るい燈火の下に、三人が待ち設けた顏を合はした時、宗助は何よりも先づ病人の色澤の回復して來た事に氣が附いた。立つ前よりも却て好い位に見えた。安井自身もそんな心持がすると云つて、わざ〳〵襯衣の袖を捲くり上げて、青筋の入つた腕を獨りで撫でてゐた。お米も嬉しさうに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣ひが殊に珍らしく受取れた。今迄宗助の心に映じたお米は、色と音の撩亂する裏に立つてさへ、極めて落ち附いてゐた。さうして其落ち附きの大部分は、矢鱈に動かさない眼の働きから來たとしか思はれなかつた。

次の日三人は表へ出て、遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂の出る空氣を吸つた。冬の日の短かい空を赤裸々に横切つて大人しく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈の火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。たゞ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊つてゐる三日の間續いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云つた。お米はもつと遊んで行きませうと云つた。安井は宗助が遊びに來たから好い天氣になつたんだらうと云つた。三人は又行李と鞄を携へて京都に歸つた。冬は何事もなく北風を寒い國へ吹き遣つた。山の上を明らかにした斑な雪が次第に落ちて、後から青い色が一度に芽を吹

いた。

　宗助は當時を憶ひ出すたびに、自然の進行が其處ではたりと留まつて、自分もお米も忽ち化石して仕舞つたら、却て苦はなかつたらうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まつて、散り盡くした櫻の花が若葉に色を易へる頃に終つた。凡てが生死の戰ひであつた。青竹を炙つて油を絞る程の苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がつた時は、何處も彼處も既に砂だらけであつたのである。彼等は砂だらけになつた自分達を認めた。けれども、何時吹き倒されたかを知らなかつた。

　世間は容赦なく彼等に徳義上の罪を背負はした。然し彼等自身は徳義上の良心に責められる前に、一旦茫然として、彼等の頭が確かであるかを疑つた。彼等は彼等の眼に、不徳義の男女として恥づべく映る前に、既に不合理な男女として、不可思議に映つたのである。其處に言譯らしい言譯が何もなかつた。だから其處に云ふに忍びない苦痛があつた。彼等は殘酷な運命が氣紛れに罪もない二人の不意を打つて、面白半分、穽の中に突き落としたのを無念に思つた。

　曝露の日がまともに彼等の眉間を射たとき、彼等は既に徳義的に痙攣の苦痛を乘り切つてゐた。彼等は蒼白い額を素直に前に出して、其處に燄に似た烙印を受けた。さうして無形の鎖で繋がれた儘、手を携へて何處迄も、一所に歩調を共にしなければならない事を見出した。彼等は親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云へば一般の社會を棄てた。もしくは夫等から棄てられた。學校からは無論棄てられた。たゞ表向き丈は此地から退學した事になつて、形式の上に人間らしい迹を留めた。

是が宗助とお米の過去であつた。

十五

此過去を負はされた二人は、廣島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て來ても、依然として重い荷に抑へつけられてゐた。佐伯の家とは親しい關係が結べなくなつた。叔父は死んだ。叔母と安之助はまだ生きてゐるが、生きてゐる間に打ち解けた交際は出來ない程、もう冷淡の日を重ねて仕舞つた。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。向うからも來なかつた。家に引き取つた小六さへ、腹の底では兄に敬意を拂つてゐなかつた。二人が東京へ出たてには、單純な子供の頭から、正直にお米を惡んでゐた。お米にも宗助にもそれが能く分つてゐた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考へて、靜かな年を送り迎へた。今年ももう盡きる間際迄來た。

通町では暮の内から門並揃ひの注連飾をした。往來の左右に何十本となく竝んだ、軒より高い笹が、悉く寒い風に吹かれて、さら〱と鳴つた。宗助も二尺餘りの細い松を買つて、門の柱に釘附けにした。それから大きな赤い橙を御供の上に載せて、床の間に据ゑた。床には如何はしい墨畫の梅が、蛤の恰好した月を吐いて懸かつてゐた。宗助には此變な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかつた。

「一體是や、何う云ふ了見だね」と自分で飾り付けた物を眺めながら、お米に聞いた。お米にも毎年斯うする意味は頓と解らなかつた。

「知らないわ。たゞ左樣して置けば可いのよ」と云つて臺所へ去つた。宗助は、

「斯うして置いて、詰まり食ふためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

伸し餅は夜業に細君が茶の間迄持ち出して、みんなで切つた。庖丁が足りないので、宗助は始めから仕舞迄手を出さなかつた。力のある丈に小六が一番多く切つた。其代り不同も一番多かつた。中には見掛けの悪い形のものも交つた。変なのが出来るたびに清が声を出して笑つた。小六は庖丁の背に濡布巾を宛てがつて、硬い耳の處を断ち切りながら、

「恰好は何うでも、食ひさへすれば可いんだ」と、うんと力を入れて耳迄赤くした。

その外に迎年の支度としては、小殿原を熬つて、煮染を重詰にする位なものであつた。大晦日の夜に入つて、宗助は挨拶旁家賃を持つて、坂井の家に行つた。わざと遠慮して勝手口へ廻ると、摺硝子へ明るい灯が映つて、中はざわ〳〵してゐた。上り框に帳面を持つて腰を掛けた掛取らしい小僧が、立つて宗助に挨拶をした。茶の間には主人も細君もゐた。其片隅に印袢天を着た出入りのものらしいのが、下を向いて、小さい輪飾をいくつも拵へてゐた。傍に譲葉と裏白と半紙と鋏が置いてあつた。若い下女が細君の前に坐つて、釣銭らしい札と銀貨を畳に並べてゐた。主人は宗助を見て、

「いや何うも」と云つた。「押し詰まつて嘸御忙しいでせう。此通りごた〳〵です。さあ何うぞ此方へ。何ですな、御互に正月にはもう飽きましたな。いくら面白いものでも四十返以上繰り返すと厭になりますね」

主人は年の送迎に煩はしい様な事を云つたが、其態度には何處と指してくさ〳〵した處は認められなかつた。言葉遣ひは活潑であつた。顔はつや〳〵してゐた。晩食に傾けた酒の勢ひが、まだ頰の上に差して

ゐる如く思はれた。宗助は貰ひ煙草をして二三十分ばかり話して歸つた。

家ではお米が清を連れて湯に行くとか云つて、石鹼入れを手拭に包んで、留守居を賴む夫の歸りを待ち受けてゐた。

「何うなすつたの、隨分長かつたわね」と云つて時計を眺めた。時計はもう十時近くであつた。其上清は湯の戻りに髪結の處へ廻つて頭を拵へる筈だそうであつた。閑靜な宗助の活計も、大晦日には夫相應の事件が寄せて來た。

「拂ひはもう皆濟んだのかい」と宗助は立ちながらお米に聞いた。お米はまだ薪屋が一軒殘つてゐると答へた。

「來たら拂つて頂戴」と云つて懐の中から汚れた男持ちの紙入れと、銀貨入れの蟇口を出して、宗助に渡した。

「小六は何うした」と夫はそれを受取りながら云つた。

「先刻大晦日の夜の景色を見て來るつて出て行つたのよ。隨分御苦勞さまね。此寒いのに」と云ふお米の後に追いて、清は大きな聲を出して笑つた。やがて、

「御若いから」と評しながら、勝手口へ行つて、お米の下駄を揃へた。

「何處の夜景を見る氣なんだ」

「銀座から日本橋通のだつて」

お米は其時もう框から下り掛けてゐた。すぐ腰障子を開ける音がした。宗助は其音を聞き送つて、たつ

た一人火鉢の前に坐つて、灰になる炭の色を眺めてゐた。彼の頭には明日の日の丸が映つた。外を乗り回す人の絹帽子の光が見えた。洋刀の音だの、馬の嘶きだの、遣羽子の聲が聞こえた。彼は今から數時間の後、又年中行事のうちで、尤も人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢はなければならなかつた。

陽氣さうに見えるもの、賑やかさうに見えるものが、幾組となく彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂を把つて、一所に引つ張つて行かうとするものは一つもなかつた。彼はたゞ饗宴に招かれない局外者として、醉ふ事を禁じられた如くに、又醉ふ事を免れた人であつた。彼は自分とお米の生命を、毎年平凡な波瀾のうちに送る以上に、面前大した希望も持つてゐなかつた。かうして忙しい大晦日に、一人家を守る靜かさが、丁度彼の平生の現實を代表してゐた。

お米は十時過ぎに歸つて來た。何時もより光澤の好い頰を灯に照らして、湯の溫りのまだ拔けない襟を少し開ける樣に襦袢を重ねてゐた。長い襟首が能く見えた。

「何うも込んで込んで、洗ふ事も桶を取る事も出來ない位なのよ」と始めて緩り息を吐いた。

清の歸つたのは十一時過ぎであつた。是も綺麗な頭を障子から出して、たゞ今、どうも遅くなりましたと挨拶をした序に、あれから二人とか三人とか待ち合はしたと云ふ話をした。

たゞ小六丈は容易に歸らなかつた。十二時を打つたとき、宗助はもう寢ようと云ひ出した。お米は今日に限つて、先へ寢るのも變なものだと思つて、出來る丈話しを繫いでゐた。小六は幸ひにして間もなく歸つた。日本橋から銀座へ出て、夫から水天宮の方へ廻つた處が、電車が込んで何臺も待ち合はしたために、遅くなつたといふ言譯をした。

白牡丹へ這入つて景物の金時計でも取らうと思つたが、何も買ふものがなかつたので、仕方なしに鈴の着いた御手玉を一箱買つて、さうして幾百となく器械で吹き上げられる風船を一つ攫んだら、金時計は當たらないで、こんなものが中たつたと云つて、袂から倶樂部洗粉を一袋出した。それをお米の前に置いて、

「姉さんに上げませう」と云つた。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫つた御手玉を宗助の前に置いて、

「坂井の御孃さんにでも御上げなさい」と云つた。

事に乏しい一小家族の大晦日は、これで終りを告げた。

十六

正月は二日目の雪を率ゐて注連飾の都を白くした。降り已んだ屋根の色が故に復る前、夫婦は亜鉛張の庇を滑り落ちる雪の音に幾遍か驚かされた。夜半にはどさと云ふ響が殊に甚しかつた。小路の泥濘は雨上りと違つて、一日や二日では容易に乾かなかつた。外から靴を汚して歸つて來る宗助が、お米の顏を見るたびに、

「こりや不可ない」と云ひながら玄關へ上がつた。其樣子が恰もお米を路を惡くした責任者と見傚してゐる風に受取られるので、お米は仕舞に、

「何うも濟みません。本當に御氣の毒さま」と云つて笑ひ出した。宗助は別に返すべき冗談も有たなかつた。

「お米此處から出掛けるには、何處へ行くにも足駄を穿かなくつちやならない樣に見えるだらう。所が下町へ出ると大違ひだ。どの通もどの通もから／＼で、却て埃が立つ位だから、足駄なんぞ穿いちや極りが惡くつて歩けやしない。つまり斯う云ふ所に住んでゐる我々は、一世紀がた後れる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顏もしてゐなかつた。お米も夫の鼻の穴を滑る烟草の烟を眺める位な氣で、それを聞いてゐた。

「坂井さんへ行つて、さう云つて入らつしやいな」と輕い返事をした。

「さうして家賃でも負けて貰ふ事にしよう」と答へた儘、宗助はつひに坂井へは行かなかつた。

其坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだ丈で、わざと主人の顏を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちに略片附けて夕方歸つて見ると、留守の間に坂井がちやんと來てゐたので恐縮した。二日は雪が降つた丈で何事もなく過ぎた。三日目の日暮に下女が使に來て、御閑ならば、旦那樣と奧さまと、夫から若旦那樣に是非今晩御遊びに入らつしやる樣にと云つて歸つた。

「何をするんだらう」と宗助は疑つた。

「屹度歌加留多でせう。子供が多いから」とお米が云つた。「貴方行つて入らつしやい」

「折角だから御前行くが好い。己は歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行かうとはしなかつた。仕舞に、では若旦那がみんなを代表して行くが宜からうといふ事になつた。

「若旦那行つて來い」と宗助が小六に云つた。小六は苦笑ひして立つた。夫婦は若旦那と云ふ名を小六に冠らせる事を、大變な滑稽のやうに感じた。若旦那と呼ばれて、苦笑ひする小六の顏を見ると、等しく聲を出して笑ひ出した。小六は春らしい空氣の中から出た。さうして一町程の寒さを橫切つて、又春らしい電燈の下に坐つた。

其晚小六は大晦日に買つた梅の花の御手玉を袂に入れて、是は兄から差し上げますとわざ〳〵斷つて、坂井の御孃さんに贈物にした。其代り歸りには、福引に當たつた小さな裸人形を同じ袂に入れて來た。其人形の額が少し缺けて、其處丈墨で塗つてあつた。小六は眞面目な顏をして、是が袖萩ださうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。何故袖萩だか夫婦には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奧さんが丁寧に說明して吳れたさうであるが、夫でも腑に落ちなかつたので、主人がわざ〳〵半切に洒落と本文を並べて書いて、歸つたら是を兄さんと姉さんに、御見せなさいと云つて渡したとかいふ話しであつた。小六は袂を探つて其書附を取り出して見せた。それに「此垣一重が黑鐵の」と認めた後に括弧をして、(此額鬼額が黑缺の)とつけ加へてあつたので、宗助とお米は又春らしい笑ひを洩らした。

「隨分念の入つた趣向だね。一體誰の考へだい」と兄が聞いた。

「誰ですかな」と小六は矢つ張り詰らなさうな顏をして、人形を其處へ放り出した儘、自分の室に歸つた。

それから二三日して、たしか七日の夕方に、また例の坂井の下女が來て、もし御閑なら何うぞ御話しにと、丁寧に主人の命を傳へた。宗助とお米は洋燈を點けて丁度晚食を始めた所であつた。宗助は其時茶碗

を持ちながら、

「春も漸く一段落が着いた」と語つてゐた。そこへ清が坂井からの口上を取次いだので、お米は夫の顔を見て微笑した。宗助は茶碗を置いて、

「また何か催しがあるのかい」と少し迷惑さうな眉をした。坂井の下女に聞いて見ると、別に來客もなければ、何の支度もないといふ事であつた。其上細君は子供を連れて、親類へ呼ばれて行つて留守だといふ話し迄した。

「それぢや行かう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の社交を嫌つてゐた。已むを得なければ會合の席などへ顔を出す男でなかつた。個人としての朋友も多くは求めなかつた。訪問をする暇を有たなかつた。たゞ坂井丈は取除けであつた。折々は用もないのに此方からわざ／＼出掛けて行つて、時を潰して來る事さへあつた。其癖坂井は世の中で尤も社交的の人であつた。此社交的な坂井と、孤獨な宗助が二人寄つて話しが出來るのは、お米にさへ妙に見える現象であつた。坂井は、

「彼方へ行きませう」と云つて、茶の間を通り越して、廊下傳ひに小さな書齋へ入つた。其處には棕櫚の筆で書いた樣な、大きな硬い字が五字ばかり床の間に懸かつてゐた。棚の上に見事な白い牡丹が活けてあつた。その外机でも蒲團でも悉く綺麗であつた。坂井は始め暗い入口に立つて、

「さあ何うぞ」と云ひながら、何處かぴちりと捩つて、電氣燈を點けた。それから、

「一寸待ち給へ」と云つて、燐寸で瓦斯煖爐を焚いた。瓦斯煖爐は室に比例した極小さいものであつた。

坂井はしかる後蒲團を薦めた。

「是が僕の洞窟で、面倒になると此處へ避難するんです」
宗助も厚い綿の上で、一種の靜かさを感じた。瓦斯の燃える音が微かにして、次第に背中からほか〳〵煖まつて來た。
「此處にゐると、もう何處とも交渉はない。全く氣樂です。悠りして入らつしやい。實際正月と云ふものは豫想外に煩瑣いものですね。私も昨日迄で殆んど〳〵に降參させられました。新年が停滞れてゐるのは實に苦しいですよ。夫で今日の午から、とう〳〵塵世を遠ざけて、病氣になつてぐつと寐込んぢまひました。今しがた眼を覺まして、湯に入つて、それから飯を食つて、烟草を呑んで、氣が附いて見ると、家内が子供を連れて親類へ行つて留守なんでせう。成程靜かな筈だと思ひましてね。すると今度は急に退屈になつたのです。人間も隨分我儘なものですよ。然しいくら退屈だつて、此上御目出たいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、又御正月らしいものを、呑んだり食つたりするのも恐れますから、それで御正月らしくない、と云ふと失禮だが、まあ世の中とあまり緣のない貴方、と云つてもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云ふと、超然派の一人と話しがして見たくなつたんで、それでわざ〳〵使を上げた樣な譯なんです」と坂井は例の調子で、悉くすら〳〵したものであつた。宗助は此樂天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。さうして時によると、自分がもし順當に發展して來たら、斯んな人物になりはしなかつたらうかと考へた。
其處へ下女が三尺の狹い入口を開けて這入つて來たが、改めて宗助に鄭重な御辭儀をした上、木皿の樣な菓子皿の樣なものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを云

はずに退つた。木皿の上には護謨毬ほどな大きな田舎饅頭が一つ載せてあつた。それに普通の倍以上もあらうと思はれる楊枝が添へてあつた。

「何うです暖かい内に」と主人が云つたので、宗助は始めて此饅頭の蒸して間もない新しさに氣が附いた。珍らしさうに黄色い皮を眺めた。

「いや出來たてぢやありません」と主人が又云つた。「實は昨夜ある所へ行つて、冗談半分に賞めたら、御土産に持つて入らつしやいと云ふから貰つて來たんです。其時は全く暖かだつたんですがね。これは今上げようと思つて蒸し返さしたのです」

主人は箸とも楊枝とも片の附かないもので、無雜作に饅頭を割つて、むしや〳〵食ひ始めた。宗助も顰に傚つた。

其間に主人は昨夕行つた料理屋で逢つたとか云つて、妙な藝者の話をした。此藝者はポッケット論語が好きで、汽車へ乘つたり遊びに行つたりするときは、何時でも夫を懷にして出るさうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路が一番好きだつて云ふんですがね。其所謂を聞くと、子路と云ふ男は、一つ何か教はつて、それを未だ行はないうちに、又新しい事を聞くと苦にする程正直だからだつて云ふんです。實の所私も子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人が出來て、それと夫婦にならない前に、また新しく好い人が出來ると苦になる樣なものぢやないかつて、聞いて見たんです……」

主人は斯んな事を甚だ氣樂さうに述べ立てた。其話しの樣子からして考へると、彼はのべつに斯ういふ

場所に出入して、其刺激にはとうに麻痺しながら、因習の結果、依然として月に何度となく同じ事を繰り返してゐるらしかつた。よく聞き糺して見ると、しかく平氣な男も、時々は歡樂の飽滿に疲勞して、書齋のなかで精神を休める必要が起るのださうであつた。

宗助はさういふ方面に丸で經驗のない男ではなかつたので、強ひて興味を裝ふ必要もなく、たゞ尋常な挨拶をする所が、却て主人の氣に入るらしかつた。彼は平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗く樣な素振を見せた。然しそちらへは宗助が進みたがらない痕迹が少しでも出ると、すぐ話しを轉じた。それは政略よりも寧ろ禮讓からであつた。從つて宗助には毫も不愉快を與へなかつた。

其内小六の噂が出た。主人は此青年に就いて、肉身の兄が見逃す樣な新しい觀察を、二三有つてゐた。宗助は主人の評語を、當たると當たらないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合はしては複雜な實用に適しない頭を有つてゐながら、年よりも若い單純な性情を平氣で露はす子供ぢやないかといふ質問があつた。宗助はすぐそれを首肯つた。然し學校教育丈で社會教育のないものは、いくら年を取つても其傾きがあるだらうと答へた。

「左樣。それと反對で、社會教育丈あつて學校教育のないものは、隨分複雜な性情を發揮する代りに、頭は何時迄も子供ですからね。却て始末が惡いかも知れない」

主人は此處で一寸笑つたが、やがて、

「何うです。私の所へ書生に寄こしちや。少しは社會教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病氣で病院へ這入る一ヶ月前とかに、徴兵檢査に合格して入營したぎり、今では一人もゐない

のださうであつた。

宗助は小六の處置を附ける時機が、求めざるに先だつて、春と共に自から回つて來たのを喜んだ。同時に、今迄世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇氣を有たなかつた彼は、突然此主人の申し出に逢つて少し面喰つた位驚いた。けれども出來るなら成る可く早く、弟を坂井に預けて置いて、此機會を出來る丈自分の餘裕に、幾分か安全の補綴を足して、さうして小六の希望通り、高等の教育を受けさして遣らうといふ分別をした。そこで打ち明けた話しを腹藏なく主人にすると、主人は成程々々と聞いてゐる丈であつたが、仕舞に雜作なく、

「そいつは好いでせう」と云つたので、相談は即席に纏まつた。

宗助は其所で辭して歸れば可かつたのである。又歸らうとしたのである。所が主人から「まあ緩りなさい」と云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵だと云つて時計を出して見せた。實際彼は退屈らしかつた。宗助も歸れば只寢るより外に用のない身體なので、つい又尻を据ゑて、濃い葉卷を新しく吹かし始めた。仕舞には主人の例に倣つて、柔らかい座蒲團の上で膝さへ崩した。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟さんを有つてゐると、隨分厄介なものですよ。私も一人やくざなのを世話をした覺えがありますがね」と云つて、自分の弟が大學にゐるとき金の掛かつた事抔を、自分が學生時代の質朴さに比べて色々話した。宗助は此派出好きな弟が、其後何んな經路を取つて、何う發展したかを、氣味の惡い運命の意思を窺ふ一端として、主人に聞いて見た。主人は卒然

「冒險者」と、頭も尾もない一句を投げる樣に吐いた。

此弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這入つたが、何でも金を儲けなくつちや不可ないと口癖の樣に云つてゐたさうで、日露戰爭後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに發展して見たいとか稱へて、遂に滿洲へ渡つたのだと云ふ。其處で何を始めるかと思ふと、遼河を利用して、豆粕大豆を船で下す、大仕掛な運送業を經營して、忽ち失敗してしまつたのださうである。元より當人は、資本主ではなかつたのだけれども、愈といふ曉に、勘定して見ると大きな缺損と事が極まつたので、無論事業は繼續する譯に行かず、當人は必然の結果、地位を失つたぎりになつた。

「それから後私も何うしたかよく知らなかつたんですが、其後漸く聞いて見ると、驚きましたね。蒙古へ這入つて漂浪いてゐるんですよ。何處迄山氣があるんだか分らないんで、私も少々剣呑になつてゐるんですよ。夫でも離れてゐるうちは、まあ何うかしてゐるだらう位に思つて放つて置きます。時たま音信があつたつて、蒙古といふ所は、水に乏しい所で、暑い時には往來へ泥溝の水を撒くとかね、又はその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、從つて甚だ臭いとか、まあそんな手紙が來る丈ですから、――そりやあ金の事も云つて來ますが、なに東京と蒙古だから打遣つて置けば夫迄です。だから離れてさへゐれば、まあ可いんですが、其奴が去年の暮突然出て來ましてね」

主人は思ひ附いた樣に、床の柱に懸けた、綺麗な房の附いた一種の裝飾物を取り卸した。

それは錦の袋に這入つた一尺ばかりの刀であつた。鞘は何とも知れぬ綠色の雲母の樣なもので出來てゐて、其所々が三ヶ所程銀で卷いてあつた。中身は六寸位しかなかつた。從つて刃も薄かつた。けれども鞘

の恰好に恰も六角の樫の棒の様に厚かつた。よく見ると、柄の後に細い棒が二本並んで差さつてゐた。結果は鞘を重ねて離れない爲に、銀の鉢巻をしたと同じであつた。主人は、

「蒙古王にこんなものを持つて来ました。蒙古刀ださうです」と云ひながら、すぐ抜いて見せた。後に差してあつた象牙の様な棒も二本抜いて見せた。

「是や箸ですよ。蒙古人は始終是を腰へぶら下げてゐて、いざ御馳走といふ段になると、此刀を抜いて肉を切つて、さうして此箸で傍から食ふんださうです」

主人はことさらに刀と箸を両手に持つて、切つたり食つたりする眞似をして見せた。宗助はひたすらに其精巧な作りを眺めた。

「まだ蒙古人の天幕に使ふフエルトも貰ひましたが、まあ昔の毛氈と變つた所もありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱ふ事や、蒙古犬の瘦せて細長くて、西洋のグレー・ハウンドに似てゐる事や、彼等が支那人のために段々押し狭められて行く事や、――凡て近頃彼地から歸つたといふ弟に聞いた儘を宗助に話した。宗助は又自分の未だ曾て耳にしたことのない話丈に、一々少なからぬ興味を有つてそれを聞いて行つた。其うちに、元来此弟は蒙古で何をしてゐるのだらうと云ふ好奇心が出た。乃で一寸主人に尋ねて見ると、主人は、

「冒険者」と再び先刻の言葉を力強く繰り返した。「何をしてゐるか分らない。私には、牧畜をやつてゐます、しかも成功してゐますと云ふんですがね、一向當てにはなりません。今迄もよく法螺を吹いて私を欺したもんです。それに今度東京へ出て来た用事と云ふのが餘つ程妙です。何とか云ふ蒙古王のた

めに、金を二萬圓許り借りたい。もし貸してやらないと自分の信用に關るつて奔走してゐるんですからね。その取つ始めに捕まつたのは私だが、いくら蒙古王だつて、いくら廣い土地を抵當にするつたつて、蒙古と東京ぢや催促さへ出來やしませんもの。で、私が斷ると、蔭へ廻つて妻に、兄さんはあれだから大きな仕事が出來つこないつて、威張つてゐるんです。仕樣がない」

主人は此處で少し笑つたが、妙に緊張した宗助の顏を見て、

「何うです一遍逢つて御覽になつちや。わざ〳〵毛皮の着いただぶ〳〵したものなんか着て、一寸面白いですよ。何なら御紹介しませう。丁度明後日の晩呼んで飯を食はせる事になつてゐるから。――なに引つ掛かつちや不可ませんがね。默つて向うに喋舌らして、聞いてゐる分には、少しも危險はありません。たゞ面白い丈です」としきりに勸め出した。宗助は多少心を動かした。

「御出でになるのは御令弟丈ですか」

「いや外に一人弟の友達で向うから一所に來たものか、來る筈になつてゐます。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、弟が頻りに私に紹介したがるから、實はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助は其夜蒼い顏をして坂井の門を出た。

十七

宗助とお米の一生を暗く彩どつた關係は、二人の影を薄くして、幽靈の樣な思ひを何處かに抱かしめた。彼等は自己の心の或部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潛んでゐるのを、仄かに自覺しながら、

わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過ごした。

當初彼等の頭腦に痛く應へたのは、彼等の過ちが安井の前途に及ぼした影響であつた。二人の頭の中で沸き返つた凄い泡の樣なものが漸く靜まつた時、二人は安井も亦半途で學校を退いたといふ消息を耳にした。彼等は固より安井の前途を傷つけた原因をなしたに違ひなかつた。次に安井が郷里に歸つたといふ噂を聞いた。次に病氣に罹つて家に寢てゐるといふ報知を得た。二人はそれを聞くたびに重い胸を痛めた。最後に安井が滿洲に行つたと云ふ音信が來た。宗助は腹の中で、病氣はもう癒つたのだらうかと思つた。又は滿洲行の方が嘘ではなからうかと考へた。安井は身體から云つても、性質から云つても、滿洲や臺灣に向く男ではなかつたからである。宗助は出來る丈手を回して、事の眞僞を探つた。さうして、或關係から、安井がたしかに奉天にゐる事を確め得た。同時に彼の健康で、活潑で、多忙である事も確め得た。其時夫婦は顔を見合はせて、ほつといふ息を吐いた。

「まあ可からう」と宗助が云つた。

「病氣よりはね」とお米が云つた。

二人は夫から以後安井の名を口にするのを避けた。考へ出す事さへ敢てしなかつた。彼等は安井を半途で退學させ、郷里へ歸らせ、病氣に罹らせ、もしくは滿洲へ驅り遣つた罪に對して、如何に悔恨の苦しみを重ねても、何うする事も出來ない地位に立つてゐたからである。

「お米、御前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助がお米に聞いた。お米は、たゞ、

「あるわ」と答へた丈で、すぐ「貴方は」と聞き返した。

宗助は薄笑ひをしたぎり、何とも答へなかつた。其代り、押してお米の信仰に就いて、詳しい質問も掛けなかつた。お米には、それが仕合せかも知れなかつた。彼女はその方面に、是といふ程判然した凝り整つた何物も有つてゐなかつたからである。二人は兎角して會堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた。さうして只自然の恵から来る月日といふ緩和劑の力丈で、漸く落ち附いた。時々遠くから不意に現はれる訴へも、苦しみとか恐れとかいふ殘酷な名を附けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉體と慾得を離れ過ぎる樣になつた。必竟するに、彼等の信仰は、神を得なかつたため、佛に逢はなかつたため、互を目標として働いた。互に抱き合つて、丸い圓を描き始めた。彼等の生活は淋しいなりに落ち附いて來た。其淋しい落ち附きのうちに、一種の甘い悲哀を味はつた。文藝にも哲學にも縁のない彼等は、此味を舐め盡くしながら、自分で自分の狀態を得意がつて自覺する程の知識を有たなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた。——是が七日の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞く迄の夫婦の有樣であつた。

其夜宗助は家に歸つてお米の顔を見るや否や、

「少し具合が惡いから、すぐ寝よう」と云つて、火鉢に倚りながら、歸りを待ち受けてゐたお米を驚かした。

「何うなすつたの」とお米は眼を上げて宗助を眺めた。宗助は其處に突つ立つてゐた。

宗助が外から歸つて來て、こんな風をするのは、殆どお米の記憶にない位珍らしかつた。お米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲はれた如くに立ち上がつたが、殆ど機械的に、戸棚から夜具蒲團を取り出して、

夫の云ひ附け通り床を延べ始めた。其間宗助は矢っ張り懐手をして傍に立つてゐた。さうして床が敷けるや否や、そこ〳〵に着物を脱ぎ捨てて、すぐ其中に潜り込んだ。お米は枕元を離れ得なかつた。

「何うなすつたの」

「何だか、少し心持が悪い。しばらく斯うして凝としてゐたら、好くなるだらう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。其声が籠もつた様にお米の耳に響いた時、お米は済まない顔をして、枕元に坐つたなり動かなかつた。

「彼方へ行つて居ても可いよ。用があれば呼ぶから」

お米は漸く茶の間へ帰つた。

宗助は夜具を被つた儘、ひとり硬くなつて眼を眠つてゐた。彼は此暗い中で、坂井から聞いた話しを何度となく反覆した。彼は満洲にゐる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知らうとは、今が今迄豫期してゐなかつた。もう少しの事で、其安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣合せか向合せに坐る運命にならうとは、今夜晩餐を済ます迄、夢にも思ひ掛けなかつた。彼は寝ながら過去二三時間の経過を考へて、其クライマックスが突如として、如何にも不意に起つたのを不思議に感じた。且悲しく感じた。彼は是程偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡を掛けなければ、倒す事の出来ない程強いものとは、自分ながら任じてゐなかつたのである。自分の様な弱い男を放り出すには、もつと穏当な手段で沢山でありさうなものだと信じてゐたのである。

小六から坂井の弟、それから満洲、蒙古、出京、安井、——斯う談話の迹を辿れば辿る程、偶然の度は

あまりに甚だしかつた。過去の痛恨を新にすべく、普通の人が滅多に出逢はない此偶然に出逢ふために、千百人のうちから選り出されなければならない程の人物であつたかと思ふと、宗助は苦しかつた。又腹立たしかつた。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐いた。

此二三年の月日で漸く癒り掛けた創口が、急に疼き始めた。疼くに伴れて熱つて來た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みさうになつた。宗助は一層のこと、萬事をお米に打ち明けて、共に苦しみを分かつて貰はうかと思つた。

「お米、お米」と二聲呼んだ。

お米はすぐ枕元へ來て、上から覗き込むやうに宗助を見た。宗助は夜具の襟から顔を全く出した。次の間の灯がお米の頰を半分照らしてゐた。

「熱い湯を一杯貰はう」

宗助はとう〳〵言はうとした事を言ひ切る勇氣を失つて、嘘を吐いて胡魔化した。

翌日宗助は例の如く起きて、平日と變る事なく食事を濟ました。さうして給仕をして呉れるお米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉しい様な憐れな様な一種の情緒を以て眺めた。

「昨夕は驚いたわ。何うなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注いだ茶を飲んだ丈であつた。何と答へていゝか、適當な言葉を見出さなかつたからである。

其日は朝からから風が吹き荒んで、折々埃と共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休ん

だら」と云ふお米の口説を聞き捨てにして、例の通り電車へ乗つた宗助は、風の音と車の音の中に首を縮めて、たゞ一つ所を見詰めてゐた。降りる時はごうといふ音がして、頭の上の針金が鳴つたのに氣が附いて、空を見たら、此猛烈な自然の力の狂ふ間に、何時もより明らかな日がのそりと出てゐた。風は洋袴の股を冷たくして通つた。宗助には其砂を捲いて向ふの堀の方へ進んで行く影が、斜に吹かれる雨の脚の様に判然見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持つて頰杖を突いた儘何か考へた。時々は不必要な墨を磨りに磨り卸ろした。煙草は無暗に喫んだ。さうしては、思ひ出した様に窓硝子を通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はたゞ早く歸りたかつた。

漸く時間が來て家へ歸つたとき、お米は不安らしく宗助の顏を見て、

「何うもなくつて」と聞いた。宗助は已むを得ず、何うもないが、たゞ疲れたと答へて、すぐ炬燵の中へ入つたなり、晩食迄動かなかつた。其内風は日と共に落ちた。晝の反動で四隣は急にひつそり靜まつた。

「好い案排ね、風が無くなつて。晝間の様に吹かれると、家に坐つてゐても何だか氣味が惡くつて仕様がないわ」

お米の言葉には、魔物でもあるかの様に、風を恐れる調子があつた。宗助は落ち附いて、

「今夜は少し暖かい様だね。穏やかで好い御正月だ」と云つた。飯を濟まして煙草を一本喫ふ段になつて、突然、

「お米、寄席へでも行つて見ようか」と珍らしく細君を誘つた。お米は無論否む理由を有たなかつた。

小六は義太夫などを聞くより、宅に居て餅でも燒いて食つた方が勝手だといふので、留守を頼んで二人出た。

少し時間が遅れたので、寄席は一杯であつた。二人は座蒲團を敷く餘地もない一番後の方に、立て膝をする樣に割り込まして貰つた。

「大變な人ね」

「矢つ張り春だから入るんだらう」

二人は小聲で話しながら、大きな部屋にぎつしり詰まつた人の頭を見廻した。其頭のうちで、高座に近い前の方は、煙草の烟で霞んでゐる樣にぼんやり見えた。宗助には此累々たる黒いものが、悉く斯う云ふ娯樂の席へ來て、面白く半夜を潰す事の出來る餘裕のある人らしく思はれた。彼は何の顏を見ても羨ましかつた。

彼は高座の方を正視して、熱心に淨瑠璃を聞かうと力めた。けれどもいくら力めても面白くならなかつた。時々眼を外らして、お米の顏を偸み見た。見るたびにお米の視線は正しい所を向いてゐた。傍に夫のゐる事は殆ど忘れて、眞面目に聽いてゐるらしかつた。宗助は羨ましい人のうちに、お米迄勘定しなければならなかつた。

中入の時、宗助はお米に、

「何うだ、もう歸らうか」と云ひ掛けた。お米は其唐突なのに驚かされた。

「厭なの」と聞いた。宗助は何とも答へなかつた。お米は、

「何うする可いわ」と半分夫の意に忤はない樣な挨拶をした。宗助は折角連れて來たお米に對して却て氣の毒な心が起つた。とう／＼仕舞迄辛抱して坐つてゐた。

家へ歸ると、小六は火鉢の前に胡坐を搔いて、背表紙の反り返るのも構はずに、手に持つた本を上から翳して讀んでゐた。鐵瓶は傍へ卸ろしたなり、湯は生温く冷めてしまつた。盆の上に燒き餘りの餅が、三切か四片載せてあつた。網の下から小皿に殘つた醬油の色が見えた。

小六は席を立つて、

「面白かつたですか」と聞いた。夫婦は十分程身體を炬燵で暖めた上、すぐ床へ入つた。

翌日になつても宗助の心に落附きが來なかつた事は、略前の日と同じであつた。役所が退けて、例の通り電車へ乘つたが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に來ると云ふ事を想像すると、何うしても、わざ／＼其人と接近するために、こんな速力で、家へ歸つて行くのが不合理に思はれた。同時に安井はその後何んなに變化したらうと思ふと、餘所から一目彼の樣子が眺めたくもあつた。

坂井が一昨日の晩、自分の弟を評して、一口に「冒險者」と云つた。その音が今宗助の耳に高く響き渡つた。宗助は此一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平と憎惡と、亂倫と悖德と、盲斷と決行とを想像して、是等の一角に觸れなければならない程の坂井の弟と、それと利害を共にすべく滿洲から一所に出て來た安井が、如何なる程度の人物になつたかを、頭の中で描いて見た。描かれた畫は無論、冒險者の字面の許す範圍内で、尤も強い色彩を帶びたものであつた。

斯樣に墮落の方面を特に誇張した冒險者を、頭の中で拵へ上げた宗助は、其責任を自身一人が全く負

はなければならない樣な氣がした。彼はたゞ坂井へ客に來る安井の姿を一目見て、其姿から、安井の今日の人格を髣髴したかつた。さうして、自分の想像程彼は墮落してゐないといふ慰藉を得たかつた。

彼は坂井の家の傍に立つて、向うに知れずに、他を窺ふ樣な便利な場所はあるまいかと考へた。不幸にして、身を隱すべきところを思ひ附き得なかつた。若し日が落ちてから來るとすれば、此方が認められない便宜があると同時に、暗い中を通る人の顏の分らない不都合があつた。

そのうち電車が神田へ來た。宗助は何時もの通り其處で乘り換へて、家の方へ向いて行くのが苦痛になつた。彼の神經は一歩でも安井の來る方角へ近づくに堪へなかつた。安井を餘所ながら見たいといふ好奇心は、始めから左程強くなかつた丈に、乘換の間際になつて、全く抑へつけられてしまつた。彼は寒い町を多くの人の如く歩いた。けれども多くの人の如くに、判然した目的は有つてゐなかつた。其内店に灯が點いた。電車も燈火を點した。宗助はある牛肉店に上がつて酒を飲み出した。一本は夢中に飲んだ。二本目は無理に飲んだ。三本目にも醉へなかつた。宗助は背を壁に持たして、醉つて相手のない人の樣な眼をして、ぼんやり何處かを見詰めてゐた。

時刻が時刻なので、夕飯を食ひに來る客は入れ代り立ち代り來た。其の多くは用辨的に飲食を濟まして、さつさと勘定をして出て行く丈であつた。宗助は周圍のざわつく中に默然として、他の倍も三倍も時を過ごした如く感じた末、遂に坐り切れずに席を立つた。

表は左右から射す店の灯で明らかであつた。軒先を通る人は、帽も衣裳もはつきり物色する事が出來た。けれども廣い寒さを照らすには餘りに弱過ぎた。夜は戸毎の瓦斯と電燈を閑却して、依然として暗く大き

く見えた。宗助は此世界と調和する樣な黑味の勝つた外套に包まれて歩いた。其時彼は自分の呼吸する空氣さへ灰色になつて、肺の中の血管に觸れる樣な氣がした。

彼は此晩に限つて、ベルを鳴らして忙しさうに眼の前を往つたり來たりする電車を利用する考へが起らなかつた。目的を有つて途を行く人と共に、拔目なく足を運ばす事を忘れた。しかも彼は根の締まらない人間として、かく漂浪の雛形を演じつゝある自分の心を省みて、もし此狀態が長く續いたら何うしたら可からうと、ひそかに自分の未來を案じ煩つた。今日迄の經過から推して、凡ての創口を癒合するものは時日であるといふ格言を、彼は自家の經驗から割り出して、深く胸に刻み附けてゐた。それが一昨日の晩にすつかり崩れたのである。

彼は黑い夜の中を歩きながら、たゞ何うかして此心から逃れ出たいと思つた。其心は如何にも弱くて落ち付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見えた。彼は胸を抑へつける一種の壓迫の下に、如何にせば、今の自分を救ふ事が出來るかといふ實際の方法のみを考へて、其壓迫の原因になつた自分の罪や過失は全く此結果から切り放して仕舞つた。其時の彼は他の事を考へる餘裕を失つて、悉く自己本位になつてゐた。今迄は忍耐で世を渡つて來た。是からは積極的に人生觀を作り易へなければならなかつた。さうして其人生觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の實質が太くなるものでなくては駄目であつた。

彼は行く／＼口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれども其響は繰り返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ烟が、手を開けると何時の間にか無くなつてゐる樣に、宗教とは果敢ない文字であつた。

宗教と關聯して宗助は、坐禪といふ記憶を呼び起した。昔京都に居た時分、彼の級友に相國寺へ行つて坐禪をするものがあつた。當時彼は其迂濶を笑つてゐた。「今の世に……」と思つてゐた。其級友の動作が別に自分と違つた所もない樣なのを見て、彼は益馬鹿々々しい氣を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑に値する以上の或動機から、貴重な時間を惜しまずに、相國寺へ行つたのではなからうかと考へ出して、自分の輕薄を深く恥ぢた。もし昔から世俗で云ふ通り安心とか立命とかいふ境地に、坐禪の力で達する事が出來るならば、十日や二十日役所を休んでも構はないから遣つて見たいと思つた。けれども彼は斯道にかけては全くの門外漢であつた。從つて此より以上明瞭な考へも浮かばなかつた。

漸く家へ辿り着いた時、彼は例の樣なお米と、例の樣な小六と、それから例の樣な茶の間と座敷と洋燈と簞笥を見て、自分丈が例にない狀態の下に、此四五時間を暮らしてゐたのだといふ自覺を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、其蓋の隙間から湯氣が立つてゐた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、何時もの座蒲團を敷いて、其前にちやんと膳立てがしてあつた。

宗助は絲底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、此二三年來朝晩使ひ慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食はないよ」と云つた。お米は多少不本意らしい風もした。

「おや左樣。餘り遲いから、大方何處かで召上つたらうとは思つたけれど、若し未だだと不可ないから」と云ひながら、布巾で鍋の耳を撮んで、土瓶敷の上に卸ろした。それから淸を呼んで膳を臺所へ退げさした。

宗助は斯ういふ風に、何ぞ事故が出來て、役所の退出からすぐ外へ回つて遲くなる場合には、何時でも其顛末の大略を、歸宅早々お米に話すのを例にしてゐた。お米もそれを聞かないうちは氣が濟まなかつた。けれども今夜に限つて彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上がつた事も、無理に酒を飮んだ事も、丸で話したくなかつた。何も知らないお米は又平常の通り、無邪氣に夫から夫へと聞きたがつた。

「何別に是といふ理由もなかつたのだけれども、つい彼處いらで牛が食ひたくなつた丈の事さ」

「さうして御腹を消化す爲に、わざ〳〵此處迄歩いて入らしつたの」

「まあ左樣だ」

お米は可笑しさうに笑つた。宗助は寧ろ苦しかつた。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎へに來なかつたかい」と聞いた。

「いゝえ。何故」

「一昨日の晩行つたとき、御馳走するとか云つてゐたからさ」

「また？」

お米は少し呆れた顏をした。宗助は夫なり話しを切り上げて寐た。頭の中をさわ〳〵何か通つた。時々眼を開けて見ると、例の細く洋燈が暗くして床の間の上に載せてあつた。お米はさも心地好ささうに眠つてゐた。つい此間迄は自分の方が好く寐られないで、お米は毎晩も睡眠の不足に惱まされたのであつた。宗助は眼を閉ぢながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分を、更に心苦しく感じた。其時計は最初は幾つも續けさまに打つた。それが過ぎるとぴんと只一つ鳴つた。其濁つた音が彗星の尾の

樣に、ぼうと宗助の耳朶に暫く響いてゐた。次には二つ鳴つた。甚だ淋しい音であつた。宗助は其間に何とかして、もつと鷹揚に生きて行く分別をしなければならないと云ふ決心丈をした。三時は朦朧として聞こえた樣な聞こえない樣なうちに過ぎた。四時、五時、六時は丸で知らなかつた。たゞ世の中が膨れた。天が波を打つて伸び縮んだ。地球が糸で釣るした毬の如くに、大きな弧線を描いて空間に搖いた。凡てが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過ぎに彼はぼつとして、此夢から覺めた。お米が何時もの通り微笑して枕元に曲んでゐた。冴えた日は黒い世の中を疾くに何處かへ追ひ遣つてゐた。

十八

宗助は一封の紹介狀を懷にして山門を入つた。彼はこれを同僚の知人の某から得た。其同僚は役所の往復に電車の中で、洋服の隱袋から菜根譚を出して讀む男であつた。かう云ふ方面に趣味のない宗助は、固より菜根譚の何物なるかを知らなかつた。ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乘つた時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答へた。宗助は重ねて何んな事が書いてあるかと尋ねた。其時同僚は、一口に說明の出來る恰好な言葉を有つてゐなかつたと見えて、まあ禪學の書物だらうといふ樣な妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いた此返事をよく覺えてゐた。

紹介狀を貰ふ四五日前、彼は此同僚の傍へ行つて、君は禪學を遣るのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顏を見て頗る驚いた樣子であつたが、いや遣らない、唯慰み半分にあんな書物を讀む丈だと、すぐ逃げて終つた。宗助は多少失望に弛んだ下唇を垂れて自分の席に歸つた。

其日歸りがけに、彼等は又同じ電車に乘り合はした。先刻宗助の樣子を氣の毒に觀察した同僚は、彼の質問の裏に維摩以上の或意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切に其方面の話しをして聞かした。然し自分は未だ嘗て參禪と云ふ事をした經驗がないと自白した。もし詳しい話しが聞きたければ、幸ひ自分の知合に、よく鎌倉へ行く男があるから紹介してやらうと云つた。宗助は車の中で其人の名前と番地を手帳に書き留めた。さうして次の日、同僚の手紙を持つてわざ〳〵廻り道をして訪問に出掛けた。宗助の懷にした書狀は、其折席上で認めて貰つたものであつた。

役所は病氣になつて十日許り休む事にした。お米の手前も矢張り病氣だと繕つた。

「少し腦が惡いから、一週間程役所を休んで遊んで來るよ」と云つた。お米は此頃の夫の樣子の何處かに、異狀があるらしく思はれるので、内心では始終心配してゐた矢先だから、平生煮え切らない宗助の果斷を喜んだ。けれども其突然なのにも全く驚いた。

「遊びに行くつて、何處へ入らつしやるの」と眼を丸くしない計りに聞いた。

「矢つ張り鎌倉邊が好からうと思つてる」と宗助は落ち附いて答へた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とは、殆ど緣の遠いものであつた。突然二つのものを結び附けるのは滑稽であつた。お米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。私も一所に連れてつて頂戴」と云つた。宗助は愛すべき細君のこの冗談を味はふ餘裕を有たなかつた。眞面目な顏をして、

「そんな贅澤なところへ行くんぢやないよ。禪寺へ留めて貰つて、一週間か十日、たゞ靜かに頭を休め

て見る丈の事さ。それも果して好くなるか、ならないか分らないが、空氣の可い所へ行くと、頭には大變違ふと皆云ふから」と辯解した。

「そりや違ひますわ。だから行つて入らつしやいとも。今のは本當の冗談よ」

お米は善良な夫に調戲つたのを、多少濟まない樣に感じた。宗助は其翌日すぐ貰つて置いた紹介狀を懷にして、新橋から汽車に乘つたのである。

其紹介狀の表には釋宜道樣と書いてあつた。

「此間迄侍者をしてゐましたが、此頃では塔頭にある古い庵室に手を入れて、其處に住んでゐるとか聞きました。何うですか、まあ着いたら尋ねて御覽なさい。庵の名はたしか一窓庵でした」と書いて呉れる時、わざ〳〵注意があつたので、宗助は禮を云つて手紙を受け取りながら、侍者だの塔頭だのといふ、自分には全く耳新しい言葉の說明を聞いて歸つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮つてゐるために、路が急に暗くなつた。其陰氣な空氣に觸れた時、宗助は世の中と寺の中との區別を急に覺つた。靜かな境內の入口に立つた彼は、始めて風邪を意識する場合に似た一種の惡寒を催した。

彼はまづ眞直に步き出した。左右にも行手にも、堂の樣なものや、院の樣なものがちよい〳〵見えた。けれども人の出入りは一切なかつた。悉く寂寞として錆び果ててゐた。宗助は何處へ行つて、宜道のゐる處を敎へて貰はうかと考へながら、誰も通らない路の眞中に立つて四方を見回した。

山の裾を切り開いて、一二丁奧へ上る樣に建てた寺だと見えて、後の方は樹の色で高く塞がつてゐた。

路の左右も山續きか丘續きの地勢に制せられて、決して平ではない樣であつた。其小高い處々に、下から石段を疊んで、寺らしい門を高く構へたのが二三軒目に着いた。平地に垣を繞らして、點在してゐるのは、幾多もあつた。近寄つて見ると、何れも門瓦の下に、院號やら庵號やらが額にして懸けてあつた。

宗助は箔の剝げた古い額を一二枚讀んで歩いたが、不圖一窓庵から先へ探し出して、もし其處に手紙の名宛の坊さんがゐなかつたら、もつと奧へ行つて尋ねるが便利だらうと思ひ附いた。それから逆戻をして其額を一々調べに掛かると、一窓庵は山門を這入るや否や、すぐ右手の方の高い石段の上にあつた。丘外れなので日當りの好い、からりとした玄關先を控へて、後の山の懷に暖まつてゐる樣な位置に冬を凌ぐ氣色に見えた。宗助は玄關を通り越して、庫裡の方から土間に足を入れた。上り口の障子の立ててある處迄來て、頼む〳〵と二三度呼んで見た。然し誰も出て來て呉れるものはなかつた。宗助はしばらく其處に立つた儘、中の樣子を窺つてゐた。何時迄立つてゐても音沙汰がないので、宗助は不思議な思ひをして、又庫裡を出て門の方へ引き返した。すると石段の下から、剃立ての頭を青く光らした坊さんが上がつて來た。年はまだ二十四五としか見えない若い色白の顏であつた。宗助は門の扉の處に待ち合はして、

「宜道さんと仰しやる方は此方に御出でゝせうか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答へた。宗助は少し驚いたが、又嬉しくもあつた。すぐ懷中から例の紹介狀を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、其場で讀み下した。やがて手紙を卷き返して封筒へ入れると、

「好うこそ」と云つて、丁寧に會釋したなり、先に立つて宗助を導いた。二人は庫裡に下駄を脫いで、

障子を開けて内へ這入つた。其處には大きな圍爐裏が切つてあつた。宜道は鼠木綿の上へ羽織つてゐた薄い粗末な法衣を脱いで釘に掛けて、

「御寒う御座いませう」と云つて、圍爐裏の中に深く埋けてあつた炭を灰の下から掘り出した。

此僧は若いに似合はず甚だ落ち附いた話し振をする男であつた。低い聲で何か受け答へをした後で、にやりと笑ふ具合などは、丸で女の樣な感じを宗助に與へた。宗助は心のうちに、この青年がどういふ機緣の元に、思ひ切つて頭を剃つたものだらうかと考へて、其樣子のしとやかな所を、何となく憐れに思つた。

「大變御靜かな樣ですが、今日はどなたも御留守なんですか」

「いえ、今日に限らず、何日も私一人です。だから用のあるときは、構はず明け放しにして出ます。今も一寸下迄行つて用を足して參りました。それがため折角御出での所を失禮致しました」

宜道は此時改めて遠來の人に對して自分の不在を詫びた。此大きな庵を、たつた一人で預かつてゐるさへ、相應に骨が折れるのに、其上に厄介が增したら嘸迷惑だらうと、宗助は少し氣の毒な色を外に動かした。すると宜道は、

「いえ、些とも御遠慮には及びません。道の爲で御座いますから」と床しい事を云つた。さうして、目下自分の所に、宗助の外に、まだ一人世話になつてゐる居士のある旨を告げた。此居士は山へ來てもう二年になるとかいふ話しであつた。宗助はそれから二三日して、始めて此居士を見たが、彼は剽輕な羅漢の樣な顏をしてゐる氣樂さうな男であつた。細い大根を三四本ぶら下げて、今日は御馳走を買つて來たと云つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助も其相伴をした。此居士は顏が坊さんらしいので、

時々僧堂の衆に交つて、村の御齋杯に出掛ける事があるとかと云つて宜道が笑つてゐた。

其外俗人で山へ修業に來てゐる人の話も色々聞いた。中に筆墨を商ふ男があつた。背中へ荷を一杯負つて、二十日なり三十日なり、其處等中回つて歩いて、略賣り盡くしてしまふと山へ歸つて來て坐禪をする。それから少時して食ふものがなくなると、又筆墨を背に載せて行商に出る。彼は此兩面の生活を、殆んど循環小數の如く繰り返して、飽く事を知らないのだと云ふ。

宗助は一見こだはりの無ささうな是等の人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、其懸隔の甚しいのに驚いた。そんな氣樂な身分だから坐禪が出來るのか、或は坐禪をした結果さういふ氣樂な心になれるのか迷つた。

「氣樂では不可ません。道樂に出來るものなら、二十年も三十年も雲水をして苦しむものはありません」

と宜道は云つた。

彼は坐禪をするときの一般の心得や、老師から公案の出る事や、その公案に一生懸命嚙り附いて、朝も晩も晝も夜も嚙りつゞけに嚙らなくては不可ない事やら、凡て今の宗助には心元なく見える助言を與へた末、

「御室へ御案内しませう」と云つて立ち上がつた。

圍爐裏の切つてある所を出て、本堂を横に拔けて、其外れにある六疊の座敷の障子を縁から開けて、中へ案内された時、宗助は始めて一人遠くに來た心持がした。けれども頭の中は、周圍の冷靜な趣と反照するためか、却て町にゐるときよりも動搖した。

約一時間もしたと思ふ頃、宜道の足音が又本堂の方から響いた。
「老師が相見になるさうで御座いますから、御都合が宜しければ參りませう」と云つて、丁寧に敷居の上に膝を突いた。
二人は又寺を空にして連れ立つて出た。山門の通を略一丁程奥へ來ると、左側に蓮池があつた。寒い時分だから池の中はたゞ薄濁りに淀んでゐる丈で、少しも淸淨な趣はなかつたが、向う側に見える高い石の崖外れ迄、椽に欄干のある座敷が突き出して居る所が、文人畫にでもありさうな風致を添へた。
「彼所が老師の住んでゐられる所です」と宜道は比較的新しい其建物を指さした。
二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段を上つて、其正面にある大きな伽藍の屋根を仰いだまゝ直ぐ左へ切れた。玄關へ差しかゝつた時、宜道は
「一寸失禮します」と云つて、自分丈裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て來て、
「さあ何うぞ」と案内をして、老師のゐる所へ伴れて行つた。
老師といふのは五十恰好に見えた。赭黑い光澤のある顏をしてゐた。其皮膚も筋肉も悉く緊まつて、何處にも怠りのない所が、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫り附けた。たゞ唇があまり厚過ぎるので、其處に幾分の弛みが見えた。其代り彼の眼には、普通の人間に到底見るべからざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めて其視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思ひがあつた。
「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つた。「父母未生以前本來の面目は何だか、それを一つ考へて見たら善からう」

宗助には父母未生以前といふ意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云ふものは畢竟何物だか、其本體を捕まへて見ろと云ふ意味だらうと判斷した。それより以上口を利くには、餘り禪といふものの知識に乏しかつたので、默つて又宜道に伴れられて一窓庵へ歸つて來た。

晩食の時宜道は宗助に、入室の時間が朝夕二囘あることと、提唱の時間が午前である事などを話した上、

「今夜は未だ見解も出來ないでせうから、明朝か明晩御誘ひ申しませう」と親切に云つて呉れた。其上最初のうちは、詰めて坐るのは難儀だから、線香を立てて、それで時間を計つて、少し宛休んだら好からうと云ふ樣な注意もして呉れた。

宗助は線香を持つて、本堂の前を通つて自分の室と極まつた六疊に這入つて、ぼんやりして坐つた。彼から云ふと所謂公案なるものの性質が、如何にも自分の現在と縁の遠い樣な氣がしてならなかつた。自分は今腹痛で惱んでゐる。其腹痛と云ふ訴へを抱いて來て見ると、豈計らんや、其對症療法として、六づかしい數學の問題を出して、まあ是でも考へたら可からうと云はれたと一般であつた。考へろと云はれゝば、考へないでもないが、それは一應腹痛が治まつてからの事でなくては無理であつた。

同時に彼は勤めを休んで、わざ〳〵此處迄來た男であつた。紹介状を書いて呉れた人、萬事に氣を附けて呉れる宜道に對しても、餘りに輕卒な振舞は出來なかつた。彼は先づ現在の自分が許す限りの勇氣を提げて、公案に向はうと決心した。それが何れの處に彼を導いて、どんな結果を彼の心に持ち來すかは、彼自身と雖も全く知らなかつた。彼は悟りといふ美名に欺かれて、彼の平生に似合はぬ冒險を試みようと企てたのである。さうして、もし此冒險に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救ふ事が出來はし

まいかと、果敢ない望みを抱いたのである。
彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教へられた通り座蒲團の上に半跏を組んだ。晝のうちは左迄とは思はなかつた室が、日が落ちてから急に寒くなつた。彼は坐りながら、背中のぞく〳〵する程溫度の低い空氣に堪へなかつた。
彼は考へた。けれども考へる方向も、考へる問題の實質も、殆ど捕まへ樣のない空漠なものであつた。彼は考へながら、自分は非常に迂濶な眞似をしてゐるのではなからうかと疑つた。火事見舞に行く間際に、細かい地圖を出して、仔細に町名や番地を調べてゐるよりも、ずつと飛び離れた見當違ひの所作を演じてゐる如く感じた。
彼の頭の中を色々なものが流れた。其あるものは明らかに眼に見えた。あるものは混沌として雲の如くに動いた。何處から來て何處へ行くとも分らなかつた。たゞ先のものが消える、すぐ後から次のものが現はれた。さうして仕切りなしに夫から夫へと續いた。頭の往來を通るものは、無限で無數で無盡藏で、決して宗助の命令によつて、留まる事も休む事もなかつた。斷ち切らうと思へば思ふ程、滾々として湧いて出た。
宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微かな灯で薄暗く照らされてゐた。灰の中に立つた線香は、まだ半分程しか燃えてゐなかつた。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて氣が附いた。
宗助はまた考へ始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のあるものが頭の中を通り出した。ぞろ〳〵と

群がる蟻の如くに動いて行く、あとから又ぞろ〳〵と群がる蟻の如くに現はれた。凝としてゐるのはたゞ宗助の身體丈であつた。心は切ない程、苦しい程、堪へがたい程動いた。

其内凝としてゐる身體も、膝頭から痛み始めた。眞直に延ばしてゐた脊髓が次第々々に前の方に曲つて來た。宗助は兩手で左の足の甲を抱へる樣にして下へ卸した。彼は何をする目的もなく室の中に立ち上がつた。障子を明けて表へ出て、門前をぐる〳〵駈け回つて歩きたくなつた。夜はしんとしてゐた。寐てゐる人も起きてゐる人も何處にも居りさうには思へなかつた。宗助は外へ出る勇氣を失つた。凝と生きながら妄想に苦しめられるのは猶恐ろしかつた。

彼は思ひ切つて又新しい線香を立てた。さうして又略前と同じ過程を繰り返した。最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考へるのも寐て考へるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅に疊んであつた薄汚い蒲團を敷いて、其中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちて仕舞つた。

眼が覺めると枕元の障子が何時の間にか明るくなつて、白い紙にやがて日の通るべき色が動いた。晝も留守を置かずに濟む山寺は、夜に入つても戸を閉てる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖下の暗い部屋に寐てゐたのでないと意識するや否や、すぐ起き上がつた。縁へ出ると、軒端に高く大覇王樹の影が眼に映つた。宗助は又本堂の佛壇の前を拔けて、圍爐裏の切つてある昨日の茶の間へ出た。其處には昨日の通り宜道の法衣が折れ釘に懸けてあつた。さうして本人は勝手の竈の前に蹲踞つて、火を焚いてゐた。宗助を見て、

「御早う」と慇懃に禮をした。「先刻御誘ひ申さうと思ひましたが、よく御寐みの樣でしたから、失禮して一人參りました」

宗助は此若い僧が、今朝夜明がたに既に參禪を濟まして、夫から歸つて來て、飯を炊いでゐるのだといふ事を知つた。

見ると彼は左の手で頻りに薪を差し易へながら、右の手に黑い表紙の本を持つて、用の合間々々に夫を讀んでゐる樣子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧巖集といふ六づかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕の樣に當て途もない考へに耽つて、腦を疲らすより、一層其道の書物でも借りて讀む方が、要領を得る捷徑ではなからうかと思ひ附いた。宜道にさう云ふと、宜道は一も二もなく宗助の考へを排斥した。

「書物を讀むのは極く惡う御座います。有體に云ふと、讀書程修業の妨げになるものは無い樣です。私共でも、斯うして碧巖抔を讀みますが、自分の程度以上の所になると、丸で見當が附きません。それを好い加減に揣摩する癖がつくと、それが坐る時の妨げになつて、自分以上の境界を豫期して見たり、悟りを待ち受けて見たり、充分突つ込んで行くべき所に頓挫が出來ます。大變毒になりますから、御止しになつた方が可いでせう。もし強ひて何か御讀みになりたければ、禪關策進といふ樣な、人の勇氣を鼓舞したり激勵したりするものが宜しう御座いませう。それだつて、唯刺激の方便として讀む丈で、道其物とは無關係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼は此生若い青い頭をした坊さんの前に立つて、恰も一個の

低能兒であるかの如き心持を起した。彼の慢心は京都以來既に銷磨し盡くしてゐた。彼は平凡を分として。今日迄生きて來た。聞達程彼の心に遠いものはなかつた。彼はたゞ有の儘の彼として、宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙かに無力無能な赤子であると、更に自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい發見であつた。同時に自尊心を根絶する程の發見であつた。

宜道が竈の火を消して飯をむらしてゐる間に、宗助は臺所から下りて、庭の井戸端へ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雜木山が見えた。其裾の少し平な處を拓いて、菜園が拵へてあつた。宗助は濡れた頭を冷たい空氣に曝して、わざと菜園迄下りて行つた。さうして、其處に崖を横に掘つた大きな穴を見出した。宗助は暫く其前に立つて、暗い奥の方を眺めてゐた。やがて茶の間へ歸ると、圍爐裏には暖かい火が起つて、鐵瓶に湯の沸る音が聞こえた。

「手がないものだから、つい遲くなりまして御氣の毒です。すぐ御膳に致しませう。然しこんな處だから上げるものがなくつて困ります。其代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てませう」と宜道が云つて呉れた。宗助は難有く圍爐裏の向うに坐つた。

やがて食事を了へて、わが室へ歸つた宗助は、又父母未生以前と云ふ稀有な問題を眼の前に据ゑて、凝と眺めた。けれども、もと／＼筋の立たない、從つて發展しやうのない問題だから、いくら考へても何處からも手を出す事は出來なかつた。さうして、すぐ考へるのが厭になつた。宗助は不圖お米に此處へ着いた消息を、書かなければならない事に氣が附いた。彼は俗用の生じたのを喜ぶ如くに、すぐ鞄の中から卷紙と封じ袋を取り出して、お米に遣る手紙を書き始めた。まづ此處の閑靜な事、海に近い所爲か、東京

よりは餘程暖かい事、空氣の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味い事、夜具蒲團の綺麗に行かない事、などを書き連ねてゐるうちに、はや三尺餘りの長さになつたので、其處で筆を擱いたが、公案に苦しめられてゐる事や、坐禪をして膝の關節を痛くしてゐる事や、考へるために益神經衰弱が劇しくなりさうな事は、噯にも出さなかつた。彼は此手紙に切手を貼つて、ポストに入れなければならない口實を求めて、早速山を下つた。さうして父母未生以前と、お米と、安井に脅やかされながら、村の中をうろついて歸つた。

午には、宜道から話しのあつた居士に會つた。此居士は茶碗を出して、宜道に飯を盛つて貰ふとき、憚り樣とも何とも云はずに、たゞ合掌して禮を述べたり、相圖をしたりした。此位靜かに物事を爲るのが法だとか云つた。口を利かず、音を立てないのは、考への邪魔になると云ふ精神からださうであつた。それ程眞劍にやるべきものだと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥づかしく思はれた。

食後三人は圍爐裏の傍で暫く話した。其時居士は、自分が坐禪をしながら、何時か氣が付かずにうとうとと眠つて仕舞つてゐて、はつと正氣に歸る間際に、おや悟つたなと喜ぶ事があるが、さて愈眼を開いて見ると、矢つ張り元の通りの自分なので失望する計りだと云つて、宗助を笑はした。斯う云ふ氣樂な考へで、參禪してゐる人もあると思ふと、宗助も多少は寛いだ。けれども三人が分かれ〳〵に自分の室に入る時、宜道が、

「今夜は御誘ひ申しますから、是から夕方迄しつかり御坐りなさいまし」と眞面目に勸めたとき、宗助は又一種の責任を感じた。消化れない堅い團子が胃に滯つてゐる樣な不安な胸を抱いて、わが室へ歸つて

來た。さうして又線香を焚いて坐り出した。其癖夕方迄は坐り續けられなかつた。どんな解答にしろ一つ拵へて置かなければならないと思ひながらも、仕舞には根氣が盡きて、早く宜道が夕飯の報知に本堂を通り拔けて來て呉れゝば好いと、たゞそればかり氣に掛かつた。

日は懊惱と困憊の裡に傾いた。障子に映る時の影が次第に遠くへ立ち退くにつれて、寺の空氣が床の下から冷え出した。風は朝から枝を吹かなかつた。縁側に出て、高い庇を仰ぐと、黑い瓦の小口丈が揃つて、長く一列に見える外に、穩やかな空が、蒼い光をわが底の方に沈めつゝ、自分と薄くなつて行く所であつた。

十九

「危險う御座います」と云つて宜道は一足先へ暗い石段を下りた。宗助はあとから續いた。町と違つて夜になると足元が惡いので、宜道は提灯を點けて僅か一丁許りの路を照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽ひ被さる樣に空を遮つた。闇だけれども蒼い葉の色が二人の着物の織目に染み込む程に宗助を寒がらせた。提灯の灯にも其色が多少映る感じがあつた。其提灯は一方に大きな樹の幹を想像する所爲か、甚だ小さく見えた。光の地面に屆く尺數も僅かであつた。照らされた部分は明るい灰色の斷片となつて、暗い中にほつかり落ちた。さうして二人の影が動くに伴れて動いた。

蓮池を行き過ぎて、左へ上る所は、夜はじめての宗助に取つて、少し足元が滑らかに行かなかつた。土の中に根を食つてゐる石に、一二度下駄の臺を引つ掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路もあるが、此

方は凸凹が多くて、慣れない宗助には近くても不便だらうと云ふので、宜道はわざ〳〵廣い方を案内したのである。

玄關を入ると、暗い土間に下駄が大分竝んでゐた。宗助は曲んで、人の履物を踏まない樣にそつと上へのぼつた。室は八疊程の廣さであつた。其壁際に列を作つて、六七人の男が一側に竝んでゐた。中に頭を光らして、黑い法衣を着た僧も交つてゐた。他のものは大概袴を穿いてゐた。此六七人の男は上り口と奥へ通ずる三尺の廊下口を殘して、行儀よく鉤の手に竝んでゐた。さうして一言も口を利かなかつた。宗助は是等の人の顏を一目見て、まづ其峻刻なのに氣を奪はれた。彼等は皆固く口を結んでゐた。事ありげな眉を強く寄せてゐた。傍にどんな人がゐるか見向きもしなかつた。如何なるものが外から入つて來ても、全く注意しなかつた。彼等は活きた彫刻の樣に己を持して、火の氣のない室に肅然と坐つてゐた。宗助の感覺には、山寺の寒さ以上に、一種嚴かな氣が加はつた。

やがて寂寞の中に、人の足音が聞こえた。初めは微かに響いたが、次第に強く床を踏んで、宗助の坐つてゐる方へ近附いて來た。仕舞に一人の僧が廊下口からぬつと現はれた。さうして宗助の傍を通つて、默つて外の暗がりへ拔けて行つた。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

此時宗助と竝んで嚴肅に控へてゐた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、矢張り無言の儘立ち上がつて、室の隅の廊下口の眞正面へ來て着座した。其處には高さ二尺幅一尺程の木の枠の中に、銅鑼の樣な形をした、銅鑼よりも、ずつと重くて厚さうなものが懸かつてゐた。色は蒼黑く貧しい灯に照らされてゐた。袴を着けた男は、臺の上にある撞木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の眞中を二つ程打ち鳴らした。さうして、

ついと立つて、廊下口を出て、奥の方へ進んで行つた。今度は前と反對に、足音が段々遠くの方へ去るに從つて、微かになつた。さうして一番仕舞にぴたりと何處かで留まつた。宗助は坐ながら、はつとした。彼は此袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつゝあるだらうかを想像したのである。けれども奥はしんとして靜まり返つてゐた。宗助と竝んでゐるものも、一人として顏の筋肉を動かすものはなかつた。たゞ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然として鈴を振る響が彼の耳に應へた。同時に長い廊下を踏んで、此方へ近附く足音がした。袴を着けた男は又廊下口から現はれて、無言の儘玄關を下りて、霜の裡に消え去つた。入れ代つて又新しい男が立つて、最前の鐘を打つた。さうして、又廊下を踏み鳴らして奥の方へ行つた。宗助は沈默の間に行はれる此順序を見ながら、膝に手を載せて、自分の番の來るのを待つてゐた。

自分より一人置いて前の男が立つて行つた時は、良暫くしてから、わつと云ふ大きな聲が奥の方で聞こえた。其聲は距離が遠いので、劇しく宗助の鼓膜を打つ程、強くは響かなかつたけれども、たしかに精一杯威を振るつたものであつた。さうして只一人の咽喉から出た個人の特色を帶びてゐた。自分のすぐ前の人が立つた時は、愈わが番が回つて來たと云ふ意識に制せられて、一層落附きを失つた。

宗助は此間の公案に對して、自分丈の解答は準備してゐた。けれども、それは甚だ覺束ない薄手のものに過ぎなかつた。室中に入る以上は、何か見解を呈しない譯に行かないので、已むを得ず納まらない所を、わざと納まつた樣に取り繕つた、其場限りの挨拶であつた。彼は此心細い解答で、僥倖にも難關を通過して見たい抔とは、夢にも思ひ設けなかつた。老師を胡魔化す氣は無論なかつた。其時の宗助はもう少し眞

面目であつたのである。單に頭から割り出した、恰も畫にかいた餅の樣な代物を持つて、義理にも室中に入らなければならない自分の空虚な事を恥ぢたのである。

宗助は人のする如くに鐘を打つた。しかも打ちながら、自分は人並に此鐘を撞木で敲くべき權能がないのを知つてゐた。それを人並に鳴らして見る猿の如き己を深く嫌忌した。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつゝ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下は長く續いた。右側にある室は悉く暗かつた。角を二つ折れ曲がると、向うの外れの障子に灯影が差した。宗助は其敷居際へ來て留まつた。

室中に入るものは老師に向つて三拜するのが禮であつた。拜しかたは普通の挨拶の樣に頭を疊に近く下げると同時に、兩手の掌を上向きに開いて、夫を頭の左右に並べたまゝ、少し物を抱へた心持に耳の邊迄上げるのである。宗助は敷居際に跪いて形の如く拜を行つた。すると座敷の中で、

「一拜で宜しい」と云ふ會釋があつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はたゞ薄暗い灯に照らされてゐた。其弱い光は、如何に大字な書物をも披見せしめぬ程度のものであつた。宗助は今日迄の經驗に訴へて、これ位微かな燈火に、夜を營む人間を憶ひ起す事が出來なかつた。其光は無論月よりも强かつた。且月の如く蒼白い色ではなかつた。けれどももう少しで朦朧の境に沈むべき性質のものであつた。

此靜かな判然しない燈火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宜道の所謂老師なるものを認めた。彼の顏は例によつて鑄物の樣に動かなかつた。色は銅であつた。彼は全身に澁に似た柿に似た茶に似た色

の法衣を纏つてゐた。足も手も見えなかつた。たゞ頸から上が見えた。其頸から上が、嚴肅と緊張の極度に安んじて、何時迄經つても變る恐れを有せざる如くに人を魅した。さうして頭には一本の毛もなかつた。
此面前に氣力なく坐つた宗助の口にした言葉はたゞ一句で盡きた。
「もつと、ぎろりとした所を持つて來なければ駄目だ」と忽ち云はれた。
「其位な事は少し學問をしたものなら誰でも云へる」
宗助は喪家の犬の如く室中を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

二十

障子の外で野中さん、野中さんと呼ぶ聲が二度程聞こえた。宗助は半睡の裡にはいと應へた積りであつたが、返事を仕切らない先に、早く知覺を失つて、又正體なく寢入つてしまつた。
二度目に眼が覺めた時、彼は驚いて飛び起きた。縁側へ出ると、宜道が鼠木綿の着物に襷を掛けて、甲斐甲斐しく其處いらを拭いてゐた。赤く凍んだ手で濡雜巾を絞りながら、例の如く柔和しいにこやかな顏をして、
「御早う」と挨拶した。彼は今朝も亦とくに參禪を濟ました後、斯うして庵に歸つて働いてゐたのである。宗助はわざ〱呼び起されても起き得なかつた自分の怠慢を省て、全く極りの惡い思ひをした。
「今朝もつい寢忘れて失禮しました」
彼はこそ〱勝手口から井戸端の方へ出た。さうして冷たい水を汲んで出來る丈早く顏を洗つた。延び

掛かつた髯が、頰の邊で手を刺す樣にさら〳〵したが、今の宗助にはそれを苦にする程の餘裕はなかつた。

彼はしきりに宜道と自分とを對照して考へた。

紹介狀を貰ふときに東京で聞いた所によると、此宜道といふ坊さんは、大變性質の可い男で、今では修業も大分出來上がつてゐると云ふ話しだつたが、會つて見ると、丸で一丁字もない小廝の樣に丁寧であつた。かうして襷掛けで働いてゐる所を見ると、何うしても一個の獨立した庵の主人らしくはなかつた。納所とも小坊主とも云へた。

此矮小な若僧は、まだ出家をしない前、たゞの俗人として此處へ修業に來た時、七日の間結跏したぎり少しも動かなかつたのである。仕舞には足が痛んで腰が立たなくなつて、厠へ上る折などは、やつとの事壁傳ひに身體を運んだのである。其時分の彼は彫刻家であつた。見性した日に嬉しさの餘り、裏の山へ驅け上がつて、草木國土悉皆成佛と大きな聲を出して叫んだ。さうして遂に頭を剃つてしまつた。

此庵を預かる樣になつてから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べて、樂に足を延ばして寐た事はないと云つた。冬でも着物の儘壁に倚れて坐睡する丈だと云つた。侍者をしてゐた頃などは老師の犢鼻褌迄洗はせられたと云つた。其上少しの暇を偸んで坐りでもすると、後から來て意地の惡い邪魔をされる、毒吐かれる、頭の剃り立てには何の因果で坊主になつたかと悔む事が多かつたと云つた。

「漸く此頃になつて少し樂になりました。しかし未だ先が御座います。修業は實際苦しいものです。さう容易に出來るものなら、いくら私共が馬鹿だつて、斯うして十年も二十年も苦しむ譯が御座いません」

宗助はたゞ惘然とした。自己の根氣と精力の足らない事を齒痒く思ふ上に、夫程歲月を掛けなければ成

就出來ないものなら、自分は何しに此山の中迄遣つて來たか、それからが第一の矛盾であつた。

「決して損になる氣遣ひは御座いません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の德があるのは無論です。其上最初を一つ綺麗に打ち拔いて置けば、あとは斯う云ふ風に始終此處に御出でにならないでも濟みますから」

宗助は義理にも亦自分の室へ歸つて坐らなければならなかつた。

斯んな時に宜道が來て、

「野中さん提唱です」と誘つて吳れると、宗助は心から嬉しい氣がした。彼は禿頭を捕まへる樣な手の著け所のない難題に惱まされて、坐ながら凝と煩悶するのを、如何にも切なく思つた。どんなに精力を消耗する仕事でも可いから、もう少し積極的に身體を働かしたく思つた。

提唱のある場所は、矢張り一窓庵から一町も隔たつてゐた。蓮池の前を通り越して、それを左へ曲がらずに眞直に突き當たると、屋根瓦を嚴めしく重ねた高い軒が、松の間に仰がれた。宜道は懷に黑い表紙の本を入れてゐた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱と云ふのが、學校でいふ講義の意味である事さへ、此處へ來て始めて知つた。

室は高い天井に比例して廣く且寒かつた。色の變つた疊の色が古い柱と映り合つて、昔を物語る樣に寂び果ててゐた。其所に坐つてゐる人々も皆地味に見えた。席次不同に思ひ〳〵の座を占めてはゐるが、高聲に語るもの、笑ふものは一人もなかつた。僧は皆紺麻の法衣を着て、正面の曲彔の左右に列を作つて向ひ合せに並んだ。其曲彔は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現はれた。疊を見詰めてゐた宗助には、彼が何處を通つて、何處から此處へ出たか薩張り分らなかつた。たゞ彼の落ち附き拂つて曲彔に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袱紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置く所を見た。又其禮拜して退く態を見た。

此時堂上の僧は一聲に合掌して、夢窓國師の遺誡を誦し始めた。思ひ／＼に席を取つた宗助の前後にゐる居士も皆同音に調子を合はせた。聞いてゐると、經文の樣な、普通の言葉の樣な、一種の節を帶びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。所謂猛烈にして諸緣を放下し、專一に己事を究明する之を上等と名づく。修業純ならず駁雜學を好む、之を中等と云ふ」云々といふ、餘り長くはないものであつた。宗助は始め夢窓國師の何人なるかを知らなかつた。宜道から此夢窓國師と大燈國師とは、禪門中興の祖であると云ふ事を教はつたのである。平生跛で充分に足を組む事が出來ないのを憤つて、死ぬ間際に、今日こそ己の意の如くにして見せると云ひながら、惡い方の足を無理に折つぺしよつて結跏したため、血が流れて法衣を赭染ましたといふ大燈國師の話も其折宜道から聞いた。

やがて提唱が始まつた。宜道は懷から例の書物を出して、頁を半ば擦らして宗助の前へ置いた。それは宗門無盡燈論と云ふ書物であつた。始めて聞きに出た時、宜道は、

「難有い結構な本です」と宗助に教へて吳れた。白隱和尙の弟子の東嶺和尙とかいふ人の編輯したもので、重に禪を修行するものが、淺い所から深い所へ進んで行く徑路やら、それに伴なふ心境の變化やらを秩序立てて書いたものらしかつた。

中途から顏を出した宗助には、よくも解せなかつたけれども、講者は能辯の方で、默つて聞いてゐるうちに、大變面白い所があつた。其上參禪の士を鼓舞する爲か、古來から斯道に苦しんだ人の閲歴譚抔を取り交ぜて、一段の精彩を着けるのが例であつた。此日も其通りであつたが、或所へ來ると、突然語調を改めて、

「此頃室中に來つて、何うも妄想が起つて不可ない抔と訴へるものがあるが」と急に入室者の不熱心を戒め出したので、宗助は覺えずぎくりとした。室中に入つて、其訴へをなしたものは實に彼自身であつた。

一時間の後宜道と宗助は袖をつらねて又一窓庵に歸つた。其歸り路に宜道は、

「あゝして提唱のある時に、よく參禪者の不心得を諷せられます」と云つた。宗助は何も答へなかつた。

二十一

其内山の中の日は一日〳〵と經つた。お米からは可なり長い手紙がもう二本來た。尤も二本共に新たに宗助の心を亂す樣な心配事は書いてなかつた。宗助は常の細君思ひに似ず遂に返事を出すのを怠つた。彼は山を出る前に、何とか此間の問題に片を附けなければ、折角來た甲斐がない樣な、又宜道に對して濟まない樣な氣がしてゐた。眼が覺めてゐる時は、之がために名狀し難い一種の壓迫を受けつゞけに受けた。從つて日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の數が重なるにつけて、恰も後から追ひ掛けられでもする如く氣を焦つた。けれども彼は最初の解決より外に、一歩も此問題にちかづく術を知らなかつた。彼は又いくら考へても此最初の解決は確かなものであると信じてゐた。たゞ理窟から割り出したのだから、腹の足

しには一向ならなかつた。彼は此確かなものを放り出して、更に又確かなものを求めようとした。けれども左樣ものは少しも出て來なかつた。

彼は自分の室で獨り考へた。疲れると、臺所から下りて、裏の菜園へ出た。さうして崖の下に掘つた横穴の中へ這入つて、凝と動かずにゐた。宜道は氣が散る樣では駄目だと云つた。段々集注して凝り固まつて、仕舞に鐵の棒の樣にならなくては駄目だと云つた。さう云ふ事を聞けば聞く程、實際にさうなるのが困難になつた。

「既に頭の中に、さう仕ようと云ふ下心があるから不可ないのです」と宜道が又云つて聞かした。宗助は愈窮した。忽然安井の事を考へ出した。安井がもし坂井の家へ頻繁に出入りでもする樣になつて、當分滿洲へ歸らないとすれば、今のうちあの借家を引き上げて、何處かへ轉宅するのが上分別だらう。こんな所に愚圖々々してゐるより、早く東京へ歸つて其方の處置を附けた方が、まだ實際的かも知れない。緩り構へて、お米にでも知れると又心配が殖える丈だと思つた。

「私の樣なものには到底悟りは開かれさうに有りません」と思ひ詰めた樣に宜道を捕まへて云つた。それは歸る二三日前の事であつた。

「いえ信念さへあれば誰でも悟れます」と宜道は躊躇もなく答へた。「法華の凝り固まりが夢中に太鼓を叩く樣に遣つて御覽なさい。頭の巓邊から足の爪先迄が悉く公案で充實したとき、俄然として新天地が現前するので御座います」

宗助は自分の境遇やら性質が、夫程盲目的に猛烈な働きを敢てするに適しない事を深く悲しんだ。況や

自分の此山で暮らすべき日は既に限られてゐた。彼は直截に生活の葛藤を切り掃ふ積りで、却て迂濶に山の中へ迷ひ込んだ愚物であつた。

彼は腹の中で斯う考へながら、宜道の面前で、それ丈の事を言ひ切る力がなかつた。彼は心から此若い禪僧の勇氣と、熱心と、眞面目と、親切とに敬意を表してゐたのである。

「道は近きにあり、却て之を遠きに求むといふ言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、何うしても氣が附きません」と宜道はさも殘念さうであつた。宗助は又自分の室に退いて線香を立てた。

斯う云ふ狀態は、不幸にして宗助の山を去らなければならない日迄、目に立つ程の新生面を開く機會なく續いた。愈出立の朝になつて宗助は潔く未練を抛げ棄てた。

「永々御世話になりました。殘念ですが、何うも仕方がありません。もう當分御眼に掛かる折も御座いますまいから、隨分御機嫌よう」と宜道に挨拶をした。宜道は氣の毒さうであつた。

「御世話どころか、萬事不行屆で嘸御窮屈で御座いましたらう。然し是程御坐りになつても大分違ひます。わざ／＼御出でになつた丈の事は充分御座います」と云つた。然し宗助には丸で時間を潰しに來た樣な自覺が明らかにあつた。それを斯う取り繕つて云つて貰ふのも、自分の腑甲斐なさからであると、獨り恥ぢ入つた。

「悟りの遲速は全く人の性質で、それ丈では優劣にはなりません。入り易くても後で塞へて動かない人もありますし、又初め長く掛かつても、愈と云ふ場合に非常に痛快に出來るのもあります。決して失望な

さる事は御座いません。たゞ熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚などは、もと儒教をやられて、中年からの修業で御座いましたが、僧になつてから三年の間と云ふもの丸で一則も通らなかつたです。夫で私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝厠に向つて禮拜された位でありましたが、後にはあのやうな知識になられました。これ抔は尤も好い例です」

宜道は斯んな話をして、暗に宗助が東京へ歸つてからも、全く此方を斷念しない樣に、あらかじめ間接の注意を與へる樣に見えた。宗助は謹んで宜道のいふ事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもう既に半分去つた如くに感じた。自分は門を開けて貰ひに來た。けれども門番は扉の向う側にゐて、敲いても遂に顏さへ出して呉れなかつた。たゞ、

「敲いても駄目だ。獨りで開けて入れ」と云ふ聲が聞こえた丈であつた。彼は何うしたら此門の閂を開ける事が出來るかと考へた。さうして其手段と方法を明らかに頭の中で拵へた。けれども夫を實地に開ける力は、少しも養成する事が出來なかつた。從つて自分の立つてゐる場所は、此問題を考へない昔と毫も異なる所がなかつた。彼は依然として無能無力に鎖された扉の前に取り殘された。彼は平生自分の分別を便りに生きて來た。其分別が今は彼に祟つたのを口惜しく思つた。さうして始めから取捨も商量も容れない愚なものの一徹一途を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、智慧も忘れ、思議も浮かばぬ精進の程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて來たものらしかつた。それは是非もなかつた。けれども、何うせ通れない門なら、わざ〳〵其處迄辿り附くのが矛盾であつた。彼は後を顧た。さうして到底又元の路へ引き返す勇氣を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も

展望を遮つてゐた。彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで濟む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許へ一寸暇乞に行つた。老師は二人を蓮池の上の、縁に勾欄の着いた座敷に通した。宜道は自ら次の間に立つて、茶を入れて出た。

「東京はまだ寒いでせう」と老師が云つた。「少しでも手掛りが出來てからだと、歸つたあとも樂だけれども。惜しい事で」

宗助は老師の此挨拶に對して、丁寧に禮を述べて、又十日前に潛つた山門を出た。甍を壓する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後に聳えた。

二十二

家の敷居を跨いだ宗助は、己にさへ憫然な姿を描いた。彼は過去十日間、毎朝頭を冷水で濕らしたなり、未だ曾て櫛の齒を通した事がなかつた。髭は固より剃る暇を有たなかつた。三度とも宜道の好意で白米の炊いだのを食べたには食べたが、副食物と云つては、菜の煮たのか大根の煮たの位なものであつた。彼の顏は自ら蒼かつた。出る前よりも多少面窶れてゐた。其上彼に一窓庵で考へ續けに考へた習慣が、まだ全く抜け切らなかつた。何處かに卵を抱く牝鷄の樣な心持が殘つて、頭が平生の通り自由に働かなかつた。其癖一方では坂井の事が氣に掛かつた。坂井と云ふよりも、坂井の所謂冒險者として宗助の耳に響いた其弟と、其弟の友達として彼の胸を騷がした安井の消息が氣にかゝつた。けれども彼は自身に家主の

宅へ出向いて、それを聞き糺す勇氣を有たなかつた。間接にそれをお米に問ふことは猶出來なかつた。彼は山にゐる間さへ、お米が此事件に就いて何事も耳にして呉れなければ可いがと、氣遣はない日はなかつた位である。宗助は年來住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乘ると短かい道中でも氣の所爲か疲れるね。留守中に別段變つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさへ堪へかねる顏附をしてゐた。

お米は如何な場合にも、夫の前に忘れなかつた笑顏さへ作り得なかつた。と云つて、折角保養に行つた轉地先から今歸つて來たばかりの夫に、行かない前より却て健康が惡くなつたらしいとは、氣の毒で露骨に話し惡かつた。わざと活潑に、

「いくら保養でも、家に歸ると、少しは氣疲れが出るものよ。けれども貴方は餘り爺々汚いわ。後生だから一休みしたら御湯に行つて、頭を刈つて髭を剃つて來て頂戴」と云ひながら、わざ〳〵机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助はお米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空氣を風で拂つたやうな心持がした。一たび山を出て家に歸れば矢張り元の宗助であつた。

「坂井さんからは其後何とも云つて來ないかい」

「いゝえ何とも」

「小六の事も」

「いゝえ」

其小六は圖書館へ行つて留守だつた。宗助は手拭と石鹸を持つて外へ出た。

明くる日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた。中には少し瘠せた樣ですねと云ふものもあつた。宗助には夫が無意識の冷評の意味に聞こえた。菜根譚を讀む男はたゞ、何うです旨く行きましたかと尋ねた。宗助は此間にも大分痛い思ひをした。

其晩は又お米と小六から、代る〲鎌倉の事を根掘り葉掘り問はれた。

「氣樂でせうね。留守居も何も置かないで出られたら」とお米が云つた。

「それで一日幾何出すと置いて呉れるんです」と小六が聞いた。「鐵砲でも擔いで行つて、獵でもしたら面白からう」とも云つた。

「然し退屈ね。そんなに淋しくつちや。朝から晩迄寐て入らつしやる譯にも行かないでせう」とお米が又云つた。

「もう少し滋養物が食へる處でなくつちや、矢つ張り身體に可くないでせう」と小六が又云つた。

宗助は其夜床の中へ入つて、明日こそ思ひ切つて坂井へ行つて、安井の消息をそれとなく聞き糺して、もし彼がまだ東京に居て、猶しば〲坂井と往復がある樣なら、遠くの方へ引越して仕舞はうと考へた。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落とした。夜に入つて彼は、

「一寸坂井さん迄行つて來る」と云ひ捨てて門を出た。月のない坂を上つて、瓦斯燈に照らされた砂利を鳴らしながら潛り戸を開けた時、彼は今夜此處で安井に落ち合ふ樣な萬一は、まづ起らないだらうと度胸を据ゑた。それでもわざと勝手口へ廻つて、御客來ですかと聞くことは忘れなかつた。

「よく御出でです。何うも相變らず寒いぢやありませんか」と云ふ常の通り元氣の好い主人を見ると、子供を大勢自分の前へ並べて、其中の一人と掛け聲をかけながら、じやん拳を遣つてゐた。相手の女の子の年は、六つ許りに見えた。赤い幅のあるリボンを蝶々の樣に頭の上に喰つ附けて、主人に負けない程の勢ひで、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。其斷然たる樣子と、其握り拳の小ささと、之に反して主人の仰山らしく大きな拳骨が、對照になつて皆の笑ひを惹いた。火鉢の傍に見てゐた細君は、

「そら今度こそ雪子の勝ちだ」と云つて愉快さうに綺麗な齒を露はした。子供の膝の傍には、白だの赤だの藍だのの硝子玉が澤山あつた。主人は、

「とう／＼雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、「何うです又洞窟へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がつた。

書齋の柱には、例の如く錦の袋に入れた蒙古刀が振ら下がつてゐた。花活には何處で咲いたか、もう黃色い菜の花が挿してあつた。宗助は床柱の中途を華やかに彩どる袋に眼を着けて、

「相變らず掛かつて居りますな」と云つた。さうして主人の氣色を頭の奧から窺つた。主人は、

「えゝ些と物數奇過ぎますね、蒙古刀は」と答へた。「所が弟の野郎そんな玩具を持つて來ては、兄貴を籠絡する積りだから困りものぢやありませんか」

「御舍弟は其後何うなさいました」と宗助は何氣ない風を示した。

「えゝ漸く四五日前歸りました。ありや全く蒙古向きですね。御前の樣な夷狄は東京にや調和しないから早く歸れつたら、私もさう思ふつて歸つて行きました。何うしても、ありや萬里の長城の向ふ側にゐる

べき人物ですよ。さうしてゴビの沙漠の中で金剛石でも搜してゐれば可いんです」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか。あれも無論一所です。あゝなると落ち附いちや居られないと見えますね。何でも元は京都大學にゐたこともあるんだとか云ふ話ですが。何うして、あゝ變化したものですかね」

宗助は腋の下から汗が出た。安井が何う變つて、どう落ち附かないのか、全く聞く氣にはならなかつた。たゞ自分が主人に安井と同じ大學にゐた事を、まだ洩らさなかつたのを天佑の樣に難有く思つた。けれども主人は其弟と安井とを晩餐に呼ぶとき、自分を此二人に紹介しようと申し出た男である。辭退をして其席へ顏を出す不面目丈は漸と免れた樣なものゝ、其晩主人が何かの機會に、つい自分の名を二人に洩らさないとは限らなかつた。宗助は後暗い人の、變名を用ひて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「貴方はもしや私の名を安井の前で口にしやしませんか」と聞いて見たくて堪らなかつた。けれども、夫丈は何うしても聞けなかつた。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。一丁の豆腐位な大きさの金玉糖の中に、金魚が二疋透いて見えるのを、其儘庖丁の刃を入れて、元の形を崩さずに、皿に移したものであつた。宗助は一目見て、たゞ珍らしいと感じた。けれども彼の頭は寧ろ他の方面に氣を奪はれてゐた。すると主人が、「何うです一つ」と例の通り先づ自分から手を出した。

「是はね、昨日ある人の銀婚式に呼ばれて、貰つて來たのだから、頗る御目出度いのです。貴方も一切位肖つても可いでせう」

主人は肖りたい名の下に、甘垂るい金玉糖を幾切か頬張つた。これは酒も飲み、茶も飲み、飯も菓子も食へる樣に出來た、重寶で健康な男であつた。

「何實を云ふと、二十年も三十年も夫婦が皺だらけになつて生きてゐたつて、別に御目出度くもありませんが、其處が物は比較的な所でね。私は何時か清水谷の公園の前を通つて驚いた事がある」と變な方面へ話しを持つて行つた。斯ういふ風に、夫から夫へと客を飽かせない樣に引つ張つて行くのが、社交になれた主人の平生の調子であつた。

彼の云ふ所によると、清水谷から辨慶橋へ通じる泥溝の樣な細い流れの中に、春先になると無數の蛙が生れるのださうである。其蛙が押し合ひ鳴き合つて生長するうちに、幾百組か幾千組の戀が泥渠の中で成立する。而して夫等の愛に生きるものが、重ならない許りに隙間なく清水谷から辨慶橋へ續いて、互に睦まじく浮いてゐると、通り掛りの小僧だの閑人が、石を打ち附けて、無殘にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、其數が殆ど勘定し切れない程多くなるのださうである。

「死屍累々とはあの事ですね。それが皆夫婦なんだから實際氣の毒ですよ。詰りあすこを二三町通るうちに、我々は悲劇にいくつ出逢ふか分らないんです。夫を考へると御互は實に幸福でさあ。夫婦になつてるのが惡らしいつて、石で頭を破られる恐れは、まあ無いんですからね。しかも雙方ともに二十年も三十年も安全なら、全く御目出たいに違ひありませんよ。だから一切位肖つて置く必要もあるでせう」と云つて、主人はわざと箸で金玉糖を挾んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話しを、主人はいくらでも續けるので、宗助は已むを得ず或邊までは釣られて行つた。

けれども腹の中は決して主人の樣に太平樂には行かなかつた。辭して表へ出て、又月のない空を眺めた時は、其深く黒い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物淒さを感じた。

彼は坂井の家に、たゞ苟くも免れんとする料簡で行つた。さうして、其目的を達するために、恥と不愉快を忍んで、好意と眞率の氣に充ちた主人に對して、政略的に談話を驅つた。しかも知らうと思ふ事は悉く知る事が出來なかつた。己の弱點に附いては、一言も彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかつた。

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて頭に觸れずに過ぎたらしかつた。けれども、是に似た不安は是から先何度でも、色々な程度に於て、繰り返さなければ濟まない樣な、蟲の知らせが何處かにあつた。夫を繰り返させるのは天の事であつた。夫を逃げて廻るのは宗助の事であつた。

二十三

月が變つてから寒さが大分緩んだ。官吏の増俸問題につれて必然起るべく、多數の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末迄に略片附いた。其間ぽつ／＼と首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ歸つてお米に、

「今度は己の番かも知れない」と云ふ事があつた。お米はそれを冗談とも聞き、又本氣とも聞いた。稀には隱れた未來を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釋した。それを口にする宗助の胸の中にも、お米と同じ樣な雲が去來した。

月が改まつて、役所の動搖も是で一段落だと沙汰せられた時、宗助は生き殘つた自分の運命を顧て、當

然の樣にも思つた。又偶然の樣にも思つた。立ちながら、お米を見下ろして、
「まあ助かつた」と六づかし氣に云つた。其嬉しくも悲しくもない樣子が、お米には天から落ちた滑稽に見えた。

又二三日して宗助の月給が五圓昇つた。

「原則通り二割五分增さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給の儘でゐる人も澤山あるんだから」と云つた宗助は、此五圓に自己以上の價値をもたらし歸つた如く滿足の色を見せた。お米は無論の事心のうちに、不足を訴へるべき餘地を見出ださなかつた。

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まつた飯の香を嗅いだ。お米はわざ／＼淸を遣つて、坂井の家に引き移つた小六を招いた。小六は、
「やあ御馳走だなあ」と云つて勝手から入つて來た。

梅がちらほらと眼に入る樣になつた。早いのは既に色を失つて散りかけた。雨は烟る樣に降り始めた。それが霽れて、日に蒸されるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新にすべき濕氣がむら／＼と立ち上つた。背戶に干した雨傘に、小犬がじやれ掛かつて、蛇の目の色がきら／＼する所に、陽炎が燃える如く長閑に思はれる日もあつた。

「漸く冬が過ぎた樣ね。貴方今度の土曜に佐伯の叔母さんの處へ廻つて、小六さんの事を極めて入らつしやいよ。あんまり何時迄も放つて置くと、又安さんが忘れて仕舞ふから」とお米が催促した。宗助は、
「うん、思ひ切つて行つて來よう」と答へた。小六は坂井の好意で、其處の書生に住み込んだ。其上に

宗助と安之助が、不足の處を分擔する事が出來たらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判をした。さうして、形式的に宗助の方から依賴すれば、すぐ安之助が引き受ける迄に自分で埒を明けたのである。

小康は斯くして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午宗助は久し振に、四日目の垢を流すため横町の洗湯に行つたら、五十許りの頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、漸く春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換はしてゐた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴聲を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答へてゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「えゝ、まだ充分に舌が廻りません」

宗助は家へ歸つてお米に此鶯の問答を繰り返して聞かせた。お米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本當に難有いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ／＼しい眉を張つた。宗助は緣に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、鋏を動かしてゐた。

昭和四年七月一日印刷
昭和四年七月五日發行

漱石全集第六卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　東京市神田區南神保町十六番地　漱石全集刊行會

右代表者　岩波茂雄

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

（片山製本）